上峰町文化財調査報告書第55集

鎮西山城跡 I

令和３年度鎮西山再整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年10月

上峰町教育委員会

上峰町文化財調査報告書第55集

鎮西山城跡 I

令和３年度鎮西山再整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022年10月

上峰町教育委員会

序

本書は、鎮西山再整備事業に先立ち、社会資本整備総合交付金を受けて、令和3年度に鎮西山の山頂一帯で実施した埋蔵文化財発掘調査の報告書です。

鎮西山は、町の北部にある標高202mの山です。山頂一帯では地表観察で曲輪・土塁・横堀などの痕跡が部分的に認められることから、以前から町内唯一の中世山城が存在していたということは分かっていました。

昭和63年から平成初期にかけて、鎮西山生活環境保全林整備事業により、「鎮西山いこいの森」として山全体の整備が行われました。その後も鎮西山の整備は続き、山登りや散歩だけの利用ではなく、スポーツ、レクリエーション、憩いと安らぎ、野外学習の場として町内外の方に広く活用されてきました。近年は、山頂に設置した東屋・展望台・ベンチなどの公園設備や、アスレチック広場の遊具類、キャンプ場の施設などの老朽化が進み、この度再整備することになりました。

今回の調査成果として、山城の築城当時の構造を知るうえで貴重な資料を得ることができました。副郭の調査では、副郭全面の遺構検出を実施し、曲輪内に掘立柱建物・柵列の建物跡や堀跡などを確認しました。主郭・副郭の周辺下を巡る帯曲輪のトレンチ調査では、切岸・横堀・土塁などの痕跡を検出し、遺構の残存状況が良好で、築城時期が戦国時代であることが分かりました。また、山頂の調査では、12～13世紀頃の多種多様な中国産の陶磁器類が多く出土し、山城の築城前には山岳信仰との関連が考えられる建物跡や墓などの遺構を確認しました。

本書が学術研究のみならず、住民の皆さんとともに多くの方々の文化財への理解と認識を深める一助となり、歴史教育・学術の振興に幅広く活用いただければ、幸いと存じます。

最後になりましたが、発掘調査にあたり、多大な御指導並びに、御助言をいただきました佐賀大学全学教育機構教授の宮武正登教授をはじめ、関係各位の皆様に対し深く感謝申し上げます。

令和4年10月

上峰町教育委員会
教育長　野　口　敏　雄

例　言

1. 本書は鎮西山の再整備事業に伴い、令和３年度に調査を実施した佐賀県三養基郡上峰町大字堤字三本黒木に所在する鎮西山城跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は上峰町教育委員会の委託を受けて、㈱埋蔵文化財サポートシステムが実施した。
3. 山頂の調査面積は 5,598 ㎡である。
4. 現地での発掘調査は令和３年 12 月 21 日から令和４年３月 19 日まで行った。
   今回の発掘調査に際し、下記の方々から助言・協力を頂いた。（敬称略・順不同）
   宮武正登（佐賀大学）、末光博史（佐賀県文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室）
   太田睦・豊嶋輝彦（みやき町教育委員会）、河野竜介・古賀静夏（吉野ヶ里町教育委員会）
5. 整理作業、調査報告書作成は上峰町教育委員会の監督のもと、㈱埋蔵文化財サポートシステムが実施した。
6. 整理作業、報告書作成は令和４年１月 24 日から令和４年 10 月 31 日まで行った。
7. 本書の執筆は第Ⅰ・Ⅱ章を上峰町教育委員会の松浦智が行い、その他を㈱埋蔵文化財サポートシステムの中田裕樹と礒村康行が担当した。
8. 本書の編集は上峰町教育委員会の松浦の監修のもと、㈱埋蔵文化財サポートシステムの礒村が行った。
9. 今回の調査で出土した全ての遺物及び現場で作成した図面・写真・その他の記録類は、上峰町教育委員会で保管している。

凡　例

1. 鎮西山城跡の略号は「TNZ」である。
2. 遺構番号に記した２文字のアルファベットは、遺構の種別を表す。
   SA・・・・・柵列、SB・・・・・掘立柱建物跡、SD・・・・・溝状遺構、SK・・・・・土坑、SX・・・・・性格不明遺構
   P・・・・・小穴・柱穴
3. 本文・挿図中の方位については全て座標北を基準としている。
4. 土器・陶磁器類の小破片で器種名の判断が難しいものについては、本文・表中の記号で×を用いている。
   （例：壺×甕）
5. 表中の数値に付した記号で（　）は残存値・最大値を表す。
6. 本文･表中の中国産磁器「碗」･「椀」の使い分けについて、器種では「碗」を用いているが、分類については『大宰府条坊跡 XV - 陶磁器分類編 - 』に基づいて「椀」を用いている。
7. 土層断面実測図中の一点破線は掘削停止線を表す。
8. 本書に掲載した遺物実測図の標記は、以下のとおりである。
   遺物断面が白ヌキのもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・陶磁器・土師質土器・土師器・鉄製品
   遺物断面が黒塗りのもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・須恵器
   遺物断面が灰色のもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・瓦器
   遺物断面が斜線のもの・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・石製品

調整が同じで、その単位がわかるもの …… 長破線

釉と付着物、黒斑など、その範囲を示す必要があるもの …… 一点破線

遺物表面に煤が付着する部分 …… 網掛けグレー 20%

石製品で二次加工痕が認められる部分 …… 網掛けグレー 40%

鉄滓・鞴の羽口・壁土で表面が残存している部分 …… 網掛けグレー 60%

9. 本書に用いた陶磁器・須恵器・土師質土器・土師器・石製品の分類及び年代観は、以下の文献による。

〔陶磁器〕 山本信夫 『大宰府条坊 XV - 陶磁器分類編 - 』太宰府市の文化財 第 49 集 太宰府市教育委員会 2000

森田勉 「14 ～ 16 世紀の白磁の形式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』 貿易陶磁研究会 1982

上田秀夫 「14 ～ 16 世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』 貿易陶磁研究会 1982

乗岡実 「中近世の備前焼擂鉢の編年案」『第 3 回中近世備前焼研究会 発表要旨』 2000

〔須恵器〕 間壁忠彦 「備前焼」『考古学ライブラリー』60 ニュー・サイエンス社 1991

山本信夫 「型式の設定と編年」『宮ノ本遺跡 II - 窯跡編 - 』 太宰府市の文化財第 10 集 太宰府市教育委員会 1992

森田稔 「8. 中世須恵器」『概説 中世の土器・陶磁器』中世土器研究会 真陽社 1995

〔土師質土器〕 徳永貞紹 「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究』VI 日本中世土器研究会 1990

〔土師器〕 松本隆昌 「肥前（佐賀県）における土器からみた貿易陶磁 - 肥前府中の古代末～中世前半の資料から - 」『中近世土器の基礎研究』XI 日本中世土器研究会 1996

〔石製品〕 木戸雅寿 「III 土器・陶磁器 13. 石鍋」『中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編 1995

10. 先の市町村合併により上峰町周辺の町村も合併が進み町村名が変更になっている。本書では現在の市町名のあとに（ ）で旧市町村名を記している。

本 文 目 次

序

例言・凡例

Ⅰ．遺跡の位置と環境 …… 1

1．鎮西山城跡の位置 …… 1

2．歴史的環境 …… 1

3．鎮西山近辺の歴史について …… 5

4．発掘調査前の鎮西山城跡について …… 9

Ⅱ．調査の概要 …… 13

1．調査に至る経緯 …… 13

2．調査の経過と方法 …… 17

Ⅲ．遺跡の概要 …… 20

1．遺跡の概要 …… 20

2．調査の概要 …… 20

Ⅳ．遺構と出土遺物 …… 28

1．トレンチ調査 …… 28

2．遺構と出土遺物 …… 72

3．その他の出土遺物 …… 84

Ⅴ．総括 …… 95

1．中世山城構築以前の遺構 …… 95

2．中世山城機能時の遺構 …… 96

3．出土遺物 …… 100

4．まとめ …… 101

挿図目次

Fig. 1 鎮西山城跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）・・・・・・・ 3
Fig. 2 鎮西山城跡縄張図（1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 7
Fig. 3 令和２・３年度鎮西山城跡確認調査位置図
（1/5,000）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・14
Fig. 4 鎮西山城跡確認調査　山頂部
試掘トレンチ設定図（1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・15
Fig. 5 鎮西山城跡確認調査　山頂部
試掘トレンチ遺構配置図（1/200）・・・・・・・・・・・・・15
Fig. 6 鎮西山城跡確認調査　アスレチック広場
試掘トレンチ設定図（1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・16
Fig. 7 鎮西山城跡確認調査　ねむの木通り
試掘トレンチ設定図（1/1,000）・・・・・・・・・・・・・・・・16
Fig. 8 鎮西山城跡調査前地形測量図（1/400）・・・・・・・・・・・・21
Fig. 9 鎮西山城跡トレンチ配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・23
Fig.10 鎮西山城跡遺構配置図（1/400）・・・・・・・・・・・・・・・・・25
Fig.11 No.1 トレンチ平面・土層断面実測図（1/80）・・・・・29
Fig.12 No.1 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・29
Fig.13 No.2 トレンチ平面・土層断面実測図（1/80）・・・・・30
Fig.14 No.2 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・31
Fig.15 No.3 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・32
Fig.16 No.4 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・33
Fig.17 No.5 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・34
Fig.18 No.6 トレンチ平面・土層断面実測図（1/100）・・・・36
Fig.19 No.6 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・36
Fig.20 No.7 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・37
Fig.21 No.7 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・38
Fig.22 No.8 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・39
Fig.23 No.8 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・39
Fig.24 No.9 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・41
Fig.25 No.9 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・・41
Fig.26 No.11 トレンチ平面・
土層断面実測図①（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
Fig.27 No.11 トレンチ平面・
土層断面実測図②（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
Fig.28 No.11 トレンチ出土遺物実測図①（1/3）・・・・・・・・・47
Fig.29 No.11 トレンチ出土遺物実測図②（1/3）・・・・・・・・・48
Fig.30 No.12 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・49
Fig.31 No.12 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・50
Fig.32 No.13 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・51
Fig.33 No.13 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・51
Fig.34 No.14 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・53
Fig.35 No.14 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・54
Fig.36 No.15 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・54
Fig.37 No.15 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・55
Fig.38 No.16 東側トレンチ平面・
土層断面実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・56
Fig.39 No.16 西側トレンチ平面・
土層断面実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・57
Fig.40 No.16 東側トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・57
Fig.41 No.16 西側トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・59
Fig.42 No.17 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・59
Fig.43 No.17 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・59
Fig.44 No.18 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・60
Fig.45 No.18 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・60
Fig.46 No.19 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・61
Fig.47 No.19 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・61
Fig.48 No.20 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・62
Fig.49 No.20 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・62
Fig.50 No.21 トレンチ平面・土層断面実測図
（1/60・詳細図 1/20）・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・64
Fig.51 No.21 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・65
Fig.52 No.22 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・66
Fig.53 No.23 トレンチ平面・土層断面実測図（1/40）・・・・66
Fig.54 No.23 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・68
Fig.55 No.24 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・69
Fig.56 No.24 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・69
Fig.57 No.25 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・70
Fig.58 No.26 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）・・・・71
Fig.59 No.26 トレンチ出土遺物実測図（1/3）・・・・・・・・・・・71
Fig.60 SA2 平面・土層断面実測図（1/60）・・・・・・・・・・・・・72

Fig.61 SA2出土遺物実測図(1/3)……72
Fig.62 SA8 平面・土層断面実測図(1/60)……73
Fig.63 SB6 平面・土層断面実測図(1/60)……75
Fig.64 SB6 出土遺物実測図(1/2・1/3)……75
Fig.65 SB7 平面・土層断面実測図(1/60)……76
Fig.66 SB7 出土遺物実測図(1/3)……77
Fig.67 SB9 平面実測図(1/60)……78
Fig.68 SD4 平面・土層断面実測図(1/60)……79
Fig.69 SD4 出土遺物実測図(1/3)……79
Fig.70 SD5・SX12 平面・土層断面実測図(1/80)……80
Fig.71 SD5 出土遺物実測図(1/3)……81
Fig.72 SK1 平面実測図(1/20)……81
Fig.73 SK1 出土遺物実測図(1/3・1/2)……82
Fig.74 SK3 平面・土層断面実測図(1/40)……83
Fig.75 P2 出土遺物実測図(1/3)……83
Fig.76 P3 出土遺物実測図(1/3)……83
Fig.77 P4 出土遺物実測図(1/3)……83
Fig.78 その他の出土遺物実測図①(1/3)……85
Fig.79 その他の出土遺物実測図②(1/3)……87
Fig.80 その他の出土遺物実測図③(1/2・1/3)……89
Fig.81 その他の出土遺物実測図④(1/3)……91
Fig.82 その他の出土遺物実測図⑤(1/3)……94
Fig.83 主要遺構の変遷想定図(1/800)……98

表目次

Tab. 1 遺物一覧表①……104
Tab. 2 遺物一覧表②……105
Tab. 3 遺物一覧表③……106
Tab. 4 遺物一覧表④……107
Tab. 5 遺物一覧表⑤……108
Tab. 6 遺物一覧表⑥……109
Tab. 7 遺物一覧表⑦……110
Tab. 8 トレンチ一覧表①……111
Tab. 9 トレンチ一覧表②……112
Tab.10 柵列一覧表……112
Tab.11 掘立柱建物跡一覧表……112
Tab.12 溝状遺構・土坑一覧表……112

写真図版目次

PL. 1-1 鎮西山城跡調査状況遠景(北から)
1-2 鎮西山城跡調査状況全景(天が北)
PL. 2-1 鎮西山全景(南西から)
2-2 鎮西山全景(南から)
2-3 鎮西山城跡調査前全景(東から)
2-4 曲輪Ⅰ(主郭部)調査前(南から)
2-5 曲輪Ⅱ(副郭部)調査前(西から)
2-6 No.1 トレンチ調査前(西から)
2-7 No.1 トレンチ南壁面土層(西から)
2-8 No.1 トレンチ掘削完了(東から)
PL. 3-1 No.2 トレンチ掘削完了・北壁面土層(東から)
3-2 No.3 トレンチ調査前(東から)
3-3 No.3 トレンチ南壁面土層(西から)
3-4 No.3 トレンチ掘削完了(北東から)
3-5 No.4 トレンチ調査前(東から)
3-6 No.4 トレンチ西壁面土層(南東から)
3-7 No.4 トレンチ掘削完了(南から)
3-8 No.5 トレンチ西壁面土層(北東から)
PL. 4-1 No.5 トレンチ掘削完了(北から)
4-2 No.6 トレンチ西壁面土層(南東から)
4-3 No.6 トレンチ掘削完了(北から)
4-4 No.7 トレンチ調査前(東から)
4-5 No.7 トレンチ東壁面土層(南西から)
4-6 No.7 トレンチ掘削完了(西から)
4-7 No.8 トレンチ調査前(南東から)
4-8 No.8 トレンチ西壁面土層(南から)

PL. 5-1 No.8 トレンチ掘削完了（南から）
5-2 No.9 トレンチ調査前（北東から）
5-3 No.9 トレンチ西壁面土層（東から）
5-4 No.9 トレンチ掘削完了（南から）
5-5 No.11 トレンチ東端土層（南東から）
5-6 No.11 トレンチ西側掘削完了（東から）
5-7 No.11 トレンチ東側掘削完了（西から）
5-8 No.12 トレンチ西壁面土層（北東から）
PL. 6-1 No.12 トレンチ掘削完了（南から）
6-2 No.13 トレンチ西壁面土層（北東から）
6-3 No.13 トレンチ掘削完了（北東から）
6-4 No.14 トレンチ東壁面土層①（南西から）
6-5 No.14 トレンチ東壁面土層②（南西から）
6-6 No.14 トレンチ掘削完了（北西から）
6-7 No.15 トレンチ調査前（西から）
6-8 No.15 トレンチ南壁面土層（東から）
PL. 7-1 No.15 トレンチ掘削完了（北東から）
7-2 No.16 東側トレンチ調査前（北西から）
7-3 No.16 東側トレンチ西壁面土層（北東から）
7-4 No.16 東側トレンチ掘削完了（北西から）
7-5 No.16 西側トレンチ西壁面土層（南東から）
7-6 No.16 西側トレンチ掘削完了（北西から）
7-7 No.17 トレンチ西壁面土層（東から）
7-8 No.17 トレンチ掘削完了（南西から）
PL. 8-1 No.18 トレンチ東壁面土層（南西から）
8-2 No.18 トレンチ掘削完了（北から）
8-3 No.19 トレンチ東壁面土層（北西から）
8-4 No.19 トレンチ掘削完了（北から）
8-5 No.20 トレンチ東壁面土層（南西から）
8-6 No.20 トレンチ掘削完了（北から）
8-7 No.21 トレンチ西壁面土層（北東から）
8-8 No.21 トレンチ掘削完了（北から）
PL. 9-1 No.21 トレンチ遺物出土状況（東から）
9-2 No.22 トレンチ西壁面土層（南西から）
9-3 No.22 トレンチ掘削完了（北西から）
9-4 No.23 トレンチ西壁面土層（東から）
9-5 No.23 トレンチ掘削完了（南東から）
9-6 No.24 トレンチ掘削完了・西壁面土層（北東から）
9-7 No.25 トレンチ掘削完了・西壁面土層（北東から）
9-8 No.26 トレンチ掘削完了・西壁面土層（北東から）
PL. 10-1 曲輪Ⅱ（副郭部）調査状況（天が北）
10-2 SA2・8・10、SB6・7・9、SD5、SK3、SX12 検出（天が南）
PL. 11-1 SA2 検出（東から）
11-2 SA8 検出（西から）
11-3 SB6・7 検出（西から）
11-4 SB6 - P15 遺物出土状況（西から）
11-5 SB9 検出（南から）
11-6 SD4 土層（北から）
11-7 SD5 トレンチ 1 南壁面土層（北東から）
11-8 SD5 トレンチ 2 北壁面土層（南東から）
PL. 12-1 SK1 検出（西から）
12-2 SK1 遺物出土状況（西から）
12-3 SK3 検出（南から）
12-4 SK3 土層（南から）
12-5 SX12 検出（東から）
12-6 SX13 検出（北西から）
12-7 SX13 遺物出土状況（北東から）
12-8 宮武教授による現地指導
PL. 13-1 No.7 トレンチ出土遺物（Fig.21 - 2）
13-2 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 2）
13-3 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 3）
13-4 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 9）
13-5 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 10）
13-6 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 11）
PL. 14-7 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 13）
14-8 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.28 - 14）
14-9 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.29 - 16）
14-10 No.11 トレンチ出土遺物（Fig.29 - 24）
14-11 No.12 トレンチ出土遺物（Fig.31 - 1）
14-12 No.13 トレンチ出土遺物（Fig.33 - 4）
PL. 15-13 No.14 トレンチ出土遺物（Fig.35 - 4）
15-14 No.15 トレンチ出土遺物（Fig.37 - 1）
15-15 No.15 トレンチ出土遺物（Fig.37 - 3）

15-16　No.15 トレンチ出土遺物（Fig.37 - 4）
15-17　No.15 トレンチ出土遺物（Fig.37 - 5）
15-18　No.19 トレンチ出土遺物（Fig.47 - 1）
15-19　No.20 トレンチ出土遺物（Fig.49 - 3）
PL. 16-20　No.21 トレンチ出土遺物（Fig.51 - 2）
16-21　No.21 トレンチ出土遺物（Fig.51 - 3）
16-22　No.21 トレンチ出土遺物（Fig.51 - 5）
16-23　No.23 トレンチ出土遺物（Fig.54 - 2）
PL. 17-24　No.23 トレンチ出土遺物（Fig.54 - 7）
17-25　No.23 トレンチ出土遺物（Fig.54 - 10）
17-26　No.26 トレンチ出土遺物（Fig.59 - 1）
17-27　No.26 トレンチ出土遺物（Fig.59 - 2）
17-28　SB6（Fig.64-1）、
その他の出土遺物（Fig.82-48・49・50）
17-29　SB6 出土遺物（Fig.64 - 2）
PL. 18-30　SB7 出土遺物（Fig.66 - 5）
18-31　SD4 出土遺物（Fig.69 - 3）
18-32　SD5 出土遺物（Fig.71 - 1）
18-33　SK1 出土遺物（Fig.73 - 1）
18-34　SK1 出土遺物（Fig.73 - 2）
18-35　SK1 出土遺物（Fig.73 - 3）
18-36　SK1 出土遺物（Fig.73 - 4）
18-37　SK1 出土遺物（Fig.73 - 6）
18-38　SK1 出土遺物（Fig.73 - 7）
PL. 19-39　その他の出土遺物（Fig.78 - 1）
19-40　その他の出土遺物（Fig.78 - 2）
19-41　その他の出土遺物（Fig.78 - 4）
19-42　その他の出土遺物（Fig.78 - 6）
19-43　その他の出土遺物（Fig.78 - 8）
19-44　その他の出土遺物（Fig.78 - 9）
19-45　その他の出土遺物（Fig.78 - 10）
PL. 20-46　その他の出土遺物（Fig.78 - 18）
20-47　その他の出土遺物（Fig.78 - 19）
20-48　その他の出土遺物（Fig.79 - 23）
20-49　その他の出土遺物（Fig.79 - 29）
20-50　その他の出土遺物（Fig.79 - 32）
20-51　その他の出土遺物（Fig.80 - 40）
20-52　その他の出土遺物（Fig.80 - 47）
PL. 21-53　その他の出土遺物（Fig.80 - 54）
21-54　その他の出土遺物（Fig.80 - 57）
21-55　その他の出土遺物（Fig.81 - 65）
21-56　その他の出土遺物（Fig.81 - 68）
21-57　その他の出土遺物（Fig.81 - 69）
21-58　その他の出土遺物（Fig.81 - 70）
21-59　その他の出土遺物（Fig.81 - 71）
21-60　その他の出土遺物（Fig.81 - 72）
21-61　その他の出土遺物（Fig.81 - 73）
PL. 22-62　その他の出土遺物（Fig.81 - 77）
22-63　その他の出土遺物（Fig.81 - 78）
22-64　その他の出土遺物（Fig.81 - 81）
22-65　その他の出土遺物（Fig.82 - 82）
22-66　その他の出土遺物（Fig.82 - 86）
22-67　その他の出土遺物（Fig.82 - 87）
22-68　その他の出土遺物（Fig.82 - 88）

調 査 組 織

発掘調査

令和３年度

調 査 主 体	上峰町教育委員会			
調査事務局	総　　括	野口　敏雄	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	宗雲　英則	〃	文化課長
	経費執行	原田　大介	〃	文化課係長
	〃	松浦　智	〃	文化課文化係
	〃	伊達　有彩	〃	〃
調 査 組 織	調 査 員	原田　大介	〃	文化課係長
		松浦　智	〃	文化課文化係（現場監督）
		伊達　有彩	〃	〃

調 査 委 託	㈱埋蔵文化財サポートシステム		
	主任調査員	中田　裕樹	
	調 査 助 手	内田　賢一	
	遺構実測・測量	藤﨑　伸一郎	世戸　慎吾

調査指導・助 言	宮武　正登	佐賀大学　全学教育機構 教授（人文科学・芸術部門）博士（歴史学）
調査協力	佐賀県 文化・スポーツ交流局 文化課 文化財保護室	

整理・報告書作成

令和３・４年度

調 査 主 体	上峰町教育委員会			
調査事務局	総　　括	野口　敏雄	上峰町教育委員会	教育長
	事務主任	宗雲　英則	〃	文化課長
	経費執行	松浦　智	〃	文化課係長
調 査 組 織	調 査 員	松浦　智	〃	文化課係長
	調 査 員	原田　大介	〃	文化財保護専門員

業 務 委 託	㈱埋蔵文化財サポートシステム	
	主任技師	礒村　康行
	技　　師	中田　裕樹
	報告書編集指導	大坪　芳典

遺物整理

立石　和也　　井手　基子　　久田　ひとみ　　水之浦　宗一郎

遺物実測・デジタルトレース・写真撮影

古閑　健一　　村上　久美子　　末吉　由紀子　　堤　圭子　　永田　里美

本田　晶子　　作田　清恵　　浅久野　あゆ子　　小原　さおり　　金田　由紀子

宮崎　英里　　伊勢戸　文

Ⅰ．遺跡の位置と環境

1．鎮西山城跡の位置（Fig. 1）

鎮西山城跡が所在する佐賀県三養基郡上峰町は、佐賀県東部の穀倉地帯である佐賀平野のほぼ中央、三養基郡の西端に位置しており、東部は同郡みやき町（旧中原町・旧北茂安町）と、南部は同郡みやき町（旧三根町）と、西部は神埼郡吉野ヶ里町（旧東脊振村・旧三田川町）と境を接している。また、この神埼郡との境界は古代以来の三根郡との郡界を踏襲しており、現在も町のほぼ中央を東西に横断する国道 34 号付近の旧三田川町と境を接する地域は郡境地区と呼称されている。

鳥栖市から佐賀市大和町（旧佐賀郡大和町）に至る佐賀県東部には、北部に脊振山地、その南麓に発達する更新世丘陵、さらに南部には有明海へと続く沖積平野が展開するという、変化に富んだ地形が発達している。なかでも、山麓部から沖積平野部へ移行する部分に発達する更新世丘陵は、山麓部に源を発し有明海へと南流する大小の河川によって浸食され北から南へ延びる舌状を呈した段丘を数多く形成している。そして、これらの段丘は古くから人々の生活の場として利用され、段丘上には数多くの遺跡が分布し、遺跡数、内容ともに県内でも有数の地域となっている。

そのようななか、南北に細長い町域をもつ上峰町においても、北部に山麓部、中央部に更新世丘陵部、南部に沖積平野部と、この佐賀県東部の特徴的な地形が展開しており、とくに中央部に発達する更新世丘陵地域を中心に遺跡の分布が知られ、古くから「遺跡の宝庫」と呼ばれてきた。

今回、調査を実施した鎮西山城跡は上峰町の北部、大字堤字三本黒木に所在する。山城跡の立地については脊振山系の九千谷山～石谷山間の南西麓に位置する鎮西山の山頂上にある。鎮西山は、山頂の標高が 202m、南麓の登山口付近で標高 70m 前後を測り、高低差約 130m の低山である。鎮西山を含め脊振山系の山々は、1 億年前にできた花崗岩で構成されており、特に鎮西山より以北は花崗岩閃緑岩が分布し、鎮西山の山頂付近には巨石がせり出している箇所が数地点認められる。鎮西山の北麓には、大正初年に開山した真言宗醍醐派の修験道場、鳥越山不動院が所在する。「奥の院」とも呼ばれ、境内にある滝が切通川の上流域にあたり、ここから町の東側を南北に縦断するように流れている。

2．歴史的環境（Fig. 1）

上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観すると、前述のとおり、山麓部から更新世丘陵部におよぶ一帯が古くから人々の生活の舞台となっており、山麓部及び各段丘上には以前から遺跡の存在が知られ、県内においても特に弥生時代の遺跡を中心に遺跡の分布密度が高い地域となっている。沖積地を望む丘陵部のほとんどが、各時代の集落あるいは墓域として占有され、とりわけ弥生時代以降の遺跡を縄文時代以前の遺跡と比較すると、量的にも、質的にも爆発的に増加、充実する。銅鐸の鋳型を出土した鳥栖市安永田遺跡[1]、約 400 基の甕棺墓が検出されたみやき町（旧中原町）姫方遺跡[2]、埋納された 12 本の銅矛を出土したみやき町（旧北茂安町）検見谷遺跡[3]、甕棺墓から舶載鏡を出土した吉野ヶ里町（旧東脊振村）三津永田遺跡[4]、近年の工業団地建設に先立つ調査で貴重な遺構、遺物が検出された神埼市（旧神埼町）・吉野ヶ里町（旧三田川町・旧東脊振村）に跨る吉野ヶ里遺跡[5] など多くの著名な集落遺跡、墳墓群が知られ弥生時代の「クニ」あるいは「ムラ」単位の集団の存在が想定されるに至ってい

る。このようななか南北約 12km、東西約 3km と南北に細長い町域を持つ本町においても同様に、町の北部から中央部を占める更新世段丘上に弥生時代を中心に各時代の遺跡が分布している。

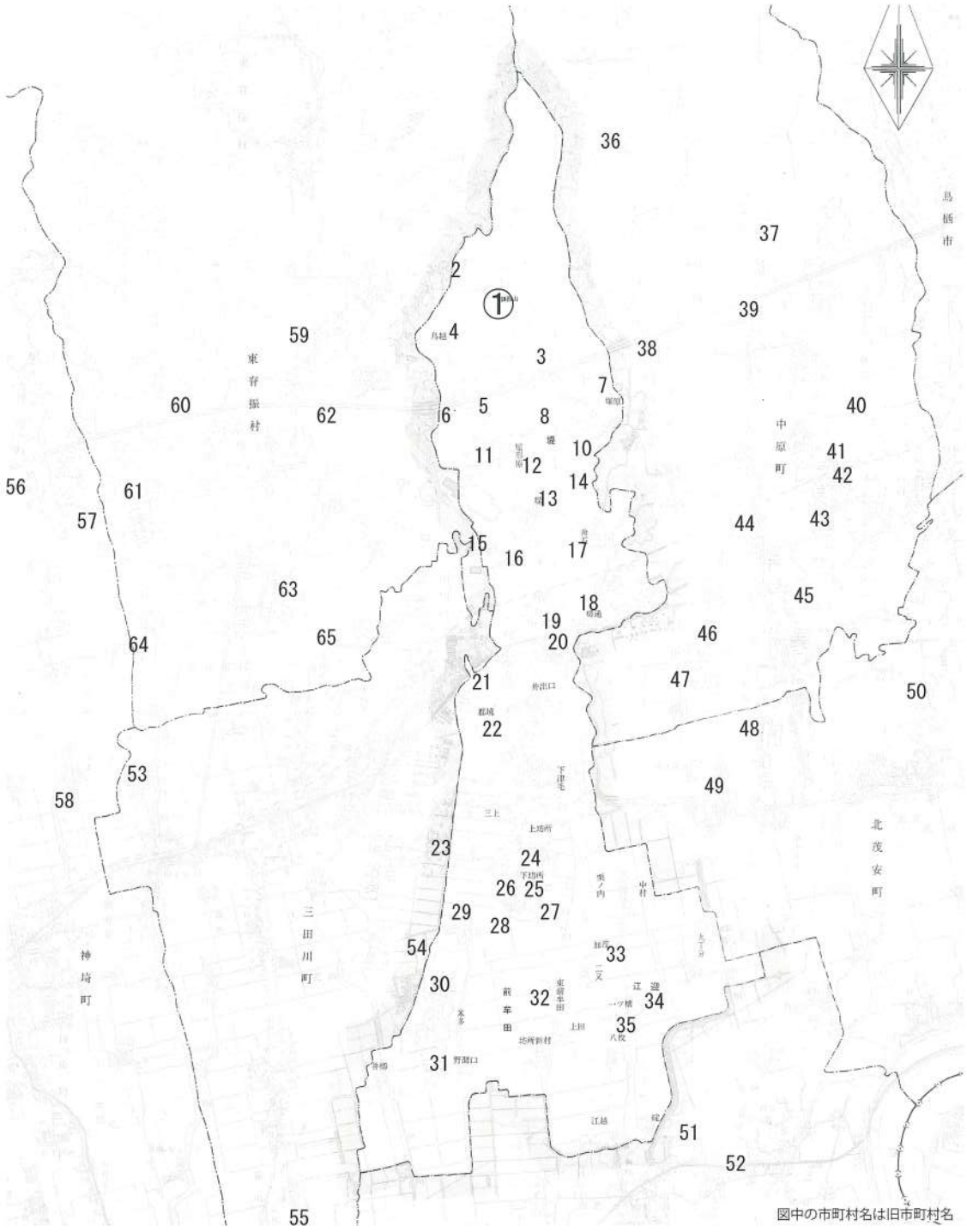
先土器時代の遺跡についてみると、各段丘で層序が異なる本地域においては本格的な調査がなされていないのが現状で、断片的な遺物の出土、採取にとどまっている。町内では、平成 4 年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡の調査において細石刃 1 点とこの時期のものと考えられる石器類が少量出土しているが、これが発掘調査における主な出土例である[6]。周辺地域では、吉野ヶ里町(旧三田川町)との境界に位置する二塚山丘陵の吉野ヶ里町（旧三田川町）側からナイフ形石器の採取例が報告されている[7]。また平成 5 年度の県営農業基盤整備事業に伴う八藤遺跡下層における阿蘇 4 火砕流跡と埋没林に係る調査において、先土器時代の年代示標となっている姶良 - Tn 火山灰（AT）の含有ピークが、通常の丘陵上の埋蔵文化財調査において遺構検出面としている「地山」の表層を構成する黄褐色風積土層の最上部付近、アカホヤ含有層のやや下部にて検出されている[8]。

縄文時代になると、みやき町（旧中原町）香田遺跡[9]や吉野ヶ里町（旧東脊振村）戦場ヶ谷遺跡[10]などが出現する。町内においても、これまでも町北部の丘陵部から土器や石器が、耕作や先覚者の遺跡の表面観察などによって断片的に出土、採取されていたが、近年の上峰北部農業基盤整備事業に伴う発掘調査の結果、平成元年度の船石遺跡 11 区[11]、平成 2 年度から 5 年度にわたり実施した八藤丘陵の調査[12]において、遺構や遺物がまとまって検出されており、今後の調査例の増加が期待されている。

弥生時代になると、遺跡の数や規模、その内容が飛躍的に増加、充実することは先に触れたが、早くから『魏志倭人伝』の「弥奴国」の所在地を佐賀平野東部、なかでも三養基郡西部の旧三根郡にあてる論考が行われてきたことは周知のことである。旧三根郡に所属する上峰町においても、丘陵部のほとんどにこの時期の遺跡が展開している。しかし町の南部や中央部の米多地区、坊所地区の丘陵部は中世以降集落として発達し、早くから宅地化が進み、本格的な発掘調査の例に乏しく、わずかに再開発に伴い部分的に小規模の発掘調査が行われているに過ぎず、遺跡の詳細について把握できていないのが現状である。これに対して、町北部の大字堤地区では、近年の工業団地建設や農業基盤整備事業など大型開発に伴い広範囲かつ大規模な発掘調査が実施され、各遺跡から当時の社会の様子を知るうえで貴重な資料が得られている。町内の代表的な遺跡としては甕棺墓から細形銅剣や貝釧を出土した切通遺跡[13]、吉野ヶ里町（旧東脊振村・旧三田川町）に跨る、佐賀県東部中核工業団地の建設に伴い甕棺墓、土坑墓など約 300 基が調査され、舶載鏡、小型倣製鏡をはじめとする貴重な副葬品を出土した二塚山遺跡[14]、佐賀県住宅供給公社の宅地造成に伴う調査で一集団の集落部分の全容が明らかになった一本谷遺跡[15]、地区運動公園整備に伴う調査で 5 世紀代の古墳とともに支石墓はじめ多数の甕棺墓が検出された船石遺跡[16]などが知られている。また近年の上峰北部県営農業基盤整備事業に伴う調査においても、船石遺跡[17]、船石南遺跡[18]、八藤遺跡[19]から竪穴建物跡や甕棺墓などが多数検出されている。

古墳時代になると、この地域にも首長墓が出現する。初頭の時期にはみやき町（旧中原町）姫方原遺跡[20]、上峰町五本谷遺跡[21]などにおいて方形周溝墓が営まれ、やがて中期から後期にかけて鳥栖市から佐賀市大和町に至る山麓や丘陵部に大型の前方後円墳が出現する。鳥栖市剣塚古墳[22]、みやき町（旧中原町）姫方古墳[23]、上峰町西南部から吉野ヶ里町（旧三田川町）に跨る目達原古墳群[24]、神埼市（旧神埼町）伊勢塚古墳[25]、佐賀市銚子塚古墳[26]、佐賀市大和町船塚古墳[27]など佐賀県東部の代表的な古墳が築かれるようになる。さらに後期には現在長崎自動車道や県道佐賀川久保 - 鳥栖線が通る山麓部から丘陵部に跨る一帯に小円墳を中心とした古墳が多数築かれ、それぞれが山麓部の尾根や谷あるいは丘陵を単位として後期群集墳を形成している。

後の『肥前風土記』にみえる三根郡米多郷に属する当時の上峰町一帯は『古事記』、『国造本紀』などの記事によ



上峰町

① 鎮西山城跡
2 奥の院古墳群
3 二本柳古墳群
4 鎮西山南麓古墳群
5 堤三本松遺跡
6 屋形原古墳群
7 谷渡古墳群
8 堤三本柳遺跡
9 青柳古墳群
10 新立古墳群
11 屋形原遺跡
12 堤六本谷遺跡
13 堤土塁跡
14 八藤遺跡
15 二塚山遺跡
16 五本谷遺跡
17 船石遺跡
18 船石南遺跡
19 切通遺跡
20 一本谷遺跡
21 坊所一本谷遺跡
22 上のびゅう塚古墳
23 目達原古墳群
24 坊所城跡
25 樫寺遺跡
26 杉寺遺跡
27 坊所二本松遺跡
28 坊所三本松遺跡
29 塔の塚廃寺跡
30 西前牟田遺跡
31 米多城跡
32 前牟田城跡
33 加茂環濠集落跡
34 江迎城跡
35 一ノ橋環濠集落跡

みやき町(旧中原町)

36 鷹取山城跡
37 山田古墳群
38 高柳大塚古墳
39 綾部城跡
40 蓑原遺跡
41 姫方遺跡
42 姫方古墳
43 姫方原遺跡
44 原古賀六本黒木遺跡
45 町南遺跡
46 天神遺跡
47 西寒水遺跡

みやき町(旧北茂安町)

48 宝満谷遺跡
49 宝満宮古墳
50 大塚古墳

みやき町(旧三根町)

51 西島城跡
52 本分貝塚

吉野ヶ里町(旧三田川町)

53 吉野ヶ里丘陵遺跡群
54 下中杖遺跡
55 下藤貝塚

神埼市(旧神埼町)

56 志波屋六本松遺跡
57 伊勢塚古墳
58 馬郡遺跡

吉野ヶ里町(旧東脊振村)

59 西石動古墳群
60 戦場ヶ谷遺跡
61 三津永田遺跡
62 西石動遺跡
63 松原遺跡
64 辛上廃寺跡
65 横田遺跡

Fig. 1　鎮西山城跡の位置及び周辺遺跡（1/50,000）

れば応神天皇の曾孫にあたる「都紀女加」なる人物が初代の米多国造として中央より下向した地域に比定され、その中心は、町南西部の米多地区から吉野ヶ里町（旧三田川町）東部の目達原一帯にあったと推定されている。

町内の主要な古墳としては都紀女加を始祖とする米多国造一族の墳墓として、5世紀代後半に形成されたと考えられる上のびゅう塚（現在、陵墓「都紀女加王墓」宮内庁管轄）はじめ無名塚、大塚、古稲荷塚、稲荷塚などの前方後円墳ほかからなる目達原古墳群[28]が知られていたが、戦前の陸軍飛行場建設の際に、唯一上のびゅう塚を残し他の古墳は簡単な発掘調査の後に破壊されている。また町の北部の古墳としては、同じく5世紀代の古墳で、蛇行状鉄剣、蛇行状鉄矛を出土した船石天神宮境内の船石古墳1～3号墳[29]が知られている。古墳時代後期の古墳としては、町北部の鎮西山の周辺山麓部から高位段丘上にかけて、小円墳を主体とする谷渡、青柳、新立、奥の院、鎮西山南麓、屋形原などの古墳群が点在している。

一方、この時期の集落は吉野ヶ里町（旧三田川町）下中杖遺跡[30]、吉野ヶ里町（旧東脊振村）下石動遺跡[31]などが知られているが、弥生時代集落に比べ、遺跡そのものの数も少なく、調査例も少数であることから、いまだに実態が明らかになっていないのが現状である。町内の遺跡をみても、当時の政治的中心であったと考えられる町南部の米多地区周辺における本格的な発掘調査の例がなく、今後の大きな課題といえる。

奈良・平安時代の遺跡としては吉野ヶ里町（旧三田川町）下中杖遺跡、吉野ヶ里町（旧東脊振村）辛上廃寺跡[32]、霊仙寺跡[33]などが著名であるが、この時期の遺跡についてもまとまった調査例が少なく、実態はあまり解明されていない。当時の遺構として大規模なものは、佐賀平野に敷かれた条里制の遺構が上げられ、早くから地名などから条里の復元が試みられ、現在ではほとんどの条里が復元されている。また大宰府から肥前国府へ通じる官道の調査も進み、近年部分的な発掘調査が行われている。

町内では堤土塁跡[34]や塔の塚廃寺跡[35]などが奈良時代の遺跡として戦前から注目されている。町北部の堤地区の八藤丘陵と二塚山丘陵の間の谷底平野を遮断する形で築かれた堤土塁跡は、版築工法により築かれた福岡県の水城に似た施設＝「小水城」で、その築造目的が、大宰府の防衛施設であるとする説、灌漑用水確保のための溜池の堤防であるとする説など議論がなされてきたが、平成2年度からの土塁の東方に接する八藤丘陵の調査において、土塁東端から一直線に八藤丘陵を東方へ横断する道路側溝状の遺構が検出され[36]、その性格付けにあらたに古代道の存在が想定されることとなった。また、町南西部を占める目達原丘陵の南端部に位置する塔の塚廃寺跡は、百済系単弁軒丸瓦が発見され、戦前までは基壇、礎石の存在が知られていた奈良時代の寺院址で、目達原古墳群を営んだ米多国造一族の流れをくむ三根郡の郡司層が建立したものと推定されている。また町内における奈良・平安時代の集落は、農業基盤整備事業に伴う調査や近年の大規模小売店舗建設に先立つ坊所一本谷遺跡[37]の調査などでまとまった調査がなされたのみで、今後の調査例の増加が期待される。

中世に入り、14世紀頃から東肥前では北部の脊振山系の山麓部の小峰に山城が築かれ、沖積平野部には環濠を伴う平城や集落が出現するようになり、この状況が戦国時代まで続く。上峰町周辺で著名な山城跡は、鳥栖市の勝尾城跡[38]、みやき町（旧中原町）の綾部城跡[39]、神埼市（旧神埼町）の勢福寺城跡[40]などが挙げられる。勝尾城跡は国人領主筑紫氏の本城として知られている。勝尾城跡を中心に鬼ヶ城跡・高取城跡・葛籠城跡・鏡城跡などの出城、筑紫氏の居館跡、家臣団の屋敷跡、総構の堀や土塁跡など広範囲にわたる城館関係遺跡が確認されており、勝尾城筑紫氏遺跡として国史跡に指定されている。綾部城跡は、室町期において一色氏・今川氏・渋川氏などの歴代の九州探題が在城した山城として知られている。勢福寺城跡は少弐氏の居城として知られる肥前最大級の山城で、山城の南側に城下町を備えていたものと考えられ[41]、少弐氏滅亡後は龍造寺隆信の神埼郡支配の中核として再整備されている。一方、上峰町周辺で著名な平城に関してはみやき町（旧三根町）の西島城跡[42]や神埼市（旧神埼町）

の姉川城跡[43]が挙げられる。西島城跡は、西の切通川と東の寒水川が合流する場所に立地する平城である。永禄7年（1564）から天正3年（1575）にかけて、城主横岳鎮貞が東肥前の進出を図る龍造寺隆信と幾度となく激しい攻防戦を繰り広げた平城として知られている。姉川城跡は水堀で囲まれた平城で、14世紀代に菊池武安によって築城され、16世紀後半まで機能していたと考えられている。

町内の中世城館跡としては、北部の鎮西山城跡、上峰町中央部の平野を臨む丘陵部に坊所城跡、町南部の平野部には米多城跡、前牟田城跡、江迎城跡、一ノ橋環濠集落、加茂環濠集落などが知られていた[44]。しかし、昭和40年代後半からの圃場整備事業によって、これら平野部の遺構は、原状がほとんど失われてしまった。そのようななかで、町の親水公園として整備された江迎城跡では13世紀後半代の龍泉窯系の青磁碗が建物跡ともに出土し、また坊所城跡では16世紀後半代の青花皿片が出土している[45]。

以上、上峰町を中心に佐賀県東部の遺跡を概観したが、まさにこの地域は遺跡の密度、その内容ともに高く、遺跡の宝庫と呼ぶにふさわしい地域といえる。

3．鎮西山近辺の歴史について（Fig.1）

上峰町の北部は町の行政区では大字堤地区であり、現在、鳥越・屋形原・塚原・堤・船石・切通の6集落からなる。上記の3集落については鎮西山と隣接しており、この3集落と鎮西山の位置関係は、鎮西山の西から南西方向の麓に鳥越集落、南麓に屋形原集落、南東側の麓に塚原集落が所在している。ここでは、この3集落と鎮西山の歴史について詳しくみてみる。なお、以下の文章で紹介する遺跡については調査区名まで記載しているが、調査区の位置詳細図については、紙面の都合上割愛している。遺跡の位置については、「Fig. 1　鎮西山城跡の位置及び周辺遺跡」を参照してほしい。

旧石器時代の遺跡については町内では唯一屋形原集落の南方に位置する八藤遺跡で細石刃・尖頭器・石核などが出土している。しかしこれらの石器は後世の竪穴建物跡や土坑などの遺構から出土したものであり、町内全域でも旧石器時代と判別できる遺構は確認されていない。

縄文時代の遺跡については屋形原遺跡2区[46]において縄文時代後期から晩期にかけての竪穴建物跡や土坑が確認され、各遺構内から御領式土器・黒川式土器が出土している。塚原集落の青柳古墳群1区[47]の調査においては、土坑6基が検出され、各土坑から縄文時代早期の押型文土器、前期の撚糸文土器、後期から晩期にかけての鐘崎式土器・御領式土器・黒川式土器・刻目凸帯文土器が出土している。また土製円盤や石槍・石斧・石匙・磨石なども出土している。

弥生時代の遺跡については弥生時代前期後半頃から中期にかけて、堤地区の南辺域の低丘陵地上に所在する二塚山遺跡・切通遺跡・八藤遺跡・船石遺跡などで、甕棺墓・土坑墓を主体とする墓地群が確認されている。特に二塚山遺跡では弥生時代中期から後期段階にかけての甕棺墓・土坑墓から、銅鏡・鉄剣・貝輪・管玉などの副葬品が出土し、この地域を支配した有力者一族の墓群であったことが想定される。また町内では二塚山丘陵から南方へ延びる目達原丘陵一帯の丘陵上の各所において、確認調査や分布調査などで弥生時代の集落や墓地群が確認されている。それとは対照的に、鳥越・屋形原・塚原の3集落においては、弥生時代の遺構と判断できる遺構は数が少なく、堤六本谷遺跡1区[48]で弥生時代中期初頭の土坑が1基確認されている程度である。

古墳時代に入ると鎮西山近辺では4～5世紀代の遺構・遺物は皆無であるが、南麓の屋形原遺跡1区[49]・2区[50]、堤六本谷遺跡10区[51]・11区[52]、青柳古墳群1区で、6世紀代の竪穴建物跡が確認されている。堤六本谷遺跡

11区では、竪穴建物跡が25基確認されており、集落の形成が9世紀初頭頃まで継続している。また墳墓については、鎮西山の南麓には鎮西山南麓古墳群・屋形原古墳群・青柳古墳群・二本柳古墳群・谷渡古墳群、北麓には奥の院古墳群が所在し、6世紀から7世紀にかけて横穴式石室を持つ径10m規模の円墳が造られ、5～10基単位で群集している[53]。鎮西山近辺では古墳時代後期になると集落や墳墓群の形成が活発化する。

中世については堤六本谷遺跡2区や堤三本柳遺跡2区[54]において、15～16世紀代の土坑が4～5基確認されている。遺物は土師器坏、瓦質の鍋や擂鉢などが出土しており、土坑については形態や規模に規則性はなく、廃棄土坑と考えられる。埋蔵文化財以外の文化財については屋形原集落の東部にある子供遊場内に、天台宗の坂本修学院の末寺と伝わる慈眼廃寺の小堂がある。小堂の中には聖観音像が祀られており、背面には「天正8年（1580）庚辰9月30日、当願主執行藤八郎」と記され、町重要文化財に指定されている。またこの慈眼廃寺の小堂から東方400m地点の林の中には、元亀元年（1570）に起きた今山の戦いで、龍造寺軍の将として軍功をあげた鴨打胤忠の夫人の墓と伝わる五輪塔が残っている[55]。なお鎮西山城については、山城に関する文献資料が残っていないため、築城時期や城主については不明である。

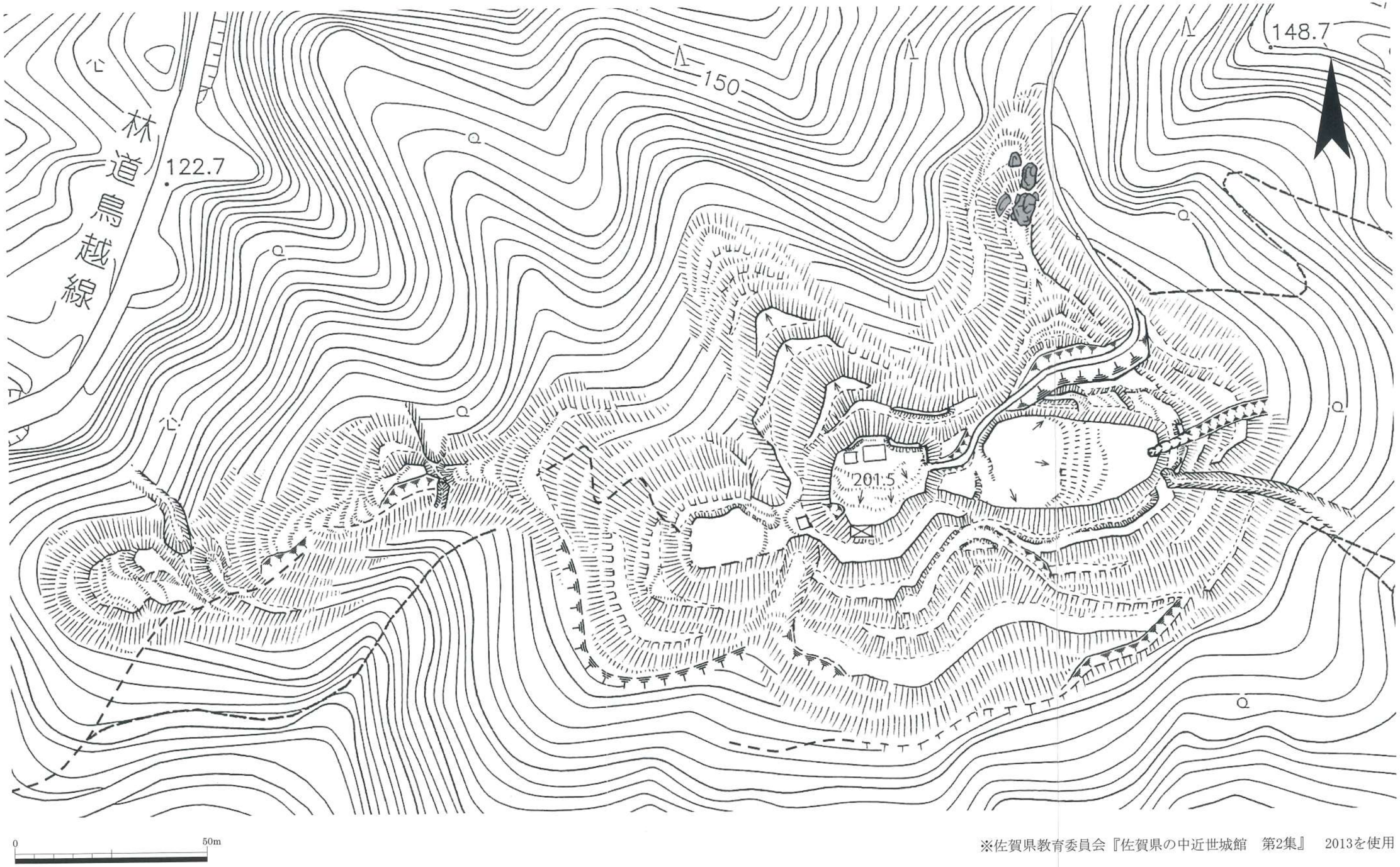
近世に入ると、屋形原集落の東側に所在する永昌山青松寺は元々浄土宗の寺であったが、『三養基郡誌』によると貞享3年（1686）に天台宗に転宗したとの記録が残る。また『三根郡誌』によると寛文11年（1671）に改宗したとの記録があり、転宗した時期が異なる。もともと、この地には南北朝時代の延文年間（1356～1361）に開山したと伝わる船石山浄地院西蓮寺の末寺として終南寺があったと推定され、青松寺の前身が終南寺で、その後天台宗に転宗して寺名を変更したのではないかと考えられている[56]。

鎮西山の北部一帯の草山は江戸時代の宝暦年間（1751～1764）以前から、神埼郡の石動上村・石動下村・大曲村、三根郡の舟石村・出来町村（切通村）・堤村・屋形原村、養父郡の高柳村の計8村が、刈敷の肥料や馬牛の餌料用の秣場として利用していた[57]。宝暦6年（1756）には草山に入る道筋について村間で紛争が起きるが、秣場の利用や、郡村境界の問題などについては、村々間の紛争が明治時代の終わりまで続いた[58]。

大正初年に、佐賀市今宿町の威徳院の村川良喜和尚が、鎮西山の北麓に真言宗醍醐派の修験道場、鳥越山不動院を開山する。「奥の院」とも呼称され、本尊に不動明王を安置している。現在も毎年8月には大護摩祈祷が行われ、多くの信者で賑わっている[59]。

昭和61年に上峰村が鎮西山を山登りや散歩だけの利用だけではなく、スポーツやレクリエーション、憩いと安らぎ、野外学習や健康づくりの場として機能を持たせたいという観点から、「鎮西山いこいの森」基本計画を策定した。昭和63年から佐賀県の生活環境保全林事業として鎮西山全体の整備に着手し、この間に雑木の伐採、車道や歩道の整備、約120種の樹木植栽、アスレチック広場の建設などが行われている。その後も鎮西山の整備は続き、山頂の南斜面に町章をかたどった径約40mのツツジの植栽、五万ヶ池の北側に約11,800㎡のキャンプ場の建設などが行われている。

鎮西山に関連した伝説として、平安末期の武将、鎮西八郎源為朝が山頂に城を築いたとの言い伝えがある。江戸時代に成立した『肥陽軍記』の中に「為朝九国に威勢つよく、東肥前に屋形を立て居住し」と記述されており[60]、東肥前に該当する三養基・神埼地区で「館」に関する地名は唯一鎮西山の南麓にある集落「屋形原」が該当する。川副義敦氏は、『肥陽軍記』の記載から、屋形原に為朝の館（居館）が所在し、その背後にある山城が為朝の居城として結びついたものではないかと推測している[61]。また山頂東側の中腹には「五万ヶ池（ごまがいけ）」という池があり、源為朝が鎮西山城を攻めた敵兵五万騎余りをこの辺りで討ったことから名付けられたという言い伝えがある。これも前述する為朝伝説と結びついて派生したものではないかと考えられている。また「鎮西山」の呼称に



※佐賀県教育委員会『佐賀県の中近世城館　第2集』　2013を使用

Fig. 2　鎮西山城跡縄張図（1/1,000）

ついては近世以前の文献資料や古地図に「鎮西山」と記載されたものがない。鎮西山の西麓にある大字堤字三本黒木一帯は明治22年（1889）に市町村制施行に伴い上峰村が誕生する以前は、地元の旧堤村と近隣の村々との間で秣場や村境の紛争が行われ、また明治22年以降は上峰村と近隣の村々との間での同様の紛争が起きているが、ここでも「鎮西山」の名称は登場しない。ただ昭和54年に発行された『上峰村史』の中に、「地形図にみる上峰村の変遷」として明治33年（1900）に国土地理院が測量を行った地図が掲載されているが、この地図上では「鎮西山」と記載されており、この頃には「鎮西山」と呼ばれていたことが分かる。

4．発掘調査前の鎮西山城跡について（Fig.2）

鎮西山城については宮武正登氏（現佐賀大学教育機構教授）が作成した縄張図[62]を見てみると、山城の全容を窺い知ることができる。

山頂の最高所に主郭部と考えられる曲輪跡があり、主郭部の平面形状は不定形を呈し、規模は南北30m×東西33mである。主郭内部の北西側が標高202mの最高地点になるが、この一帯は昭和63年から平成初期にかけて行われた公園整備事業に伴い東屋や貯水槽の施設が設置されており、当時の削平を大きく受けている場所である。主郭部の地形は北から南側に向かって緩やかに傾斜しており、曲輪の北側外周部一帯には土塁残痕が認められる。

副郭部と考えられる曲輪跡は主郭部の東隣にあり、主郭部との高低差は1m強の段差を有する。副郭部の平面形は長楕円形を呈し、規模は南北26m×東西62mを測り、規模の大きい曲輪である。地形については副郭部の西側から中央にかけてはおおむね平坦であるが、中央付近から東側にかけては緩斜面になっており、おそらく主・副郭部も公園造成前までは内部を細区分する段差を残していたものと推測している。

主・副郭部の2つの曲輪を取り巻くように2～4段の帯曲輪が付随している。主郭部の北東下、副郭部の南下の帯曲輪では現状の地表観察から外岸に土塁を盛った上幅2m、深さ0.5m前後の横堀の痕跡が認められることから、主・副郭部の周囲全体を横堀が囲繞するプランであったものと推定している。また副郭部東下の南東隅には、上幅5m、深さ2m規模の大きな竪堀が認められる。副郭部の北側には北尾根に延びる腰曲輪群があり、北尾根の先端部には細長い平場があり、「櫓石」と指呼される4つの巨岩が認められる。

主郭部の西側には南北14m×東西20mの出丸相当の曲輪が認められ、主郭部との間に埋没した堀切、もしくは鞍部に堀切転用の痕跡が窺えるとしている。この出丸相当の曲輪から西方下に延びる西尾根上は現在登山道として利用されているが、簡易的につくられた小規模の曲輪が多数認められ、道中で2つの堀切跡が認められる。

またこの西尾根の最先端部に当たる標高130m地点の中腹部には、「西古（小）城」の呼称地名（しこ名）を持つ大きな曲輪状の平坦地があり、先の公園整備事業に伴いアスレチック広場として整備されている。当時の削平を大きく受けており、旧地形の詳細が分からなくなっている。また、山頂から南西下に延びる尾根上の、標高130～140m地点にはねむの木通りという登山道があり、「東古（小）城」という呼称地名が残っている。アスレチック広場と比較すると公園整備による削平の影響が少なく、旧地形を維持しているようだが、明確な曲輪空間が見当たらないとしている。

宮武正登氏は先に行われた鎮西山全体の公園整備の影響により、旧態の理解が困難であるとしながらも、山頂に残存する遺構の配置状況や構造などの特徴から、鎮西山城について遺構の大半が戦国期のものではないかと指摘している。

【註】

1) 藤瀬禎博・石橋新次 『柚比遺跡群範囲確認調査第3年次概要報告書』 鳥栖市文化財調査報告書第30集 鳥栖市教育委員会 1980

2) 木下巧・天本洋一 『姫方遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第30集 佐賀県教育委員会 1974

3) 七田忠昭 『検見谷遺跡』 北茂安町文化財調査報告書第2集 北茂安町教育委員会 1986

4) 金関丈夫・坪井清足・金関恕 「佐賀県三津永田遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961

5) 七田忠昭他 『吉野ヶ里』 佐賀県文化財調査報告書第113集 佐賀県教育委員会 1992

6) 原田大介 『八藤遺跡Ⅲ』 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999

7) 七田忠志 「原始」『上峰村史』 上峰村 1979

8) 下山正一・西田民雄 「Ⅱ. 佐賀県上峰町周辺の地形と地質」『佐賀平野の阿蘇4火砕流と埋没林』 上峰町文化財調査報告書第11集 上峰町教育委員会 1994

9) 高瀬哲郎・堤安信・久保伸洋 「香田遺跡」『香田遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書2 佐賀県文化財調査報告書第57集 佐賀県教育委員会 1981

10) 七田忠志 「佐賀県戦場ヶ谷遺跡」『史前学雑誌』 6－2・4 1934

11) 原田大介 『船石遺跡Ⅴ』 上峰町文化財調査報告書第12集 上峰町教育委員会 1995

12) 原田大介 『八藤遺跡Ⅱ・堤土塁跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第14集 上峰町教育委員会 1998
前出 (6)

13) 金関丈夫・金関恕・原口正三 「佐賀県切通遺跡」『日本農耕文化の生成』 日本考古学協会 1961

14) 高島忠平・七田忠昭他 「二塚山遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979

15) 七田忠昭 『一本谷遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983

16) 七田忠昭 『船石遺跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1983

17) 鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ図録編』 上峰村文化財調査報告書第6集 上峰村教育委員会 1988
鶴田浩二・原田大介 『船石遺跡Ⅱ本文編』 上峰村文化財調査報告書第7集 上峰村教育委員会 1989
原田大介 『船石遺跡Ⅲ』 上峰町文化財調査報告書第8集 上峰町教育委員会 1990
原田大介 『船石遺跡Ⅳ』 上峰町文化財調査報告書第9集 上峰町教育委員会 1991

18) 原田大介 『船石南遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第21集 上峰町教育委員会 2002
原田大介 『船石南遺跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第22集 上峰町教育委員会 2002

19) 原田大介 『八藤遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第13集 上峰町教育委員会 1997

20) 木下巧他 『姫方原遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第33集 佐賀県教育委員会 1976

21) 木下巧・七田忠昭 「五本谷遺跡」『二塚山』 佐賀県文化財調査報告書第46集 佐賀県教育委員会 1979

22) 石橋新次 『剣塚前方後円墳』 鳥栖市文化財調査報告書第22集 鳥栖市教育委員会 1984

23) 前出 (2)

24) 松尾禎作 「目達原古墳群調査報告」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第9輯 佐賀県教育委員会 1950

25) 木下之治 「古代国家の形成」『佐賀県史』佐賀県 1968

26) 木下之治編 『銚子塚』 佐賀市教育委員会 1976

27) 松尾禎作 『佐賀県考古大観』 祐徳博物館 1959

28) 前出 (24)

29) 前出（16）

30) 七田忠昭・高山久美子・西田和己 『下中杖遺跡』 佐賀県文化財調査報告書第54集 佐賀県教育委員会 1980

31) 高瀬哲郎他 「下石動遺跡」『下石動遺跡』 九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書（6） 佐賀県文化財調査報告書第86集 佐賀県教育委員会 1987

32) 松尾禎作 「東脊振村辛上廃寺跡の調査」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』第5輯 佐賀県 1936

33) 田平徳栄他 『雲仙寺跡』 東脊振村文化財調査報告書第4集 東脊振村教育委員会 1980

34) 高島忠平・杠一義 『堤土塁跡』 上峰村文化財調査報告書 上峰村教育委員会 1978

35) 松尾禎作 「塔の塚廃寺址」『佐賀県史蹟名勝天然記念物調査報告』 第7輯 佐賀県 1940

36) 前出（12）
原田大介 『八藤遺跡Ⅲ』 上峰町文化財調査報告書第16集 上峰町教育委員会 1999

37) 平成5、6年度、上峰町教育委員会調査、整理中

38) 宮武正登 「第4編 中世編 第5章 鳥栖市内の中世城館」『鳥栖市史 第3章 中世・近世編』 鳥栖市 2008

39) 三好正來 「教育と文化 三 文化財」『中原町史 下巻』 中原町 1982

40) 宮武正登 『佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告書Ⅱ 佐賀県の中近世城館 第2集 各説編1（三養基・神埼・佐賀地区）』 佐賀県文化財調査報告書第201集 佐賀県教育委員会 2013

41) 桑原幸則・河野史郎 『城原二本谷西遺跡・城原三本谷北Ⅲ遺跡・城原三本谷南遺跡』 神埼町文化財調査報告書第50集 神埼町教育委員会 1993

42) 大園隆二郎 「中世Ⅱ 三 戦国の動乱 2龍造寺隆信の進出と横岳鎮貞・西島城」『三根町史』 中原町 1984

43) 河野史郎 『姉川城跡』 神埼町文化財調査報告書第50集 神埼町教育委員会 1996

44) 米倉二郎 「中世」『上峰村史』 上峰村 1979

45) 原田大介 『坊所城跡』 上峰町文化財調査報告書第10集 上峰町教育委員会 1992

46) 原田大介 『堤六本谷遺跡Ⅱ 屋形原遺跡Ⅲ』 上峰町文化財調査報告書第18集 上峰町教育委員会 2000

47) 原田大介 『堤六本谷遺跡Ⅳ 堤三本松遺跡Ⅱ 堤三本柳遺跡Ⅱ 青柳古墳群Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第20集 上峰町教育委員会 2001

48) 原田大介 『堤六本谷遺跡Ⅰ 屋形原遺跡Ⅱ』 上峰町文化財調査報告書第17集 上峰町教育委員会 2000

49) 杠一義 『堤六本谷遺跡Ⅲ』 上峰村文化財調査報告書第2集 上峰村教育委員会 1979

50) 前出（46）

51) 原田大介 『堤六本谷遺跡Ⅲ 堤三本松遺跡Ⅲ 堤三本柳遺跡Ⅰ』 上峰町文化財調査報告書第19集 上峰町教育委員会 2000

52) 前出（47）

53) 七田忠志 「古代」『上峰村史』 上峰村 1979

54) 前出（47）

55) 前出（44）

56) 福岡博 「宗教」『上峰村史』 上峰村 1979

57) 池田史郎 「近世」『上峰村史』 上峰村 1979

58) 川崎茂 「近代」『上峰村史』 上峰村 1979

59) 前出（57）

60) 原田種眞 『肥陽軍記』 日本合戦騒動叢書 5　勉誠社　1994

61) 川副義敦「中世」『上峰村史』 上峰村　1979

62) 前出 (40)

Ⅱ．調査の概要

1．調査に至る経緯

令和2年10月28日、上峰町大字堤字三本黒木地内において鎮西山再整備計画に係る「埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて」の照会文書が、上峰町長より提出された。対象地は、鎮西山の山頂部7,000㎡、山頂西側中腹のアスレチック広場9,000㎡、山頂南西側の中腹にあるねむの木通り6,500㎡である。鎮西山は昭和63年から平成3年にかけて佐賀県が実施した鎮西山生活環境保全林整備事業により、「鎮西山いこいの森」として山全体の整備を開始し、その後もキャンプ場の建設などの整備事業を継続していた。近年は山頂に設置した東屋・展望台・ベンチなどの公園設備や、アスレチック広場の遊具類、キャンプ場の施設などの老朽化が進行した。従来の点的な整備や改良が厳しい状況から、平成29年度に町が鎮西山再整備計画を取りまとめた。

今回の再整備計画については「めぐる・たたずむ・つどう　鎮西山の花風景づくり」を基本に社会資本整備総合交付金により、再整備を行うものである。山頂は「見晴らしの丘」、ねむの木通りは「彩の丘」として、修景と眺望に重点を置いた整備を予定している。また、アスレチック広場については老朽化した遊具を撤去し、新たに新設する計画である。3地点ともに周知の埋蔵文化財包蔵地である「鎮西山城跡」の範囲内に該当し、文化財保護法に基づく通知が必要である旨回答するとともに、事前の確認調査の実施に向けて関係者と協議を行った（Fig.3）。

これを受けて令和2年10月28日付で、佐賀県知事あてに文化財保護法に基づく通知が提出されたため、埋蔵文化財確認調査を行うことになった。

確認調査は開発予定地である大字堤字三本黒木4553、4474‐1、4474‐5、4474‐6の4筆の各1部、合計22,500㎡を対象に、2回にわたって実施した。

1回目の確認調査は山頂部とアスレチック広場の2地点において、令和2年12月23日～26日の期間で実施した。山頂部の確認調査は、重機による掘削作業が可能な主・副郭部と考えられる2つの大きな平坦部の範囲、約2,000㎡内において実施した。長さ10m×幅2mの試掘トレンチを6本設定し、確認調査面積は計120㎡となった。各試掘トレンチから、現地表面下0.2～0.3m地点で建物跡の礎石と考えられる石、小穴、土坑、溝状遺構などの遺構が検出された。また表土掘削時には主に12～13世紀にかけての白磁や龍泉窯系青磁・同安窯系青磁などの碗・皿の破片、土師器片などが出土した（Fig. 4・5）。

アスレチック広場は鎮西山の西中腹に位置し、人工的な造成による平坦部が広く認められる地域で、古くから伝わる通称地名で「西古（小）城」と呼ばれている。アスレチック広場の確認調査も、重機による掘削作業が可能な平坦部上に試掘トレンチを5本設定し、確認調査面積計72㎡分を実施した。確認調査の結果、遺構や遺物は確認できなかった（Fig. 6）。

2回目の確認調査はアスレチック広場とねむの木通りの2地点において、令和3年5月25日～6月10日の期間で実施した。

アスレチック広場については前回の確認調査で平坦部に試掘トレンチを設定して調査したが、遺構を確認できなかったため、今回は遺構が残存している可能性があると想定される斜面部分に試掘トレンチを5本設定し、試掘面積計39.5㎡分の確認調査を実施した。斜面での作業となったため、安全を考慮し作業員による表土掘削を実施したが、遺構や遺物は確認できなかった。No.25試掘トレンチの掘削中に飴玉の袋が出土し、この平坦部の造成は昭和63年から平成初期に実施した公園整備工事に伴う削平・盛土によるものであることを再確認した。

またねむの木通りは鎮西山の南中腹にある南登山口から山頂を結ぶ登山道で、周辺の地形は緩やかな起伏がある傾斜地である。大ケヤキ・ヤマザクラなどの様々な修景植栽が行われており、古くから伝わる通称地名で「東古（小）城」と呼ばれている地域である。植栽やベンチの設置、登山道の整備など、簡易的な開発工事が行われているが、アスレチック広場と比較するとおおむね旧地形の名残りをとどめている。重機の搬入路が確保できなかったため、確認調査は作業員による表土掘削を実施した。3本の試掘トレンチを設定し、試掘面積計は29㎡である。3本の試掘トレンチともに遺構や遺物は確認できなかった（Fig. 7）。

2回にわたる確認調査の結果、山頂の主・副郭部と考えられる平坦部から土坑や小穴とともに堀と考えられる溝状遺構を確認した。前から地表観察で主郭部と考えられる平坦部の北側一帯では土塁と考えられる盛土状の高まりが残存していたが、改めて山城に伴う曲輪跡であることが再確認できた。また、表土中から出土した遺物については、12～13世紀にかけての白磁や龍泉窯系青磁・同安窯系青磁などの碗・皿の破片、土師器片などが主体を占めており、出土遺物の内容から山岳寺院などの存在が想定された。このことから鎮西山の山頂一帯は、戦国時代に山城が築城される前に、12～13世紀代にもまとまった遺構が存在する複合遺跡であることが分かった。一方、以前から「西古（小）城」「東古（小）城」と呼称されていたアスレチック広場やねむの木通りからは、遺構や遺物は確認できなかった。今回は鎮西山再整備事業に伴うものであり、山頂の埋蔵文化財確認調査で検出された堀跡や柱穴などの遺構は、現地表面下0.2～0.3m地点で確認されていることから、地下にある埋蔵文化財に対し工事の影響が及ぶものと判断された。

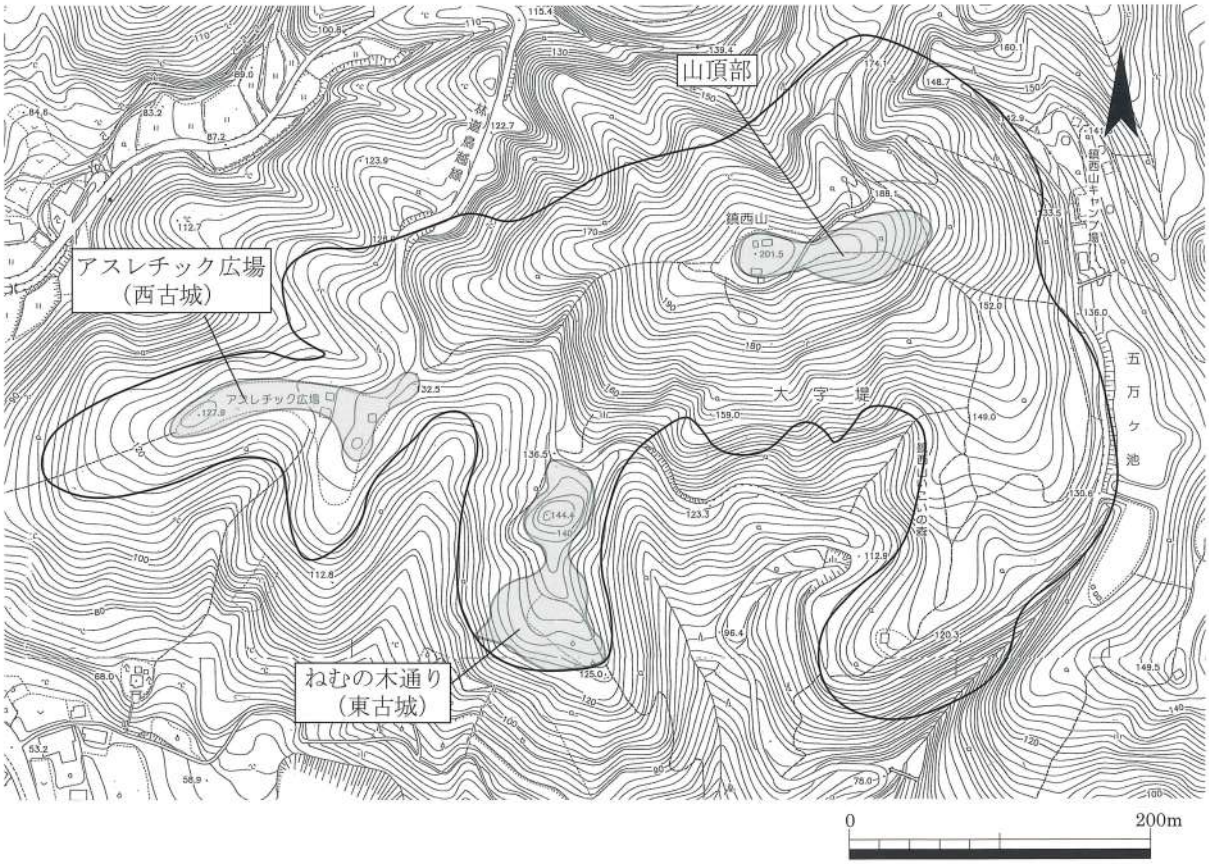


Fig. 3　令和2・3年度鎮西山城跡確認調査位置図（1/5,000）

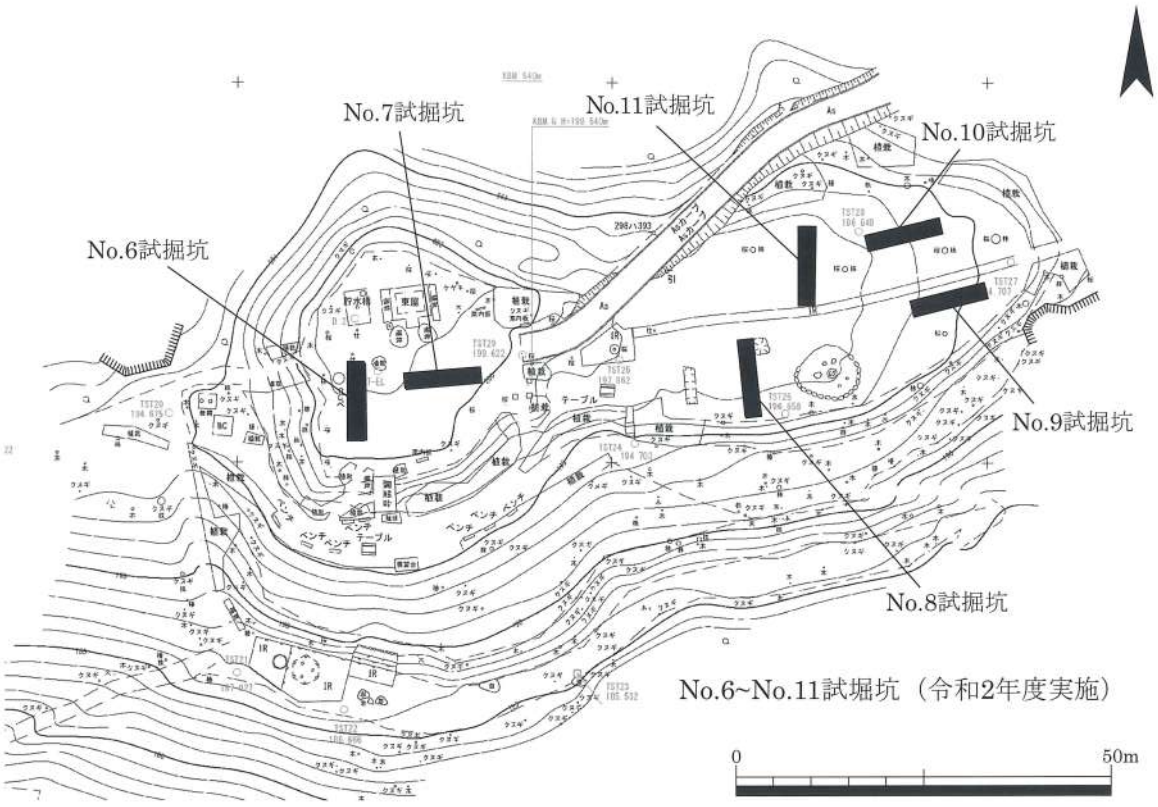


Fig. 4　鎮西山城跡確認調査　山頂部試掘トレンチ設定図（1/1,000）

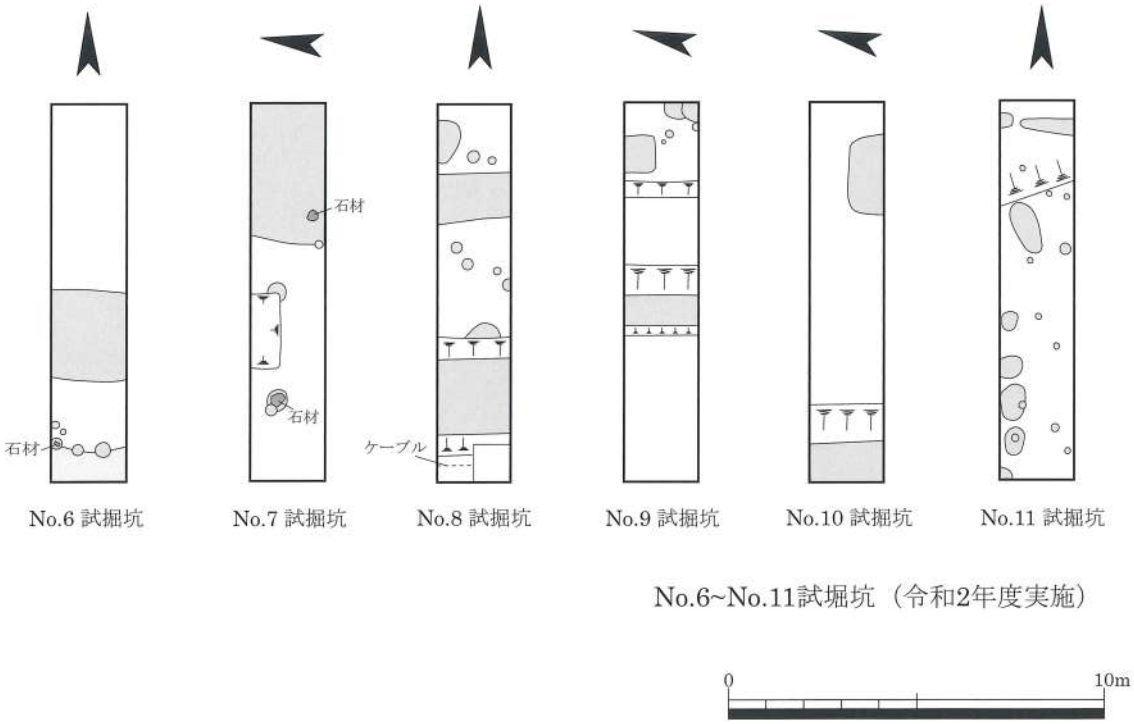


Fig. 5　鎮西山城跡確認調査　山頂部試掘トレンチ遺構配置図（1/200）

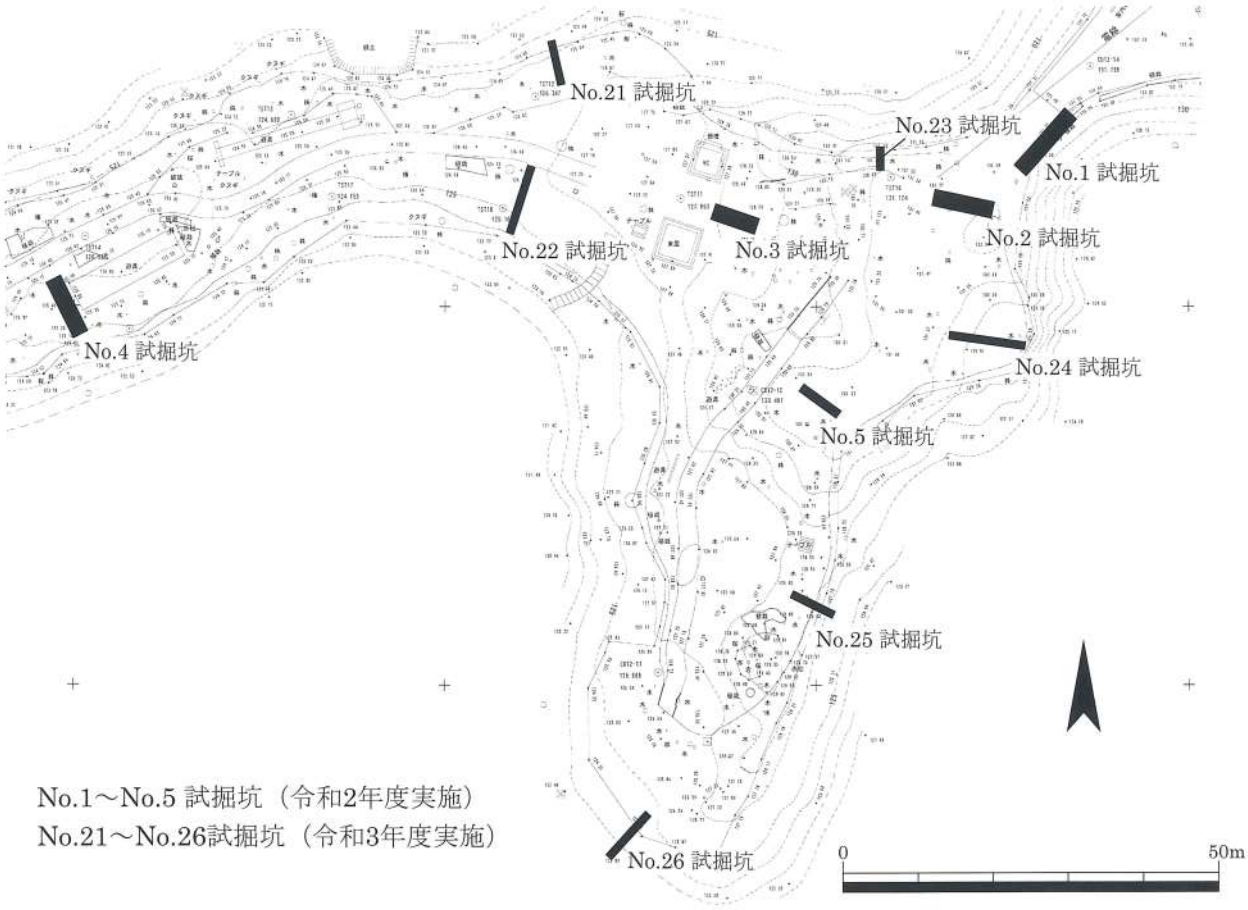


Fig. 6　鎮西山城跡確認調査　アスレチック広場試掘トレンチ設定図（1/1,000）

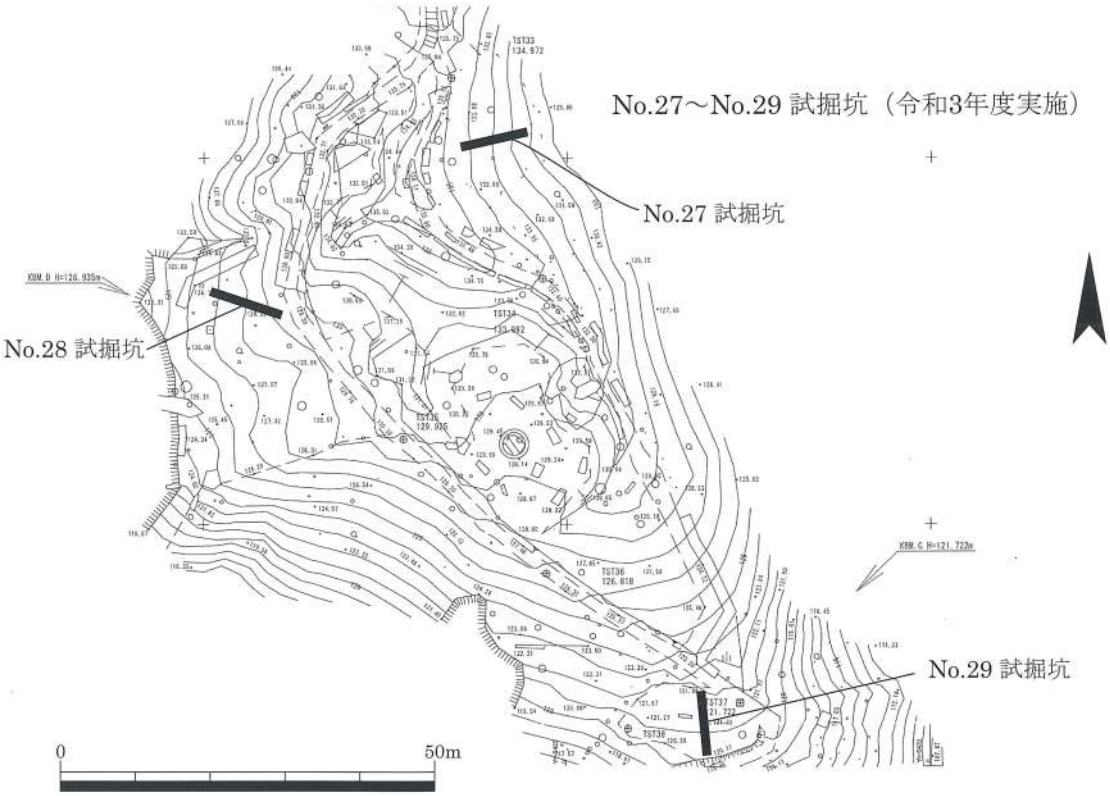


Fig. 7　鎮西山城跡確認調査　ねむの木通り試掘トレンチ設定図（1/1,000）

確認調査の結果を受けて、上峰町教育委員会は、上峰町、佐賀県文化・スポーツ交流局文化課文化財保護室と今後の遺跡の取扱いについて協議を行い、当該開発区域の内、山頂の主・副郭部とその周辺下を巡る帯曲輪と考えられる部分を含む約 5,598 ㎡について、記録保存を目的とした発掘調査を実施することになった。

発掘調査の調査方法については山城調査の有識者である佐賀大学全学教育機構の宮武正登氏から令和 3 年 7 月 9 日に現地での調査指導を受け、また同年 8 月 6 日には宮武正登氏とリモート会議を行い、これらを踏まえて発掘調査計画を検討した。

まず調査方法については山頂の各所に先行してトレンチ調査を行い、曲輪、土塁、横堀の各遺構の形状や規模などを把握したうえで、主・副郭部と考えられる平坦部の調査へと移行する流れとなった。

トレンチ調査は、遺構の有無や規模・範囲の確認を行うために、各地点にトレンチを設定して行う調査である。まず主・副郭部については、掘立柱建物跡・柵列跡などの柱穴、堀跡などの遺構の有無確認や曲輪の地形形状の把握などを目的にして、トレンチ調査を実施することになった。主郭部の地形は北から南に向かって緩やかに傾斜していることから南北方向に長いトレンチを設定し、副郭部は曲輪自体の主軸が東西軸であることから東西方向に長いトレンチを設定することが決定した。一方、主・副郭部の周辺下を囲繞する帯曲輪部分には横堀・土塁などの有無と規模・範囲の確認を行うことを目的として、各所にトレンチを設定して調査を行うこととなった。また主郭部の西側には西曲輪とも呼ばれる平坦部があり、建物跡の柱穴・堀跡などの遺構の有無確認や、曲輪の地形状況の把握を目的としてトレンチ調査を実施することになった。

主・副郭部の調査については全面の遺構検出作業を行い、建物跡や横堀などの遺構配置状況の把握を行うことが主目的となった。また遺構掘削については、遺跡の保存を第一と考慮して半裁までとし、出土遺物を回収することで遺構時期の把握を行うこととなった。

また発掘調査の実施については、調査対象面積が 5,598 ㎡と広大であるのに対し、町の教育委員会文化課の専門職員不足の問題により、町直営での調査実施が困難であった。また社会資本整備総合交付金に係る事業に対する民間会社の活用促進の観点などから、発掘調査を業務委託という形で民間会社に発注することとなった。発掘調査の体制に関しては、民間会社の主任調査員が主体となって調査を運営し、町の文化課職員が監督員として業務委託の管理を行う体制で調査を進めていくこととなった。

2．調査の経過と方法

記録による遺跡の保存が必要になった 5,598 ㎡について、令和 3 年 12 月 14 日に「令和 3 年度鎮西山城跡発掘調査業務委託」の入札を行い、落札した㈱埋蔵文化財サポートシステムと上峰町との間で 12 月 21 日に業務委託の契約を締結した。

12 月 21 日から作業に着手し、老朽化した東屋・テーブル・ベンチなどの公園設備の撤去、植栽の伐採・移植などを行い、調査開始前の地形測量を行った。また五万ヶ池南側にある多目的広場の駐車場内に現場事務所兼作業員休憩所として、仮設プレハブを設置し、発掘器材の搬入を行った。令和 4 年 1 月 4 日に発掘作業員を投入し、先行トレンチ調査を開始した。当初は 16 本のトレンチ調査を実施する予定であったが、調査が進むにつれて山城史跡の公園整備を視野に入れた確認調査を実施することになったため、随時トレンチを追加設定し、調査終了までに合計 26 本のトレンチ調査を実施した。1 月 27 日に副郭部の表土掘削を開始し、2 月 9 日に完了した。表土除去完了後、遺構検出作業や遺構掘削を行った。必要に応じて個々の遺構の写真撮影や図化作業を行い、調査区全体を対象に空

中写真撮影や遺構配置図作成などを実施した。

令和4年1月26日、2月14日、2月24日、3月13日の4日間は、佐賀大学全学教育機構の宮武正登氏に現地での調査指導を受け、2月3日にはリモート会議による今後の調査方針の検討会も行われた。調査方針の検討会では、これまでのトレンチ調査の結果、帯曲輪部分における横堀や切岸などの遺構の残存状況が良好であり、山城史跡の公園整備を視野に入れた調査が必要になった。特に帯曲輪部分の横堀の規模・範囲の確認を目的として、随時トレンチの追加設定を行い、調査を進めていくこととなった。なお当初は主郭と考えられる曲輪内の全面調査も予定していたが、先行トレンチ調査や副郭部の調査において12～13世紀代の中国産の白磁・青磁などの重要遺物が多く出土し慎重に調査を実施したことや、当社の予定よりもトレンチ箇所を増加して調査を行ったこともあり、主郭部と考えられる曲輪内の全面調査が実施できなかった。

令和4年1月26日には山頂にて各報道局より取材があり、発掘調査の進捗状況などについて発表が行われた。3月3日、3月13日に武廣勇平町長が来跡した。また、3月9日には地元の上峰小学校4年生に対する遺跡見学会を実施した。

3月17日に発掘調査が終了した。3月17日～3月19日の期間で、次年度調査に向けトレンチや副郭部の埋戻は実施せずに、ブルーシートで養生した。仮設プレハブを撤去し、発掘器材の搬出を行った。

令和3年度末から整理作業を開始し、令和4年度に報告書作成を行った。

調査の方法は遺跡名が『佐賀県遺跡地図』に掲載されている「鎮西山城跡」（上峰町1 遺跡番号0002 地図番号33）を使用した。遺跡の略号は「TNZ」とし、調査遺跡名は遺跡略号と調査回数の組み合わせにより「TNZ - 1」と表記し、出土資料や各種作成資料の登録および表示はすべてこの略号により行っている。

調査にあたり調査対象地を包括した形で調査グリッドを設定した。グリッドは平面直角座標第Ⅱ系を基準に、X =40,310m、Y = - 54,170m の交点を始点とし、10m 方眼を最小単位とした。南北行はアルファベット1文字で表示し、始点から南へA～Hまでの8行、東西列は算用数字で表示し、始点から東へ1～14までの14列として設定した（Fig.8）。各々のグリッド名称は「行名称-列名称」で表記し、発掘調査における遺構配置図や遺構図の作成、所属不明な遺構検出面で出土した遺物や表面採集遺物などの取り上げ、報告文中における遺構説明など、すべて今回設定したグリッドに基づいて行った。

遺構名についてはまず『佐賀県中近世城館跡緊急分布調査報告』掲載の鎮西山城縄張図（Fig.2）とトレンチ調査に基づいて山城としての各曲輪と防御施設に名称を付した。今回の調査では誤認を避けるため、機械的に高所より順に番号の割振りを行った（Fig.9）。例えば縄張図における主郭部は曲輪Ⅰ、副郭部は曲輪Ⅱなどとし、縄張図で確認される土塁や堀の遺構とトレンチ調査で新たに確認された横堀などにも連続性が確認できる範囲でそれぞれ番号を付与した。また、調査を行ったトレンチと曲輪Ⅱでは山城機能時以外の遺構も検出される可能性があったため、『発掘調査のてびき』（文化庁編集 2010）に基づき、遺構番号はその頭に遺構分類種別略号を付加し最終的な遺構番号とした。この遺構分類略号には、SA：柵列、SB：掘立柱建物跡、SD：溝状遺構、SK：土坑、SX：性格不明遺構、P：小穴・柱穴がある。また、掘立柱建物を構成する柱穴を表記する場合は、各柱穴に付与した柱穴番号と組み合わせて表記した（例えばSB6 - P1）。

調査ではまず調査対象範囲の事前地形測量図（1/400）の作成後、トレンチによる曲輪や防御施設の堆積状況と埋没遺構の把握を行い、その後曲輪Ⅱ全体をバックホウによる表土除去作業を行った。表土除去後、人力による遺構検出を行い、検出遺構は電子平板などを用いて縮尺1/100で遺構配置図を作成した。遺構実測は調査員と実測員によって、個別遺構図（1/10・1/20）、遺物出土状況図（1/20）、堆積土層図（1/20）の作成を行い、これ以外の遺

構は全体遺構実測図（1/20）を作成し、トレンチ調査および曲輪Ⅱ調査終了後に地形測量図（1/400）の作成を行った。遺構写真は35mmカラーネガフィルムとデジタル一眼レフカメラ（2,000万画素以上）を使用し調査員が随時撮影を行った。調査区全体写真はラジコンヘリコプターおよびドローンにてカラーネガフィルムとデジタル一眼レフカメラ（2,000万画素以上）を用いて撮影を行った。

整理作業は㈱埋蔵文化財サポートシステム本社の整理室で実施した。出土遺物の整理方法に関しては、上峰町教育委員会指導の下、以下のような方法で行っている。

(1) 出土遺物のうち、完形遺物や特徴のある遺物など資料的価値が高いと判断されるものをA種資料、時代が判別できるが実測を行っていないものをB種資料、それ以外のものをC種資料として分類する。

(2) この作業と併行して所定の目録を作成する。

(3) 作成した目録に沿って遺物の図化作業を行う。

(4) 作成した実測図の点検および遺物情報の記録を行う。

(5) 収蔵用プラスティックコンテナに収納し、所定の表示シールを貼付する。その後、収蔵施設へ搬入する。
なお出土資料および調査において作成されたすべての記録資料は、報告書刊行後に上峰町教育委員会に返還し、収蔵施設にて保管・管理を行っている。

【引用・参考文献】

宮武正登 『佐賀県中近世館跡緊急分布調査報告書Ⅱ　佐賀県の中近世城館　第2集　各説編1（三養基・神埼・佐賀地区）』佐賀県文化財調査報告書第201集　佐賀県教育委員会　2013

文化庁文化財部記念物課 「第Ⅳ章 遺構の記録 第2節 記録と情報」『発掘調査のてびき　集落遺跡発掘編』 2010

Ⅲ．遺跡の概要

１．遺跡の概要

鎮西山城跡は脊振山地より南に延びる標高 202m、鎮西山に立地する。南側登山口辺りより比高約 130m の山頂にあたる曲輪Ⅰ（主郭部）からは、九州最大の平野である筑紫平野一帯と、阿蘇山を水源とし、筑紫平野を東から西に貫流して有明海に注ぎ、筑紫次郎の異名を持つ河川である筑後川を一望できる好立地である。鎮西山城は、「ちんぜいざんじょう」と読み、別称で五万ヶ池（ごまがい）城とも言う。この五万ヶ池とは城跡近くにある池の名称からついたと考えられる。鎮西山城跡は平安末期の武将である源為朝の居城との伝承があるが定かでない。鎮西山城跡は、鎮西山の山頂を中心に城郭を形成する。今回調査を行った調査区はその山頂の一帯でいくつかの曲輪を形成していた。本調査では、鎮西山城跡の実態を確認するためにトレンチ調査を行い、その後、遺構掘削の調査を行った。

２．調査の概要

今回の調査に先立ち、東屋などの公園内の施設の解体を行った。次に地形測量を行うために植木の伐採を行い現況の地形測量（25cm コンタ）を行った（Fig.8）。

本調査では曲輪がⅠ～Ⅵまでの 6 箇所を確認できた。曲輪それぞれの地山の標高は最も高い位置にある曲輪Ⅰ（主郭部、Fig.9・10）が 200 ～ 202m で、次に高いのが曲輪Ⅰの東側に位置する曲輪Ⅱ（副郭部）で、195 ～ 198m である。また曲輪Ⅲ～Ⅵは曲輪Ⅰ・Ⅱより一段低い帯曲輪で曲輪Ⅲは標高が 194 ～ 194.5m で曲輪Ⅰの西側に位置し、曲輪Ⅳは標高が 195 ～ 196 m で曲輪Ⅰの南側に位置する。曲輪Ⅴは標高が 192 ～ 193m で曲輪Ⅱの南側に位置し、曲輪Ⅵの標高が 192 ～ 193m で曲輪Ⅱの北東部に位置する。曲輪Ⅰと曲輪Ⅲとの比高差は最大で 8m、曲輪Ⅰと曲輪Ⅳとの比高差は最大で 7m である。曲輪Ⅱと曲輪Ⅵの比高差は、最大で 7m である。最も標高が高い位置にある曲輪Ⅰと最も標高が低く、同程度の標高に位置する曲輪Ⅴ・Ⅵとの比高差は最大で 10m となっている。また遺構検出を行った曲輪Ⅱの規模は東西 60m ×南北 30m で最も面積が広く、つづいて曲輪Ⅰの規模東西 28m× 南北 28m が次ぐ。曲輪Ⅲ～Ⅳは曲輪Ⅰ・Ⅱよりも狭く、曲輪ⅢがⅣ～Ⅵに比べて方形を呈する平場となっているが、その他は東西に細長く延びる形状となっている。

本調査はまず曲輪Ⅰから曲輪Ⅵの残存状況を確認するためにトレンチ調査を実施した。トレンチ調査は、No.1 ～ No.26 までの全 26 本を設定した（Fig.9）。それぞれのトレンチで、No.3・5・7・17 ～ 22 トレンチについては、横堀を確認するために設定を行った。No.12 ～ 16 東・西側トレンチは土塁と横堀を確認するために設定を行った。No.3・4・6・8 トレンチは曲輪Ⅰの状況確認と土塁を確認するために設定を行った。No.1・2 トレンチは曲輪Ⅲの状況確認と堀切を確認するために設定を行った。No.23 ～ 26 トレンチは、曲輪Ⅱの状況確認と土塁を確認するために設定を行った。

なお No.10 トレンチに関しては当初調査を行う予定であったが、アスファルト部分であったという状況と重機の乗り入れや機材の運搬を行うための作業用の通路として使用するという作業上の都合で、調査を行わなかったことから欠番とした。今回のトレンチ調査により鎮西山城跡に伴う横堀、堀切、土塁などを確認することができた。

次に曲輪Ⅱの調査は表土剥ぎ後に地形測量と遺構検出を行い、一部遺構の半裁を行った。遺構検出の結果、実際

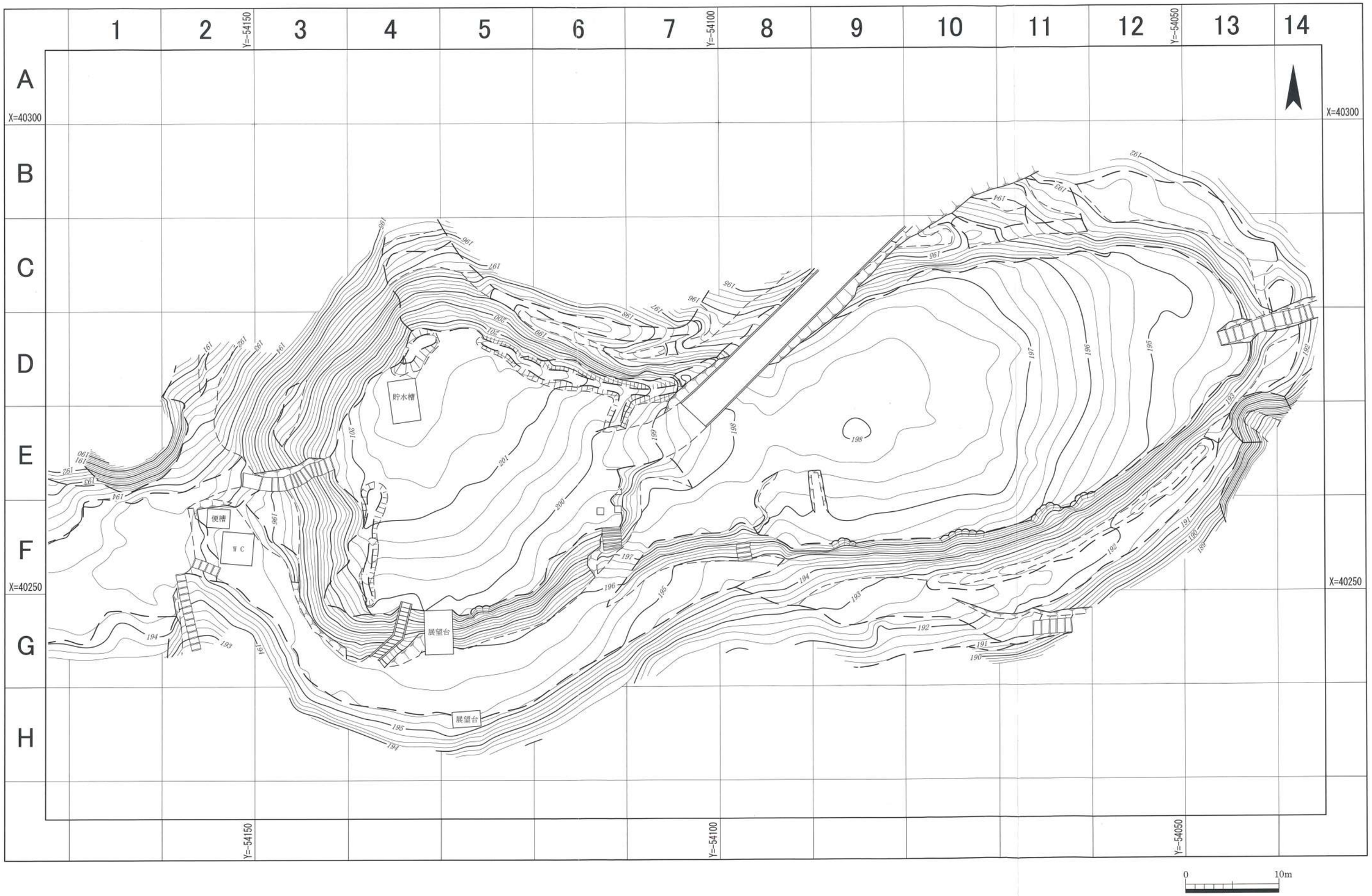


Fig. 8　鎮西山城跡調査前地形測量図（1/400）

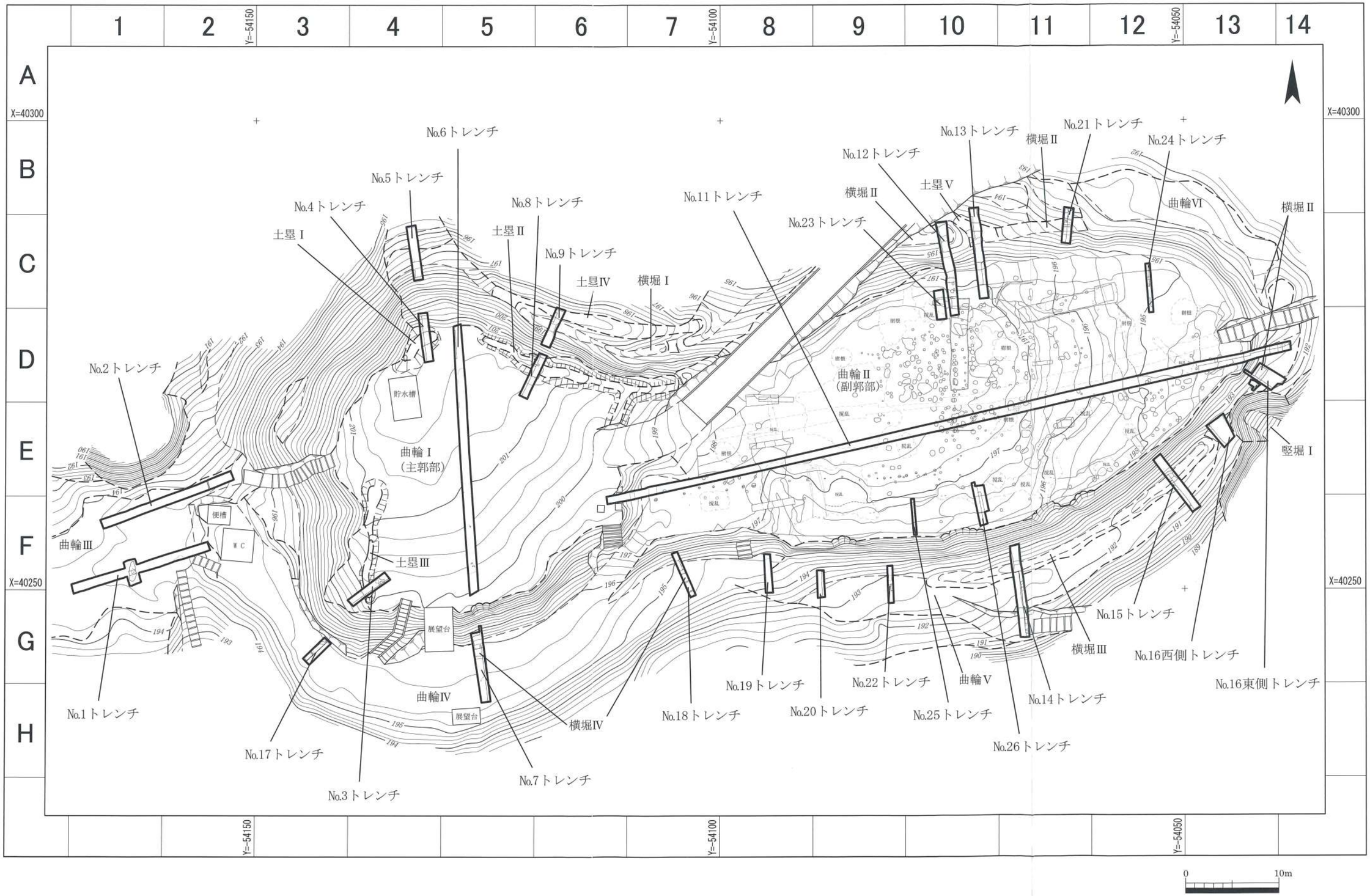


Fig. 9　鎮西山城跡トレンチ配置図（1/400）

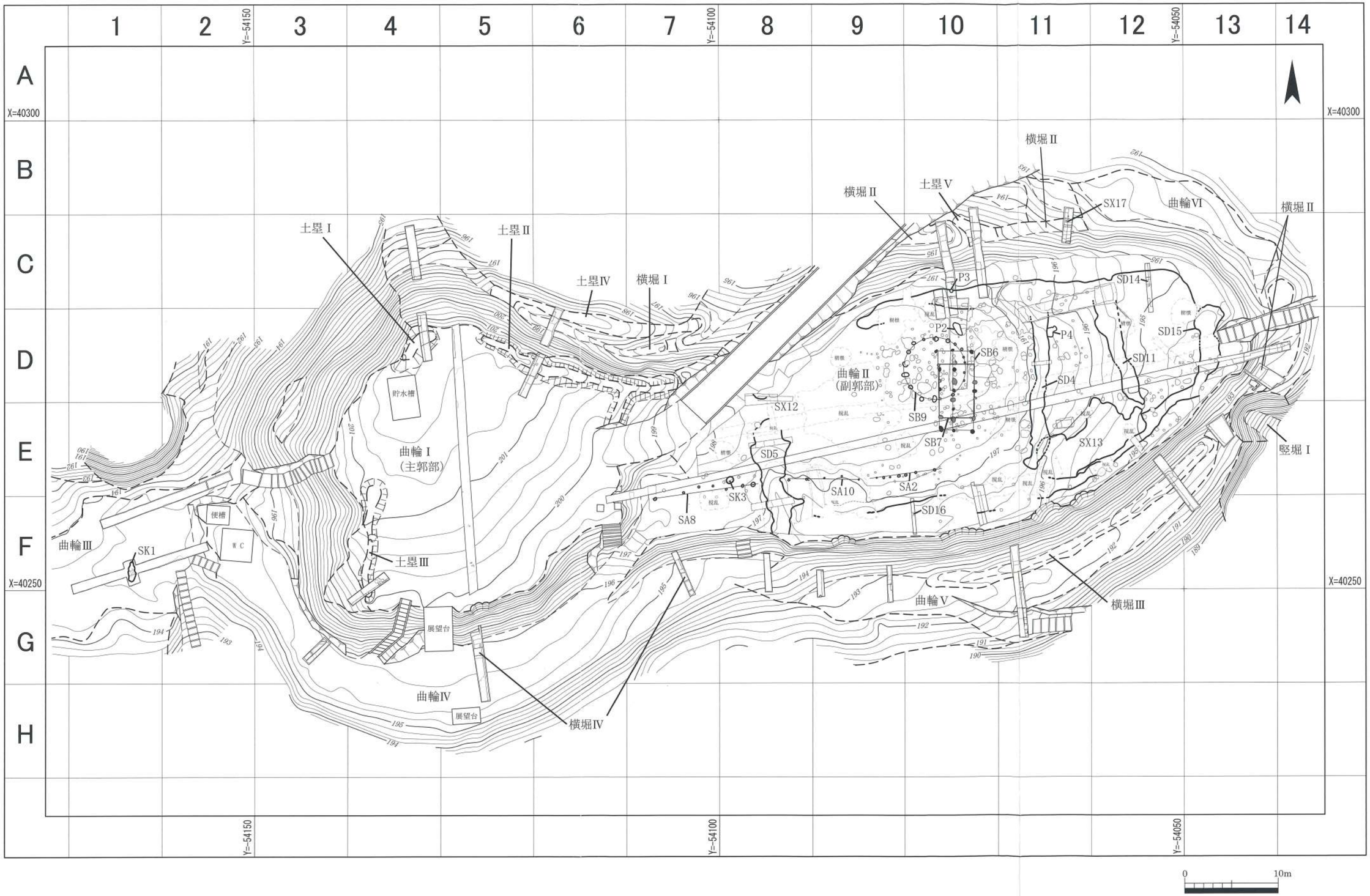


Fig. 10　鎮西山城跡遺構配置図（1/400）

に掘削を行った主要遺構としては柵列が2条、掘立柱建物跡が2軒、円形状の建物跡が1軒、溝状遺構が2条、土坑が2基、その他小穴多数が確認された。各トレンチや遺構からの出土遺物は中世前期の遺物がおおむね出土している。

Ⅳ．遺構と出土遺物

1．トレンチ調査

No.1 トレンチ（Fig.11）

No.1 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）西側部直下の F・G1、F2 グリッドに位置する。曲輪Ⅲ内の遺構の有無と、曲輪Ⅰと曲輪Ⅲ間の堀切及び堀切内に伴う土橋の確認のために、長さ 15.3m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。トレンチ内堆積土の層序は 2 層に分層でき、1 層は表土、2 層は SK1 の上層部が整地などにより拡がった可能性がある。表土を 0.05 ～ 0.2m 程度掘り下げると全体的に地山面が検出されたが、調査の結果、曲輪Ⅲ内では小穴など建物に関連する遺構は検出されず、トレンチ内の中央付近にて SK1 を検出した。SK1 はやや不定形な長楕円形を呈する土坑状の遺構で、埋土内からは遺構内全体に焼土や炭化物と共に土師器片や中国産白磁・青磁の碗・皿、鉄釘などの遺物が出土しており、中国産磁器の年代から 12 世紀後半の所産と考えられる。次に堀切及び堀切内の伴う土橋がトレンチ東側で検出されることを想定し、掘削を行った。表土を 0.1m 程度を掘り下げると地山と思われる明黄褐色土の面を検出した。このため、堀切及び堀切内に伴う土橋は認められないと判断した。しかし No.2 トレンチの堆積状況から、地山と判断した明黄褐色土の面は遺構埋土の可能性があり、今後の調査で確認する必要がある。

No.1 トレンチ出土遺物（Fig.12）

1 は表土より出土した遺物である。

水注×壺（1）　白磁で、残存器高 1.3cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が青白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

No.2 トレンチ（Fig.13）

No.2 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）西側直下の曲輪内の E2、F1・2 グリッドに位置し、曲輪Ⅲ内の遺構の有無と、曲輪Ⅰと曲輪Ⅲ間の堀切または竪堀の確認のため、No.1 トレンチの北側に並行して長さ 15m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。今回の調査では 0.1 ～ 0.2m 程度掘り下げたところで、同一面で土色の異なる面となっておりトレンチ中央から東側は 2 層、西側で 3 層の面を検出したが、遺構は認められなかった。しかしその後、トレンチ東側の 2 層中に排水管が設置されている状況を確認し、検出面よりも 1m 以上掘り下がることが判明した。このため今後の調査において堀切または竪堀となるか確認を行う必要がある。遺物は表土内から中世前期の中国産白磁碗・陶器、須恵器甕、土師器坏・小皿が出土した。

No.2 トレンチ出土遺物（Fig.14）

1・2 は表土より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、残存器高 1.5cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。

坏（2）　土師器で、残存器高 2.2cm を測る。調整は内外面ともにヨコナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色である。また口縁端部の内外面に煤の付着が認められる。

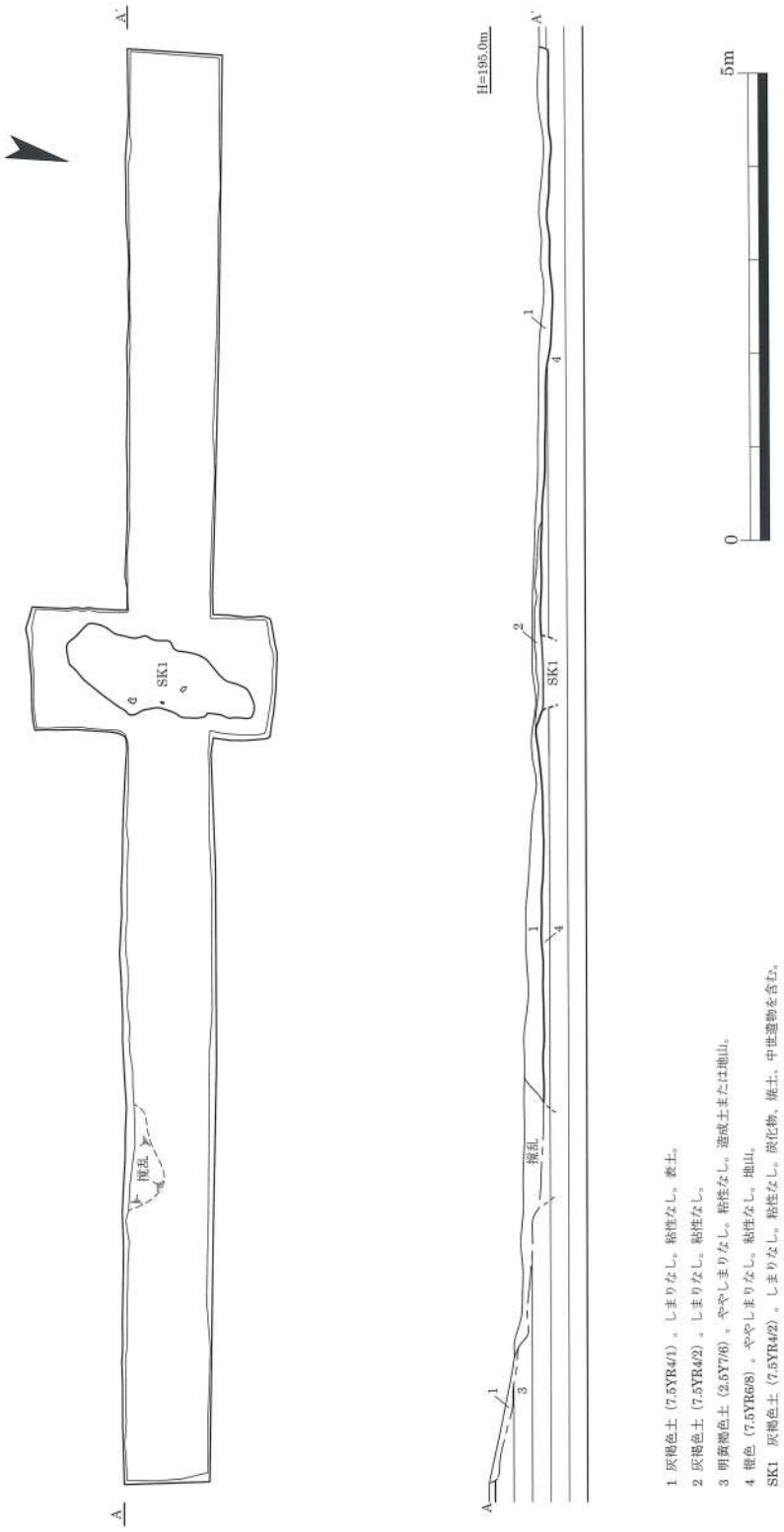


Fig. 11　No. 1 トレンチ平面・土層断面実測図（1/80）

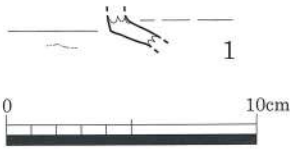


Fig. 12　No. 1 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

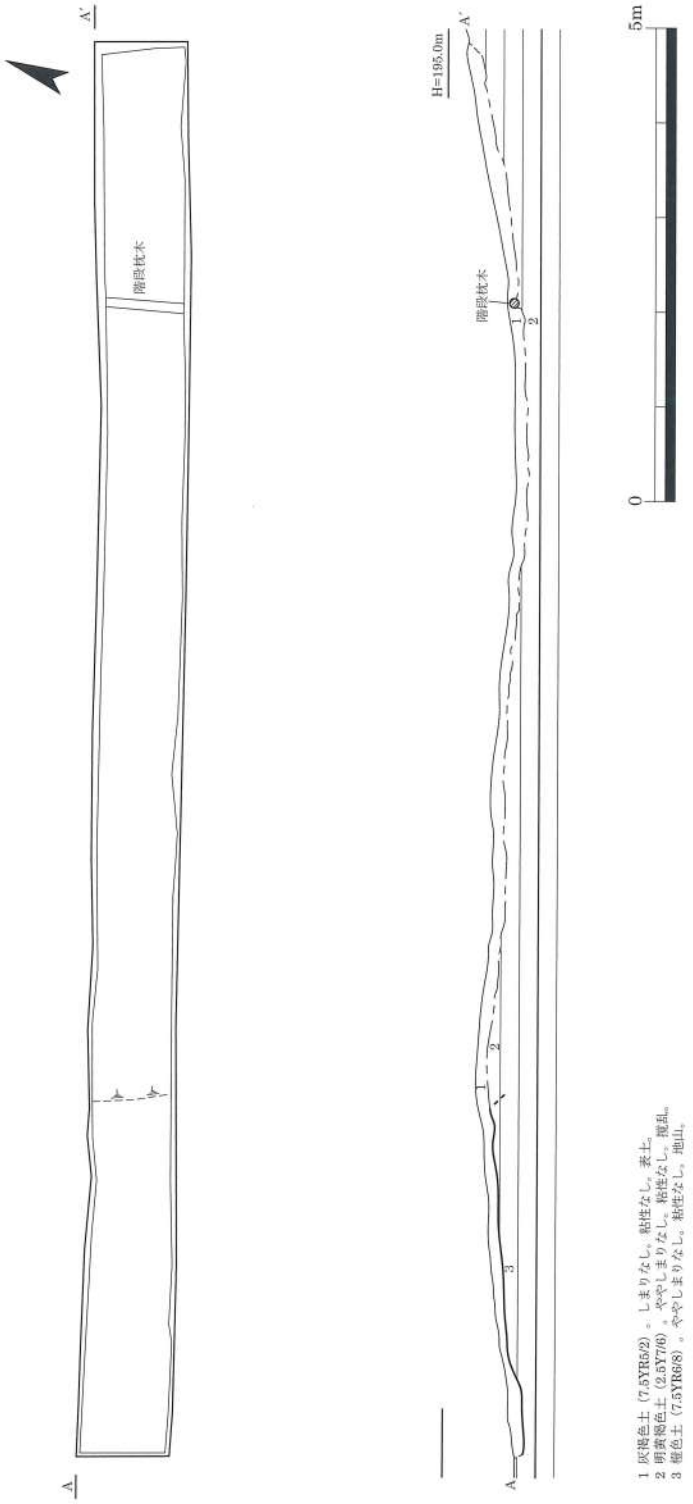


Fig. 13　No. 2 トレンチ平面・土層断面実測図（1/80）

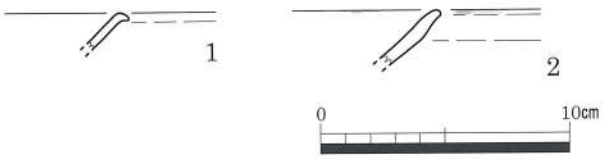


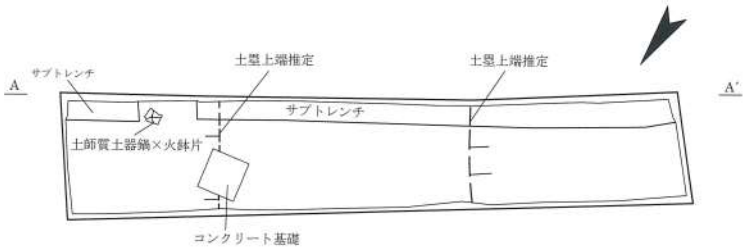
Fig. 14　No. 2 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

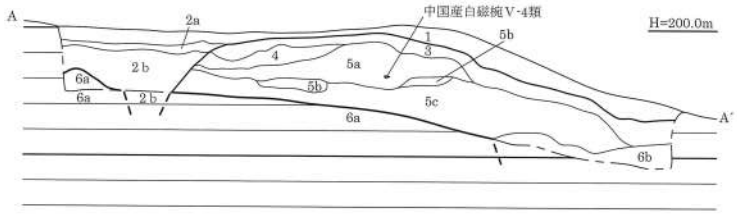
No. 3 トレンチ（Fig.15）

No.3 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）南西部の F･G4 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ南西側縁辺部の土塁の有無と形状・規模の確認のため、長さ 4.9m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。現状ではほとんど判別できない高まりとなっていたため、土塁を面的に検出するため堆積状況をサブトレンチで確認しながら慎重に掘削を行った。表土を全体的に 0.1 ～ 0.2m 程度掘り下げたところで、面的には検出することが出来なかったが壁面土層の観察によりトレンチ中央部付近に台形状の堆積が認められ、その東端側には溝状の落ち込みが認められたことから土塁Ⅲと溝状遺構が残存していると判断した。ただし溝状遺構については造成土の可能性があり、今後の調査で確認する必要がある。遺物は 2 層に鍋または火鉢と思われる土師質土器片、土塁内から中国産白磁椀Ⅴ-4 類などが出土したが、図化に耐えるものはなかった。

No. 4 トレンチ（Fig.16）

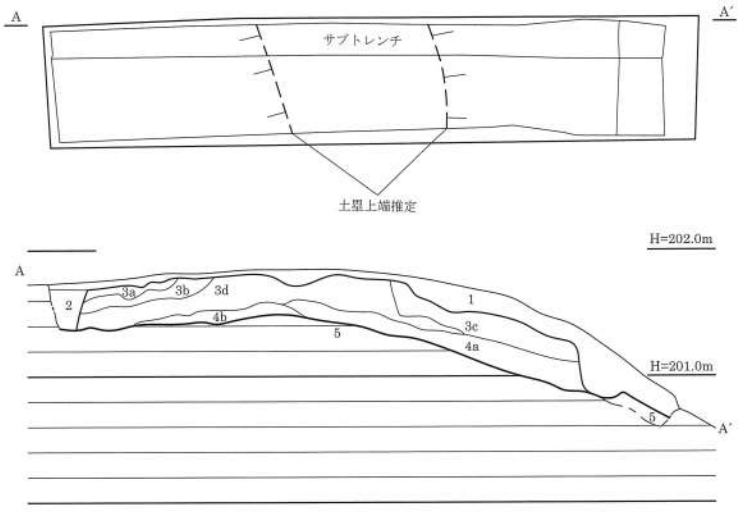
No.4 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）北側の D4 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ北西側縁辺部には現状の地表面観察でも土塁と思われる高まりが認められ、その形状と規模の確認のため、曲輪Ⅰ北西部に長さ 5.2m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。表土を 0.05 ～ 0.2m 程度掘り下げたところで、土塁上面を検出した。土層観察から残存する土塁Ⅰの形状は地表面で観察された地形の形状とほぼ同一で、経年の風雨の影響や後世の削平などにより土塁Ⅰの造成土はかなり流失していると思われる。次に土塁Ⅰの規模については上面の幅が上記の理由から不明で、残存高は 0.4m 前後を測り、土塁Ⅰの基底幅に関しては大きな土砂の流失はないものと考えられ、3 層と 4 層の堆積範囲の 4.2m 前後と思われる。ただし 4 層は No.8 トレンチの 6 層と酷似しており、旧表土の可能性もある。遺物は黒褐色を基調とする 4 層から国産陶器や多くの炭化物・焼土塊が出土したが、図化に耐えるものはなかった。





1 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。樹根が多く混入する。表土。
2a 褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。表土または堀埋土。
2b にぶい褐色土（7.5YR5/4）と黄橙色土（10YR8/6）との混淆土。土墨の崩落土。溝状遺構の埋土か？
3 にぶい黄褐色土（10YR5/3）。しまりなし。粘性なし。土墨。
4 にぶい黄橙色土（10YR6/4）。しまりなし。やや粘性あり。土墨が崩れたものか？
5a 黄橙色砂質土（10YR8/6）。しまりなし。粘性なし。中世遺物を含む。土墨。
5b 灰黄褐色ブロック土（10YR5/2）。しまりなし。やや粘性あり。土墨。
5c 橙色土（5YR7/6）と灰褐色土（7.5YR5/2）との混淆土。炭化物を多く含む。土墨。
6a 橙色土（5YR6/6）。ややしまりあり。やや粘性あり。地山または曲輪造成土。
6b 明黄褐色砂礫土（10YR6/6）。しまりなし。粘性なし。橙色の砂粒を含む。地山が風化して流出したもの。

Fig. 15 No. 3 トレンチ平面・土層断実測面図 (1/60)



1　褐灰色土（7.5YR5/2）。表土。
2　明黄褐色土（10YR7/6）。しまりなし。粘性なし。土塁崩落土または溝状遺構。
3a 黄色土（2.5Y8/6）。しまりあり。粘性なし。土塁。
3b 灰褐色土（7.5YR4/2）。ややしまりあり。粘性なし。粒子が粗い。土塁。
3c 同　上。
3d にぶい黄色土（2.5Y6/3）。ややしまりあり。粘性なし。3b・3c層に比べ粒子が細かい。土塁。
4a 黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。粘性なし。炭化物を多く含み、焼土粒を少し含む。土塁または旧表土。
4b 明黄褐色土（2.5Y7/6）。しまりあり。粘性なし。土塁または旧表土。
5　明黄褐色土（2.5Y6/6）。ややしまりなし。粘性なし。地山。

0　2m

Fig. 16　No. 4 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

No. 5 トレンチ（Fig.17）

No.5 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）北側直下の C4 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ北側直下の帯曲輪の形状と規模の確認のため、No.4 トレンチ北側の延長軸線上に長さ 5.7m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。堆積状況は表土を 0.15 ～ 0.2m 程度掘削したところで 2 層の地山面を確認した。地山面は現況面とほぼ同じ傾斜となっており、明確な平坦面は確認できなかった。想定されていた帯曲輪は曲輪Ⅰ北東直下を廻る横堀の延長上に位置していたが、横堀との連続する遺構は確認できなかった。ただし土層図面上には図示しきれていないがトレンチ南端から 1.3m 地点に傾斜変換点があり、0.5 ～ 0.6m 幅ほどやや平坦になる地点が認められ、東側の横堀から西側の曲輪Ⅲに続く通路状の遺構の可能性が残る。遺物は出土しなかった。

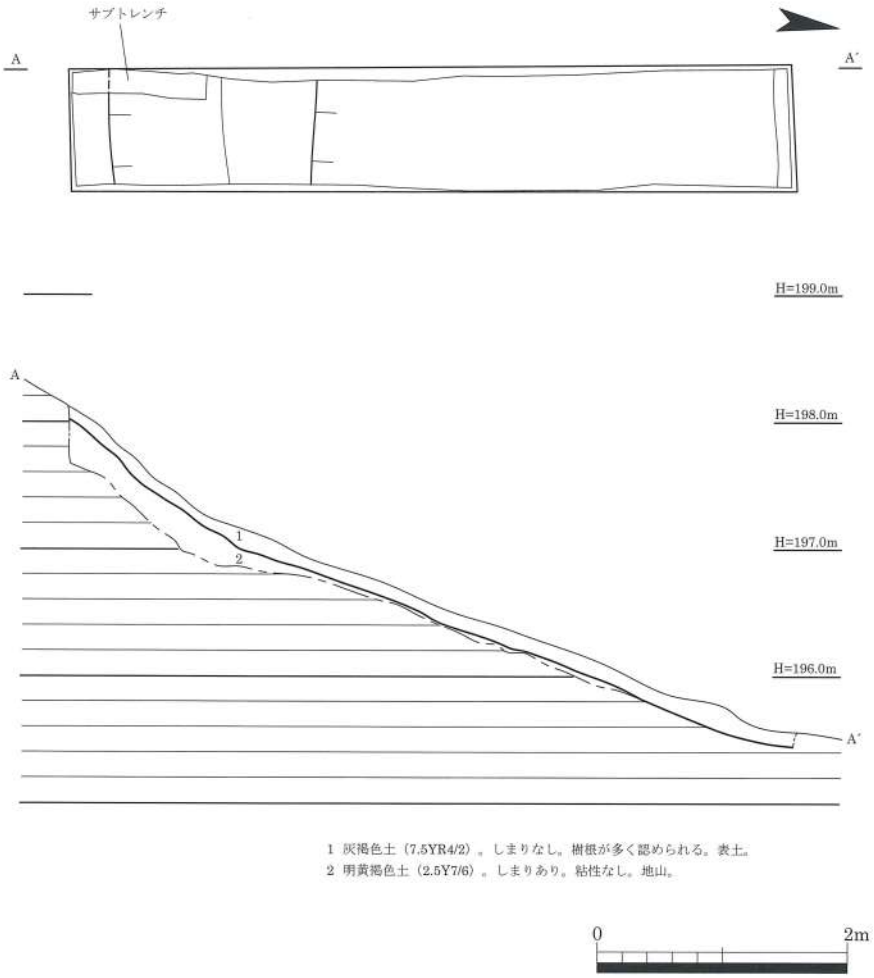


Fig. 17　No. 5 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

No. 6 トレンチ（Fig.18）

No.6 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）中央部のD～G5グリッドに位置する。曲輪Ⅰの施設・曲輪内を区画する溝や段差、曲輪Ⅰ縁辺部の土塁などの有無や規模を確認するため、曲輪Ⅰ中央の南北方向に縦断させて長さ28.7m×幅1mのトレンチを設定して掘削を行った。表土は全体的に層厚0.05m程度の堆積で、トレンチの北側は現代の構造物により地表面から層厚0.3m以上の造成土の堆積が認められた。また南端部も現代の安全柵の設置時に造成が行われており、曲輪Ⅰでは現代の公園化に伴い広い範囲での撹乱を受けている状況が確認された。遺構面が残存していると思われるトレンチ中央部より南側では現代の造成土の2層を掘り下げて、地山または曲輪造成面と思われる面を確認したが、遺構や区画の溝状遺構や段差は認められなかった。またトレンチ北端部は現状ではほぼ平坦となっており、これが近現代の削平によるものかは不明であるが、現状では土塁は確認できていない。ただし、3b層は黒褐色を基調とし、炭化物や焼土粒を多く含んでおり、東西に隣接するNo.4・8トレンチと同様に土塁基底部またはその直下の旧表土層と思われ、山城構築以前の遺構が残存している可能性がある。遺物は中世前期と思われる中国産白磁碗、青磁碗・皿、7世紀末の須恵器、土師質土器鍋、土師器坏などが出土した。

No. 6 トレンチ出土遺物（Fig.19）

1～3は表土より出土した遺物である。

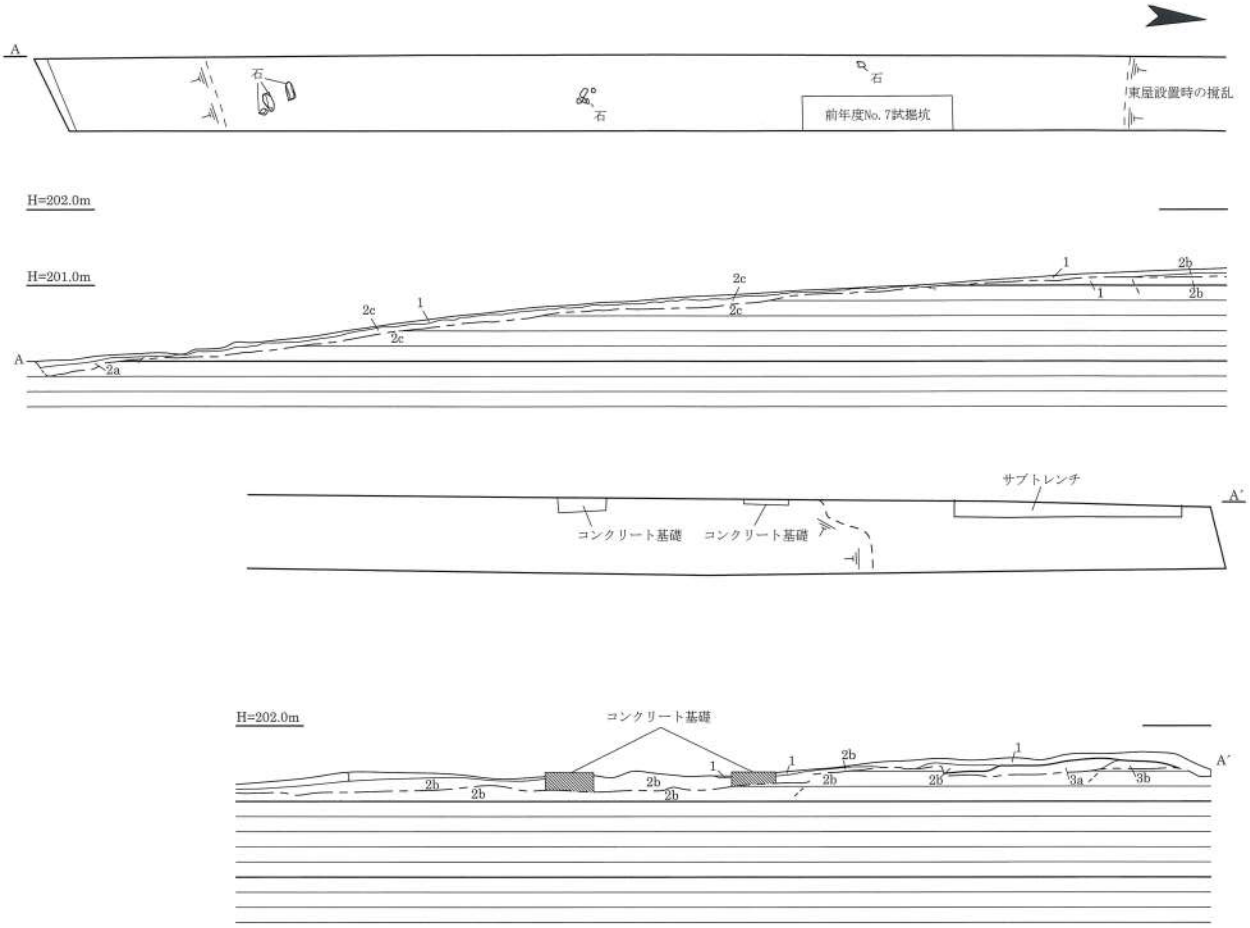
大蓋（1） 7世紀末の須恵器で、残存器高2.5cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデを施す。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。

碗（2） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類の口縁部片で、残存器高2.5cmを測る。外面が櫛目文、内面にヘラ状の施文具による花文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

鍋（3） 土師質土器鍋Ⅲ類で、残存器高5.3cmを測る。調整は外面全体に煤が付着しているため不明で、内面は横位のハケメ調整を施す。色調は内外面ともに橙茶色を呈する。

No. 7 トレンチ（Fig. 20）

No.7 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）直下の帯曲輪の曲輪Ⅳ、G・H5グリッドに位置する。曲輪Ⅰ南側直下の帯曲輪の形状・規模の確認のため、長さ8.1m×幅1mのトレンチを設定して掘削を行った。現状では曲輪Ⅰ南側直下の帯曲輪は全体が平坦面となっているが、上峰村史にはタイトルに「鎮西山頂から南、第一段の発掘、塹壕の断面」とされる試掘坑の写真が掲載されており、堀の存在がすでに確認されていた（上峰村史 1979 P.302）が調査地点は不明であった。今回設置したトレンチでは偶然にも写真と同一の試掘坑が検出され、改めて堀の存在が確認された。検出された堀の規模は上峰村史に記載されていたように堀（塹壕と記載されている）が現地表面から0.6m程埋没していることを確認した。この堀は20m東のNo.18トレンチにおいても堀が確認されたことから、曲輪Ⅰ・Ⅱ（副郭部）の北側直下の横堀と同様のものであると判断できる。横堀Ⅳの規模は曲輪Ⅰ縁辺部から横堀南側の立ち上がりまでの水平距離4.1m、深さは0.6m程埋没しており、曲輪Ⅰ縁辺部から堀底面までの比高差は4.35mで、断面形状はやや開き気味の緩いU字状を呈する毛抜堀状を呈する。横堀Ⅳから南側の上層部（1・2層）は近現代の造成土で平坦部の南端では2b層内にケーブル線が通っており、近現代の造成土となっている。3～6層は横堀Ⅳ埋土である。7・8・9層は曲輪Ⅳ造成土または土塁の崩落土に相当すると考えられ、7層から中世前期の中国産白磁碗・青磁碗・陶器、国産陶器、瓦器椀、瓦質土器、土師器坏・小皿などの遺物が多く出土した。



1　褐灰色土（7.5YR5/2）。表土。
2a　灰黄褐色土（10YR6/2）。しまりなし。粘性なし。近現代の造成土。
2b　にぶい黄橙色土（10YR6/4）。しまりなし。粘性なし。東屋構築時の造成土。
2c　褐灰色土（7.5YR5/1）。よくしまる。粘性なし。近現代の造成土。
3a　にぶい黄色土（2.5Y6/3）。ややしまりなし。粘性なし。土塁造成土または崩落土。
3b　黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。粘性なし。炭化物と焼土粒を含む。土塁の基底部か？

0　5m

Fig. 18　No.6 トレンチ平面・土層断面実測図（1/100）

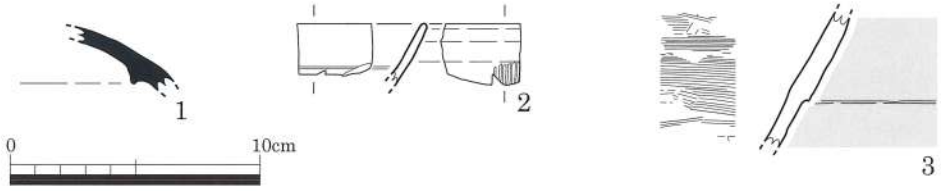
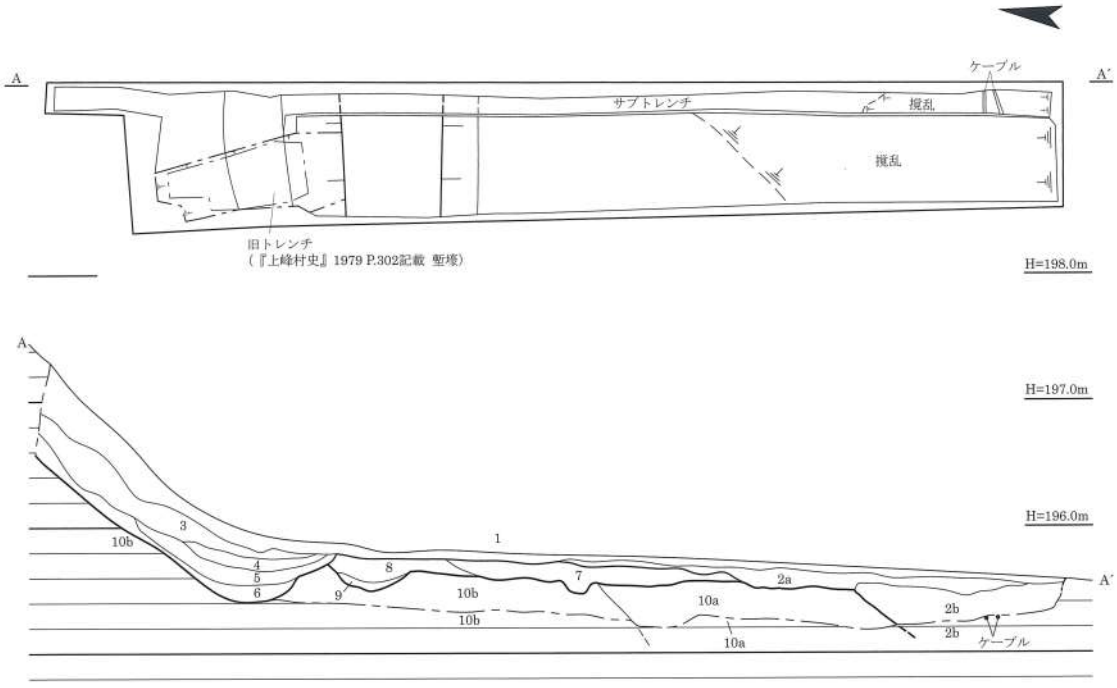


Fig. 19　No.6 トレンチ出土遺物実測図（1/3）



1 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。樹根が多く含まれる。表土。
2a 褐灰色土（7.5YR6/1）。現代の缶などを含む。現代の造成土。
2b 橙色土（5YR6/8）と灰褐色土（7.5YR5/2）との混淆土。ケーブル埋設土。
3 にぶい黄色土（2.5Y6/4）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
4 褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりなし。粘性なし。横堀埋土。
5 にぶい黄色土（2.5Y6/4）。ややしまりなし。粘性なし。横堀埋土。
6 橙色土（7.5YR7/6）。ややしまりなし。粘性なし。横堀埋土。
7 灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりあり。粘性なし。炭化物を多く含む。中世の遺物を含む。土塁崩落土または曲輪造成土。
8 にぶい黄橙色土（10YR6/4）。ややしまりあり。粘性なし。炭化物を含む。土塁崩落土または曲輪造成土。
9 灰黄褐色土（10YR5/2）。ややしまりなし。粘性なし。炭化物を含む。土塁崩落土または曲輪造成土。
10a 橙色土（5YR6/8）。ややしまりなし。粘性なし。地山。造成土の可能性もある。
10b 橙色土（7.5YR7/6）。ややしまりなし。粘性なし。地山。

Fig. 20　No. 7 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

No. 7 トレンチ出土遺物（Fig.21）

1・3 は表土、2 は曲輪造成土より出土した遺物である。

鉢×壺（1）　中国陶器で、残存器高 2.4cm、復元底径 7.5cm を測る。内外ともに施釉される。色調は釉が灰褐色を呈する。

壺×甕（2）　国産陶器の備前焼で、残存器高 7.6cm、復元底径 20.0cm を測る。調整は外面が回転ヘラケズリ後にナデ調整をし、内面は回転ナデ調整を施す。外面に自然釉が認められる。色調は釉が茶褐色、灰緑色、露胎部が灰茶色を呈する。

小皿（3）　土師器で、器高 1.0cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ後にナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい橙色を呈する。

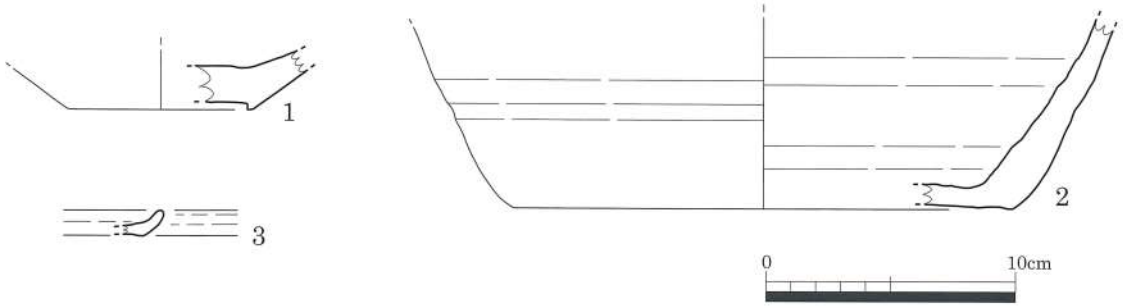


Fig. 21　No.7 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 8 トレンチ（Fig.22）

No.8 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）北東部の D5・6 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ北東側縁辺部の土塁の有無と形状・規模の確認のため、長さ 5.1m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。トレンチ内の層序は 7 層に分層され、1 層は表土、3 ～ 5 層は土塁Ⅱ、6 層は土塁Ⅱの造成土または旧表土、7a 層は地山または曲輪造成土である。1 層は表土で層厚 0.05 ～ 0.2m 程堆積しているが、土塁Ⅱ部分の 3 層直上範囲は土塁造成土の可能性もあるが、腐葉土や樹根などによる影響を受けており明確に判断することができなかった。土塁Ⅱ直下の黒褐色を基調とする 6 層は、炭化物や中世前期の中国産青磁や土師器が混入しており、No.4・6 トレンチと同一の堆積層で旧表土や土塁造成土の可能性がある。2 層は土塁の崩落土または No.3 トレンチと同様に土塁の曲輪内側に設けられた溝状遺構の可能性がある。この結果、確認された土塁Ⅱの形状は上部が造成土の流失により原形を留めていないが、堆積状況から台形状を呈していたと思われる。規模は上面の残存幅は 2.3m、残存高 0.8m、残存基底幅 3.3m を測り、土塁Ⅱの上面に小穴などの遺構は確認されなかった。また土塁Ⅱの基底部直下で地山または造成土と思われる 7 層上面には遺構か根穴と思われる小穴が検出され、さらに土塁構築以前の遺構が存在する可能性がある。遺物は土塁造成土内から中国産白磁碗・青磁碗、国産陶器、土師器片、土塁Ⅱまたは旧表土の 6 層から中国産青磁、鍋または火鉢と思われる土師質土器などが出土しており、いずれも中世前期の所産である。

No. 8 トレンチ出土遺物（Fig.23）

1・4 は 3 ～ 5 層、2・3・5 は 6 層より出土した遺物である。

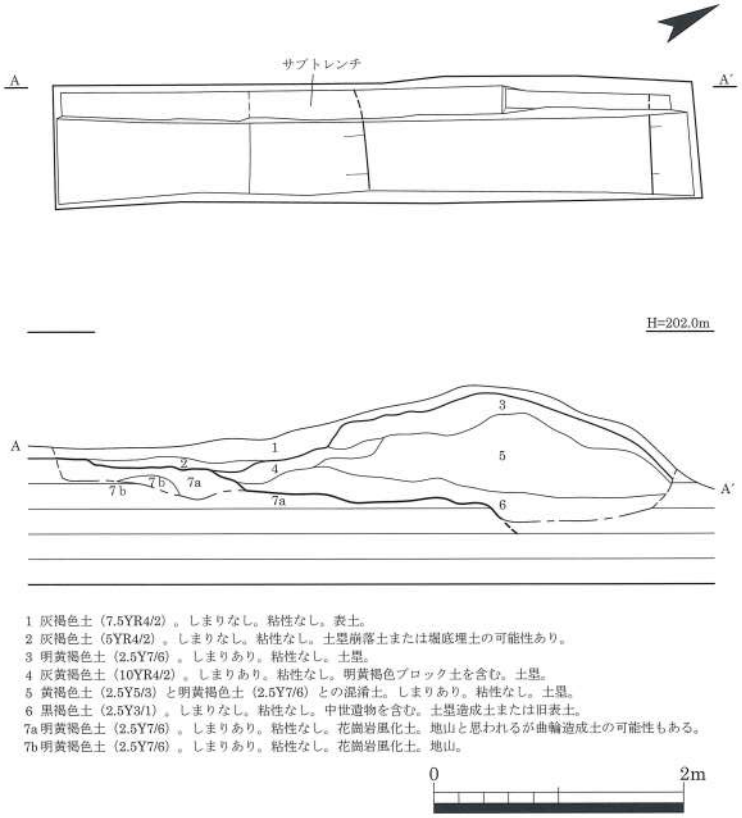
碗（1）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、残存器高 5.0cm を測る。内面に沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

碗（2）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、残存器高 3.6cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。

碗（3）　同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で、残存器高 3.4cm を測る。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が緑色を呈する。

碗（4）　同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で、残存器高 2.5cm を測る。外面が櫛目文を施し、沈線を有する。内面に沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

椀（5）　瓦器で、残存器高 1.0cm、復元底径 7.1cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、ナデ調整、内面は摩耗のため不明である。色調は外面が黄橙色、内面が黒色を呈する。



1 灰褐色土（7.5YR4/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
2 灰褐色土（5YR4/2）。しまりなし。粘性なし。土塁崩落土または堀底埋土の可能性あり。
3 明黄褐色土（2.5Y7/6）。しまりあり。粘性なし。土塁。
4 灰黄褐色土（10YR4/2）。しまりあり。粘性なし。明黄褐色ブロック土を含む。土塁。
5 黄褐色土（2.5Y5/3）と明黄褐色土（2.5Y7/6）との混淆土。しまりあり。粘性なし。土塁。
6 黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。粘性なし。中世遺物を含む。土塁造成土または旧表土。
7a 明黄褐色土（2.5Y7/6）。しまりあり。粘性なし。花崗岩風化土。地山と思われるが曲輪造成土の可能性もある。
7b 明黄褐色土（2.5Y7/6）。しまりあり。粘性なし。花崗岩風化土。地山。

Fig. 22　No. 8 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

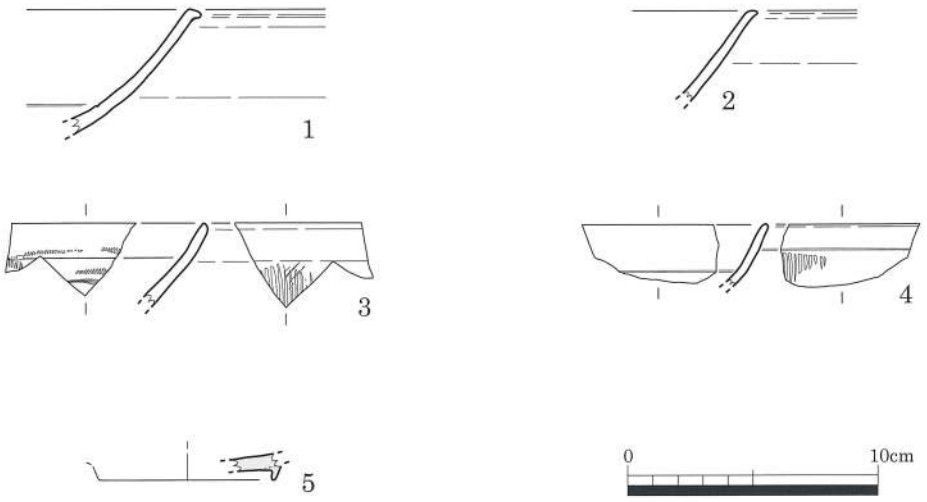


Fig. 23　No. 8 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 9 トレンチ（Fig.24）

No.9 トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）南東部直下の C・D6 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ北側土塁直下の横堀および土塁の形状・規模を確認するため、No.8 トレンチ西壁面の北側延長線上に長さ 4.3m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。トレンチ内の層序は 5 層に分層され、1 層は表土で全体に層厚 0.1 ～ 0.3m で堆積している。2 ～ 4 層は横堀埋土で切岸や直上の曲輪Ⅰ縁辺部土塁の崩落土などの堆積土、5 層は土塁造成土である。調査の結果、比較的良好に横堀Ⅰとそれに伴う土塁Ⅳが残存していることが確認できた。まず横堀Ⅰの規模は上幅（曲輪Ⅰ縁辺部土塁から横堀北側の立ち上がりまでの水平距離）が 5.4m、深さは 0.7m 程埋没しており、曲輪Ⅰ縁辺部から堀底面までの比高差は 4.0m で、断面形状は逆台形状の箱堀形を呈する。土塁Ⅳの規模は上面の残存幅は 0.8m、残存高 0.35m、基底幅は土塁Ⅳの北側が調査区外のため不明であるが、1.4m 以上を測り、形状は台形状を呈する。遺物は中国産白磁碗、陶器などが出土した。

No. 9 トレンチ出土遺物（Fig.25）

1 は横堀埋土より出土した遺物である。

碗（1） 白磁椀Ⅴ-4 ×Ⅷ-1・3 類で、復元口径 16.6cm、残存器高 4.8cm を測る。口縁部はくちばし状を呈する。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

No. 11 トレンチ（Fig.26・27）

No.11 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央部の D11 ～ 14、E6 ～ 11、F6・7 グリッドに位置する。曲輪Ⅱの内部施設・地形の形状と曲輪Ⅱ東端直下の帯曲輪の規模などを確認するため、曲輪Ⅰ（主郭部）切岸から曲輪Ⅱ東端直下の帯曲輪までを横断する長さ 75.4m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。調査ではまず 1 層の表土を 0.05 ～ 0.1m 程度掘り下げたところで遺構面が検出され、小穴や土坑などの遺構が確認できた。ただし、トレンチの東西端は堆積状況が異なっており、トレンチ西側では曲輪Ⅰ部切岸から曲輪Ⅱ西側平坦面の 0.2m 程にかけて公園整備などの近現代の盛土や削平、コンクリート基礎の設置などにより大きく撹乱を受けている状況であった。反対のトレンチ東端では曲輪Ⅱ東端部の曲輪の盛土による造成土が確認され、縁辺部付近には溝状の遺構と小穴が検出されている。また曲輪Ⅱ直下の帯曲輪には横堀が廻っていることが確認された。トレンチ内の層序は 16 層に分層されるが、前述の通り全体的に表土を除去したところで遺構面が検出されており、ここではトレンチ東端部の堆積状況を中心に記述する。まず 1 層は表土で全体に層厚 0.1 ～ 0.3m 程度堆積している。2 層はトレンチ内全体で断続的に確認される表土直下の造成土、遺物包含層または撹乱である。3b、8 ～ 14 層は曲輪Ⅱ造成土、4 ～ 7 層は横堀Ⅱ埋土、15・16 層は土塁または帯曲輪造成土と考えられるが 16 層に関しては黒褐色土を基調しており、多くの炭化物、中国産磁器、土師器が出土したことから曲輪Ⅰの No.4・8 トレンチと同様に旧表土の可能性がある。新たに確認された横堀Ⅱの規模は上幅（曲輪Ⅱ縁辺部から横堀東側の立ち上がりまでの水平距離）が 4.2m、深さは 0.9m 程埋没しており、曲輪Ⅰ縁辺部から堀底面までの比高差は 2.6m で、断面形状は逆台形状の箱堀形を呈する。遺物は曲輪Ⅱ平坦部から中国産白磁・青磁・青白磁、陶器、中世須恵器、土師器など、旧表土の可能性がある 16 層からは 12 世紀中頃から後半にかけての中国産青磁碗・皿、中世須恵器、土師器坏など中世前期の遺物が出土した。

No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28・29）

1・2・4・5・8・13 ～ 17・19 ～ 24 は表土、7 は遺構検出時、3・6・9 ～ 12・18 は 15・16 層より出土した遺物である。

碗（1） 白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、復元口径 16.0cm、残存器高 3.6cm を測る。内面の体部上位に沈線を有

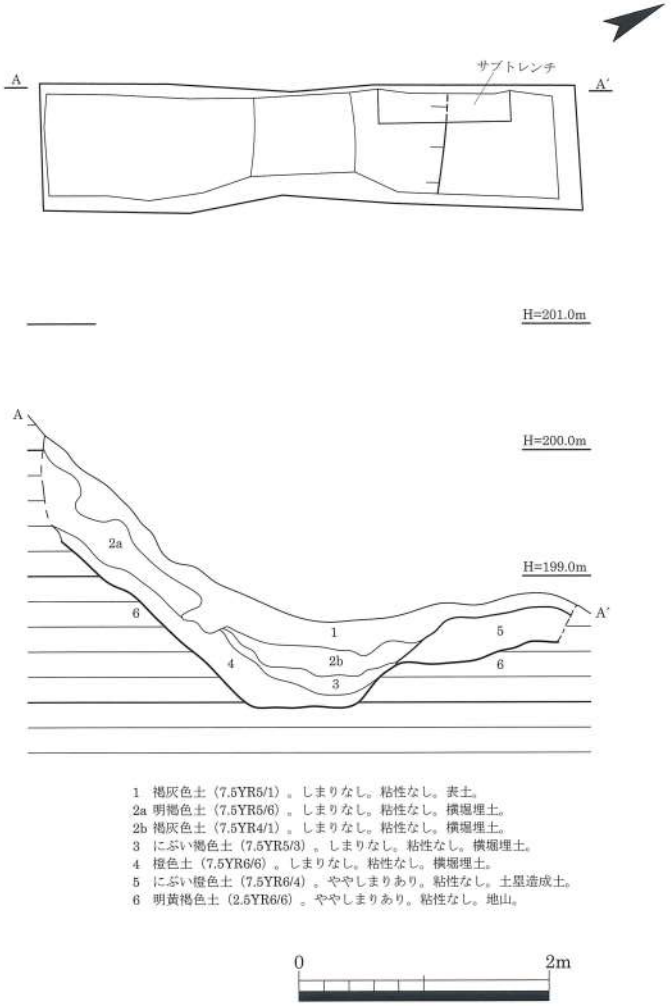


Fig. 24　No. 9 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

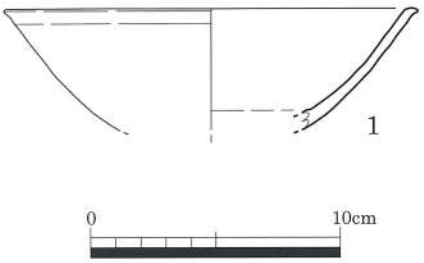


Fig. 25　No. 9 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

する。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。

皿（2）　白磁で、復元口径 13.8cm、器高 4.0cm、復元底径 4.8cm を測る。調整は外面に回転ヘラケズリを施す。内面に印花文を施し、沈線を有する。内外面ともに施釉され、高台内部と畳付の釉を掻き取っている。色調は釉が青白色、露胎部が灰白色を呈する。

碗（3）　龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2類で、復元口径 15.4cm、残存器高 4.6cm を測る。内面に片彫蓮花文を施し、体部上位に 2 条の沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。

碗（4）　龍泉窯系×同安窯系青磁で、残存器高 1.8cm を測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

皿（5）　龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で、復元口径 9.8cm、残存器高 2.0cm を測る。体部の内面に沈線を有する。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が青緑色を呈する。

碗（6）　同安窯系青磁椀Ⅰ-1b 類で、復元口径 16.0cm、残存器高 2.5cm を測る。外面に櫛目文を施し、内面に沈線を有する。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

碗（7）　同安窯系青磁椀Ⅰ-1b 類で、残存器高 5.0cm、復元底径 4.9cm を測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。外面が櫛目文、沈線文、内面にヘラ描き文、櫛点描文、体部と見込み部の境に段を有する。内外面とも

に施釉される。釉調は釉が緑色、露胎部が灰褐色を呈する。

皿（8） 同安窯系青磁皿Ⅰ－1a 類で、残存器高 1.0cm、復元底径 4.6cm を測る。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。また、内外面に貫入が認められる。色調は釉が緑色、露胎部が灰色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

皿（9） 同安窯系青磁皿Ⅰ－2b 類で、口径 11.2cm、器高 2.3cm、底径 4.4cm を測る。内面に櫛点描文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。また外面底部の釉を掻き取っている。色調は釉が黄緑色、露胎部が灰色を呈する。

皿（10） 同安窯系青磁皿Ⅰ－2b 類で、復元口径 10.8cm、器高 1.7cm、底径 4.9cm を測る。調整は外面に回転ケズリ調整を施す。内面の見込み部に櫛点描文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。色調は釉が黄緑色、露胎部が淡黄灰色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

皿（11） 同安窯系青磁皿Ⅰ－2b 類で、復元口径 10.8cm、器高 2.2cm、復元底径 4.8cm を測る。調整は外面に回転ケズリ調整を施す。内面の見込み部に櫛点描文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。また外面底部の釉を掻き取っている。色調は釉が緑色、露胎部が灰色を呈する。体部に熔着痕が認められる。

皿（12） 同安窯系青磁皿Ⅰ類で、復元口径 10.7cm、器高 1.6cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄緑色を呈する。

盤（13） 中国陶器盤Ⅰ－1a で、復元口径 32.0cm、器高 10.5cm、復元底径 22.6cm を測る。調整は外面が回転ナデ後ナデ調整、回転ヘラケズリ調整をし、内面は回転ナデ調整を施す。内面に黄釉を施し、鉄絵を描き、色調は釉が褐色、露胎部が灰色、暗灰色を呈する。14 と同一個体の可能性がある。

盤（14） 中国陶器で、残存器高 1.2cm を測る。調整は外面にナデ調整を施す。内面に黄釉を施し、鉄絵を描き、貫入が認められる。色調は灰黄色で施釉された下地の上に茶褐色で文様が描かれ、露胎部が灰褐色を呈する。13 と同一個体の可能性がある。

耳壺（15） 中国陶器で、残存器高 2.8cm を測る。調整は外面がナデ調整、内面と耳部にはナデ調整の他に指頭圧痕が認められる。色調は外面が茶灰色、内面は灰褐色を呈する。

捏鉢（16） 中世須恵器の口縁部片で、残存器高 3.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、ナデ調整、内面は回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに黄灰色を呈する。

坏（17） 土師器で、復元口径 16.3cm、器高 2.8cm、復元底径 10.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整で一部はナデを施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色である。

坏（18） 土師器で、復元口径 14.0cm、器高 2.7cm、復元底径 10.0cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面は回転ナデ後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色である。

坏（19） 土師器で、残存器高 2.5cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい橙色である。

小皿（20） 土師器で、復元口径 8.0cm、器高 1.2cm、復元底径 6.6cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙色である。

小皿（21） 土師器で、復元口径 8.2cm、器高 1.0cm、復元底径 6.6cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りでナデを施す。色調は内外面ともに橙色である。

小皿（22） 土師器で、復元口径 8.6cm、器高 1.2cm、復元底径 6.5cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内

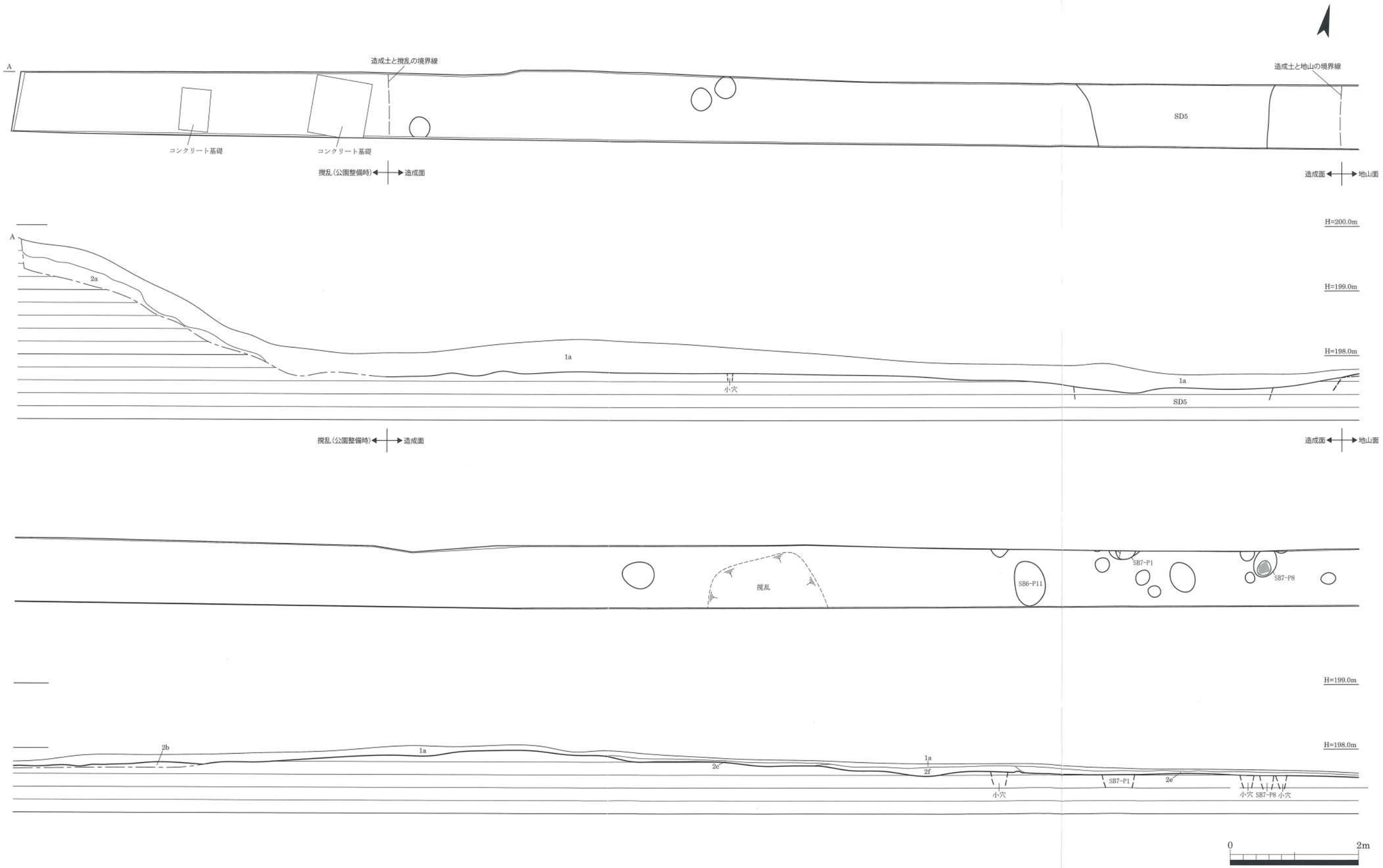


Fig. 26　No. 11 トレンチ平面・土層断面図①（1/60）

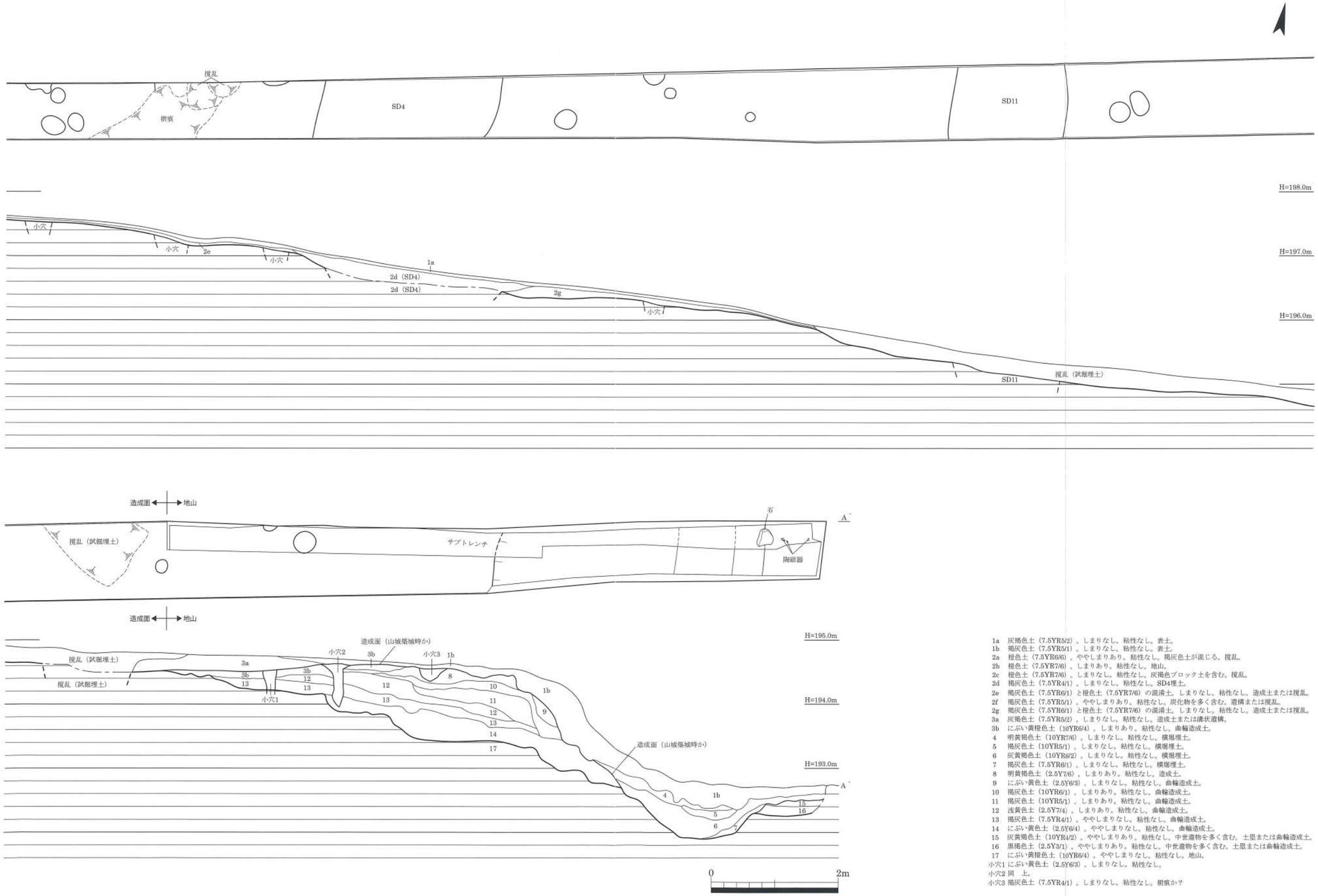


Fig. 27　No. 11 トレンチ平面・土層断面図②（1/60）

1a　灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
1b　褐灰色土（7.5YR5/1）。しまりなし。粘性なし。表土。
2a　橙色土（7.5YR6/6）。ややしまりあり。粘性なし。褐灰色土が混じる。撹乱。
2b　橙色土（7.5YR7/6）。しまりあり。粘性なし。地山。
2c　橙色土（7.5YR7/6）。しまりなし。粘性なし。灰褐色ブロック土を含む。撹乱。
2d　褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。粘性なし。SD4埋土。
2e　褐灰色土（7.5YR6/1）と橙色土（7.5YR7/6）の混淆土。しまりなし。粘性なし。造成土または撹乱。
2f　褐灰色土（7.5YR5/1）。ややしまりあり。粘性なし。炭化物を多く含む。遺構または撹乱。
2g　褐灰色土（7.5YR6/1）と橙色土（7.5YR7/6）の混淆土。しまりなし。粘性なし。造成土または撹乱。
3a　灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。造成土または溝状遺構。
3b　にぶい黄橙色土（10YR6/4）。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
4　明黄褐色土（10YR7/6）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
5　褐灰色土（10YR5/1）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
6　灰黄褐色土（10YR6/2）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
7　褐灰色土（7.5YR6/1）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
8　明黄褐色土（2.5Y7/6）。しまりあり。粘性なし。造成土。
9　にぶい黄色土（2.5Y6/3）。しまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
10　褐灰色土（10YR6/1）。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
11　褐灰色土（10YR5/1）。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
12　浅黄色土（2.5Y7/4）。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
13　褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
14　にぶい黄色土（2.5Y6/4）。ややしまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
15　灰黄褐色土（10YR4/2）。ややしまりあり。粘性なし。中世遺物を多く含む。土盛または曲輪造成土。
16　黒褐色土（2.5Y3/1）。ややしまりあり。粘性なし。中世遺物を多く含む。土盛または曲輪造成土。
17　にぶい黄橙色土（10YR6/4）。ややしまりなし。粘性なし。地山。
小穴1　にぶい黄色土（2.5Y6/3）。しまりなし。粘性なし。
小穴2　同　上。
小穴3　褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。粘性なし。樹痕か？

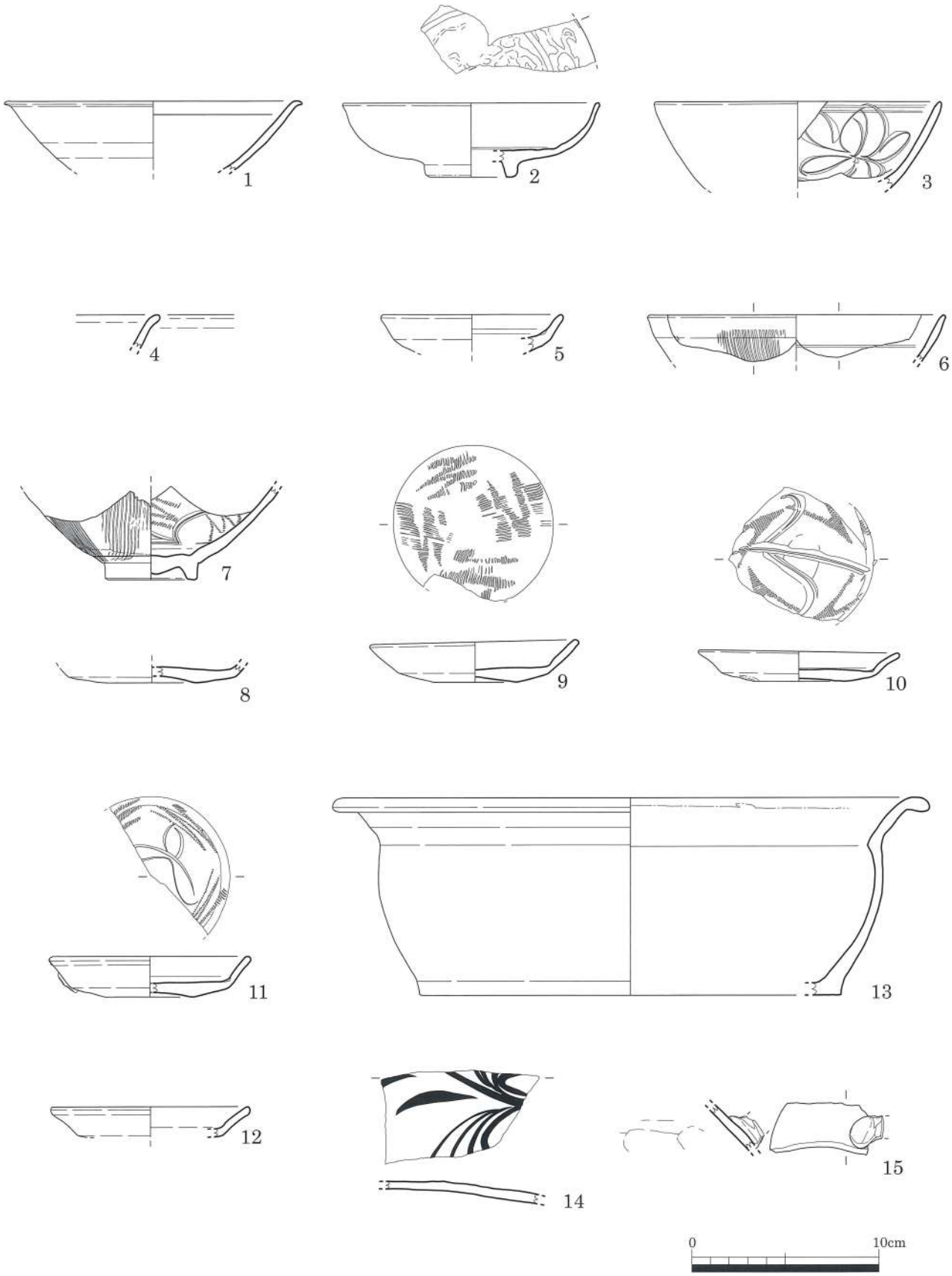


Fig. 28　No. 11 トレンチ出土遺物実測図①（1/3）

面が回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は茶褐色、内面が橙色をである。

石鍋（23） 滑石製品で、残存器高 2.9cm を測る。内面に工具調整痕、外面に煤の付着が認められる。

羽口（24） 土製品で、鞴の羽口先端部の破片と思われる。最大長 4.9cm、最大幅 3.6cm、最大厚 2.8cm を測る。胎土は外面がにぶい橙色、内面が茶褐色を呈する。

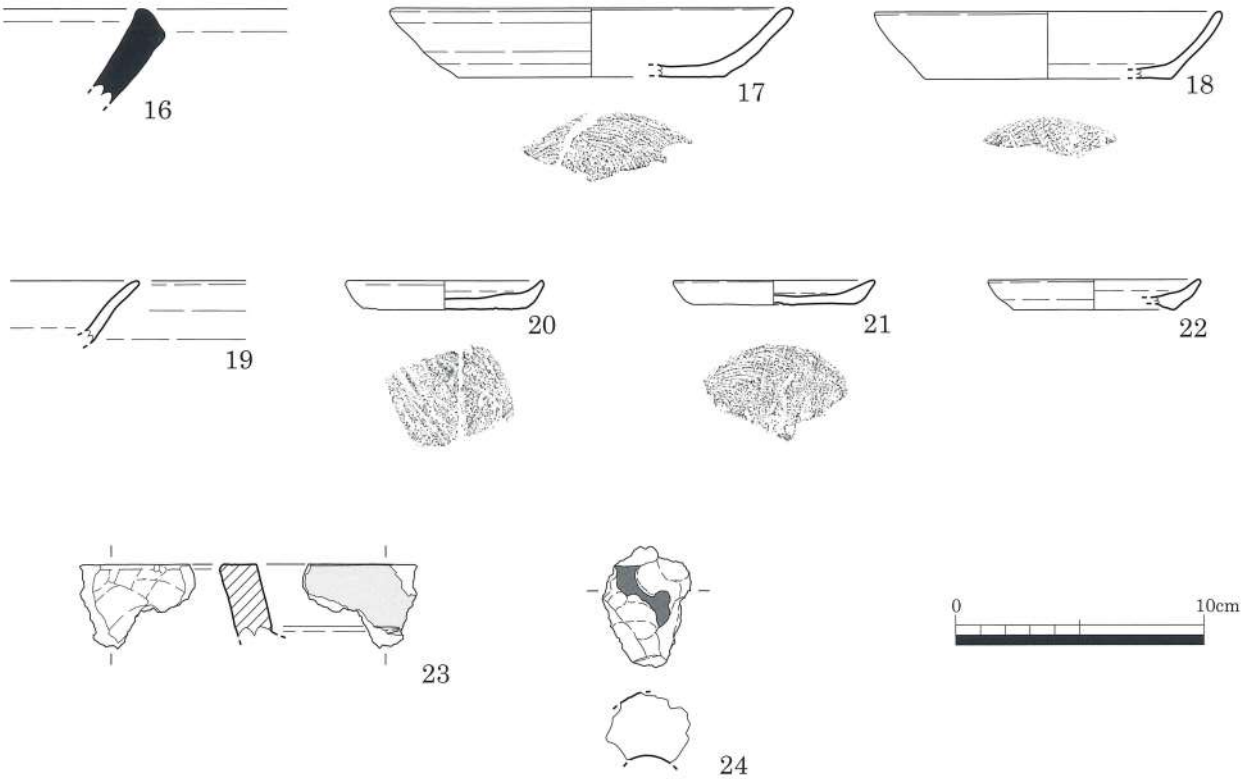


Fig. 29 No. 11 トレンチ出土遺物実測図②（1/3）

No. 12 トレンチ（Fig.30）

No.12 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央部北側の C・D10 グリッドに位置する。曲輪Ⅱ平坦部の内部施設・地形形状とその直下の横堀・土塁の規模などを確認するため、長さ 10.5m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。調査では新たに曲輪Ⅱ平坦部の縁辺部に土塁Ⅴ（または曲輪造成土）とそれに伴う SD14、曲輪Ⅱ平坦部直下で横堀Ⅱの埋没状況の確認ができた。新たに確認された曲輪Ⅱ縁辺部の土塁Ⅴの規模は残存上幅 1.5m、残存高 0.4m、基底部幅 1.9m を測り、断面形状は台形を呈する。SD14 の規模は上幅の北側の立ち上がりが調査区外であるが、現状から 3.5m 以上、深さが 0.9m 以上で断面の形状は U 字形を呈する。曲輪Ⅱ直下の横堀の規模は上幅（曲輪Ⅱ縁辺部土塁から横堀北側の現地表面の立ち上がりまでの水平距離）が 5.4m、深さは 0.7m 程埋没しており、曲輪Ⅰ縁辺部から堀底面までの比高差は 3.6m で、断面形状は逆台形状の箱堀形を呈する。トレンチ内の層序は 12 層に分層され、1 層は表土、2 層は土塁崩落土または曲輪Ⅱ造成土、3 ～ 5 層は曲輪Ⅱ平坦部土塁に伴う SD14 埋土、6 ～ 9 層は横堀Ⅱ埋土、10 ～ 12 層は土塁または曲輪Ⅱ造成土である。遺物は中国産白磁皿・水注・陶器耳壺、土師器坏などが出土している。

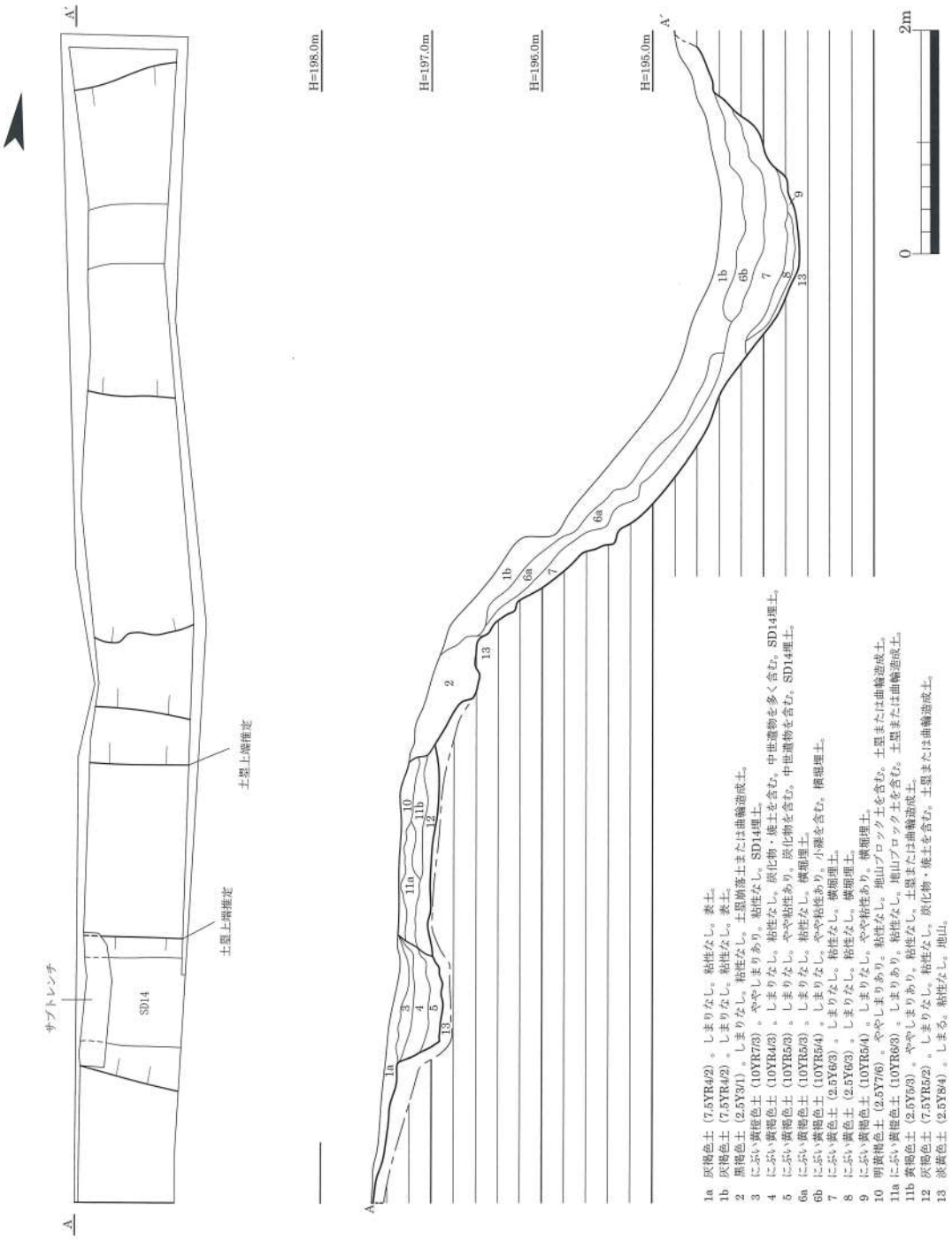


Fig. 30　No. 12 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

No. 12 トレンチ出土遺物（Fig.31）

1は表土より出土した遺物である。

耳壺（1） 中国陶器で、残存器高 2.7cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面はナデ調整を施す。外面に沈線文を施す。内外ともに施釉される。色調は灰褐色を呈する。全体的に焼締まる。

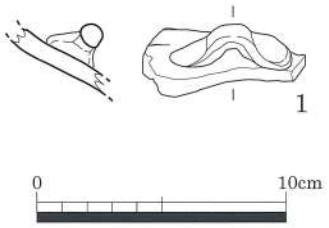


Fig. 31 No. 12 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 13 トレンチ（Fig.32）

No.13 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央部北側の B・C10 グリッドに位置する。地表面観察で曲輪Ⅱ北側直下の横堀が収束していることから、城の出入口の存在を想定し、その確認と曲輪Ⅱ直下の帯曲輪の規模・形状確認のため、長さ 9.7m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。調査では新たに曲輪Ⅱ縁辺部で地山面を階段状に切土を行ったあと、盛土による土塁（または曲輪）の造成を行っていることが確認された。また曲輪Ⅱ平坦部の直下では埋没した横堀が検出され、No.12 トレンチの横堀Ⅱと連続しており、さらに横堀Ⅱの北側に土塁Ⅴを伴っていることが判明した。今回の調査では城の出入口に関連する遺構は検出されなかった。検出された曲輪Ⅱ縁辺部の土塁Ⅴまたは曲輪造成土の規模は、造成土の残存幅 2.6m 以上、残存高 1.1m を測る。曲輪Ⅱ直下の横堀の規模は上幅（曲輪Ⅱ縁辺部の土塁から横堀の立ち上がりまでの水平距離）が 4.1m、深さは 0.6m 程埋没しており、曲輪Ⅰ（主郭部）縁辺部から堀底面までの比高差は 2.4m で、断面形状は U 字形の毛抜堀状を呈する。堀に伴う土塁（盛土造成によるものと思われるが地山の可能性もあり、その場合は切土による造成となる。）の規模は残存上幅が 0.85m、残存する深さが 0.6 ～ 0.9m、基底部（横堀底部から土塁北側裾部幅）は 3m を測る。トレンチ内の層序は 9 層に分層され、1 層は表土、2 ～ 5 層は土塁崩落土などの横堀埋土、6 ～ 8 層は曲輪Ⅱ平坦部土塁または曲輪Ⅱ造成土、9 層は土塁である。遺物は中国産白磁碗・青磁碗・陶器、国産陶器、中世須恵器、土師器坏・小皿などが出土した。

No. 13 トレンチ出土遺物（Fig.33）

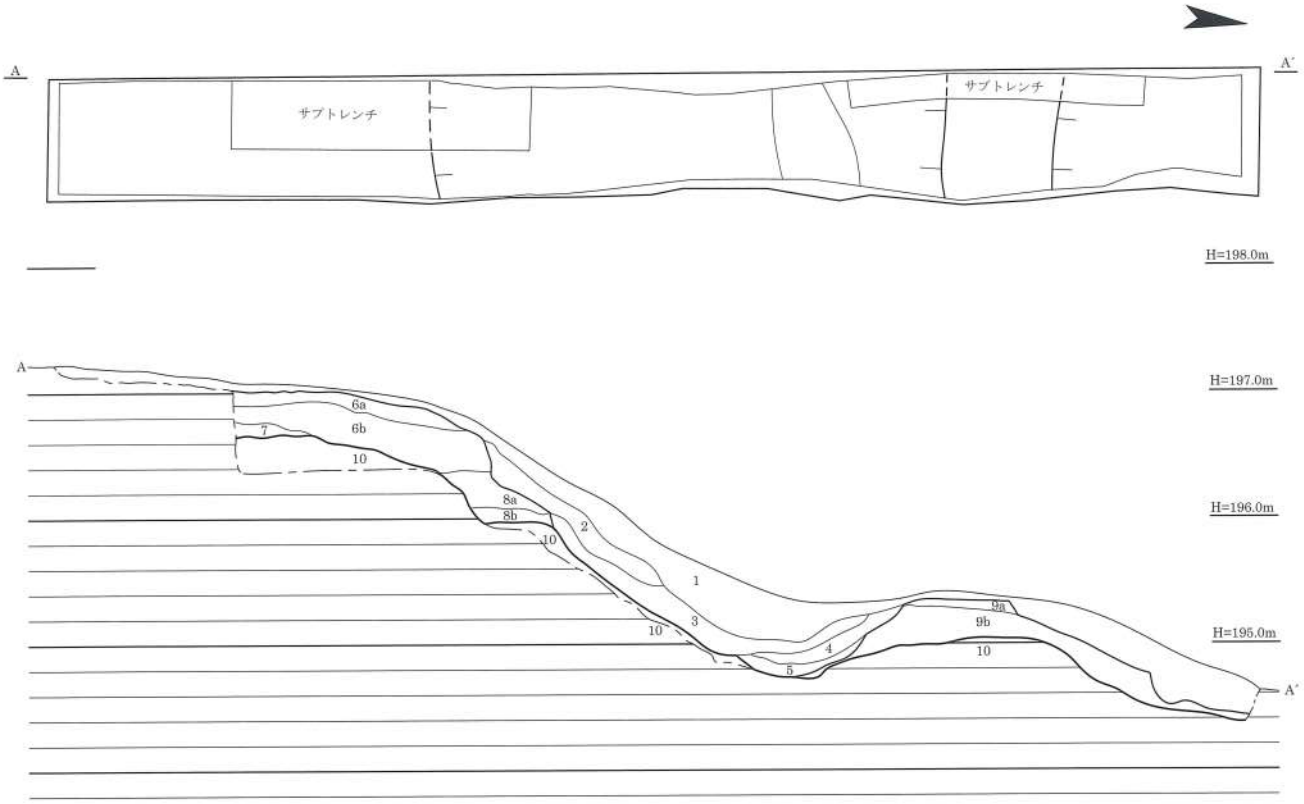
1 ～ 5 は表土より出土した遺物である。

碗（1） 白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、残存器高 3.6cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

鉢（2） 中国陶器で、残存器高 6.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ後にナデ調整をし、内面は回転ナデ調整を施す。色調は外面が灰黄色、内面が暗灰黄色を呈する。

甕（3） 中国陶器甕Ⅳ類で、残存器高 5.4cm を測る。調整は内面に回転ナデ調整を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄茶色、褐茶色、灰黄色、露胎部がにぶい黄橙色、灰黄色を呈する。肩部に砂粒を含む土の熔着が認められる。

坏（4） 土師器で、復元口径 17.6cm、器高 2.4cm、復元底径 12.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面は回転ナデ後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後、板状圧痕が認められる。色調は内外面



1 灰褐色土（7.5YR4/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
2 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。しまりなし。粘性なし。土塁等の崩落土。堀埋土。
3 灰褐色土（7.5YR4/2）。しまりなし。粘性なし。土塁等の崩落土。堀埋土。
4 褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりあり。粘性なし。粒子が細かい。土塁等の崩落土。堀埋土。
5 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。ややしまりあり。粘性なし。7層に比べやや粒子が粗い。堀埋土。
6a 橙色土（7.5YR7/6）。地山の風化土。かたくしまる。粘性なし。灰褐色土が混入する。土塁または曲輪造成土。
6b 橙色土（7.5YR7/6）と灰褐色（7.5YR5/2）が交互に水平に堆積する。かたくしまる。粘性なし。土塁または曲輪造成土。
7 明褐色土（7.5YR5/6）。かたくしまる。粘性なし。風化礫を多く含む。土塁または曲輪造成土。
8a 明黄褐色土（10YR6/6）。しまりあり。粘性なし。炭化物を含む。土塁または曲輪造成土。
8b 褐灰色土（10YR4/1）。しまりあり。やや粘性あり。炭化物を含む。土塁または曲輪造成土。
9a 淡黄色土（2.5Y8/4）。しまりあり。粘性なし。褐灰色土が若干混ざる。土塁。
9b 同　上。
10 淡黄色土（2.5Y8/4）。しまりあり。粘性なし。花崗岩の風化礫を含む。地山。

Fig. 32　No. 13 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

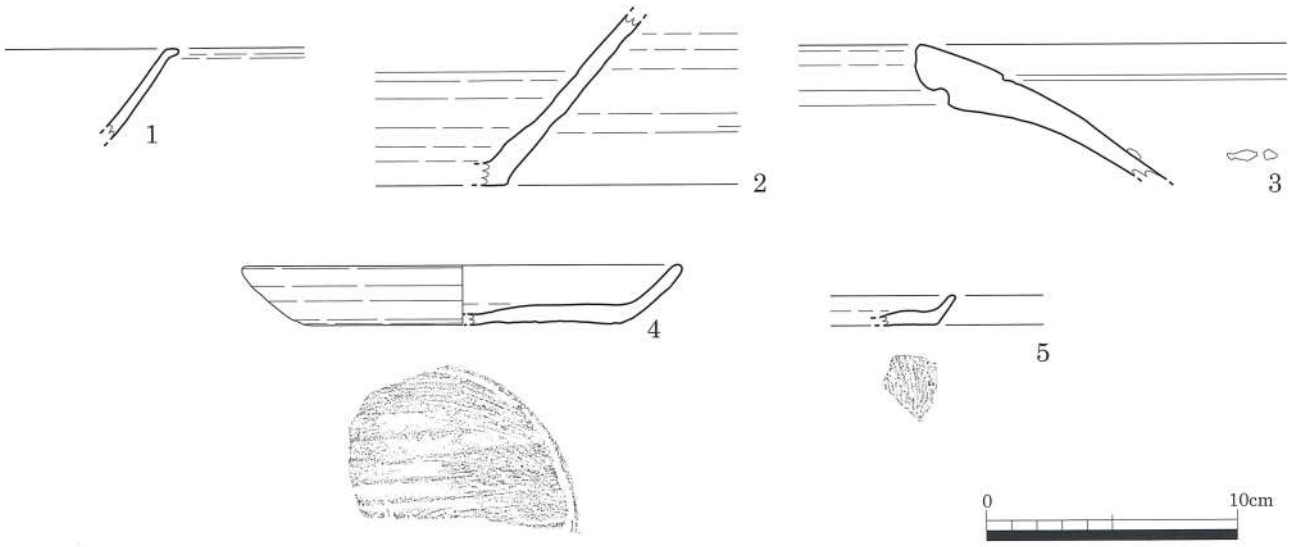


Fig. 33　No. 13 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

ともに、にぶい橙色である。

小皿（5）　土師器で、器高 1.2cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色である。

No. 14 トレンチ（Fig.34）

No.14 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央部南側直下の F・G11 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ（主郭部）中央部南側直下の帯曲輪の曲輪Ⅴおよび横堀の形状・規模の確認のため、長さ 10m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。調査では横堀Ⅲの埋没状況と帯曲輪の造成状況を確認できた。横堀Ⅲは表土が層厚 0.1 ～ 0.2m 程堆積している。表土除去後の規模は上幅（曲輪Ⅱ縁辺部土塁から横堀南側の立ち上がりまでの水平距離）が 5.1m、深さは 0.6m 程埋没しており、曲輪Ⅰ縁辺部から堀底面までの比高差は 4.6m で、断面の形状は U 字形の毛抜堀状を呈する。横堀に伴う土塁については、どこまでを土塁または帯曲輪の造成土とするか判断できなかった。土層の堆積状況から、横堀Ⅲを構築する際に横堀南側の立ち上がり部分を上面幅 1m の台形状に削り出しており、その直上に造成土を盛土している状況が観察された。これを土塁と考えることもできるが、この造成土より南側も造成土（土塁の崩落土の可能性もある）の堆積が認められ、既存の土塁を埋めて造成したものか、元々造成面を造成するために台形状に地山を削り出したものかは判断できなかった。トレンチ内の層序は 13 層に分層され、1 層は表土、2 ～ 4 層は土塁崩落土などの横堀Ⅲ埋土、5 ～ 7・10 ～ 13 層は土塁造成土と思われるが、6 層には中世前期の土師器や中国産陶磁器が含まれており、旧表土の可能性がある。また 10 層は前述の通り台形状に削り出された地山直上に堆積していることから、土塁の造成土の可能性も考えられ、その場合残存する規模は上面幅が 0.9m、造成土の残存高は 0.2m である。8・9 層は炭化物を多く含んでおり、築城以前の遺構の可能性がある。遺物は横堀Ⅲ埋土の 2 層から中国産白磁碗・青磁碗、瓦器椀、土師器坏・小皿、3 層から中国産白磁・青磁、土師器、土塁造成土の 5 ～ 7 層から中国産白磁・青磁・陶器、土師器坏・小皿などが出土した。

No. 14 トレンチ出土遺物（Fig.35）

3 は 2 層、2 は 3 層、1 は 6 層、4 は土塁造成土より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅵ - 1 類で、残存器高 1.9cm を測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が青白色を呈する。

碗（2）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、復元口径 17.2cm、残存器高 3.1cm を測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

水注×壺（3）　中国陶器で、残存器高 2.4cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰黄色を呈する。口縁部に目跡が認められる。

坏（4）　土師器で、復元口径 16.1cm、器高 2.5cm、復元底径 11.2cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面は回転ナデ後ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに、にぶい橙色である。内面の口縁端部に煤の付着が認められ、燈明具として使用された可能性がある。

No. 15 トレンチ（Fig.36）

No.15 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央部南東側直下の E・F12・13 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ（主郭部）中央部南東側直下の帯曲輪および横堀の形状・規模の確認のため、長さ 7m ×幅 1m のトレンチの設定を行い掘削を行った。調査の結果、No.13 トレンチと同様の横堀埋没状況と帯曲輪の造成状況を確認できた。トレンチ内の層序

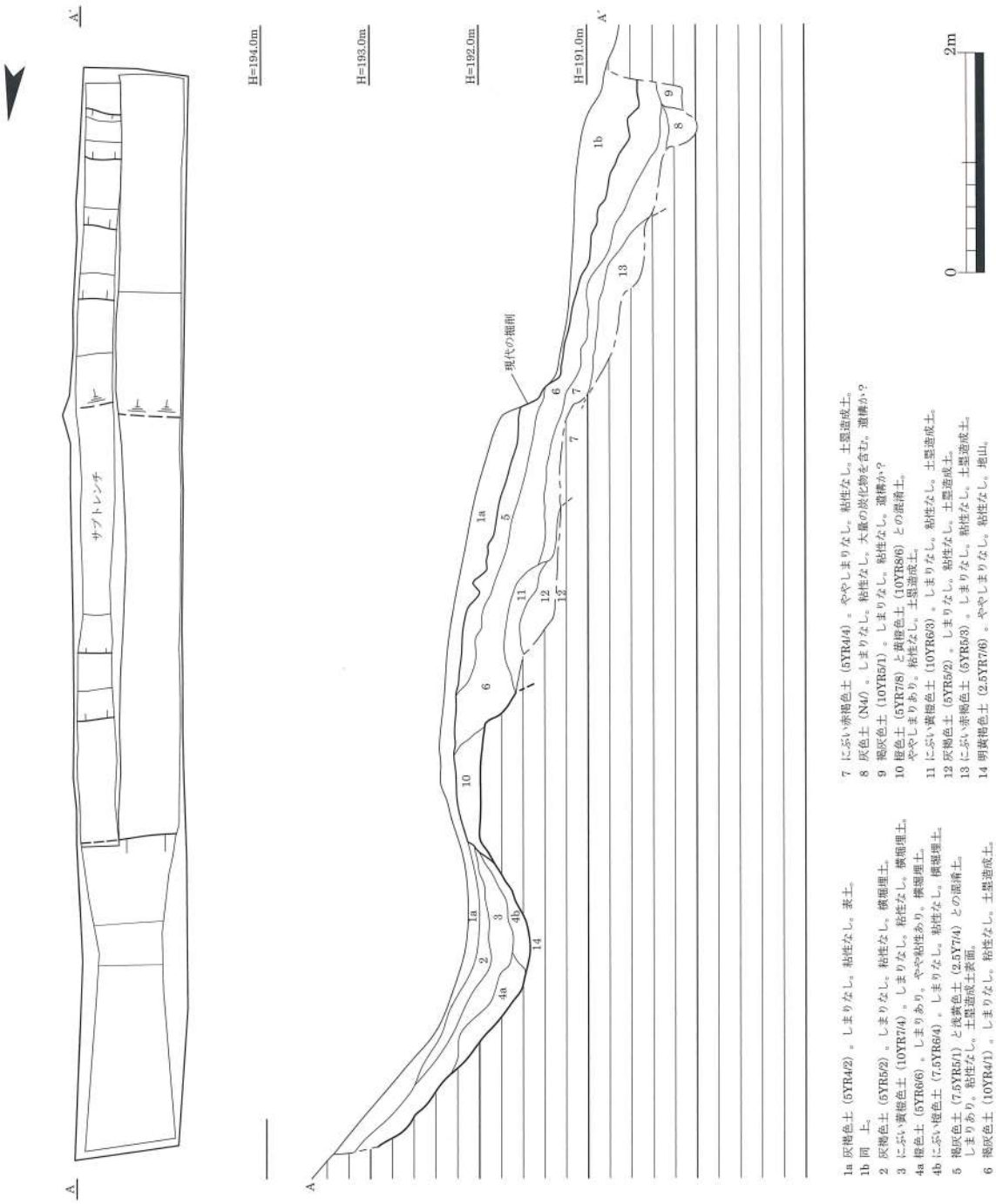


Fig. 34　No. 14 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

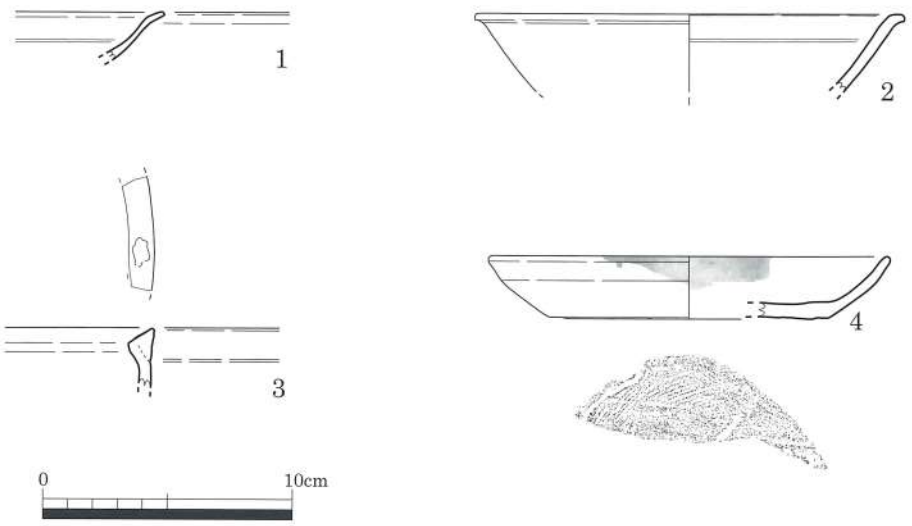
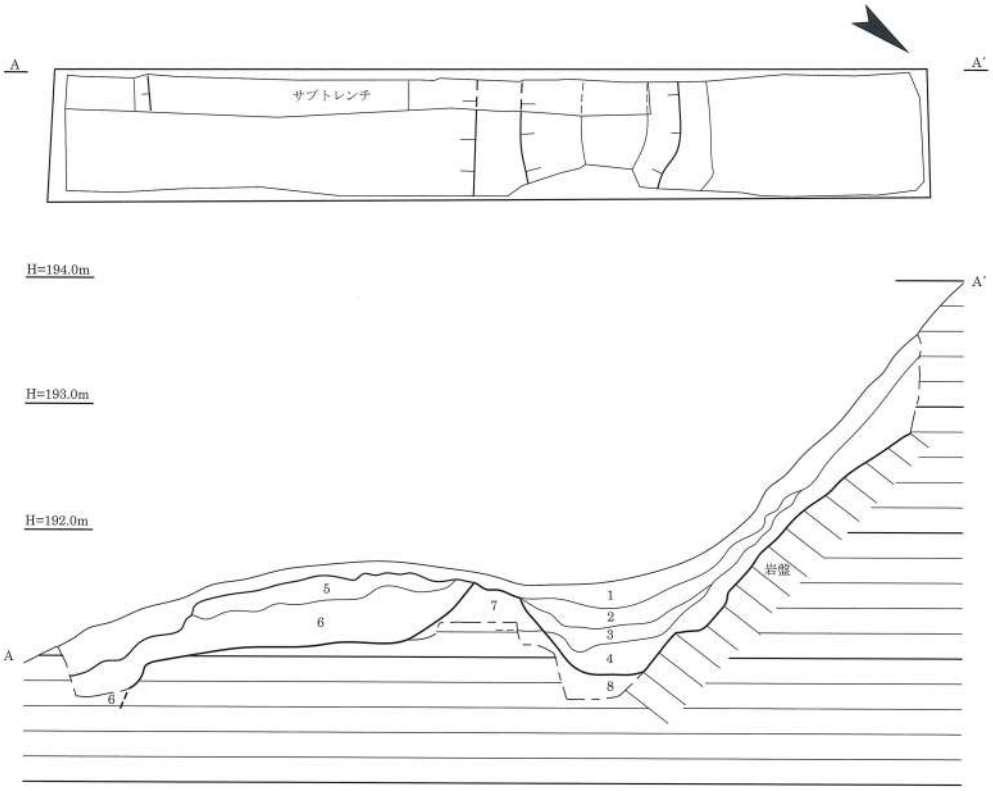


Fig. 35　No. 14 トレンチ出土遺物実測図（1/3）



1 灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
2 灰褐色土（7.5YR6/2）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
3 灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
4 橙色土（7.5YR6/6）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
5 明黄褐色土（10YR7/6）。しまりなし。粘性なし。土塁または曲輪造成土。
6 褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。やや粘性あり。中世遺物を大量に含む。土塁または曲輪造成土。
7 明赤褐色土（2.5YR5/6）。しまりあり。粘性なし。地山。
8 にぶい褐色砂質土（7.5YR5/3）。ややしまりなし。粘性なし。地山。

Fig. 36　No. 15 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

は6層に分層され、1層は表土、2～4層は土塁崩落土などの横堀Ⅲ埋土、5・6層は土塁または曲輪Ⅴ造成土である。今回のトレンチでは曲輪Ⅱ南東部斜面において花崗岩の岩盤を削り取って切岸が構築されている状況が検出され、この切岸から曲輪Ⅱ直下の横堀Ⅲへと掘削する際に切岸側の岩盤には幅30cm程の小段を削り残す状況が認められた。5・6層内からは切岸構築時に排出されたと思われる花崗岩の小剥片が多数混入していた。検出されたそれぞれの規模・形状は、横堀Ⅲの上幅（曲輪Ⅱ縁辺部から横堀の立ち上がりまでの水平距離）が4.7m、深さは0.7m程埋没しており、曲輪Ⅰ縁辺部から堀底面までの比高差は4.0mで、断面の形状はU字形に近い台形の箱堀状を呈する。帯曲輪造成土または土塁は調査範囲のため全体の確認を行えていないが、地表面観察と併せて推定すると幅4～5m程を盛土による造成を行い、そこからは急斜面となっている。またNo.14トレンチと同様に盛土造成前に横堀の南側立ち上がり部分から上幅0.4m、高さ0.5～0.6m、基底部幅1.1～1.5mを台形状に地山を削り残し、土手状の高まりを造成している。遺物は表土から中国産白磁・青磁碗、土師器、横堀Ⅲ埋土から中国産白磁・青磁碗・陶器、土師器、中世須恵器、造成土の5・6層からは中世前期の中国産青磁・陶器、東播系須恵器鉢・土師質土器鍋、土師器坏・小皿など特に6層からは多くの陶磁器・土師器片が出土しており、No.14トレンチの6層と同様に中世前期の遺物が混入している状況である。

No.15トレンチ出土遺物（Fig.37）

1は3層、2～5は5・6層より出土した遺物である。

碗（1）　龍泉窯系青磁椀Ⅰ-4b類で、復元口径15.6cm、残存器高5.2cmを測る。内面に二又片刀または櫛刀による分割線、片彫りによる飛雲文、沈線を施す。口縁端部に輪花を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

碗（2）　同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、残存器高3.0cmを測る。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

捏鉢（3）　中世須恵器で、残存器高4.5cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに灰色を呈する。

捏鉢（4）　中世須恵器で、残存器高1.7cmを測る。調整は内外面が回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに灰色である。

鍋（5）　土師質土器で、残存器高4.6cmを測る。調整は外面がヨコナデ、ハケメ調整、内面は摩耗のため不明である。色調は外面がにぶい橙色、内面が暗灰色を呈する。内面に煤の付着が認められる。

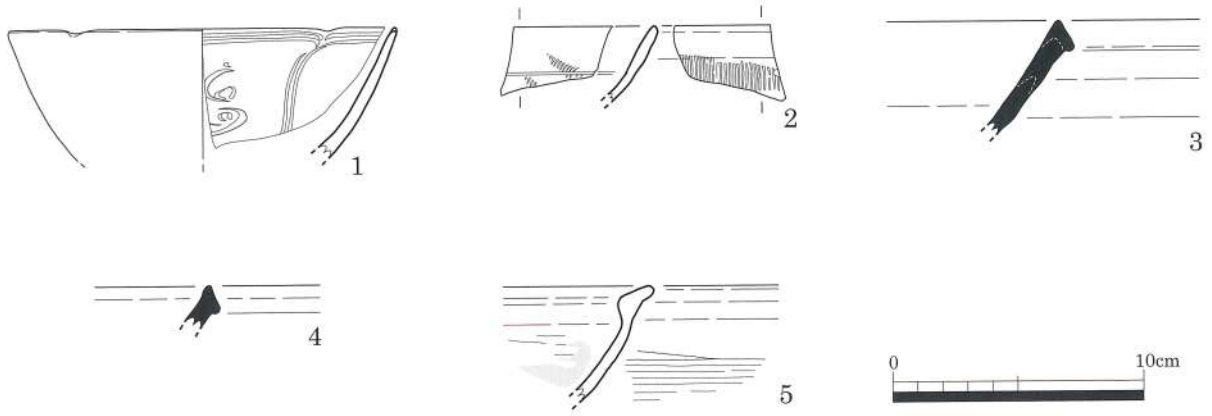


Fig.37　No.15トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 16 東側トレンチ（Fig.38）・西側トレンチ（Fig.39）

No.16 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）南東直下に構築された竪堀を挟んで二箇所に帯曲輪の規模・形状と竪堀を渡るための木橋などの柱穴の確認のため、トレンチを設定して掘削を行った。竪堀を挟んで北東側の D13・14 グリッドに長さ 3.5m ×幅 1.8m の No.16 東側トレンチ、南西側の E13 グリッドに長さ 3m ×幅 1.8m の No.16 西側トレンチを設定して掘削を行った。調査の結果 No.16 東側トレンチでは木橋に関わる遺構は認められなかったが、横堀Ⅲが検出された。調査では隣接する竪堀Ⅰとの関係を調べるため、横堀Ⅲの延びる南西側へ 1m 分トレンチを掘削し、横堀Ⅲと竪堀Ⅰが接続している状況を確認した。また、この横堀Ⅲは No.11 トレンチで検出された横堀方向に延びており、曲輪Ⅱ東端部直下の竪堀より北東には横堀Ⅲが廻っていることが確認された。トレンチ内の層序は 7 層に分層され、1 層は表土、2a 層は曲輪造成土または樹根、2b ～ 5 層は横堀Ⅲ埋土、6・7 層は土塁または曲輪Ⅴ造成土である。横堀Ⅲの規模は上幅（曲輪Ⅱ天端から横堀Ⅲの南側立ち上がりの水平距離）が 2.6m、深さは 0.7m 程で曲輪Ⅱ天端と横堀Ⅲの堀底との比高差は 2.5m で、断面の形状は U 字形に近い台形の箱堀状を呈する。横堀Ⅲ南側の造成土は土層観察により No.14・15 と同様に台形状の土手が認められるが 2a 層が造成土か樹根であるか明確でないため、今後の課題である。遺物は表土から中国産青磁碗・皿、土師器坏、横堀Ⅲ埋土の 2b ～ 5 層から中国産白磁碗・青磁碗・陶器、土師器坏が出土した。次に No.16 西側トレンチでは横堀も木橋に関わる遺構も検出されなかった。このことから、当該トレンチと No.15 トレンチとの間で横堀は途切れていることが確認された。層序は 3 層に分層され、1 層の表土と 3 層の切岸・地山の崩落土とに別れ、2 層は 1 層の流れ込みまたは斜面の堆積土と思われる。遺物は中国産白磁碗・青磁碗・皿が出土した。

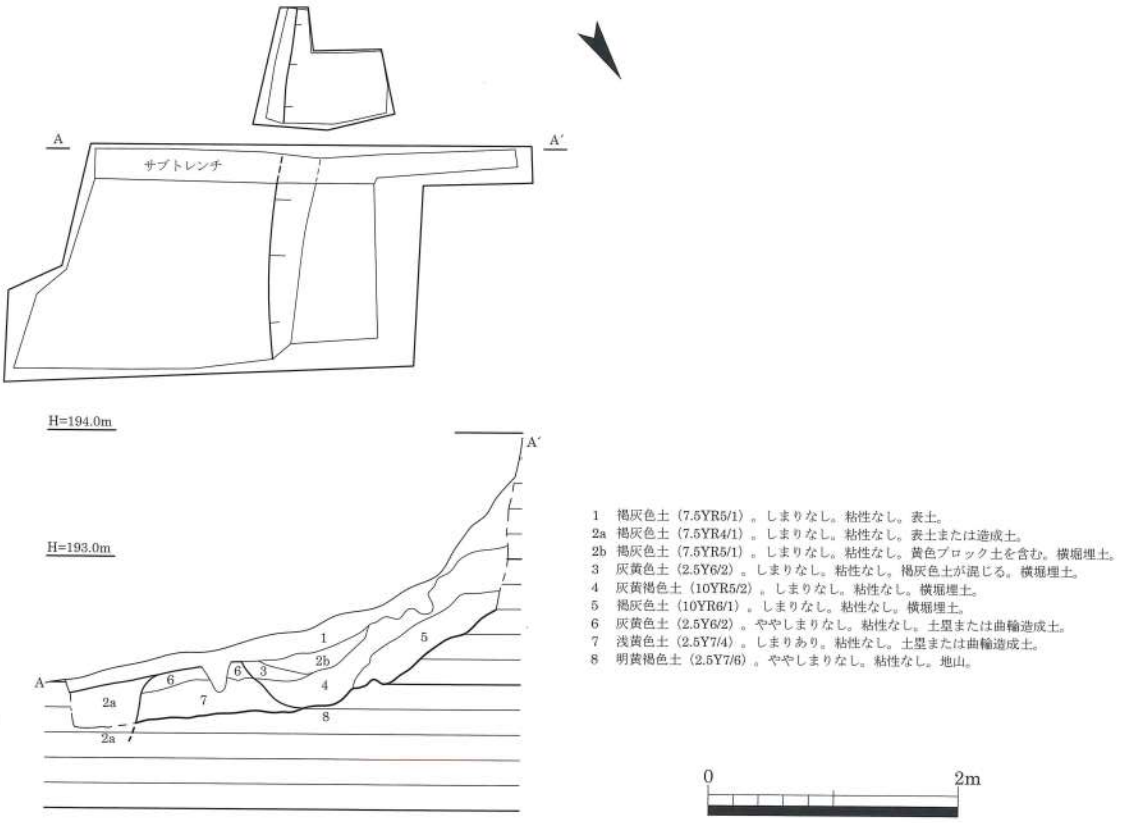


Fig. 38　No. 16 東側トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

No. 16 東側トレンチ出土遺物（Fig.40）

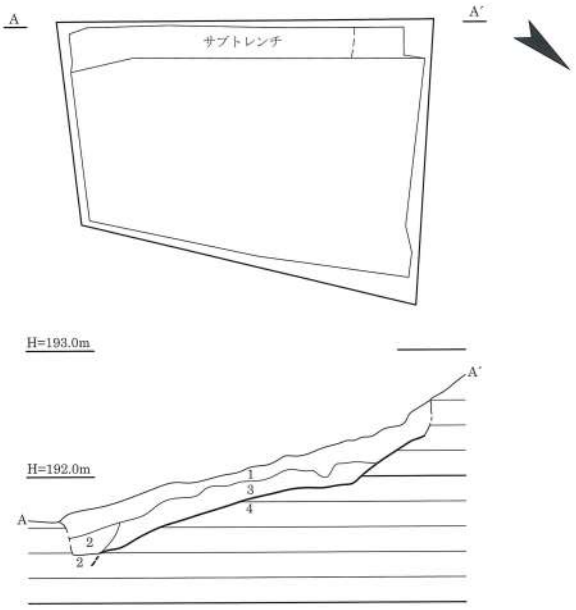
4は表土、1～3は横堀埋土より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅵ－1類で、残存器高1.6cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。外面の釉の厚みにムラが認められる。

碗（2）　白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、復元口径15.8cm、残存器高1.6cmを測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

碗（3）　龍泉窯系青磁椀Ⅰ-3a類で、残存器高2.8cmを測る。内面に櫛目文、片彫文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

皿（4）　龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で、復元口径12.6cm、残存器高2.0cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。内外面に黒色の付着物が認められる。



1　灰褐色土（7.5YR5/2）。表土。
2　にぶい黄褐色土（10YR5/3）。ややしまりあり。粘性なし。1層と同じ可能性がある。
3　明黄褐色土（10YR7/6）。しまりあり。粘性なし。中世遺物が混入する。地山の崩落土か？
4　明赤褐色土（2.5YR5/6）。しまりあり。粘性なし。地山。

0　2m

Fig. 39　No. 16 西側トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

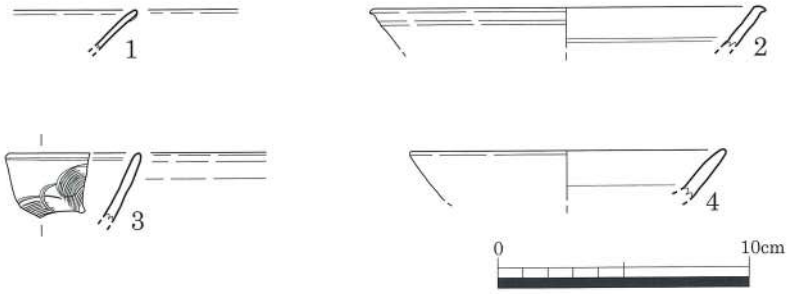


Fig. 40　No. 16 東側トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 16 西側トレンチ出土遺物（Fig.41）

1は表土より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、残存器高4.0cmを測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄白色を呈する。

No. 17 トレンチ（Fig. 42）

No.17トレンチは曲輪Ⅰ（主郭部）南東部直下のG3グリッドに位置する。曲輪Ⅰ南側直下の横堀および帯曲輪の形状・規模を確認するため、長さ3.2m×幅1mのトレンチを設定して掘削を行った。トレンチ内の層序は6層に分層され、1層は表土で層厚0.05m程堆積しており、2層は近現代の造成土、3～6層は曲輪Ⅴ造成土である。調査ではNo.7トレンチから西へ延びる横堀の存在が想定されたが地山を階段状に掘削する切り土造成後、水平方向に盛土を行っている状況が確認された。この造成がいつの段階でなされたものかは出土遺物などからでは判断できず、近現代に行われた可能性も考えられる。今後近辺の調査を行い、横堀がどこまで延びているかの確認と、今回検出された造成土の時期を判明させる課題が残った。遺物は中国産白磁壺・青磁碗、土師器片などが出土した。

No. 17 トレンチ出土遺物（Fig.43）

1～3は表土より出土した遺物である。

水注×壺（1）　白磁で、残存器高11.2cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が乳白色、黄色を呈する。

碗（2）　龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2類で、残存器高3.7cmを測る。内面に片彫蓮花文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

碗（3）　同安窯系青磁椀Ⅰ－1b類で、復元口径15.4cm、残存器高3.9cmを測る。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

No. 18 トレンチ（Fig.44）

No.18トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）南東部直下のF・G7グリッドに位置する。曲輪Ⅱ南西側直下の横堀および帯曲輪の曲輪Ⅳの形状・規模を確認するため、長さ5m×幅0.6mのトレンチを設定して掘削を行った。調査の結果、No.7トレンチで確認された横堀Ⅳの延長と思われる堀とトレンチ南側にケーブルが埋設されており撹乱されていたが、その下層に盛土による造成が確認され、この地点では帯曲輪は現状の範囲まで延びていたことが確認できた。横堀の規模は上幅（曲輪Ⅱから横堀Ⅳの南側立ち上がりの水平距離）が4.3m、深さ0.7m、曲輪Ⅱ天端と横堀Ⅳの堀底との比高差は3.3mで、断面の形状はU字形に近い台形の箱堀状を呈する。トレンチ内の層序は12層に分層され、1層は表土で層厚0.05～0.25m程堆積しており、2・3層は近現代の造成土、4～7層は横堀Ⅳ埋土、8～12層は曲輪Ⅳ造成土である。遺物は中国産青磁碗・皿・青白磁片、中世須恵器鉢、瓦器片、土師器片などが出土した。

No. 18 トレンチ出土遺物（Fig.45）

1は表土より出土した遺物である。

碗（1）　同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、残存器高3.6cmを測る。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、ヘラ描き文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

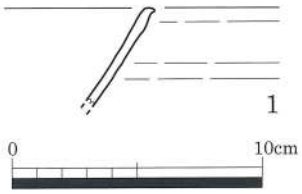
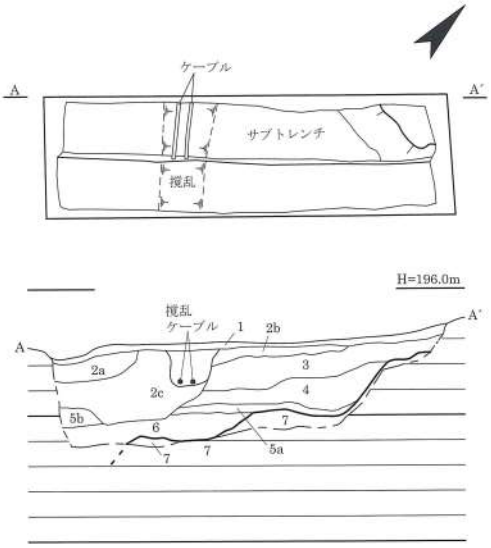


Fig. 41　No. 16 西側トレンチ出土遺物実測図（1/3）



1　灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
2a　にぶい黄褐色土（10YR5/4）。かたくしまる。粘性なし。近現代造成土。
2b　浅黄橙色土（10YR8/4）。かたくしまる。粘性なし。近現代造成土。
2c　にぶい黄褐色土（10YR5/4）。ややしまりなし。粘性なし。地山ブロック土・褐灰色ブロック土を含む。
3　黄橙色土（10YR7/8）と灰黄褐色土（10YR5/2）との混淆土。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
4　明黄褐色土（10YR6/6）。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
5a　褐灰色土（7.5YR5/1）。ややしまりなし。粘性なし。炭化物を多く含む。曲輪造成土。
5b　同　上。
6　明赤褐色土（2.5YR5/8）と褐灰色土（7.5YR5/1）との混淆土。しまりなし。やや粘性あり。曲輪造成土。
7　明赤褐色砂質土（2.5YR5/8）。しまりなし。粘性なし。花崗岩風化礫を含む。地山。

0　2m

Fig. 42　No. 17 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

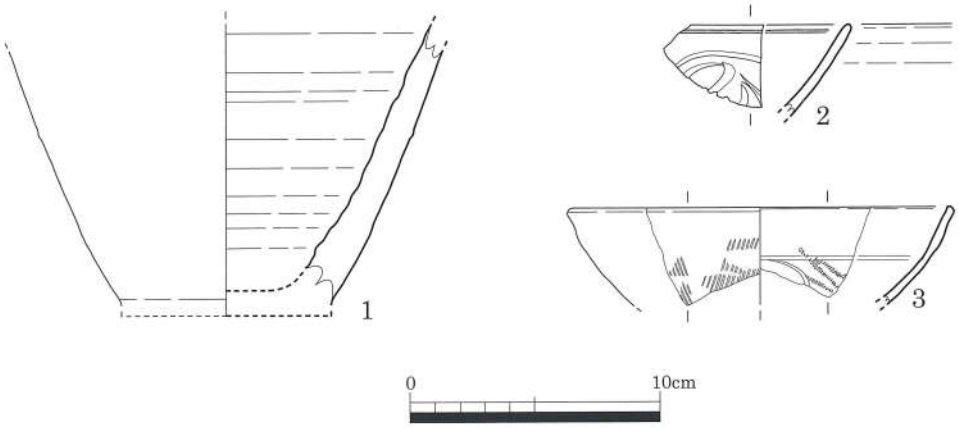
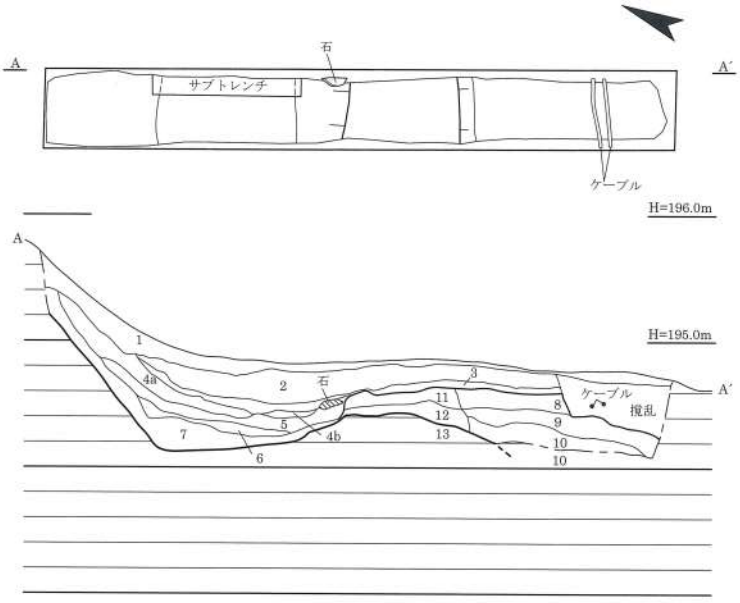


Fig. 43　No. 17 トレンチ出土遺物実測図（1/3）



1　灰褐色土（7.5YR6/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
2　灰黄色土（2.5YR7/2）。しまりなし。やや粘性あり。近現代の造成土。
3　黒褐色土（10YR3/1）。しまりなし。やや粘性あり。近現代の造成土。
4a　にぶい黄橙色土（10YR6/4）。しまりなし。やや粘性あり。横堀埋土。
4b　同　上。
5　褐灰色土（10YR5/1）。しまりなし。やや粘性あり。横堀埋土。
6　にぶい黄色土（2.5Y6/3）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
7　明赤褐色土（5YR5/6）。しまりなし。粘性なし。横堀埋土。
8　黄褐色土（10YR5/6）。ややしまりなし。やや粘性あり。曲輪造成土。
9　褐灰色土（10YR4/1）。しまりなし。やや粘性あり。曲輪造成土。
10　橙色土（7.5YR6/6）。しまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
11　にぶい黄橙色土（10YR6/4）。しまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
12　橙色土（7.5YR6/6）。ややしまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
13　赤橙色土（10YR6/8）。しまりあり。粘性なし。地山。

0　2m

Fig. 44　No. 18 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

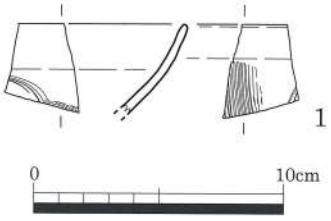


Fig. 45　No. 18 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 19 トレンチ（Fig. 46）

No.19 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）南西部直下の F・G8 グリッドに位置する。曲輪Ⅰ（主郭部）部南西側直下の横堀および帯曲輪の曲輪Ⅳの形状・規模と城の出入口に関する遺構を確認するため、長さ 4.1m ×幅 0.8m のトレンチを設定して掘削を行った。調査では西側に隣接する No.18 トレンチで検出された横堀の延長状況の確認を目的として調査を行った。その結果、現代のケーブル埋設坑により撹乱を受けている状況であったがトレンチ全体の表土を 0.2m 程掘り下げると地山面が検出され、遺構は認められなかった。トレンチ内の層序は表土のみである。遺物は表土から中国産青磁碗・陶器盤、土師質土器鍋が出土した。

No. 19 トレンチ出土遺物（Fig.47）

1 は表土より出土した遺物である。

鍋（1） 土師質土器で、残存器高 2.1cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面にナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色を呈する。

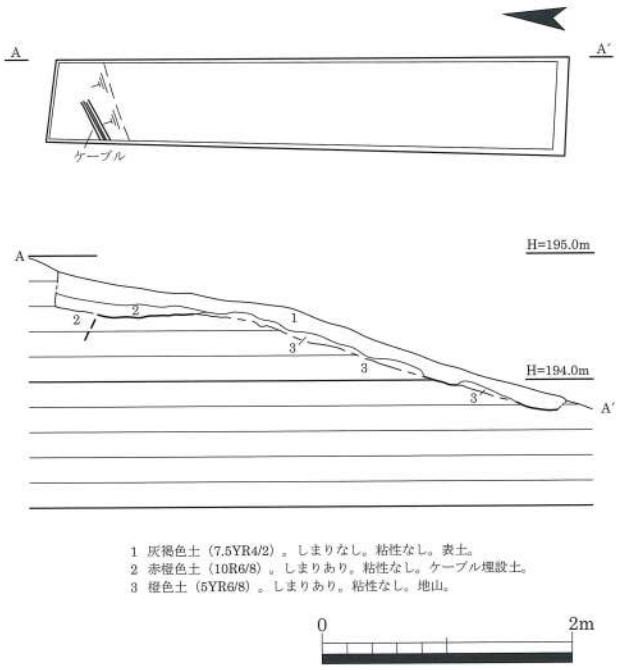


Fig. 46 No. 19 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

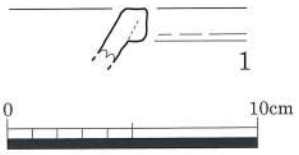


Fig. 47 No. 19 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 20 トレンチ（Fig. 48）

No.20 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）南西部直下のF・G9グリッドに位置する。曲輪Ⅰ（主郭部）南西側直下の横堀および帯曲輪の曲輪Ⅴの形状・規模を確認するため、長さ 2.8m ×幅 0.8m のトレンチを設定して掘削を行った。調査ではトレンチ内全体に砂利混じりの現代の造成土となっており、地山面まで掘り下げ平坦面を検出し、造成土や遺構は検出されなかった。遺物は現代の造成土内から中国産白磁碗・青磁碗・皿、中世須恵器鉢、土師質土器鍋、土師器椀・小皿が出土した。

No. 20 トレンチ出土遺物（Fig.49）

1～3は表土より出土した遺物である。

碗（1） 白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、残存器高 2.1cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

皿（2） 龍泉窯系青磁皿Ⅰ－1c類で、復元口径 10.2cm、器高 2.3cm を測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

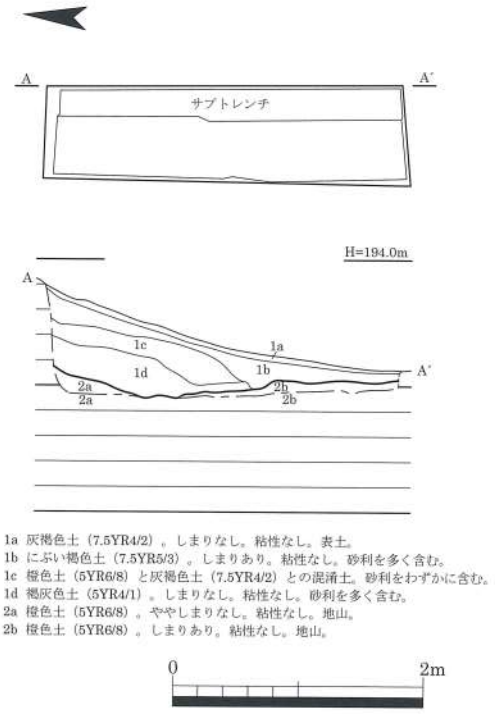


Fig. 48 No. 20 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

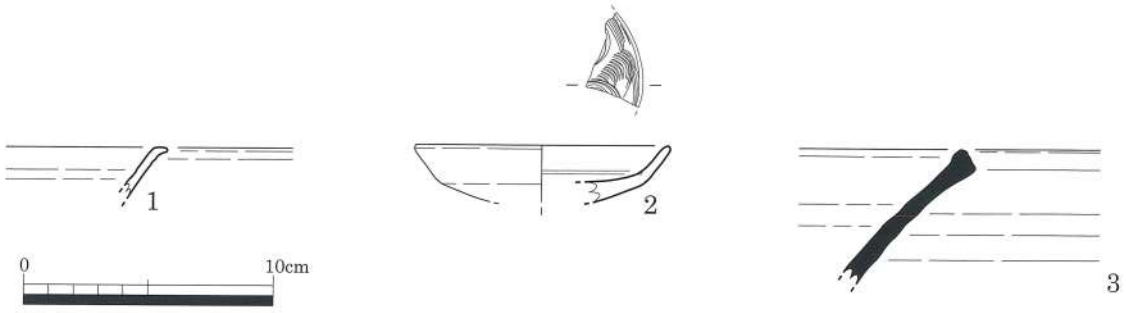


Fig. 49 No. 20 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

捏鉢（3）　中世須恵器で、残存器高 5.3cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は外面が灰色、淡黄灰色、内面が淡黄灰色を呈する。

No. 21 トレンチ（Fig. 50）

No.21 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央部北東側の B・C11 グリッドに位置する。曲輪Ⅱ直下の横堀・土塁の規模などを確認するため、長さ 3.8m ×幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。調査では西側に隣接する No.13 トレンチの横堀および土塁が東側に延びていることを想定し掘削を行った。新たに曲輪Ⅱ平坦部直下で横堀Ⅱと土塁Ⅴの検出され、横堀Ⅱと土塁Ⅴが東側へ延びていることが確認できた。また土塁Ⅴの北側では新たに SX17 または土坑が検出され、床面から同安窯系青磁碗と土師器坏が出土した。土圧により原位置はすでに失われていたが、出土状況から床面に欠けた同安窯系青磁碗を据え、その上から被せるように完形の土師器坏を伏せた状態で合わせ口状に重ねていたと考えられる。土師器坏の口縁部と見込みの一部には煤の付着が認められ、埋設用に作成されたものではなく、灯明具として使用されたものを転用したものと考えられる。同安窯系青磁碗の高台内には「上」の墨書が認められ、時期は 12 世紀中頃から後半で、口縁部～胴部の 1/2 が欠損した状況で据えられていたと思われる。また SX17 との関連性は不明であるが、0.5m 程北側にも同安窯青磁碗が胴部の一部が欠損している状態で正位置に据えられたように出土した。土塁Ⅴの規模は残存上幅 0.3m、残存高 0.3 ～ 0.5m、基底部幅 0.9m を測り、断面形状は台形を呈する。横堀Ⅱの規模は上面幅（曲輪Ⅱ縁辺部から土塁南側の上面肩部までの水平距離）が 3.3m、深さが 0.4m 程埋没しており、曲輪Ⅱ縁辺部から堀底面までの比高差が 2.3m で、断面形状は U 字形の毛抜堀状を呈する。土塁北側の溝状遺構は調査区が狭いため土坑の可能性もあるが、現状では 6・7 層が SX17 埋土で 0.3m 程堆積しており、断面形状は逆台形状を呈する。トレンチ内の層序は 9 層に分層され、1 層は表土、2 ～ 4 層は横堀Ⅱ埋土、5 層は曲輪Ⅱ造成土、6・7 層は 12 世紀中頃から後半の SX17 埋土、8・9 層は 12 世紀中頃から後半以前の堆積土または造成土である。遺物は表土から中国陶器、須恵器、土師器坏、2 ～ 9 層から中国産白磁碗・青磁碗、陶器、土師器坏・皿などが出土した。

No. 21 トレンチ出土遺物（Fig.51）

4 は表土、1 は 2 層、2・5 は 7 層、3 は 8 層より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、残存器高 2.9cm を測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が乳白色を呈する。

碗（2）　同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で口縁部の一部を欠く。復元口径 17.0cm、器高 7.0cm、底径 5.0cm を測る。調整は外面が回転ヘラケズリ調整を施す。外面に櫛目文、内面に櫛点描文、片彫文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、内面には貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部が灰緑色を呈する。高台内に墨書で「上」と読める文字が認められる。

碗（3）　同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で、口径 15.4cm、器高 6.8cm、底径 5.4cm を測る。調整は外面が回転ヘラケズリを施す。外面に櫛目文、内面に櫛点描文、片彫文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄緑色、露胎部が茶黄色を呈する。

水注×壺（4）　中国陶器で、残存器高 1.6cm を測る。色調は釉が灰緑色を呈する。

坏（5）　土師器で、口径 16.3cm、器高 3.1cm、底径 12.0cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面は回転ナデ後ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後にナデ調整と板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに、にぶい橙色である。内外面の口縁部に煤の付着が認められる。

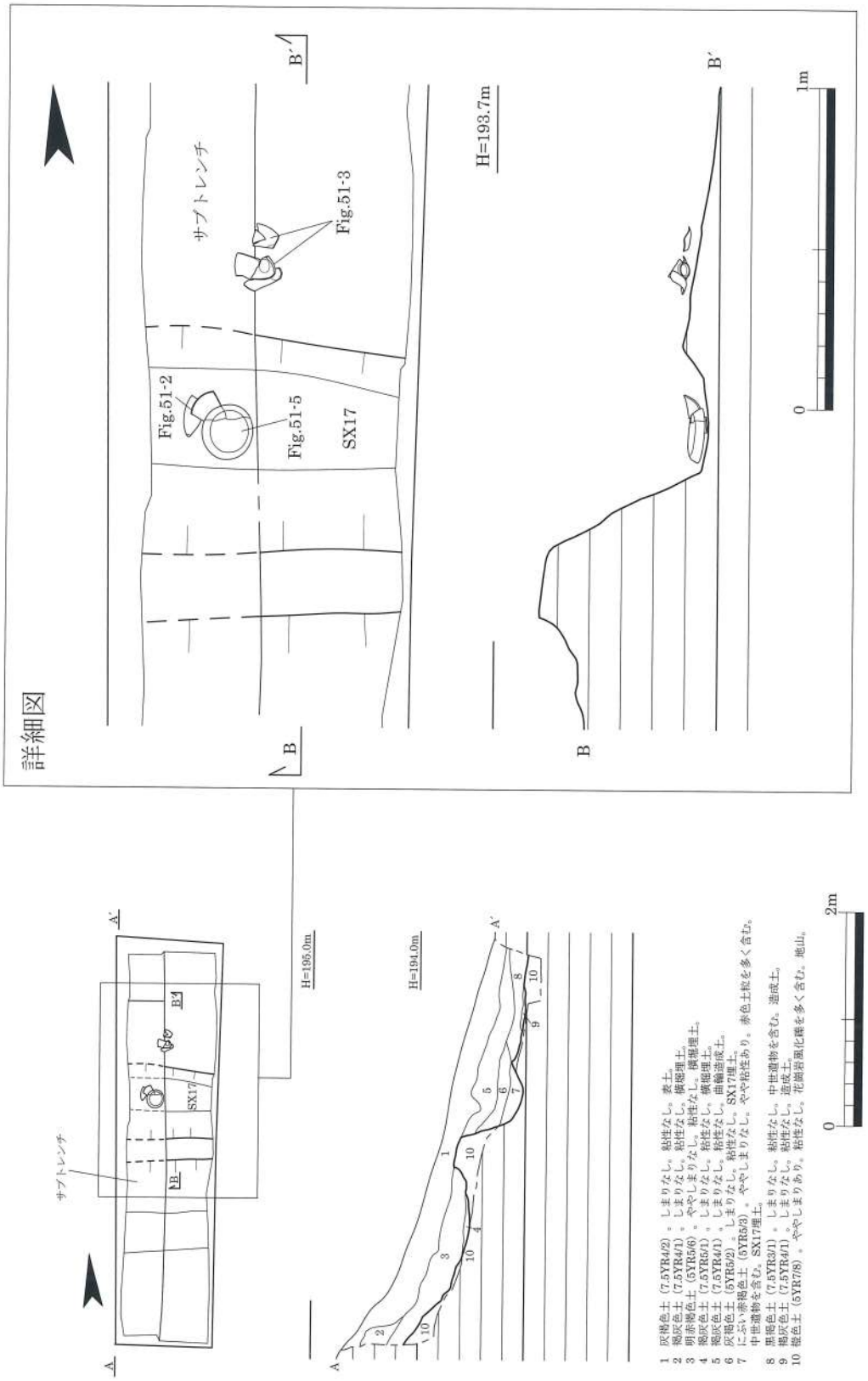


Fig. 50　No. 21 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60・詳細図 1/20）

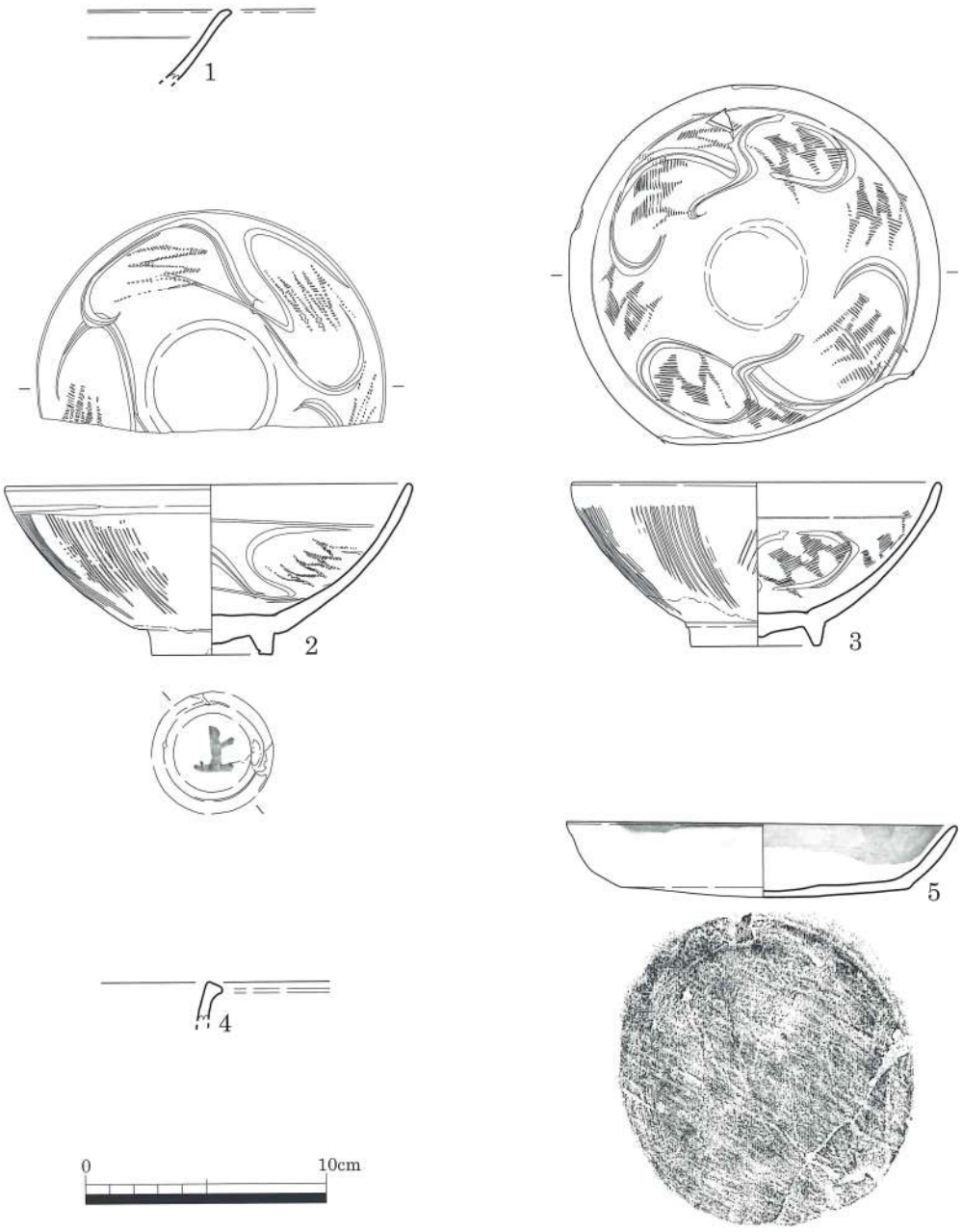


Fig. 51　No. 21 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 22 トレンチ（Fig.52）

No.22 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）南西直下の F・G9 グリッドに位置する。曲輪Ⅱ南西側直下の横堀および帯曲輪の曲輪Ⅴの形状・規模を確認するため、長さ 4m ×幅 0.6m のトレンチを設定して掘削を行った。調査の結果、No.14 トレンチで検出された横堀Ⅲの延長と思われる横堀を検出した。検出された横堀Ⅲの規模は上幅（曲輪Ⅱ縁辺部から横堀南側の立ち上がりまでの水平距離）5.6m、深さが 0.9m 程埋没しており、曲輪Ⅱ縁辺部から堀底面までの比高差が 4.7m で、断面形状は U 字形の毛抜堀状を呈する。横堀Ⅲから南側は削平のためか、土塁や造成土は認められなかった。トレンチ内の層序は 4 層に分層され、1 層は表土、2 ～ 4 層は横堀Ⅲ埋土である。遺物は中国陶器・土師器片が出土したが、図化に耐えるものはなかった。

No. 23 トレンチ（Fig. 53）

No.23 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央の C・D10 グリッドに位置する。No.12 トレンチにおいて曲輪Ⅱ北側の縁辺部に SD14 と土塁または造成土が認められ、その東側への延長確認のため、長さ 3m× 幅 1m のトレンチを設定して掘削を行った。調査の結果、No.12 トレンチと同様の遺構を検出した。検出された SD14 の規模は上幅 0.6m、深さが 0.4m で断面形状は片側が垂直に立ち上がるレの字形の片薬研堀状を呈する。SD14 の北側立ち上がりは現況では土手状の高まりはなく、土塁は確認できなかったが盛土による造成土に切り込んで SD14 が構築されていることが確認できた。トレンチ内の層序は 4 層に分層され、1 層は SD14 埋土、2・3 層は土塁または曲輪Ⅱ造成土、4 層は曲輪Ⅱ造成土または撹乱である。遺物は SD14 から 12 ～ 13 世紀の土師器片、12 世紀後半の中国産白磁・青磁などが出土した。

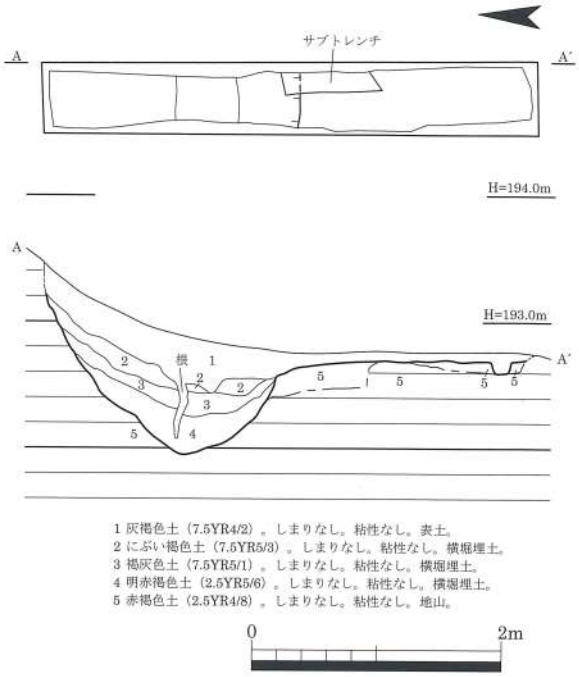


Fig. 52　No. 22 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

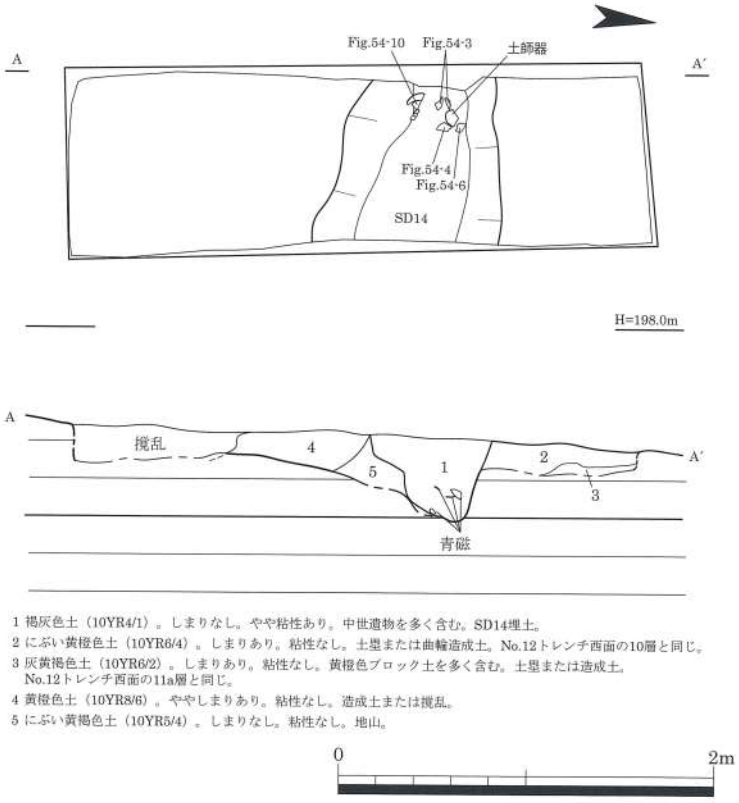


Fig. 53　No. 23 トレンチ平面・土層断面実測図（1/40）

No. 23 トレンチ出土遺物（Fig. 54）

8・9 は表土、3・4・6・10 は 1 層、1・2・5・7・11 ～ 13 は 2 層より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、復元口径 16.8cm、残存器高 3.8cm を測る。内面に沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。

碗（2）　白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、復元口径 15.8cm、残存器高 5.4cm を測る。内面体部の上位と下位に沈線を施す。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉、露胎部ともに灰白色を

呈する。

碗（3） 龍泉窯系青磁椀Ⅰ-1a類で、復元口径15.5cm、器高6.9cm、底径6.0cmを測る。内面に片彫文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、高台内部と畳付の釉は露胎である。また、内外面に貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

碗（4） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、復元口径16.0cm、残存器高4.0cmを測る。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

碗（5） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、復元口径15.8cm、残存器高5.3cmを測る。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、ヘラ描き文、櫛目文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。6と同一個体の可能性がある。

碗（6） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、復元口径15.8cm、残存器高4.8cmを測る。外面は櫛目文、内面に櫛点描文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。5と同一個体の可能性がある。

碗（7） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、復元口径16.0cm、残存器高6.3cmを測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。外面が櫛目文、内面に櫛点描文、ヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部が淡黄色、灰色を呈する。

皿（8） 同安窯系青磁皿Ⅰ-2b類で、復元口径10.8cm、残存器高1.9cmを測る。内面にヘラ描き文、櫛点描文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色である。

壺（9） 中国陶器で、残存器高3.1cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。外面に沈線文を施す。色調は釉が灰褐色を呈する。

坏（10） 土師器で、復元口径16.9cm、器高3.0cm、復元底径12.1cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色である。

坏（11） 土師器で、残存器高2.1cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色である。

小皿（12） 土師器で、復元口径8.5cm、器高1.0cm、復元底径7.2cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙色である。

小皿（13） 土師器で、復元口径9.4cm、器高0.9cm、復元底径7.0cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙色である。

No. 24 トレンチ（Fig. 55）

No.24トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央のC・D12グリッドに位置する。曲輪Ⅱ北東側の縁辺部の溝状遺構と土塁または造成土の土層確認のため、長さ5.2m×幅0.5mのトレンチを設定して掘削を行った。調査の結果、SD14と土塁または曲輪造成土と思われる遺構を確認した。検出されたSD14は曲輪Ⅱ縁辺端部から南へ2m程内側を東西方向に走行しており、西側のNo.12トレンチ・No.23トレンチで検出された遺構と同様のものであった。トレンチ内の層序は9層に分層され、1・2層は近現代と思われる造成土、3層は曲輪造成土、4層はSD14埋土、5層

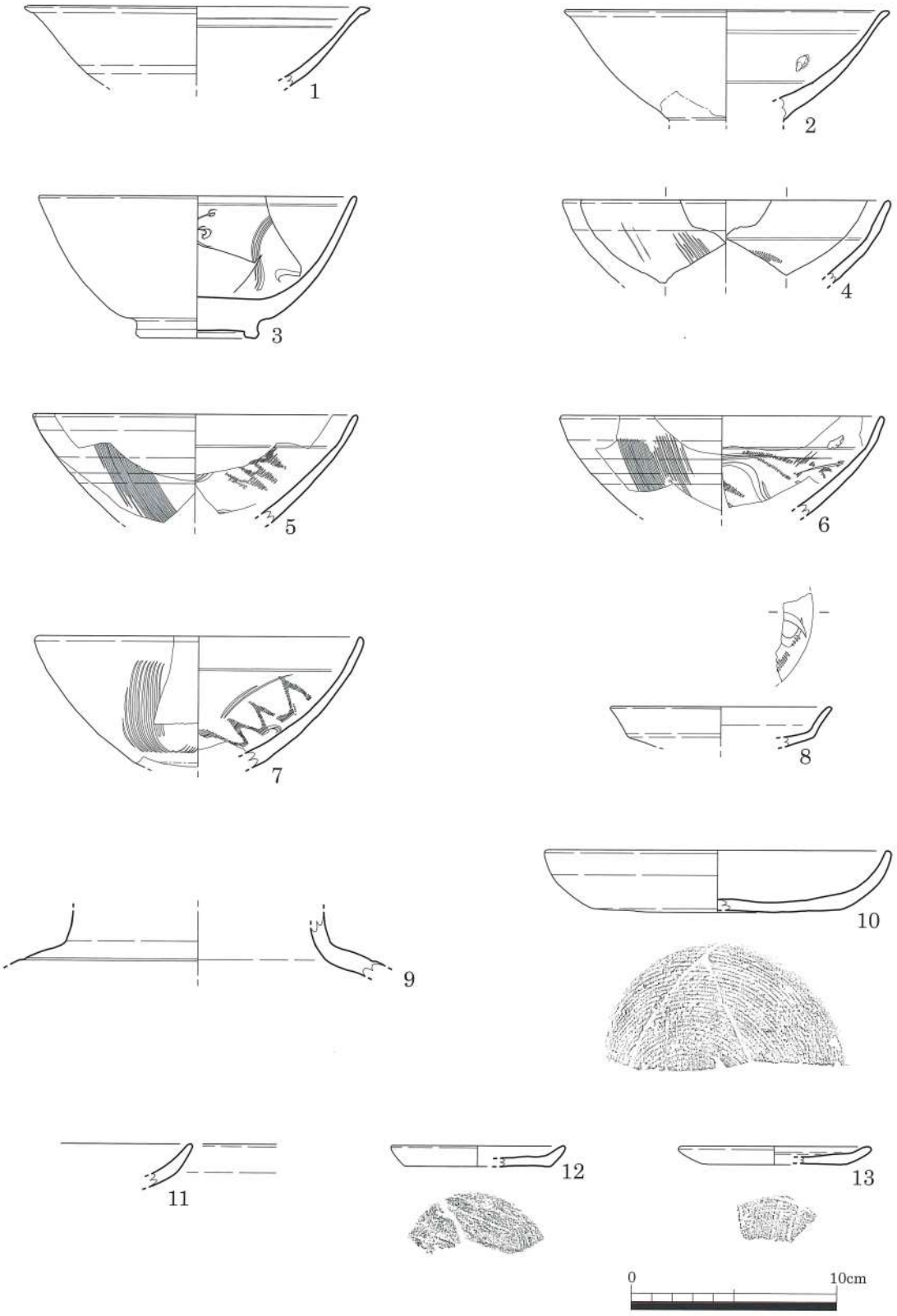


Fig. 54　No. 23 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

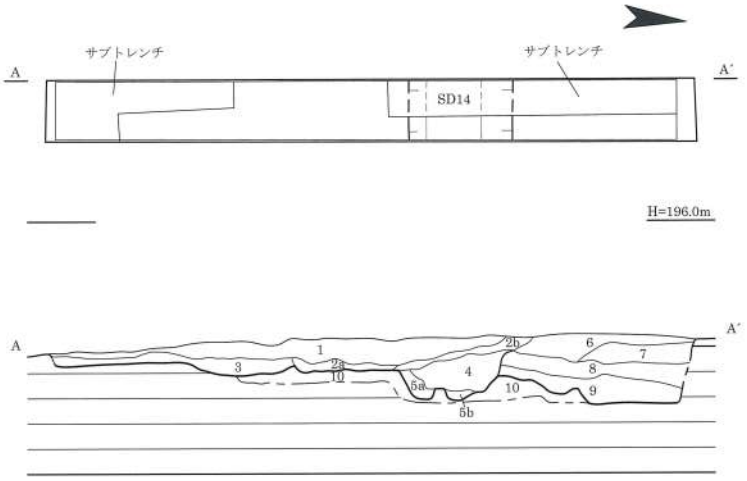
は、小穴埋土の可能性がある。6～9層は土塁または曲輪Ⅱ造成土である。このうち5層に関してはSD14以前の遺構埋土の可能性がある。SD14の規模は1･2層の撹乱により喪失しているが、残存幅0.9m、深さ0.3～0.4mで、断面形状はU字状を呈する。ただし前述の通り5層は別遺構の可能性があるため、今後平面形状で確認する必要がある。SD14の北側の立ち上がりは現況では土手状の高まりは認められず、曲輪Ⅱ造成土が確認できた。遺物は12世紀中頃から後半の中国産白磁・陶器、土師器片が出土した。

No.24 トレンチ出土遺物（Fig. 56）

1は表土、2は2層より出土した遺物である。

碗（1）　白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、残存器高2.5cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

耳壺（2）　中国陶器で肩部に付いた耳が欠損している。残存器高4.6cmを測る。調整は内面に回転ナデ調整を施す。外面に沈線文を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が暗茶褐色を呈する。Fig79－29と同一個体の可能性がある。



1　灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。地山ブロック土・炭化物を多く含む。時期不明の造成土、または近現代の流れ込みか？
2a　灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。近現代の造成土か？
2b　同　上。
3　にぶい褐色土（7.5YR5/4）。ややしまりあり。粘性なし。炭化物を含む。1・2層に比べて地山ブロック土が少なく、粒子が細かい。
　1・2層に先行してほぼ同時期に埋没した可能性と、城またはそれ以前の曲輪造成土の可能性がある。
4　褐色土（7.5YR4/4）。しまりあり。粘性なし。橙色ブロック土（土塁の崩落土か？）が混入する。SD14埋土。
5a　にぶい褐色土（7.5YR5/3）。しまりなし。粘性なし。小穴か？
5b　にぶい褐色土（7.5YR5/3）。しまりなし。粘性なし。橙色ブロック土を含む。小穴か？
6　浅黄橙色土（7.5YR8/4）。ややしまりあり。粘性なし。褐灰色ブロック土と花崗岩風化礫を多く含む。土塁または曲輪造成土。
7　6層と同色。しまりあり。粘性なし。土塁または曲輪造成土。
8　明褐色土（7.5YR5/6）。しまりあり。粘性なし。土塁または曲輪造成土。
9　褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。やや粘性あり。炭化物を含む。土塁または曲輪造成土。
10　橙色土（7.5YR7/6）。ややしまりなし。粘性なし。花崗岩風化礫層。地山。

0　2m

Fig. 55　No. 24 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

Fig. 56　No. 24 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

No. 25 トレンチ（Fig. 57）

No.25 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央南側の F10 グリッドに位置する。曲輪Ⅱ南側の縁辺部の溝状遺構と土塁または曲輪Ⅱ造成土の土層確認のため、長さ 3.8m ×幅 0.3m のトレンチを設定して掘削を行った。調査の結果、SD16 と土塁または曲輪Ⅱ造成土と思われる遺構を確認した。検出された溝状遺構は曲輪Ⅱ縁辺端部から北へ 1.2m 程内側を東西方向に走行しており、この SD16 の南側肩部から曲輪Ⅱ縁辺部の 1.2m 幅にはわずかに土手状の高まりが認められ、土塁が存在していた可能性がある。SD16 の規模は上端 2.2m、深さ 0.2m で、断面形状はかなり開き気味の逆台形状を呈する。トレンチ内の層序は 5 層に分層され、1 ～ 3 層は SD16 の埋土、4 層は曲輪Ⅱ造成土、5 層は土塁（曲輪Ⅱ造成土の可能性もある）である。遺物は出土していない。

No. 26 トレンチ（Fig. 58）

No.26 トレンチは曲輪Ⅱ（副郭部）中央南側の E・F10 グリッドに位置する。曲輪Ⅱ南側の縁辺部の溝状遺構と土塁または造成土の土層確認のため、長さ 4.7m ×幅 1.2m のトレンチを設定して掘削を行った。調査では No.25 トレンチと同様に SD16 と土塁または曲輪造成土と思われる遺構を確認し、さらに溝状遺構より下層の造成土の確認のため、安全を考慮して 1.2m までを限度に掘削を行ったが、地山面を検出できなかった。検出された SD16 は曲輪Ⅱ縁辺端部から北へ 1.4m 程内側を東西方向に走行しており、SD16 の規模は上端 2.5m、深さ 0.15m で、断面形状は台形状を呈する。SD16 の南側肩部から曲輪Ⅱ縁辺端部は土手状の高まりがあったと想定されるが、現状では確認できない。また、曲輪造成については、トレンチ北側にて階段状に地山を切土した痕跡が認められた。トレンチ内の層序は 9 層に分層され、1a 層は撹乱、1b 層は表土、2 層は SD16 の埋土、3 ～ 9 層は曲輪Ⅱ造成土である。遺物は SD16 から 12 世紀後半の中国産青磁皿、土師質土器の香炉などが出土した。

No. 26 トレンチ出土遺物図（Fig. 59）

1・2 は 2 層より出土した遺物である。

皿（1） 龍泉窯系青磁皿Ⅰ - 2c 類で、復元口径 9.8cm、器高 2.4cm、復元底径 3.4cm を測る。調整は外面が回転ヘラケズリ調整を施す。内面に櫛目文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。色調は釉が緑色、露台部が茶灰色を呈する。

香炉（2） 土師質土器で、復元口径 10.4cm、残存器高 5.9cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整後にナ

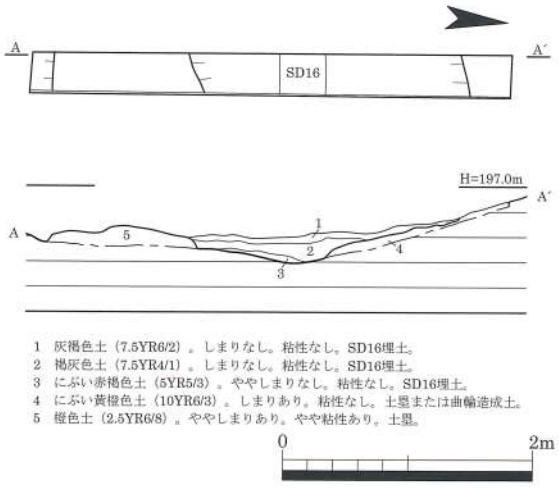
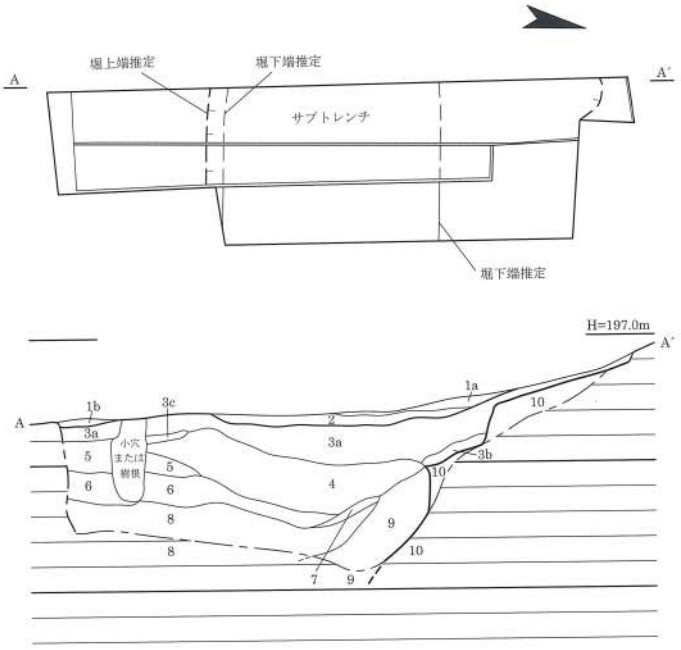


Fig. 57 No. 25 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

デ調整を施す。内面にはナデ調整の他に指頭圧痕が認められる。色調は外面が橙色、淡橙茶色、内面が灰黄色を呈する。底部に2ヶ所の脚の接合痕が認められ、接合痕の配置状況から脚が3本であると考えられる。



1a 灰褐色土（7.5YR6/2）。しまりなし。粘性なし。撹乱。
1b 灰褐色土（7.5YR4/2）。しまりなし。粘性なし。表土。
2 灰褐色土（7.5YR4/2）。しまりなし。粘性なし。SD16埋土。
3a にぶい褐色土（7.5YR5/3）。ややしまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
3b 褐灰色土。（7.5YR4/1）。しまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
3c 同 上。
4 にぶい褐色土（7.5YR5/4）。ややしまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
5 にぶい赤褐色土（5YR5/4）。ややしまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
6 にぶい赤褐色土（5YR5/3）。ややしまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
7 褐灰色土（5YR6/1）。ややしまりあり。粘性なし。曲輪造成土。
8 褐灰色土（5YR4/1）。ややしまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
9 黒褐色土（5YR3/1）。ややしまりなし。粘性なし。曲輪造成土。
10 橙色土（5YR6/6）。ややしまりあり。粘性なし。地山。

0 2m

Fig. 58 No. 26 トレンチ平面・土層断面実測図（1/60）

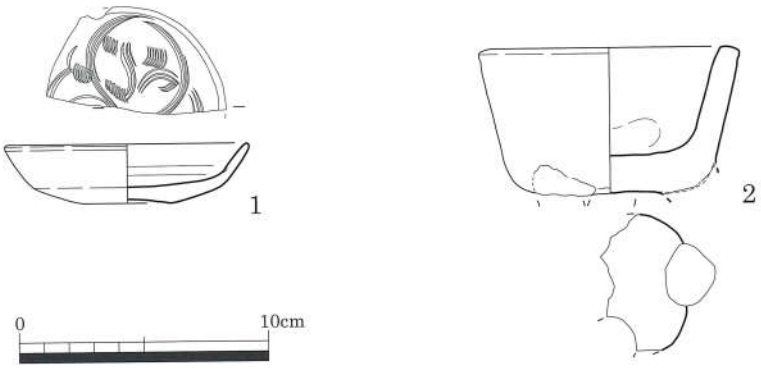


Fig. 59 No. 26 トレンチ出土遺物実測図（1/3）

2．遺構と出土遺物

SA2（Fig.60）

SA2・8・10は曲輪Ⅱ（副郭部）南西側に構築された柵列と考えられ、総延長は約30mである。これらは本来一体となって機能するものと考えられるが、SA8とSA2・10の間に堀切SD5で区画されていることから、ここではSA8とSA2・10に分けて報告を行う。またSA10に関しては未掘のため平面の検出状況での記載となる。SA2・10は曲輪Ⅱ南西側のE8～10グリッドで検出した。柱穴12基からなる東西方向の柵列である。SA10は現代造成土により削平を受けて辛うじて残存している状況であった。検出面の標高はSA2が197.3m前後で、SA10が196.2～197.2mである。他の主要遺構との切り合い関係はない。柵列の全長は15.7m、SA2の柱間距離は0.7～1.0m、SA10が1.8mから1.9m、SA2とSA10の柱間は2mである。主軸方位はSA10のP1～4まではN 82°10 'Eで、SA10のP5からSA2のP7にかけて主軸方向をN 82°15 'Eへと転じ、地形に合わせて柵列を構築している。柱掘方の平面形状はSA2・10ともに円形または楕円形を呈し、柱掘方径は0.15～0.3mで、柱痕の残るSA2のP2、P5、P6の柱痕径は0.15～0.2mを測る。掘削を行ったSA2の深さは0.05～0.4mを測り、断面形状は逆台形状を呈し、柱掘方埋土は灰褐色土または褐灰色土、柱痕は褐灰色土を基調とし、炭化物を多く含む。遺物はSA2・8から土師器片が出土し、SA2のP4の柱掘方埋土からは13世紀中頃から後半にかけての土師器坏で山城機能時以前の遺物である。また未掘のSA10の埋土は褐灰色土を基調としている。

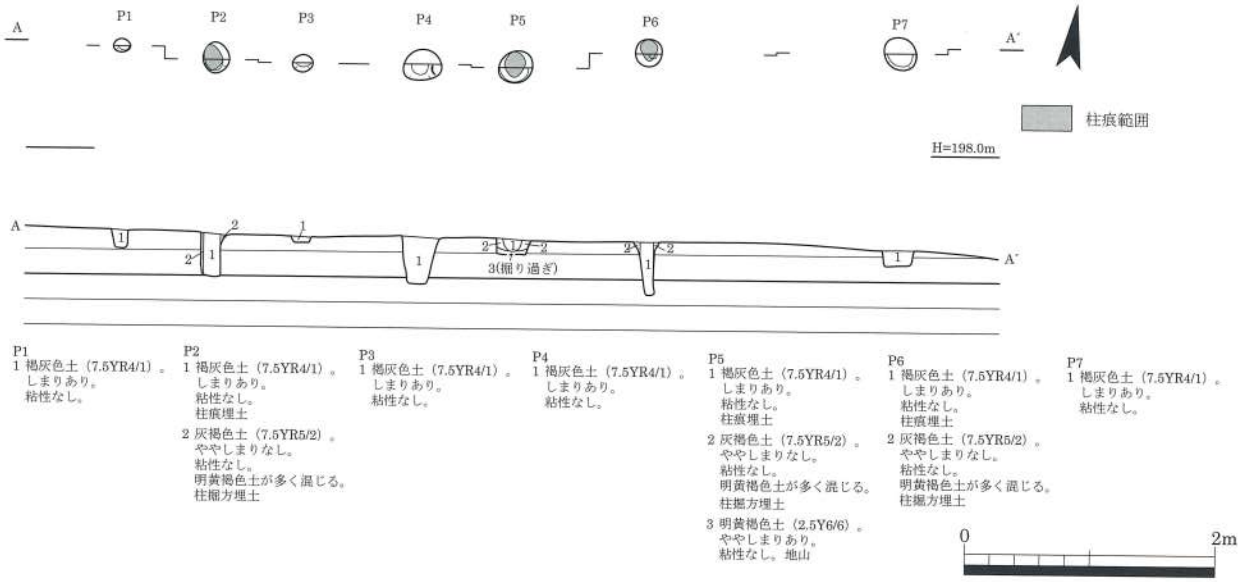


Fig. 60　SA2 平面・土層断面実測図（1/60）

SA2 出土遺物（Fig. 61）

1はP4の1層より出土した遺物である。

坏（1）　土師器で、復元口径12.4cm、器高2.5cm、復元底径9.1cmを測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色である。

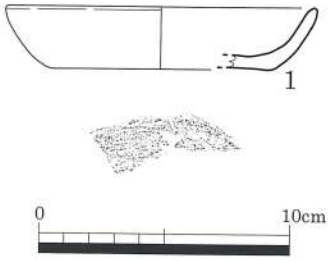


Fig. 61　SA2 出土遺物図実測図（1/3）

SA8（Fig.62）

SA8は曲輪Ⅱ（副郭部）南西側のE・F7・8グリッドで検出した。柱穴7基からなる東西方向の柵列である。検

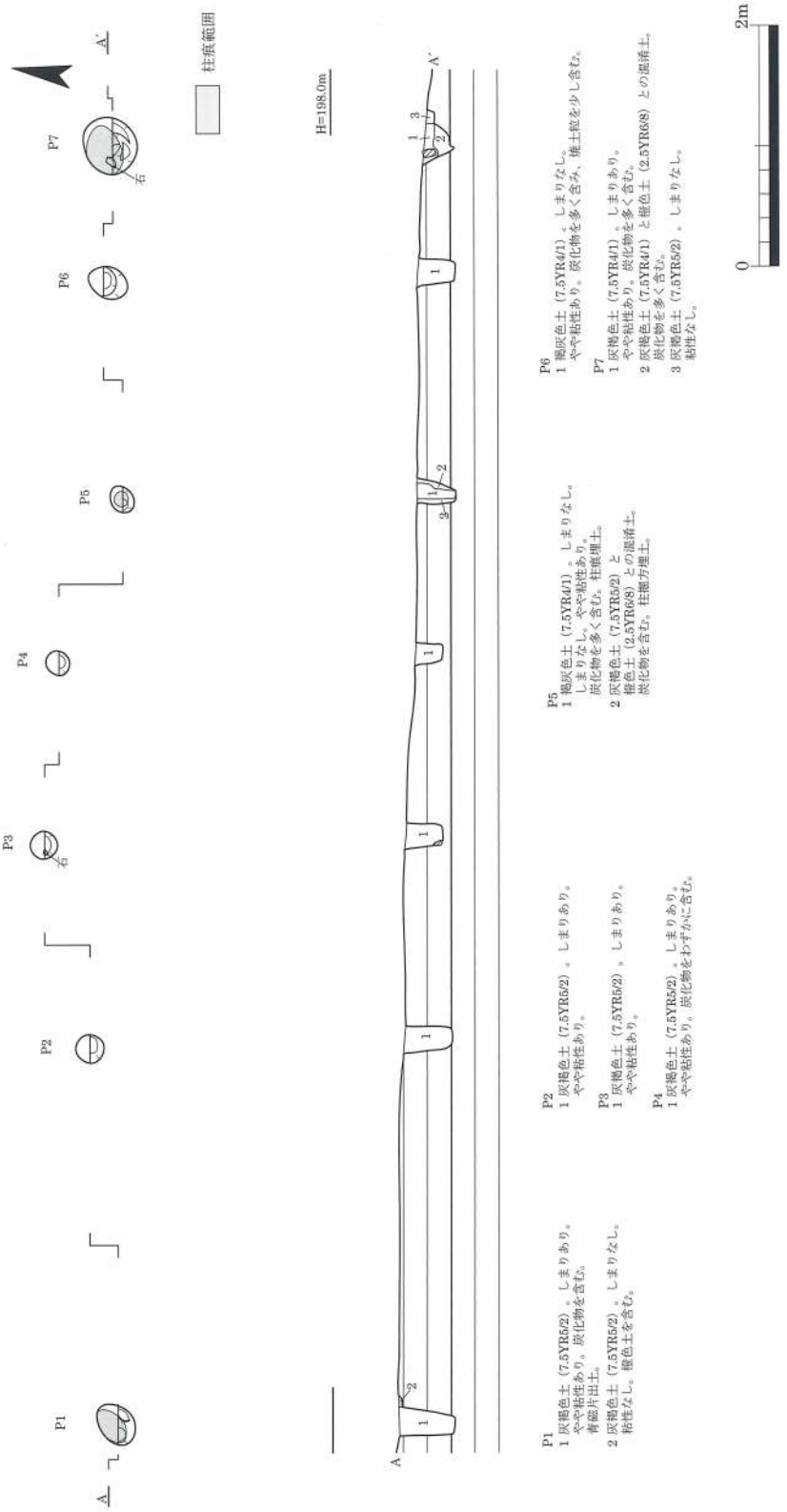


Fig. 62　SA8 平面・土層断面実測図（1/60）

出面の標高は197.2～197.4mである。他の主要遺構との切り合い関係はない。柵列の全長は10.6m、柱間距離は1.1～3.2mを測る。主軸方位はN 82°0 'Eをとる。柱掘方の平面形状は円形または楕円形を呈し、柱掘方径は0.2～0.5mで、P5の柱痕径は0.13mを測る。深さは0.2～0.5mを測り、断面形状は逆台形状を呈する。柱掘方埋土は灰褐色土、柱痕は褐灰色土を基調とし、炭化物を多く含んでいる。遺物は出土していない。

SB6（Fig.63）

SB6は曲輪Ⅱ（副郭部）中央のD・E10グリッドで検出した。検出面の標高は197.4～197.7mである。他の主要遺構との切り合い関係はない。西面に庇を有する南北棟建物で、主軸をN 0°20 'WからN 2°20 'Wにとる。身舎の規模は梁行1間で2.2m、桁行4間で柱間距離2.0～2.2m、全長8.5mを測るが、桁行東側の柱穴2基が喪失している。身舎の床面積は18.7㎡(約5.65坪)を測る。庇は梁行1間で1.5～1.7m、桁行4間で柱間距離1.9～2.1m、全長8.2mを測るが、柱穴1基が喪失している。身舎と庇を合わせた床面積は31.5㎡（約9.52坪）である。柱穴の平面形状は円形またはやや歪な長楕円形を呈し、柱穴掘方は長軸径0.4～0.7m、柱痕は柱穴7基に確認され身舎・庇ともに径0.2～0.3mを測る。遺構埋土は柱掘方埋土が褐灰色土を基調とし、柱痕埋土が黒褐色土を基調とする。掘削は身舎の東側桁1列のみ行い、深さは0.25～0.6mを測り、断面形状は逆台形を呈する。遺物はP3より碁石状石製品、壁土が出土している。またP1・3・4からは焼土塊が出土している。

SB6 出土遺物（Fig.64）

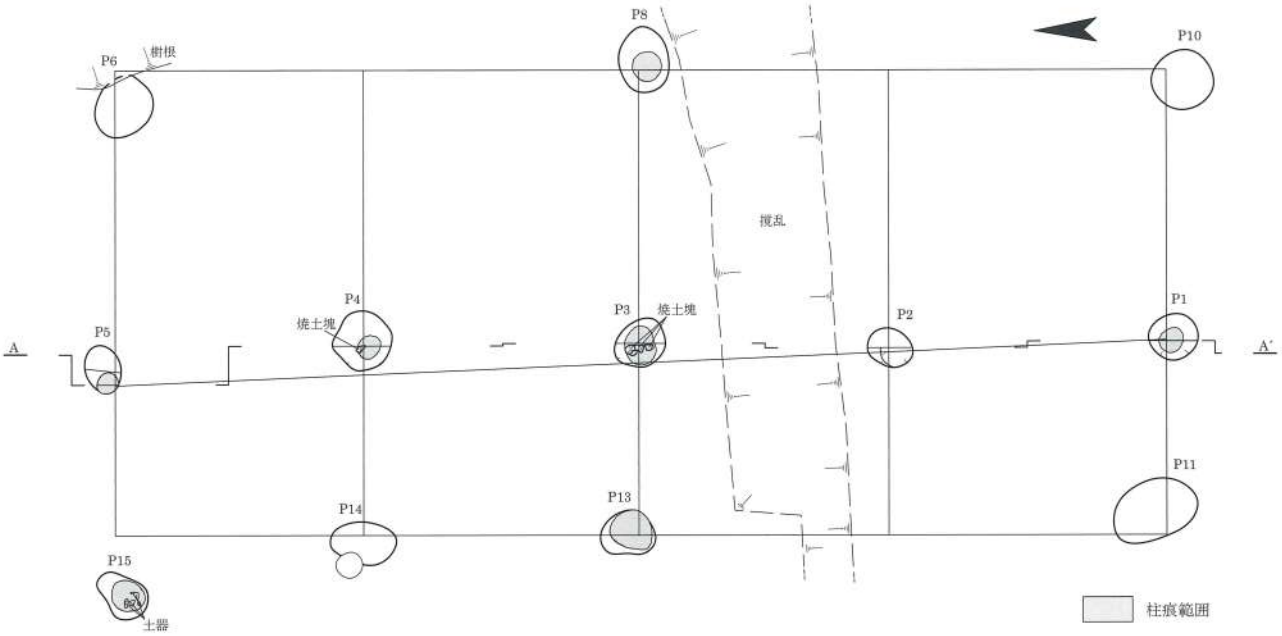
1・2はP3の埋土一括の遺物である。

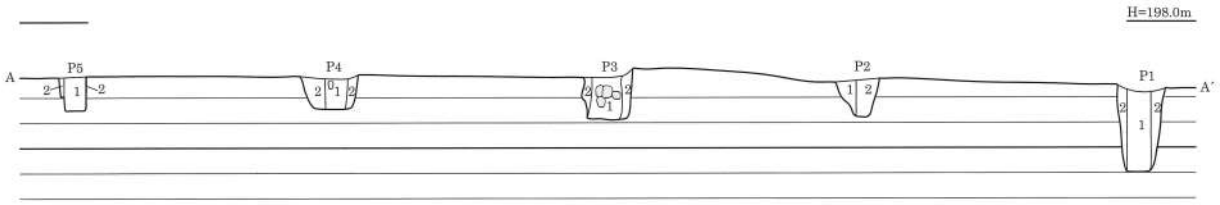
碁石状石製品（1）　石製品で、長さ1.9cm、幅1.6cm、厚さ0.8cm、重さ4.0gを測る。石材は黒色粘板岩である。本遺跡から同様のものが他に3点出土しており、形状から碁石として使用されたと思われる。

壁土（2）　土製品で、細大長6.4cm、最大幅3.8cm、最大厚3.4cmを測る。表面が茶褐色で胎土がにぶい黄橙色を呈する。

SB7（Fig.65）

SB7は曲輪Ⅱ（副郭部）中央のD・E10グリッドで検出した。検出面の標高は197.5～197.6mである。他の主要遺構との切り合い関係はない。西面に庇を有する南北棟建物で、主軸をN 0°15 'EからN 0°40 'Wにとる。身舎の規模は梁行1間で2.2m、桁行4間で柱間距離1.9～2.2m、全長5.9mを測るが、桁行東側の柱穴1基が喪失している。身舎の床面積は12.98㎡(約3.92坪)を測る。庇は梁行1間で1.4～1.7m、桁行4間で柱間距離1.8～1.9m、全長5.6mを測る。身舎と庇を合わせた床面積は21.6㎡（約6.54坪）である。柱穴の平面形状は円形またはやや歪な長楕円形を呈し、柱穴掘方は身舎の長軸径0.4～0.7m、庇の長軸径0.3～0.5m、柱痕は柱穴7基に確認され身舎・庇ともに径0.2～0.3mを測る。遺構埋土は柱掘方埋土が褐灰色土を基調とし、柱痕埋土が黒褐色土を基調とする。掘削は身舎の東側桁1列のみ行い、深さは0.25～0.6mを測り、断面形状は逆台形を呈する。遺物はP1からは焼土塊、P2からは11世紀後半から12世紀にかけての土師器坏、P3からは壁土、P4からは12世紀中頃から12世紀後半にかけての中国産青磁碗、P7からは12世紀から13世紀にかけての土師器坏、P11からは12世紀前半から12世紀中頃にかけての土師器坏が出土している。





P5
1 黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。
粘性なし。柱痕埋土。
2 褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりあり。
粘性なし。柱掘方埋土。

P4
1 黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。
粘性なし。炭化物・焼土塊を含む。
柱痕埋土。
2 褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりあり。
粘性なし。炭化物・焼土塊を含む。
柱掘方埋土。

P3
1 褐灰色土（10YR4/1）。しまりなし。
粘性なし。炭化物・焼土塊を多く含む。
柱痕埋土。
2 褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりなし。
粘性なし。浅黄色ブロック土。炭化物を含む。
柱掘方埋土。

P2
1 黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。
粘性なし。柱痕埋土。
2 灰黄褐色土（10YR6/2）。ややしまりあり。
粘性なし。柱掘方埋土。

P1
1 黒褐色土（2.5Y3/1）。しまりなし。
粘性なし。炭化物・焼土塊を含む。
柱痕埋土。
2 褐灰色土（7.5YR4/1）。ややしまりあり。
粘性なし。柱掘方埋土。

0 2m

Fig. 63　SB6 平面・土層断面実測図（1/60）

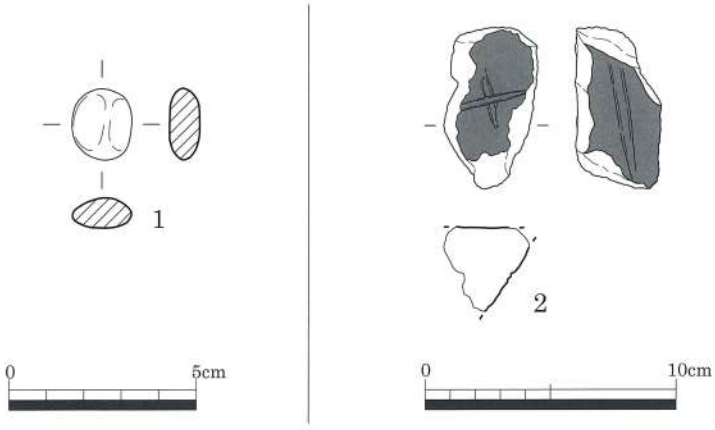


Fig. 64　SB6 出土遺物実測図（1/2・1/3）

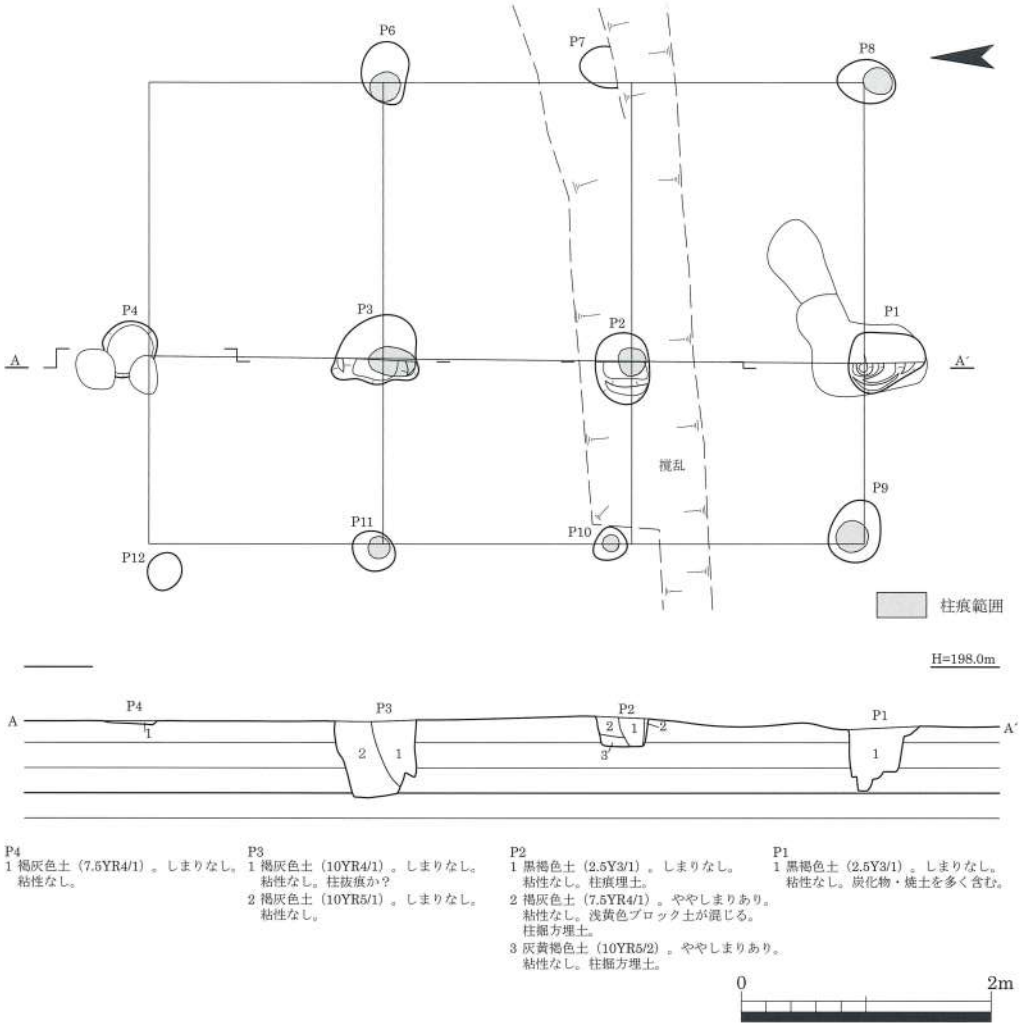


Fig. 65　SB7 平面・土層断面実測図（1/60）

SB7 出土遺物（Fig.66）

2 は P2 の 1 層、5 は P3 の埋土一括、1 は P4 の埋土一括、4 は P7 の 1 層、3 は P11 の 1 層より出土した遺物である。

碗（1）　龍泉窯系青磁椀 I -6a 類で、残存器高 2.1cm を測る。外面が片彫蓮弁文、櫛目文、沈線、内面が櫛目文、片彫文を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。

坏（2）　土師器で、残存器高 2.4cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色である。

坏（3）　土師器で、復元口径 14.9cm、残存器高 2.4cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整後一部ナデ、内面は回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色である。

坏（4）　土師器で、残存器高 1.9cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい橙色である。

壁土（5）　土製品で、最大長 4.4cm、最大幅 3.4cm、最大厚 3.8cm を測る。表面が黒色で胎土が橙茶色を呈する。

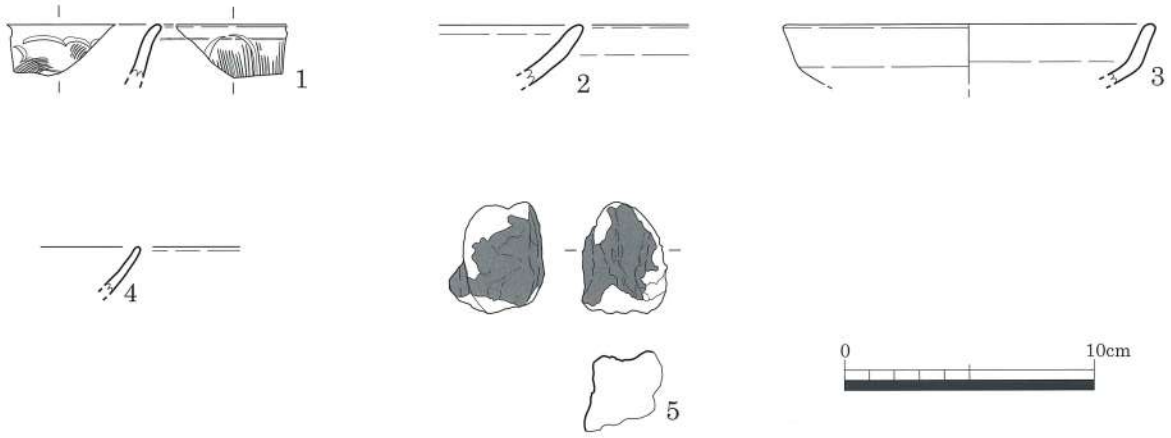


Fig. 66　SB7 出土遺物実測図（1/3）

SB9（Fig.67）

SB9 は曲輪Ⅱ（副郭部）中央の D9・10、E10 グリッドで検出した。検出面の標高は 197.5 ～ 197.7m である。他の主要遺構との切り合い関係はない。大型の円形建物と想定され、P1 を中心に半径 3.4m の円周上に 20 基の柱穴が確認された。各柱穴の平面形状は円形またはやや歪な長楕円形を呈し、長軸径は 0.2 ～ 0.8m を測る。柱痕は P14・15 の 2 基に確認されたが長楕円形を呈しており、抜き取り痕の可能性もある。柱間幅はおよそ 0.4 ～ 2m でかなりのバラつきが認められた。床面積は 36.2㎡（約 10. 9 坪）である。遺構埋土は褐灰色土を基調とする。遺物は未掘のため確認できていない。

SD4（Fig.68）

SD4 は曲輪Ⅱ（副郭部）中央よりやや東側の C ～ E11 グリッドで検出した。検出面の標高は 196.2 ～ 196.8m である。切り合い関係は SX13 を切ると思われるが、未掘のため不明である。遺構は南北方向に走行し、遺構の規模は残存長 15.8 m、幅 1.7 ～ 2.0m、深さは 0.1m を測る。遺構の断面形状は逆台形を呈する。遺構埋土は灰褐色土を基調とする。遺物は中国産青磁が出土した。

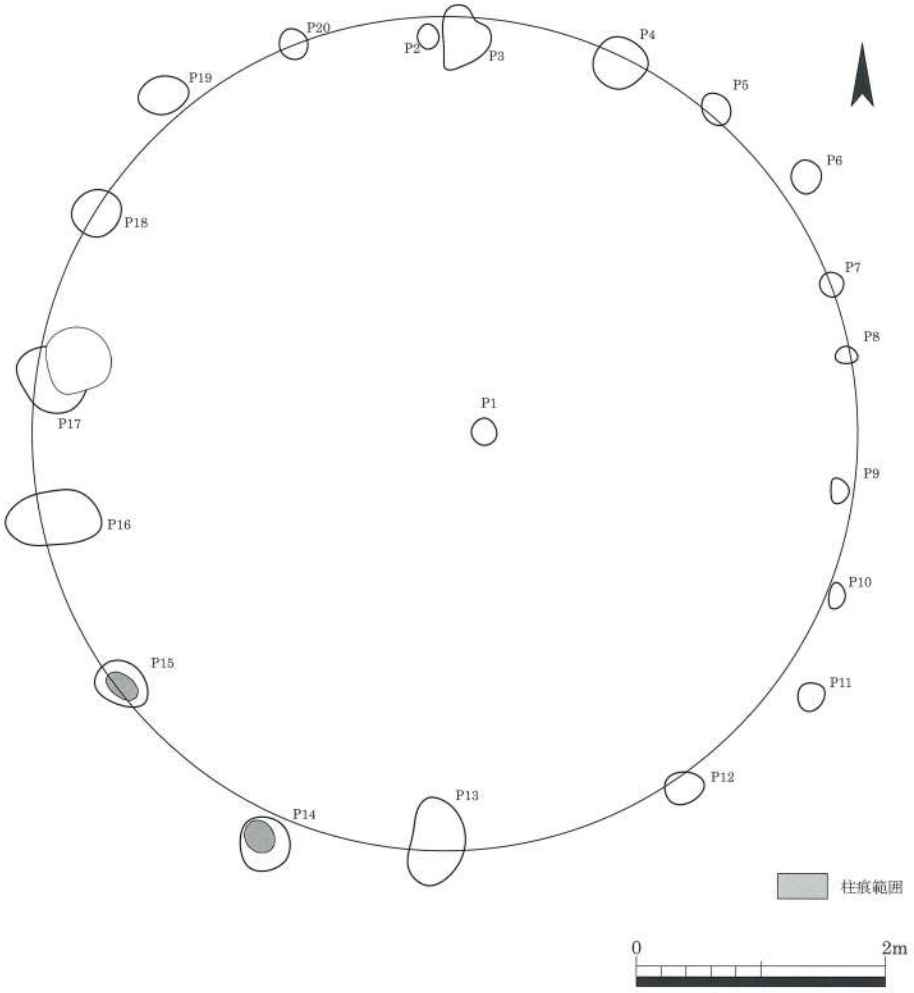


Fig. 67　SB9 平面実測図（1/60）

SD4 出土遺物（Fig. 69）

1～3は1層より出土した遺物である。

皿（1）　龍泉窯系青磁皿Ⅰ-1b類で、復元口径 10.0cm、残存器高 1.8cm を測る。内面に片彫文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。

皿（2）　龍泉窯系青磁皿Ⅰ類で、復元口径 12.8cm、残存器高 2.1cm を測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。

耳壺（3）　中国陶器耳壺Ⅵ類と思われ、残存器高 2.1cm 測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰緑色を呈する。

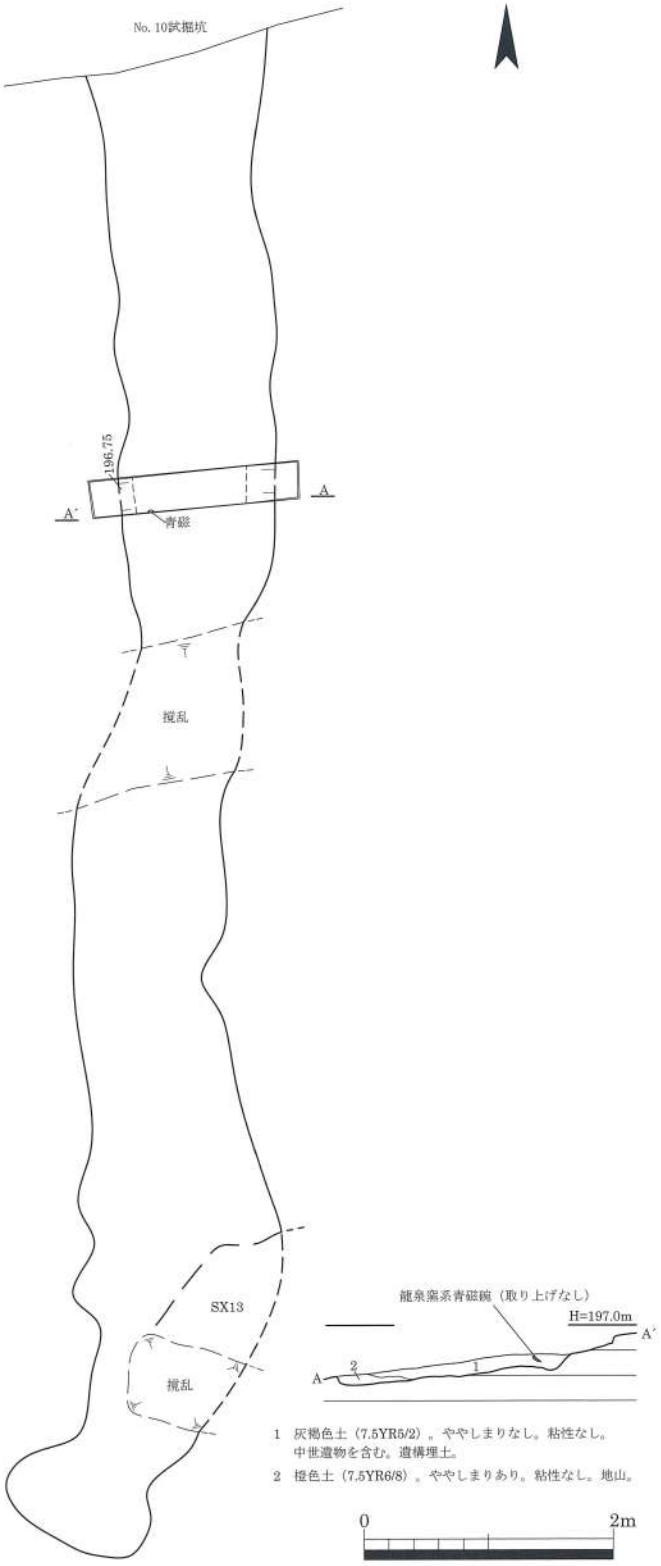


Fig. 68　SD4 平面・土層断面実測図（1/60）

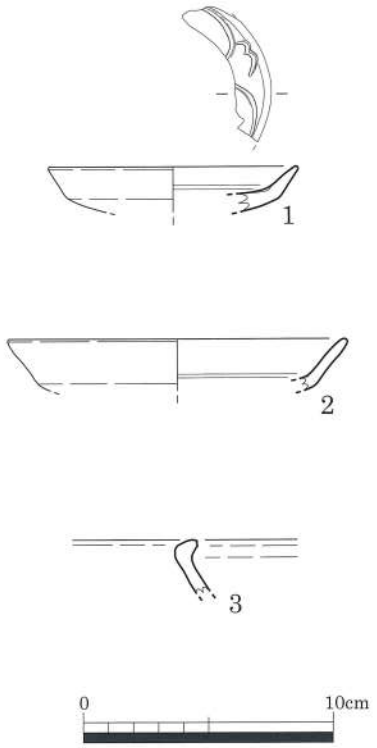
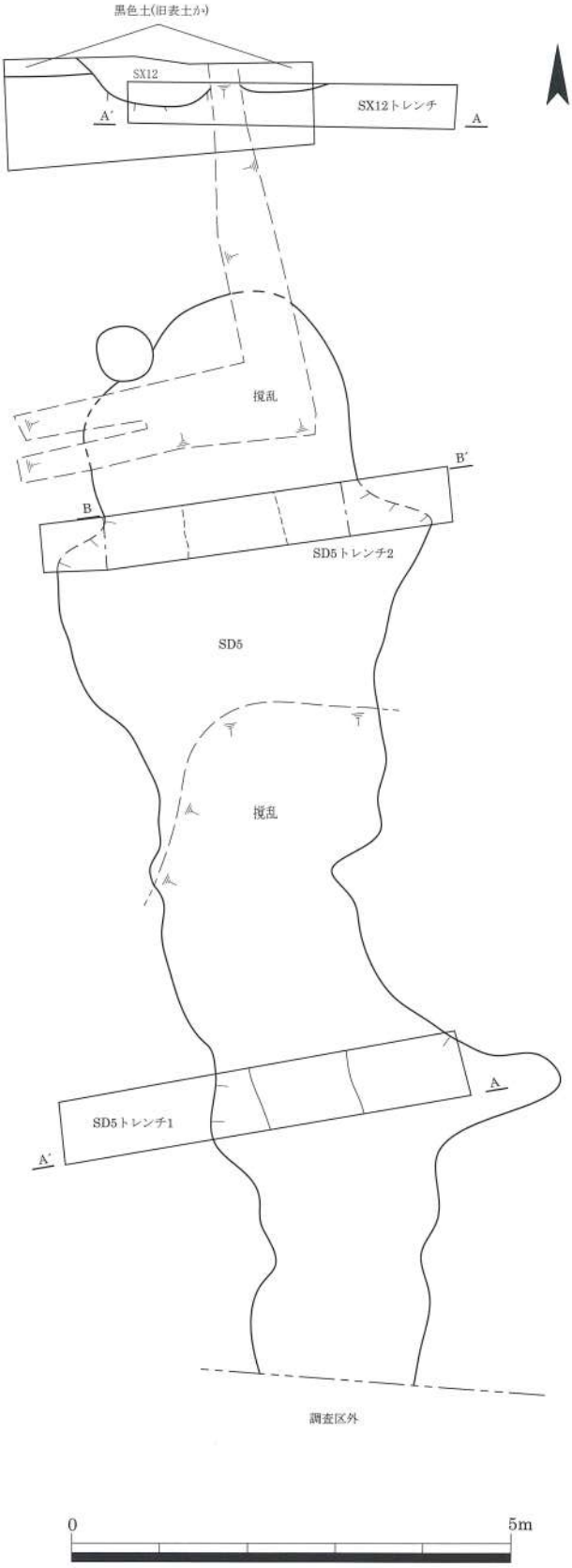
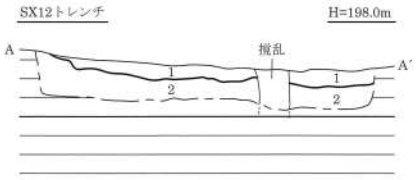


Fig. 69　SD4 出土遺物実測図（1/3）

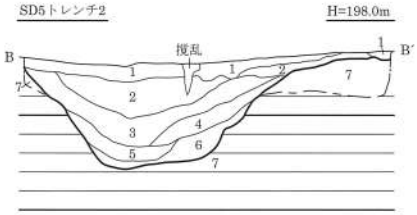
SD5・SX12（Fig.70）

SD5 は曲輪 II（副郭部）西側の E・F8 グリッドで検出した。検出面の標高は 196.3 ～ 197.5m である。他の主要遺構との切り合い関係はない。遺構は南北方向に走行しており、規模は残存長 12.3 m、残存幅 1.8 ～ 4.2m、残存する深さは 1.1m を測る。遺構の断面形状は逆台形を呈する。遺構埋土は褐灰色土または黒褐色土を基調とする。遺物は中国産白磁・青磁・青白磁・陶器、土師器坏が出土した。SX12 は SD5 トレンチ 2 から北方約 4m 地点に設置した。東西トレンチ内の北側で検出した遺構である。遺構の大半が調査区外へ展開しており、遺構の平面形は不明であるが、北壁面で幅 2m 以上を測りやや大型の遺構であると考えられる。SD5 の上端北端と SX12 の上端南端の距離は、2.2m を測る。

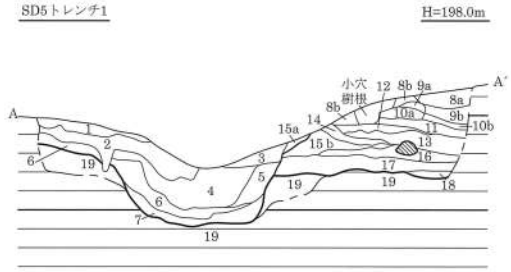




1 褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりあり。粘性なし。表土。
2 橙色土（5YR6/8）。ややしまりあり。粘性なし。地山。



1 褐灰色土（7.5YR5/1）。しまりあり。粘性なし。近現代の造成土。
2 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。ややしまりあり。粘性なし。炭化物・土器粒を含む。堀埋土。
3 黒褐色土（7.5YR3/1）。ややしまりあり。粘性なし。炭化物・土器粒を含む。堀埋土。
4 黒褐色土（7.5YR3/1）。ややしまりあり。粘性なし。3層より粒子が細かい。
炭化物・土器粒を含む。堀埋土。
5 黒褐色土（7.5YR3/1）。ややしまりなし。粘性なし。堀埋土。
6 黒褐色土（7.5YR3/1）。しまりなし。粘性なし。堀埋土。
7 橙色土（5YR6/8）。ややしまりなし。粘性なし。地山。



1 にぶい橙色土（7.5YR6/4）。ややしまりあり。粘性なし。近現代の造成土。
2 黒褐色土（7.5YR3/1）。しまりなし。粘性なし。近現代の造成土。
3 灰褐色土（7.5YR5/2）。しまりなし。粘性なし。堀埋土。
4 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。しまりなし。粘性なし。堀埋土。
5 褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。粘性なし。堀埋土。
6 黒褐色土（7.5YR3/1)。しまりなし。粘性なし。堀埋土。
7 褐灰色土（7.5YR4/1）。しまりなし。粘性なし。堀埋土。
8a 明赤褐色土（2.5YR5/6）。ややしまりあり。粘性なし。造成土。
8b にぶい赤褐色土（5YR5/3）。ややしまりあり。粘性なし。造成土。
9a 褐灰色土（5YR5/1）。ややしまりあり。粘性なし。造成土。
9b 灰褐色土（5YR6/2）。ややしまりあり。粘性なし。造成土。
10a 橙色土（2.5YR6/6）。ややしまりあり。粘性なし。炭化物を僅かに含む。造成土。
10b にぶい橙色土（2.5YR6/4）。ややしまりなし。粘性なし。褐色土が混じる。造成土。
11 褐灰色土（5YR5/1）。ややしまりなし。粘性なし。橙色土が混じる。造成土。
12 にぶい橙色土（5YR6/4）。ややしまりなし。粘性なし。造成土。
13 灰赤色土（2.5YR5/2）。ややしまりなし。やや粘性あり。造成土。
14 褐灰色土（5YR5/1）。ややしまりなし。粘性なし。橙色土が混じる。造成土。
15a 灰褐色土（7.5YR6/2）。しまりなし。粘性なし。造成土。
15b にぶい橙色土（2.5YR6/4）。ややしまりなし。粘性なし。造成土。
16 褐灰色土（10YR4/1）。ややしまりなし。粘性なし。造成土。
17 灰褐色土（7.5YR5/2）。ややしまりなし。粘性なし。造成土。
18 にぶい褐色土（7.5YR5/3）。ややしまりなし。粘性なし。造成土。
19 赤橙色土（10R6/6）。ややしまりなし。やや粘性あり。地山。

Fig. 70 SD5・SX12 平面・土層断面実測図（1/80）

SD5 出土遺物（Fig.71）

1・2は埋土一括の遺物である。

甕（1） 中国陶器甕Ⅲ類で、残存器高 4.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整後ナデ調整、内面は回転ナデ調整後ヨコナデ調整を施す。また内面には同心円状の当て具痕が認められる。色調は外面が褐色、内面が暗茶褐色を呈する。

坏（2） 土師器で、残存器高 2.0cm を測る。調整は内外面ともに摩耗のため不明である。色調は内外面ともに、にぶい橙色である。

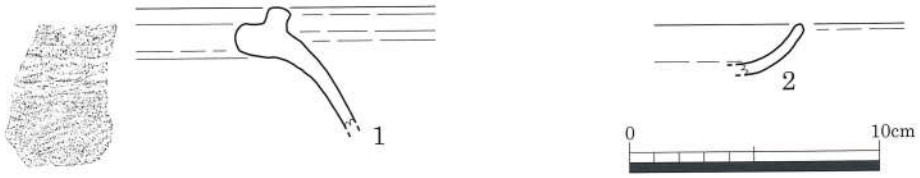


Fig. 71 SD5 出土遺物実測図（1/3）

SK1（Fig.72）

SK1は曲輪Ⅰ（主郭部）西側直下のNo.1トレンチ内、F1グリッドで検出した。検出面の標高は194.5m前後である。他の主要遺構との切り合い関係はない。遺構の規模は長軸 2.15m、短軸 0.85m、深さは中心部を 0.1m 程度掘り下げた段階で、遺物が多量に出土した土坑状の遺構である。今回の調査では完掘していないが、深さは 0.08m 以上を測る。平面形状は不定形な長楕円形を呈する。遺構埋土は灰褐色土を基調とし、埋土中には焼土や炭化物を多く含み、土坑の周辺からも炭化物、焼土塊を確認した。遺物は中国産白磁碗・青磁碗、鉄釘が出土している。

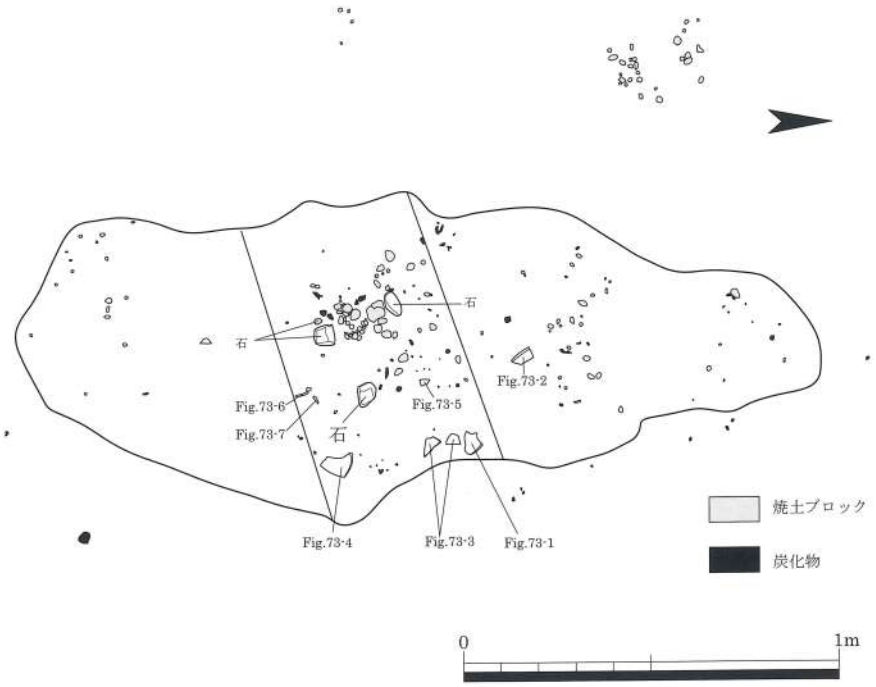


Fig. 72 SK1 平面実測図（1/20）

SK1 出土遺物（Fig.73）

1～7は埋土一括の遺物である。1～3は白磁碗で、口縁部の形態や釉調などの特徴、出土地点の位置状況から同一個体の可能性が考えられるが、接合関係が認められなかったため、3点とも図化した。

碗（1）　白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、復元口径16.6cm、残存器高4.7cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

碗（2）　白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、残存器高4.0cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

碗（3）　白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3類で、残存器高2.4cmを測る。内面に沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

碗（4）　龍泉窯系青磁椀Ⅰ－1類で、復元口径16.0cm、残存器高5.2cmを測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

皿（5）　龍泉窯系×同安窯系青磁で、残存器高1.5cmを測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

鉄釘（6）　鉄製品で、残存長3.7cm、幅0.5cm、重量4.0g、頭部径0.7cm×0.7cmを測る。頭部、軸断面がともに方形を呈する。頭部は薄く叩き折り曲げたと思われる。

鉄釘（7）　鉄製品で、残存長2.3cm、幅0.4cm、重量1.5gを測る。頭部は欠損して形状は不明である。軸断面は方形を呈する。

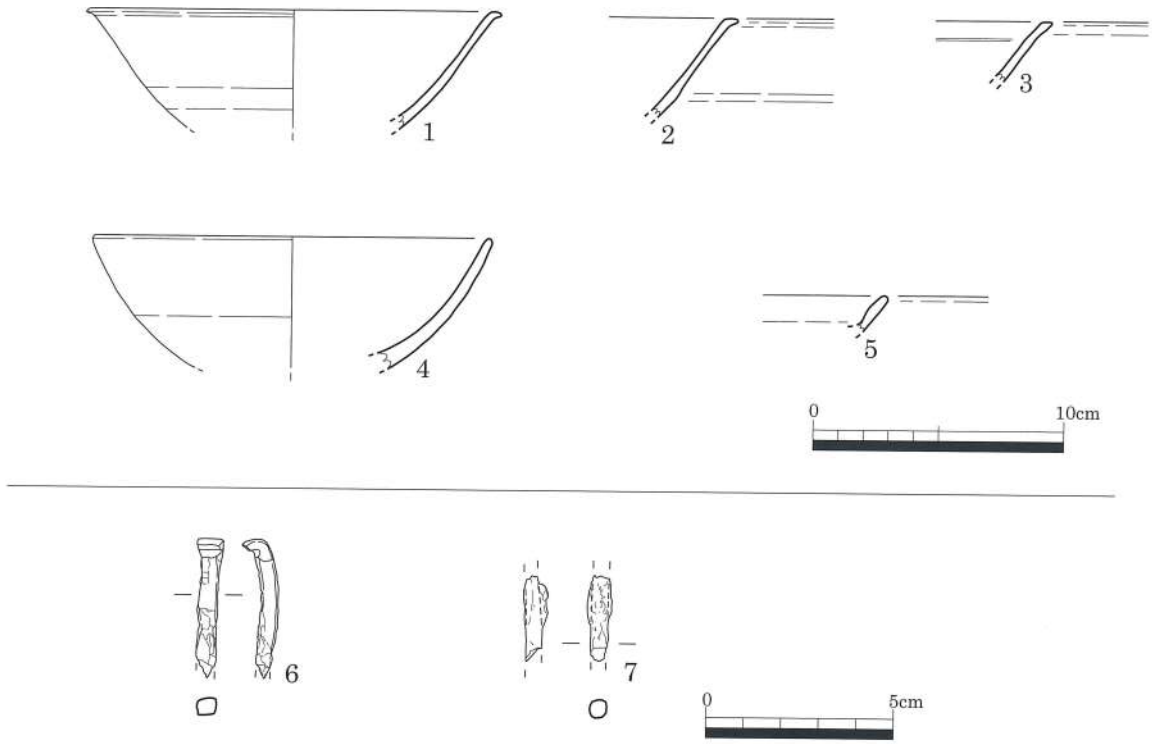


Fig. 73　SK1 出土遺物実測図（1/3・1/2）

SK3（Fig.74）

SK3は曲輪Ⅱ（副郭部）南西側のE8グリッドで検出した。検出面の標高は197.3m前後である。他の主要遺構との切り合い関係はない。遺構の規模は長軸0.8m、短軸0.65m、深さは0.06mを測る。平面形状は長楕円形を呈する。遺構埋土は灰褐色土を基調とし、埋土中には炭化物を多く含んでいる。遺物は出土していない。

その他小穴からの出土遺物

P2はD10グリッド、P3はC10グリッド、P4はD11グリッドより検出されたが、平面図・土層断面図は未掘であるため掲載していない。

P2出土遺物（Fig. 75）

1は埋土一括の遺物である。

碗×小碗（1）　同安窯系青磁で、残存器高2.7cmを測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

P3出土遺物（Fig. 76）

1は埋土一括の遺物である。

坏×皿（1）　青白磁で、残存器高1.5cmを測る。内面に印花文を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が青白色を呈する。

P4出土遺物（Fig. 77）

1は埋土一括の遺物である。

皿（1）　同安窯系青磁皿Ⅰ類で、復元口径10.9cm、残存器高1.2cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が緑色を呈する。

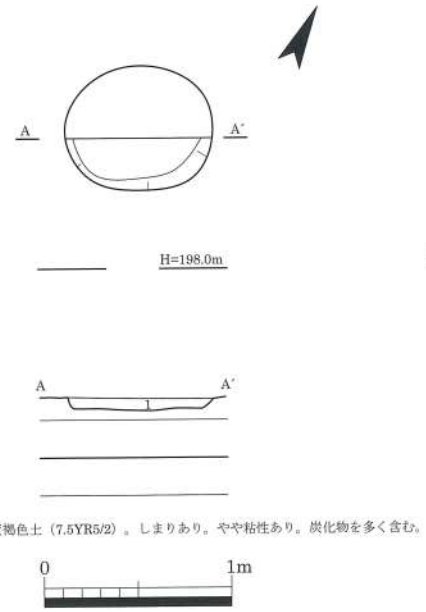


Fig. 74　SK3平面・土層断面実測図（1/40）

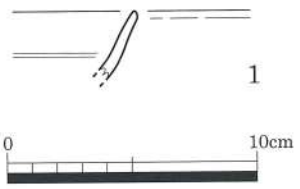


Fig. 75　P2出土遺物実測図（1/3）

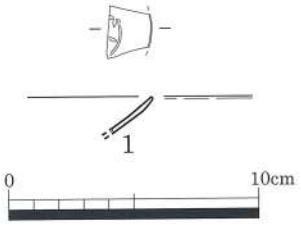


Fig. 76　P3出土遺物実測図（1/3）

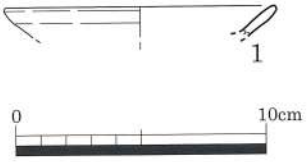


Fig. 77　P4出土遺物実測図（1/3）

3．その他の出土遺物（Fig. 78 ～ 82）

本調査でトレンチ内や遺構以外からは以下の遺物が出土した。

表土出土遺物（Fig78 - 1 ～ 12）

1 ～ 12 は曲輪Ⅱ（副郭部）の表土より出土した遺物である。

碗（1） 白磁椀Ⅷ類で、残存器高 3.0cm、復元底径 6.8cm を測る。調整は外面が回転ヘラケズリ調整を施す。見込み部と体部の境に段を有する。内外面ともに施釉され、見込み部を環状に掻き取っている。色調は釉が灰白色、露胎土が淡黄灰色を呈する。

皿（2） 白磁皿Ⅷ - 1b 類で、復元口径 10.0cm、残存器高 2.2cm、復元底径 3.8cm を測る。調整は外面が回転ヘラケズリ調整を施す。内面にヘラ描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。色調は釉が黄白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

水注（3） 白磁で、復元口径 11.6cm、残存器高 4.5cm を測る。内外面ともに施釉され、色調は釉が灰白色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

碗（4） 龍泉窯系青磁椀Ⅰ - 6a 類で、復元口径 15.4cm、残存器高 3.8cm を測る。外面が片彫蓮弁文、櫛目文、内面に片彫文を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。

坏（5） 龍泉窯系青磁坏Ⅲ類と考えられ、残存高 1.6cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。口縁端部に輪花を施す。

水注×壺（6） 中国陶器で、残存器高 6.3cm、復元底径 9.9cm を測る。調整は外面露胎部に回転ヘラケズリ調整を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰緑色、露胎部が灰黄色を呈する。

水注×壺（7） 中国陶器で、残存器高 7.1cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が赤茶色を呈する。

水注（8） 中国陶器で、残存高 3.6cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が緑褐色、露胎部が茶灰色を呈する。

壺（9） 国産陶器の備前焼で、復元口径 13.4cm、残存器高 4.0cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は外面が褐灰色、内面が赤褐色、褐灰色を呈する。全体的に焼締まる。

壺×甕（10） 国産陶器の備前焼で、残存器高 7.2cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面は回転ナデ調整後にナデ調整を施す。内外面ともに自然釉がかかる。色調は外面が褐灰色、内面が赤茶色を呈する。

小皿（11） 土師器で、復元口径 8.9cm、器高 1.1cm、復元底径 7.6cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後にナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色である。

小皿（12） 土師器で、復元口径 8.4cm、器高 1.4cm、復元底径 6.7cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は外面がにぶい黄橙色、内面が橙茶色を呈する。

遺構検出時の出土遺物（Fig.78 - 13 ～ 20、Fig.79 - 21 ～ 37、Fig.80 - 38 ～ 50）

13 ～ 50 は曲輪Ⅱ（副郭部 C11、D9 ～ 11、E10・11 グリッド）の遺構検出時に出土した遺物である。

碗（13） 白磁椀Ⅵ - 1a 類で、復元口径 16.8cm、残存器高 2.8cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

表土

遺構検出

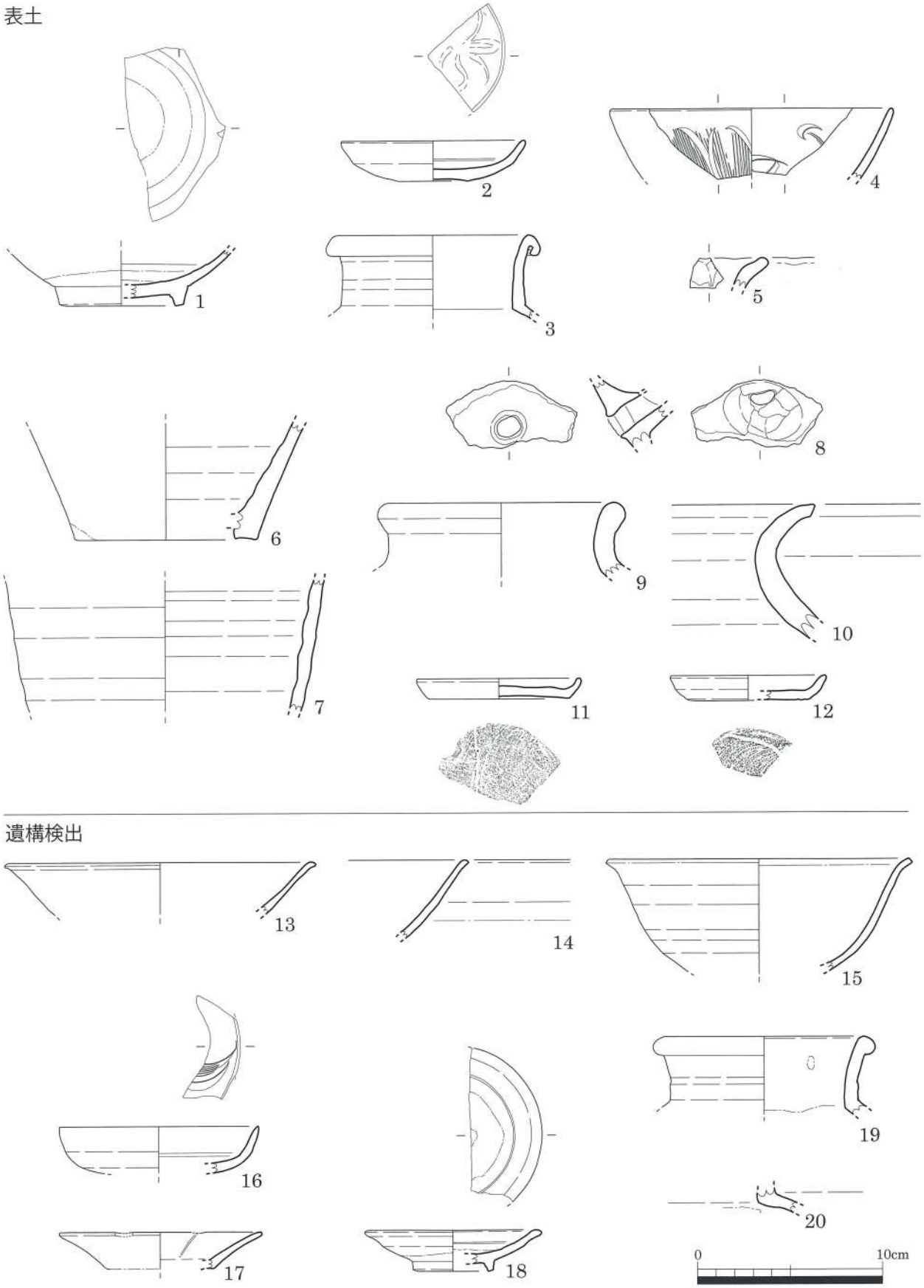


Fig. 78　その他の出土遺物実測図①（1/3）

碗（14） 白磁椀Ⅴ-4×Ⅷ-1・3類で、残存器高4.2cmを測る。内外面ともに施釉され、外面を掻き取っている。色調は釉が灰白色、露胎部が黄褐色を呈する。

碗（15） 白磁椀Ⅸ類で、復元口径16.6cm、残存器高6.1cmを測る。内外面ともに施釉され、口縁端部の釉を掻き取っている。色調は釉が灰白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

皿（16） 白磁皿Ⅶ-1c類で、復元口径10.8cm、残存器高2.5cmを測る。内面にヘラ描き文、櫛描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。

皿（17） 白磁皿Ⅳ-1b類で、復元口径11.0cm、残存器高2.0cmを測る。内面を白堆線で分割する。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。また、内外面に貫入が認められる。色調は釉が黄白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。口縁端部に輪花を施す。

皿（18） 白磁皿Ⅲ-1類で、復元口径9.6cm、器高2.2cm、復元底径4.4cmを測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。また、見込み部を環状に掻き取っている。色調は釉が黄白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

水注×壺（19） 白磁で、復元口径12.0cm、残存器高4.2cmを測る。内外面ともに施釉される。色調は釉、露胎部ともに灰白色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

水注×壺（20） 白磁で、残存器高1.4cmを測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄白色、露胎部が灰白色を呈する。

碗（21） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、復元口径16.0cm、残存器高4.5cmを測る。外面が櫛目文、沈線文を施す。内面にヘラ描き文、櫛点描文を施し、沈線を有する。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

碗（22） 同安窯系青磁椀Ⅰ-1b類で、残存器高3.7cm、底径4.6cmを測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。外面が櫛目文、内面がヘラ描き文、櫛点描文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部が淡灰色を呈する。体部が高台の中心より横に偏って成形される。

皿（23） 龍泉窯系青磁皿Ⅰ-2d類で、復元口径10.5cm、器高2.2cm、復元底径3.9cmを測る。内面に片彫魚文を施す。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。色調は釉が青緑色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

皿（24） 龍泉窯系青磁で、器高1.9cmを測る。内面にヘラ描き文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が灰緑色を呈する。

水注×壺（25） 中国陶器で、残存器高6.4cmを測る。外面に沈線文を施す。内外面とも施釉される。色調は釉が暗緑灰色を呈する。

水注×壺（26） 中国陶器で、残存器高4.2を測る。内外面とも施釉される。色調は釉が灰緑色、露胎部が黄灰色を呈する。

水注×壺（27） 中国陶器で、残存器高4.7cm、復元底径9.6cmを測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内外面とも施釉され、外面の底部を掻き取っている。色調は釉が灰緑色、露胎部が灰黄色を呈する。

水注×壺（28） 中国陶器で、残存器高6.3cm、復元底径9.0cmを測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内外面とも施釉される。色調は釉が灰緑色を呈する。

耳壺（29） 中国陶器で、残存器高3.6cm測る。調整は内面に回転ナデ調整を施す。外面に沈線文を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が暗茶褐色を呈する。Fig.56-2と同一個体の可能性がある。

甕（30） 中国陶器甕Ⅲ類で、残存器高4.2cmを測る。調整は外面回転ナデ調整を施す。また外面下部に平行タ

遺構検出

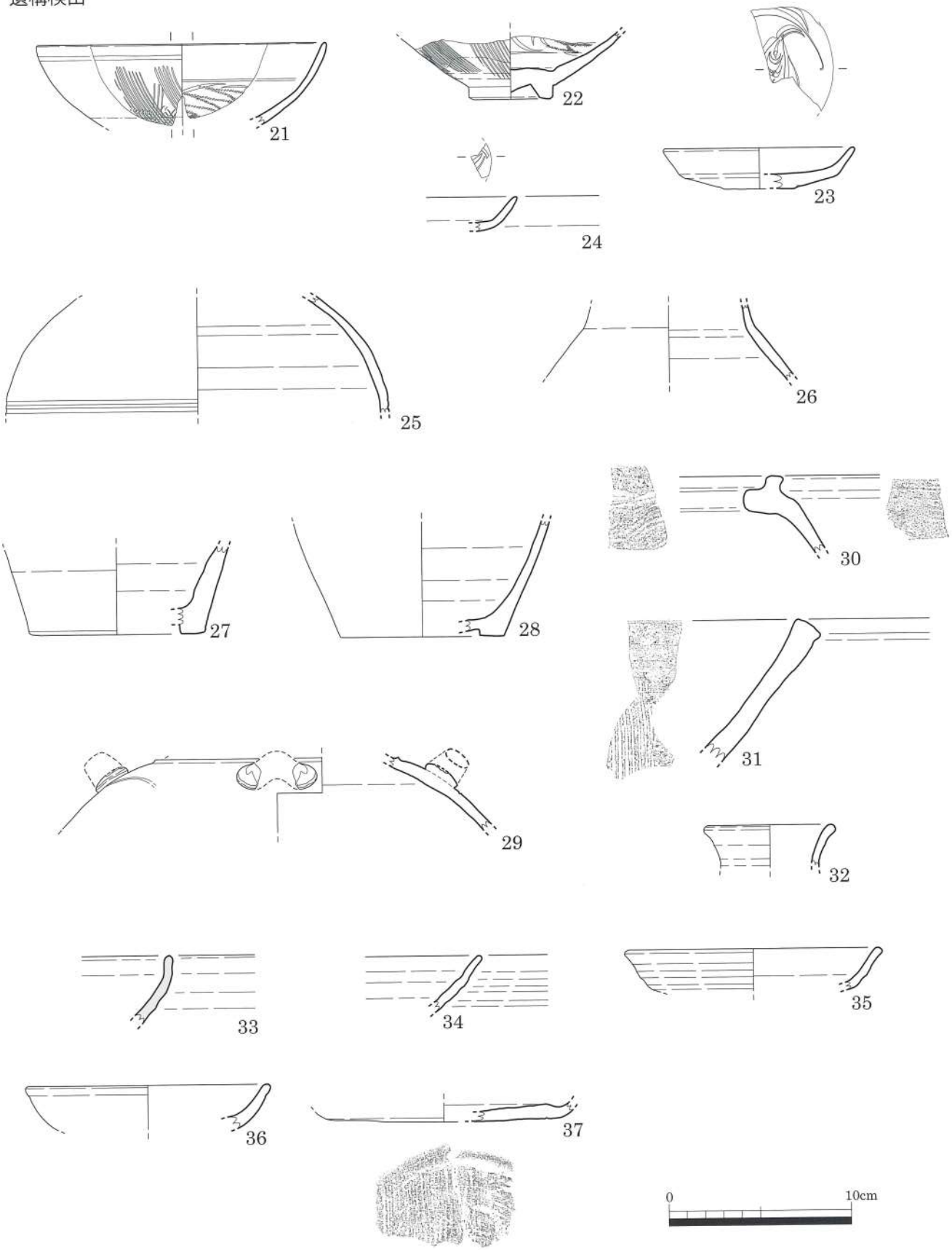


Fig. 79　その他の出土遺物実測図②（1/3）

タキ調整後ナデ調整を施す。内面は、回転ナデ調整を施す。また、内面には同心円状の当て具痕が認められる。色調は内外面ともに暗茶褐色を呈する。

擂鉢（31） 国産陶器の備前焼で、残存器高 7.7cm 測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整後擂目を施す。外面に施釉される。色調は釉が茶褐色、外面の露胎部が赤茶色、内面が暗茶褐色を呈する。

徳利×小壺（32） 国産陶器の備前焼で、復元口径 7.2cm、残存器高 2.3cm を測る。内外面とも施釉される。色調は釉が赤茶色を呈する。

椀（33） 瓦器で、残存器高 3.7cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整後にミガキ調整、内面が回転ナデ調整を施す。色調は外面が淡灰黄色、内面が淡灰黄色、灰色を呈する。

坏（34） 土師器で、残存器高 3.1cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。

坏（35） 土師器で、復元口径 14.2cm、残存器高 2.3cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。

坏（36） 土師器で、復元口径 13.5cm、残存器高 2.4cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色を呈する。

坏（37） 土師器で、残存器高 1.1cm、復元底径 13.0cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転ヘラ切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙色を呈する。

小皿（38） 土師器で、復元口径 9.8cm、器高 1.0cm、復元底径 9.1cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後にナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色を呈する。

小皿（39） 土師器で、復元口径 10.8cm、器高 1.4cm、復元底径 8.4cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色である。

小皿（40） 土師器で、復元口径 9.0cm、器高 1.3cm、復元底径 7.6cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙茶色である。

小皿（41） 土師器で、器高 1.5cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色である。

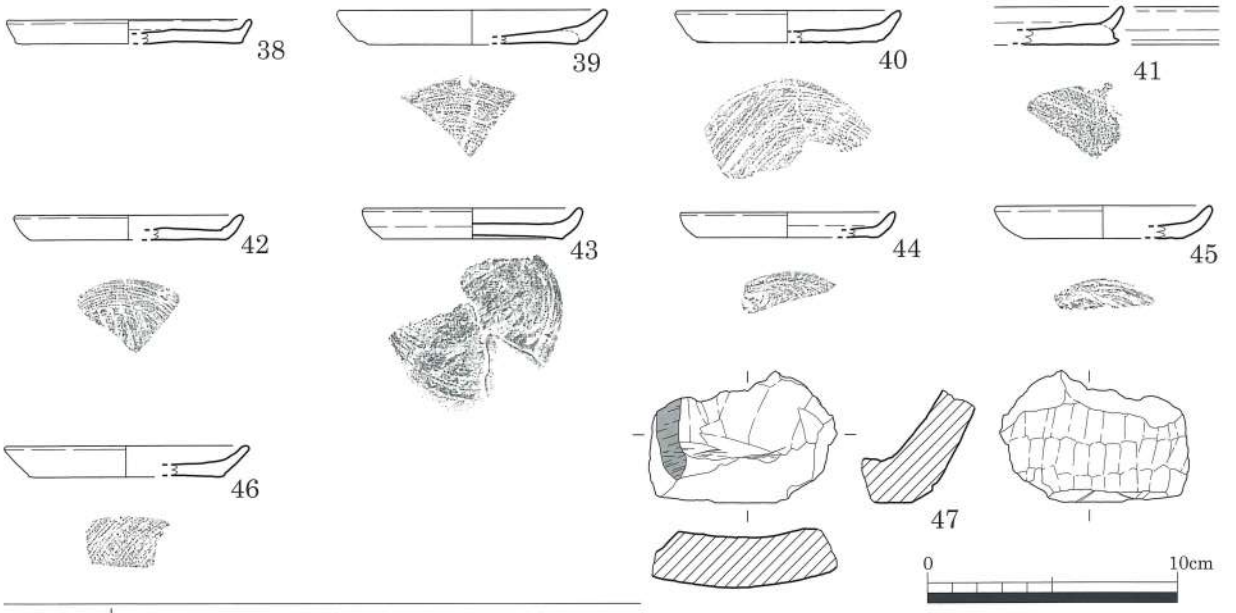
小皿（42） 土師器で、復元口径 9.2cm、器高 1.0cm、復元底径 7.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに黄橙色を呈する。

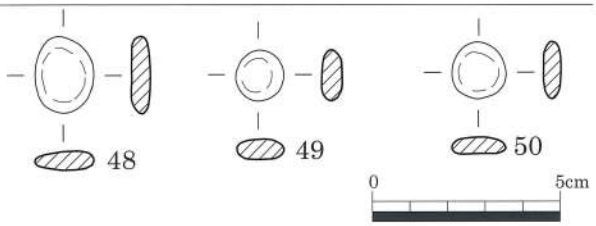
小皿（43） 土師器で、復元口径 8.8cm、器高 1.2cm、復元底径 7.2cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後にナデ調整と板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙色を呈する。

小皿（44） 土師器で、復元口径 8.6cm、器高 1.0cm、復元底径 7.3cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色を呈する。

小皿（45） 土師器で、復元口径 8.7cm、器高 1.3cm、復元底径 6.3cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、底

遺構検出





SX13

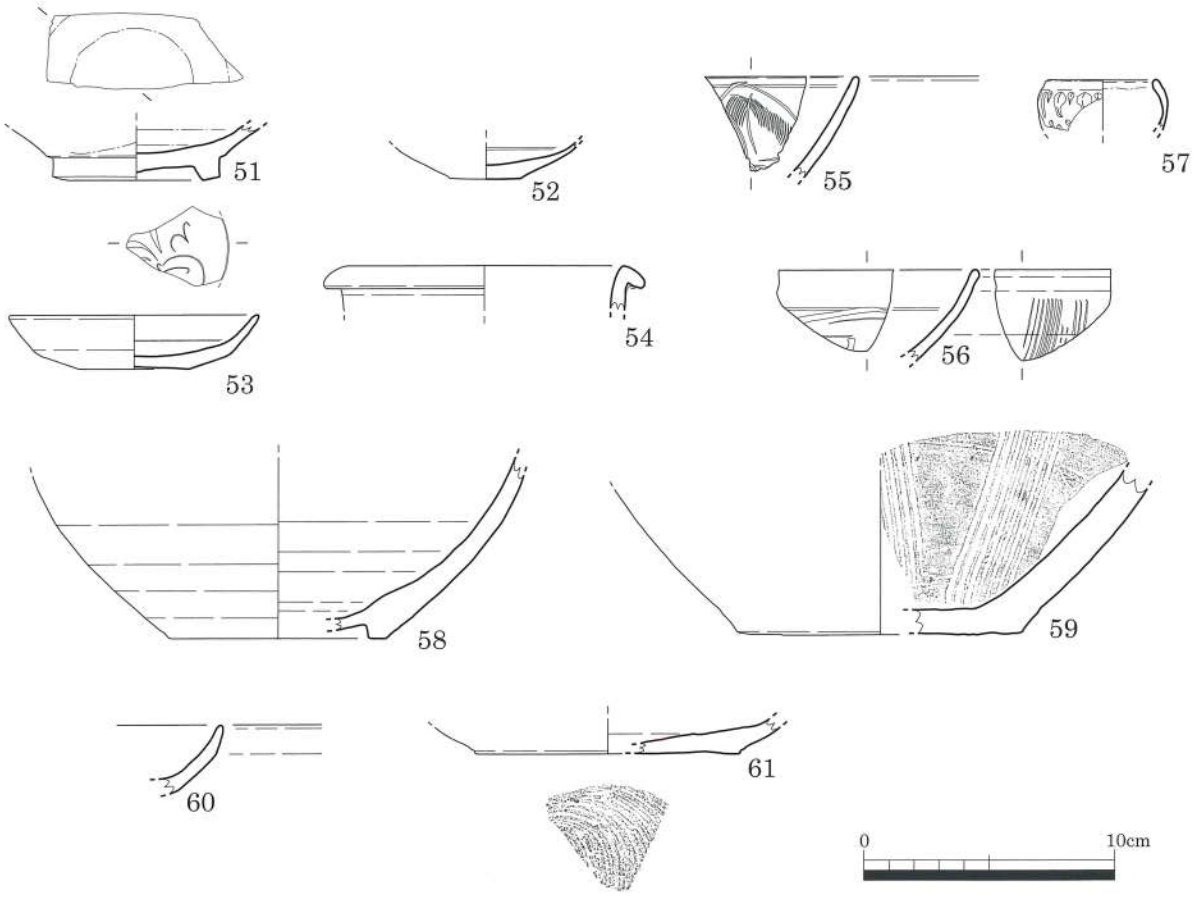


Fig. 80　その他の出土遺物実測図③（1/2・1/3）

部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色を呈する。

小皿（46） 土師器で、復元口径 9.8cm、器高 1.2cm、復元底径 7.8cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに橙色を呈する。

不明石製品（47）滑石製品石鍋の二次加工品で、最大長 7.6cm、最大幅 5.2cm、最大厚 2.0、重量 141.3g を測る。外面に工具調整痕、内面に二次加工痕、ケズリ調整が認められる。

碁石状石製品（48） 石製品で、長さ 2.1cm、幅 1.1cm、厚さ 0.6cm、重量 1.6g を測る。全体的に研磨している。石材は砂岩である。

碁石状石製品（49） 石製品で、長さ 1.4cm、幅 1.3cm、厚さ 0.5cm、重量 2.7g を測る。全体的に研磨している。石材は砂岩である。

碁石状石製品（50） 石製品で、長さ 1.5cm、幅 1.4cm、厚さ 0.5cm、重量 1.5g を測る。全体的に研磨している。石材は砂岩である。

SX13 出土遺物（Fig.80 - 51 ～ 61、Fig.81 - 62 ～ 65）

51 ～ 65 は曲輪Ⅱ（副郭部）の東南斜面に位置する SX13 から出土した遺物である。SX13 は今回の調査では掘削しておらず、遺構の表面より遺物溜まりとして出土したため、その他の遺物として掲載した。

碗（51） 白磁椀Ⅷ類で、残存器高 2.1cm、復元底径 6.6cm を測る。外面が回転ヘラケズリ調整を施す。内外面ともに施釉され、見込み部を環状に掻き取っている。色調は釉が乳白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

皿（52） 白磁皿Ⅴ×Ⅵ類で、残存器高 1.5cm、底径 2.9cm を測る。内面に沈線を有する。内外面とも施釉され、外面の底部を掻き取っている。色調は釉が黄白色、露胎部が淡黄灰色を呈する。

皿（53） 白磁皿Ⅵ-2a 類で、復元口径 10.0cm、器高 2.1cm、復元底径 4.4cm を測る。内面にヘラ描き文、櫛描き文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が乳白色、露胎部が黄灰色を呈する。

耳壺（54） 白磁で、復元口径 12.8cm、残存器高 1.8cm を測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄白色を呈する。

碗（55） 龍泉窯系青磁椀Ⅰ - 3a 類で、残存器高 4.0cm を測る。内面に櫛目文、片彫文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が緑色を呈する。

碗（56） 同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で、残存器高 3.6cm を測る。外面が櫛目文、内面にヘラ描き文、櫛点描文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。外面の釉の厚みにムラがみられる。

合子身×小壺（57） 青白磁で、復元口径 4.5cm、残存器高 2.0cm を測る。外面上部に沈線文、外側面に型押成形による文様を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が青白色を呈する。

鉢×壺（58） 中国陶器で、残存器高 7.2cm、復元底径 8.6cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰黄色を呈する。

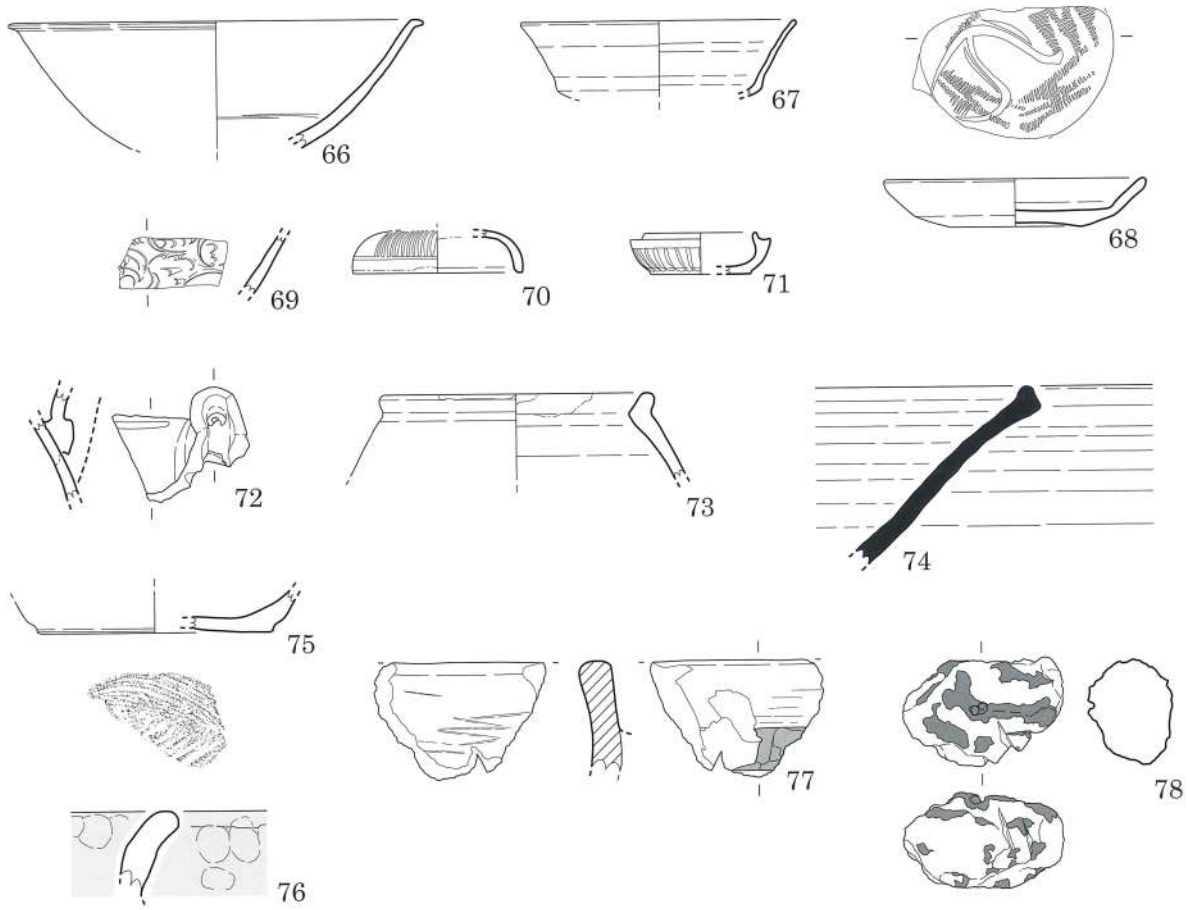
擂鉢（59） 国産陶器の備前焼で、残存器高 6.6cm、復元底径 11.4cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後に擂目を施す。外面に自然釉がかかる。色調は外面が褐色、内面が赤茶色を呈する。

坏（60） 土師器で、残存器高 2.7cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。

坏（61） 土師器で、残存器高 1.4cm、復元底径 10.6cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ

SX13

撹乱



表採

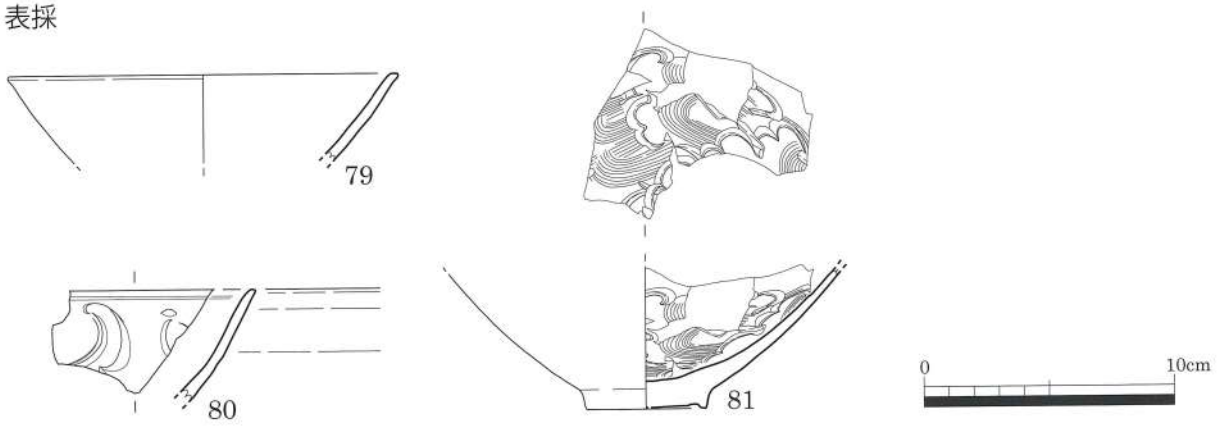


Fig. 81　その他の出土遺物実測図④（1/3）

調整後ナデ調整を施す。色調は内外面ともに橙色を呈する。底部外面に鉄分と思われる付着物が認められる。

小坏（62） 土師器で、復元口径 9.2cm、器高 1.9cm、復元底径 7.0cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、底部にナデ調整、内面には回転ナデ調整後にナデ調整を施す。色調は外面が黄橙色、内面がにぶい黄橙色を呈する。

小皿（63） 土師器で、復元口径 8.8cm、器高 0.9cm、復元底径 7.6cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに橙色を呈する。

小皿（64） 土師器で、復元口径 7.6cm、器高 1.1cm、復元底径 5.8cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りである。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。

小皿（65） 土師器で、復元口径 8.4cm、器高 1.1cm、復元底径 7.2cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面に回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、切り離し後にナデ調整を施す。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。

撹乱（Fig.81 - 66 ～ 78）

66 ～ 78 は曲輪Ⅱ（副郭部）の撹乱の中から出土した遺物である。

碗（66） 白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、復元口径 16.6cm、残存器高 5.0cm を測る。内面に沈線を有する。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

坏（67） 白磁で、復元口径 11.0cm、残存器高 3.0cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰白色を呈する。

皿（68） 同安窯系青磁皿Ⅰ - 1b 類で、復元口径 10.5cm、器高 1.9cm、底径 5.3cm を測る。内面に櫛点描文、片彫文を施す。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。また、内外面に貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部が灰白色を呈する。

碗（69） 青白磁で、残存器高 2.3cm を測る。内面にヘラ描文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が青白色を呈する。

合子蓋（70） 青白磁で復元口径 6.7cm、残存器高 1.7cm を呈する。調整は内面に回転ナデ調整を施す。外側面に型押成形による菊弁文を施す。内外面ともに施釉され、口縁端部を掻き取っている。色調は釉が灰緑色、露胎部が灰白色を呈する。

合子身（71） 青白磁で復元口径 4.6cm、残存器高 1.6cm、復元底径 4.0cm を呈する。調整は外面底部に回転ケズリ調整を施す。外側面に型押成形による蓮弁文を施す。内外面ともに施釉され、受け部を掻き取っている。色調は釉が灰緑色、露胎部が灰白色を呈する。

水注（72） 中国陶器で、残存高 4.5cm を測る。内外面とも施釉される。色調は釉が灰緑色、露胎部が黄灰色を呈する。

耳壺（73） 中国陶器で、残存器高 3.4cm 測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が灰緑色を呈する。内面に目跡が認められる。

捏鉢（74） 中世須恵器で、残存器高 7.0cm を測る。調整は内外面ともに回転ナデ調整を施す。色調は外面が灰色、淡黄灰色、内面が淡黄灰色を呈する。

坏（75） 土師器で、残存器高 1.6cm、復元底径 9.4cm を測る。調整は外面が回転ナデ調整、内面が回転ナデ調整後にナデ調整を施す。底部切り離しは回転糸切りで、その後板状圧痕が認められる。色調は内外面ともに、にぶい黄橙色を呈する。

甕（76） 土師器で、残存器高 3.4cm を呈する。調整は口縁端部にヨコナデ調整、内外面にナデ調整の他に指頭圧痕が認められる。色調は内外面ともに茶褐色を呈する。内外面に煤の付着が認められる。

不明石製品（77） 滑石製品石鍋の二次加工品で、最大長 6.9cm、最大幅 4.4cm、最大厚 1.3cm、重量 66.4g を測る。外面下部に二次加工痕、内外面に擦痕が認められる。

鉄滓か？（78） 鉄製品で、最大長 6.4cm、最大幅 4.3cm、最大厚 3.8cm、重量 122.2g を測る。

表採（Fig.81 - 79 ～ 81）

79 ～ 81 は曲輪Ⅱ（副郭部）で表採した遺物である。

碗（79） 白磁椀Ⅴ - 4 ×Ⅷ - 1・3 類で、復元口径 15.6cm、残存器高 3.5cm を測る。内外面ともに施釉される。色調は釉が黄白色を呈する。

碗（80） 龍泉窯系青磁椀Ⅰ - 2 類で、残存器高 4.5cm を測る。内面に片彫蓮花文、沈線を施す。内外面ともに施釉される。色調は釉が青緑色を呈する。

碗（81） 青白磁で、残存器高 5.6cm、復元底径 4.8cm を測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内面にヘラ描き文、櫛目文を施す。内外面ともに施釉され、外面の底部を掻き取っている。また、内外面に貫入が認められる。色調は釉が青白色、露胎部が灰白色を呈する。

造成土（Fig.82 - 82 ～ 88）

82 ～ 88 は曲輪Ⅱ（副郭部）の西側において、SD5 が検出された E・F8 グリッドから西側一帯の範囲より出土した遺物である。SD5 の土層（Fig.70）は 8 ～ 18 層が造成土で、各層は 0.1 ～ 0.2m の層厚で質の違う土を交互に積み重ね、曲輪Ⅱ縁辺部は盛土造成により水平になっている。以下はその造成土の西側より出土した遺物である。

碗（82） 龍泉窯系青磁椀Ⅰ - 2 類で、復元口径 13.0cm、器高 5.3cm、底径 4.8cm を測る。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。内面に片彫文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が灰緑色、露胎部が灰茶色を呈する。

碗（83） 龍泉窯系青磁椀Ⅰ -3a 類で、復元口径 16.8cm、残存器高 4.7cm を測る。内面に櫛目文、片彫文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が緑色を呈する。

碗（84） 同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で、復元口径 16.4cm、残存器高 6.0cm を呈する。調整は外面に回転ヘラケズリ調整を施す。外面に櫛目文、内面にヘラ描き文、櫛点描文を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色、露胎部は淡黄灰色を呈する。

碗（85） 同安窯系青磁椀Ⅰ - 1b 類で、復元口径 16.0cm、残存器高 4.4cm を測る。外面が櫛目文、内面にヘラ描き文、櫛点描文、沈線を施す。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が黄緑色を呈する。

香炉（86） 青磁で、残存器高 3.2cm を測る。内外面ともに施釉され、貫入が認められる。色調は釉が青緑色を呈する。底部に 1 ヶ所の脚の接合痕が認められる。

合子蓋（87） 青白磁で、残存器高 0.6cm を呈する。外側面に型押成形による文様を施す。内外面ともに施釉され、口縁端部を掻き取っている。色調は釉が青白色を呈する。

不明石製品（88） 滑石製品石鍋の二次加工品で、最大長 13.9cm、最大幅 5.5cm、最大厚 1.3cm、重量 163.6g を測る。口唇部に二次加工痕、外面に工具調整痕、内面に擦痕が認められる。

造成土

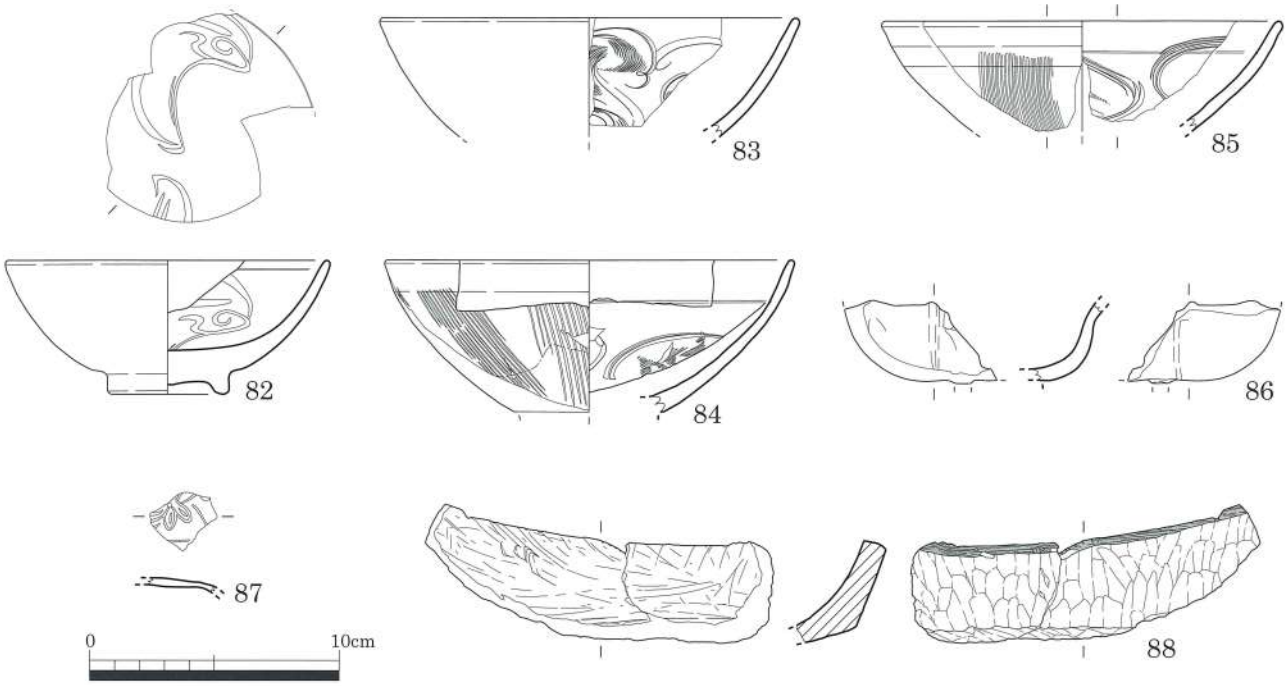


Fig. 82　その他の出土遺物実測図⑤（1/3）

Ⅵ．総括

鎮西山城跡は地表面観察による城館構造から構築時期を戦国期と考えられてきた（佐賀県教育委員会 2013）。今回の調査では鎮西山城跡の時期や山城を構成する防御施設の確認のため、埋没した堀や城の出入口と想定される箇所を中心にトレンチを 26 地点にわたり設定して掘削を行った。また、曲輪Ⅰ（主郭部）の東側に位置する曲輪Ⅱ（副郭部）平坦部全体の表土剥ぎを行い、曲輪Ⅱ内の遺構確認を行った。その結果、中世前期の平安時代末から鎌倉時代の遺構と遺物、中世後期の 16 世紀代と思われる山城遺構の少なくとも二つの時期の遺構と遺物を確認することができた。主な遺構としては、まず地表面観察での山城の遺構としては曲輪Ⅰ縁辺部の土塁、曲輪Ⅰ・Ⅱ直下をほぼ全周にわたって取り囲む横堀と土塁・帯曲輪、曲輪Ⅱ南西側直下の斜面を遮断する竪堀が確認されている。今回の調査で確認された遺構としては曲輪Ⅱ平坦部において柵列 3 条、掘立柱建物跡 3 期、溝状遺構 4 条、土坑 1 基、性格不明遺構 2 基、小穴多数などがある。主な出土遺物は平安時代末から鎌倉時代の土師器や中国産陶磁器などの中世前期の遺物が主体を占めており、これらに伴って滑石製石鍋などの石製品、鉄釘などの鉄製品が出土している。山城の機能時期と推測される 16 世紀代の遺物は確認できていない。またこの他に黒曜石の剥片や古墳時代の須恵器片、古代の土師器・瓦器片などが若干認められる。検出された遺構は大きく 2 時期に分かれると思われるが、各遺構の出土遺物は中世前期に集中している。このため、遺構の構築時期は遺物のみで判定することは困難と思われる。そこで、ここでは検出された遺構群を、山城に伴う遺構とそれ以前の遺構といずれに帰属するものか検討を行うこととする。

1．中世山城構築以前の遺構（Fig.83）

山城構築以前について今回の調査で確認できた最も古い遺物としては縄文または弥生時代と思われる黒曜石の剥片 1 点が出土している。他に時期の判別できる遺物としては 7 世紀代の須恵器大蓋片（Fig.19-1）が出土している。鎮西山城跡周辺の麓に鎮西山城跡南麓古墳群や奥の院古墳群など当該期の群集墳が見られるため、同時期に本遺跡にもたらされたものと思われるが、調査範囲内に遺構は確認されていない。またこの他の遺物として弥生土器や古代の土師器椀と思われるものが出土しているが、いずれも小片で少量の出土で当該期の遺構は確認できていない。

今回の出土遺物の主体となるのは、平安時代末から鎌倉時代の土師器・中国産陶磁器類で調査範囲内の表土・遺構内からほぼ全域にわたって出土しており、遺構の出土遺物のみでの時期の判別を行うことは困難となっているが、現状でできる限り遺構内の遺物出土状況や他の遺跡の類似例から当該期の遺構と推測されるものを検討したい。中世山城構築以前の可能性がある遺構として、土坑状遺構（SK1）、円形掘立柱建物（SB9）、No.21 トレンチ内検出の土器埋設遺構（SX17）が挙げられ、これらは遺構の性格や遺物出土状態から通常中世山城に伴わないと考えられる遺構である。

SK1 は曲輪Ⅰ（主郭部）西側直下の曲輪Ⅲに設定した No.1 トレンチにおいて検出された遺構で平面形状は不整な長楕円形を呈し、周辺に炭化物や焼土が散在している状況で検出された。掘り下げは No.1 トレンチにかかる一部のみで底面まで掘削を行っていない。埋土内には出土遺物として多量の焼土・炭化物、鉄釘 2 本、12 世紀中頃から後半の龍泉・同安窯系青磁碗、白磁椀Ⅴ－4×Ⅷ－1・3 類の破片などが出土した。このような状況から、佐賀大学の宮武正登氏より三昧場（火葬場）の可能性があるとのご指摘を頂いた。一部しか掘削していないため確実で

はないが、当該遺構が火葬場や墓などであるならば、共伴する遺物の出土状況から城として機能する以前の12世紀中頃から後半の遺構と考えられる。

SB9は曲輪Ⅱ（副郭部）平坦部の中央付近において検出した円形状の掘立柱建物跡で、今回は遺構検出のみを行った。当該遺構はP1を中心に半径3.4mの円周上に20基の柱穴からなっており柱痕のある小穴も認められた。

ほぼ同位置に検出された掘立柱建物跡SB6・7とは建物配置がそれぞれ重複しており、検出状況から3者は同時に存在していないことは確実である。また柱穴どうしでの切り合い関係はなく先後関係は不明であるが、SB6・7は柱の主軸がほぼ一致することから建て直しが想定され、SB6・7はほぼ同時期でその前後にSB9が構築されていたと考えられる。SB6・7・9の性格については通常、山城で検出される掘立柱建物跡は方形または長方形を呈している。これらの掘立柱建物跡は防御用建物として櫓、兵士が駐屯するための兵舎、居住関係建物と住居や蔵、その他に馬屋、寺院・持仏堂、牢獄などが想定されており[1]、SB6・7は防御用建物または居住関係建物のどちらかに比定される。これに対してSB9は平面形状が円形を呈しており、山城に伴う円形の掘立柱建物は実例を見出せなかった。しかし、同様の遺構として大分県大分市の横尾遺跡[2]では半径4.8mの円周上に柱穴を11基配した14世紀代の円形掘立柱建物（SX200）が検出されている。この遺構の東側部分の柱穴3～4基分には柱穴は検出されていない[2]が、円形の面積になおすと72㎡で今回本遺跡で検出されたSB9の床面積36㎡のちょうど倍にあたる床面積を有する。両遺構の類似点としてはSB9は柱穴径が0.2～0.8m、柱間距離0.4～2mで、SX200が柱穴径が0.25～0.58m、柱間距離1.8～2.52mでどちらも柱穴径・柱間距離にバラつきがあることである。遺構の性格は現状ではどちらも不明で今後性格のわかる類似遺構が検出されるのを待つしかない。ただしSB9に関しては、今回の調査指導で佐賀大学の宮武正登氏より塔などの寺院関係の建物である可能性があるとのご指摘を頂いており、出土遺物に中世前期の中国産青白磁合子や白磁の水注、土師質の香炉など宗教に関係するような遺物も認められることから十分留意しておく必要がある。この場合、寺院関係の遺構は中国産陶磁器の出土した時期の可能性が高く、今回の調査では推測とはなるがSB9は山城構築以前の遺構と考えている。

No.21トレンチ内からは土器埋設遺構（SX17）が検出された。遺構の形状はトレンチ外に延びているため不明であるが溝状また土坑状遺構と思われ、その埋土内から完形の土師器坏と体部の1/2が欠損する同安窯系青磁碗を合わせ口にした状況で検出された。本遺構は曲輪Ⅱ北側直下の戦国期の帯曲輪造成土下層から出土している。他の帯曲輪造成土内にも同時代の遺物は混入しているが、土器の検出状況から意図的に埋設されたものと判断し、同安窯系青磁の時期から12世紀中頃から後半にかけての遺構と考えられる。

以上が中世山城構築以前の遺構と推測されるものであるが、この他にも今回は掘削を行っていないが広範囲に亘る大量の土器溜まり（SX13）が検出されており、やはりこれらの遺物も平安末から鎌倉時代にかけてのもので青白磁の合子片も出土しており、今後調査による確認が必要である。前述のとおり遺跡全体のいずれの遺構からも平安時代末から鎌倉時代の遺物しか出土していない。このように山上から出土する中国産陶磁器や土師器などの遺物や遺構の検出状況から佐賀大学の宮武正登氏より山岳寺院や修験道などの宗教関連の遺跡が存在していた可能性をご指摘を頂いた。ただし、現段階ではそれを確実に裏付ける遺構や遺物は検出されていないため、山城構築以前の遺構については宗教関係以外の可能性も考え、今後も検討する必要がある。

2．中世山城機能時の遺構（Fig.83）

今回の発掘調査では、試掘調査による曲輪Ⅰ（主郭部）・曲輪Ⅱ（副郭部）とその周辺部の防御施設の規模・形

状の確認と曲輪Ⅱ平坦部全体の遺構の確認を行った。その結果、トレンチ調査では曲輪の縁辺部やその直下に配された土塁・横堀・切岸などの防御施設が層位的に確認され、曲輪Ⅱ平坦部の調査では掘立柱建物・柵列・堀切といった建物跡や防御施設と曲輪縁辺部の盛土造成の状況が判明するなど、戦国期と思われる山城遺構が良好に残存していることが確認できた。ここでは曲輪Ⅰ、曲輪Ⅱ、曲輪Ⅰ・Ⅱ周辺の遺構について今回の調査で判明したことを元に考察を加えながら述べることとする。

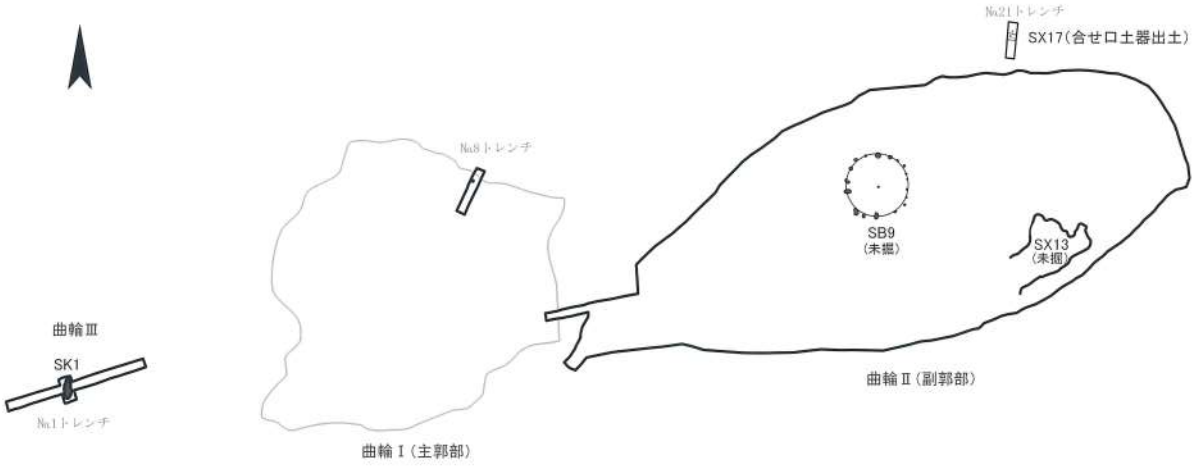
①曲輪Ⅰについて

曲輪Ⅰ（主郭部）では防御施設として地表面観察で確認された曲輪Ⅰ縁辺部の土手状の高まりが曲輪北と南西側の2箇所に認められ、ここにトレンチを設定し調査を行った。その結果、いずれも土層の堆積状況により土塁であることが確認できた。土塁は盛土造成によるもので丁寧な版築によるものではなく、周辺の造成などに伴い排出された土を一気に盛り上げて構築されているような堆積状況であった。また曲輪北側で土塁基底部層直下の旧表土と思われる黒色土層内には炭化物や焼土の混入が認められた。これは自然または人為的によるものかは不明であるが、土塁構築以前に曲輪Ⅰが焼けている可能性が窺える。このような類例として、長野県の16世紀の山城である屋代城において、曲輪造成土直前に草木を焼き払ったと思われる炭化物層が確認されている[3)]。曲輪Ⅰ縁辺部において土塁の認められなった部分はいずれも現代の撹乱を受けており、土塁が何処まで廻っていたかは現段階では不明である。曲輪Ⅰ平坦部内の建物に関してはトレンチには認められず、曲輪Ⅰ中央から北側の大部分は現代の東屋などにより現地表面から深さ0.2～0.3m以上にわたって撹乱を受けている状況であった。一方南側に関しては今回の調査以前の確認調査で溝状遺構と小穴が確認されており、今後何かしらの遺構が検出されると思われる。

②曲輪Ⅱについて

曲輪Ⅱ（副郭部）の調査では山城に関わる建物と防御施設が検出されており、主な遺構としては柵列（SA2・8・10）、掘立柱建物跡（SB6・7・9）、溝状遺構（SD4・5・11・14・15・16）、土坑（SK3）、性格不明遺構（SX12・13）がある。今回の調査では遺構の規模・形状の把握が目的のため、掘削に関しては半裁やトレンチでの確認のみで完掘を行っていないが、掘削によって判明したことを述べたいと思う。まずトレンチによる調査の成果として、曲輪Ⅱ縁辺部は土層の堆積状況により、ほぼ全周に亘って切土造成後の盛土造成上によって曲輪の拡張が行われていることが判明した。また曲輪Ⅱ縁辺部のやや内側をほぼ全周する溝状遺構が検出されている。この溝状遺構から曲輪縁端部には土塁が構築されていた可能性があるのだが、後世の削平を受けているようで調査前の地表面観察では土手状の高まりは確認されておらず、土層でも確実に土塁であるかは判断できていない。また溝状遺構の埋土内の底面近くからは平安末から鎌倉時代の遺物がある程度まとまって出土しており、戦国期に溝として機能していたならば、出土状況に疑問が残り、溝状遺構自体は山城機能時以前の中世前期に機能していた可能性が考えられる。この溝状遺構の帰属する時期については今後の課題となるが、この溝状遺構を山城に伴うものとして考えた場合、その機能としては曲輪Ⅱ部全体を一つにまとめる役割や縁辺部の排水機能などが想定される。この周囲を囲繞する溝状遺構に対し、曲輪Ⅱ内部では排水と曲輪を区画のためと思われる溝状遺構が検出されている。溝状遺構は3条（SD4・5・11）検出されており、これらによって大きく4つの曲輪（曲輪Ⅱ-1～4）に区画される。曲輪を区画する溝状遺構については、SD4では現状が幅1.5～2m、深さ0.1m程度の浅い小段状となる溝状遺構で曲輪間の区画と排水を兼ねたものと思われる。SD11もSD4と同じ機能と思われるが、幅は1.6～2m、深さ0.8mを測り、SD4と比べてかなり深い。深さの相違は機能差・時期差・近現代の削平と様々に想定することができるが、今回は判明できなかった。SD4・11に対し、SD5は残存幅1.8～4.2m、残存する深さは1.1mで規模が大きいため、溝状遺構ではなく防御施設として曲輪間を遮断する堀切とするのが妥当であろう。またSD5の北端から2.2m

戦国期山城以前と思われる遺構



中世山城機能時の遺構

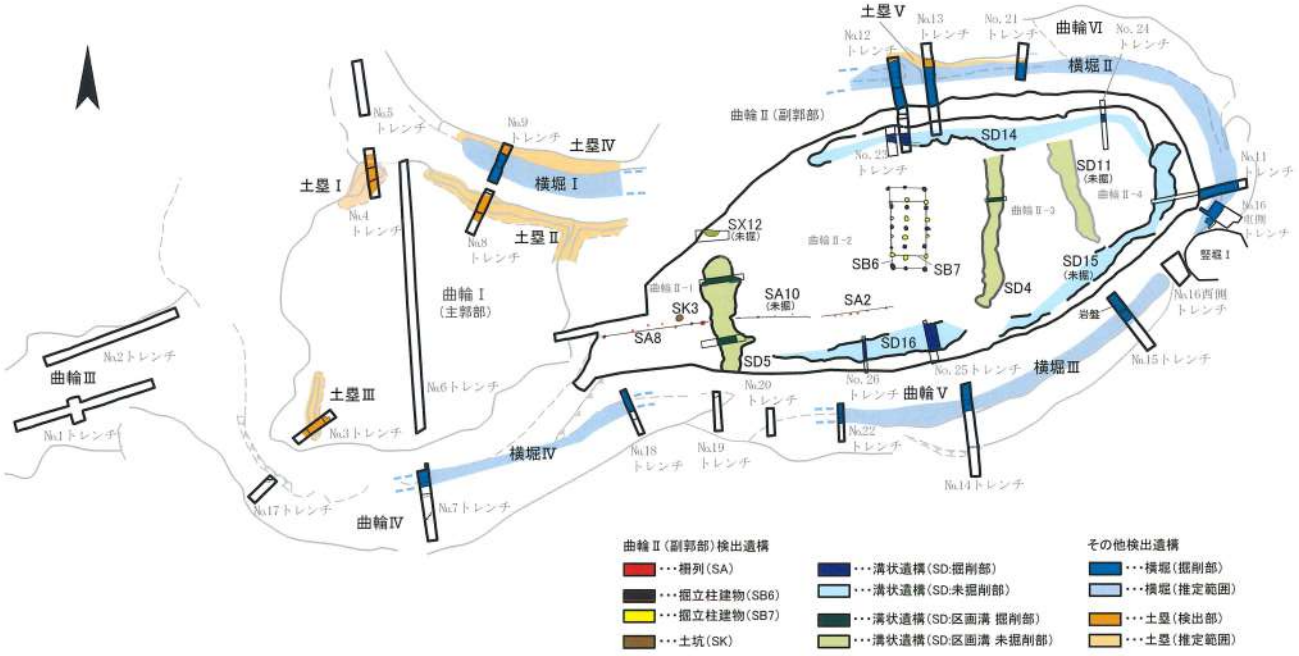


Fig. 83　主要遺構の変遷想定図（1/800）

空間をあけて半円形状の遺構 SX12 が検出されており、遺構が調査区外に延びているため全体の形状は不明である。SX12 は SD5 の端部と同じ形状で SD5 の延長線上にあり、SD5 と同様の堀切となる可能性がある。その場合、SD5 と SX12 の間の空間は曲輪間の出入口となる土橋と想定され、今回の調査では確認できなかったがこの部分には「木戸」が設けられていた可能性があり、堀切 SD5 を境とする曲輪Ⅱ-1 は曲輪Ⅱとするよりも曲輪Ⅰ（主郭部）の一部として腰曲輪と枡形状の出入口空間として機能するものと考えられる。

このように溝状遺構によって区画された曲輪は現代の公園化による削平や撹乱を受けていると思われるが、現状では西側のⅡ-1 から東側Ⅱ-4 に向かって低くなっており、その比高差は 3m 程である。曲輪Ⅱ内で最高位にある曲輪Ⅱ-1・2 はほぼ同じ標高の平坦面で、曲輪Ⅱ-1 には柵列（SA8）と土坑（SK3）、曲輪Ⅱ-2 では掘立柱建物（SB6・7）、柵列（SA2・10）に伴う小穴が確認されている。このうち掘立柱建物（SB6・7）に関しては規模に相違があるものの、ほぼ同一軸に建てられた同じ構造の建物で、柱穴どうしの切り合い関係が認められなかったため両者の建物の造営の前後関係は不明だが、建て直しであることが分かった。今回の調査では山城機能時に曲輪Ⅱには建物が 1 棟だけ建っていたことが分かった。曲輪Ⅱ-3 は緩やかに傾斜しており、曲輪内の高低差は 1.2m 程を測り、曲輪Ⅱ内の他の曲輪と比べて削平が甘く、自然地形の傾斜に近い状態で使用されていたと思われる。中央付近に南北方向の柵列状に並ぶ小穴が認められるが間隔がまばらで掘削を行っていないこともあり、柵列としてよいか判断できていない。Ⅱ-4 はほぼ平坦面で曲輪内は近現代の火災処理による削平と撹乱を受けており、撹乱土を除去すると縁辺部を除いて黒色土に覆われている状況で、この黒色土内には平安時代末から鎌倉時代の遺物が多く混入していることから旧表土の可能性がある。曲輪内の黒色土面には遺構は認められなかったが No.24 トレンチの土層面の黒色土直下に曲輪Ⅱ北側縁辺部を廻る溝状遺構の断面とその溝状遺構に切られる小穴が確認でき、黒色土直下に遺構面が存在する可能性がある。また曲輪内の南側には多数の小穴が認められ、南側縁辺部は柵列が構築されていた可能性がある。以上の検出状況から区画された曲輪は居住や城の出入口空間などのそれぞれの役割を担っていたが想定される。

③曲輪Ⅰ・Ⅱ周辺の遺構について

曲輪Ⅰ・Ⅱ周辺の遺構については曲輪Ⅰ・Ⅱの直下には帯曲輪・腰曲輪・横堀・竪堀・土塁などの防御施設が地表面観察によって縄張図が作成されていた[4]。今回のトレンチによる調査では主に横堀・土塁の規模や形状の確認を行った。地表面観察で横堀と考えられていた所は 0.4 ～ 0.9m 埋没しており、改めて横堀であることが確認された。さらに現状が平坦面となっていた曲輪Ⅰ南側の直下にも横堀が埋没していることが判明し、未調査の曲輪Ⅰ西・北西側を除いて横堀がほぼ全体を囲繞する状況が確認できた。また横堀の外岸には土塁が伴っており、その構築方法は横堀の掘削と同時に地山を上幅 0.4 ～ 1.5m 幅の断面形状が台形を呈する土手状に削り残す切土造成後、そこに盛土造成により土塁を構築していることが分かった。この他にも曲輪Ⅱ南東直下の竪堀と北東方向から廻らされた横堀は連結しており、これに対し南西方向から廻る横堀は縄張図[4]と同様に竪堀の手前で完結するようである。この竪堀と横堀の空間は曲輪Ⅱへの出入口となる可能性もあるが今回の調査ではわからなかった。曲輪Ⅰ・Ⅱ周辺の一番の調査成果としては曲輪Ⅰ・Ⅱ直下の周囲をとりまくように構築されている横堀を確認できたことである。これによって横堀の導入時期には地域差はあるが 16 世紀第 2 四半期以降[6]とされていることから本遺跡の最終的な改修または構築時期は少なくとも 16 世紀代の戦国期山城と考えることができる。戦国期の遺物の出土はなかったが、確実に横堀が構築されていることを確認できたため最終的な山城の構築または改修時期を絞ることができたのではなかろうか。また、主要な曲輪全体を横堀が囲繞する山城は上峰町の周辺地域（佐賀市、神埼市、三養基地区）に限っていえば、神埼市の横大路城、鳥栖市の葛籠城と併せて 3 例のみで前者は少弐氏、後者は筑紫氏関連の山城

[4] とされており、今後築城主体者などを考えていく上で重要な手掛かりであると考える。

3．出土遺物

鎮西山城跡の出土遺物は前述のとおり、古いものでは縄文または弥生時代と思われる黒曜石の剥片や古墳時代の須恵器や古代の土師器などの遺物もわずかに出土しているが、平安末から鎌倉時代にかけての中世前期の遺物が大多数を占めている。しかし、従来より中世山城跡として考えられていた本遺跡は今回の調査では中世前期に山城として機能していた痕跡は認められず、調査によって検出された山城の構造から戦国期の山城と考えられる。このように出土遺物と検出された遺構には時期差があり、今回の調査では戦国期の確実な遺物は認められなかった。今後の調査で戦国期の遺物が出土する可能性も十分想定され、今後の調査課題のひとつと考える。ここでは本遺跡で出土した中世遺物からどのような遺跡の性格が想定されるか検討してみたいと思う。また No.21 トレンチ内で同安窯系青磁碗と土師器坏が合せ口の状態で出土しており、このうち同安窯系青磁碗の高台内には「上」の墨書が認められた。これについて考察を行いたいと思う。

①中世の出土遺物について

まず本遺跡における中世遺物の出土状況は、表採・表土や山城機能時の造成土・遺構埋土など今回の調査範囲の全域にわたって出土している。その年代幅は 11 世紀後半から 14 世紀代で、12 世紀代中頃から後半にかけての中国産陶磁器が多く出土しており、山城造成時の造成土直下の旧表土では土師器皿・坏などが共伴して出土しているため、本遺跡における出土遺物の主体をなす。この前後の遺物の出土数は少なく、11 世紀後半から 12 世紀前半の遺物で木戸編年Ⅲ - a に比定される滑石製石鍋（Fig.29 - 23）や、松本編年Ⅰ～Ⅱ期に比定される土師器坏（Fig.79 - 34 他）が出土しており、13 世紀以降の遺物の下限としては国産では間壁編年Ⅲ期に比定される 14 世紀代後半の備前焼擂鉢（Fig.78 - 31 他、PL.19 - 44）、徳永編年Ⅲ類に比定される土師質土器の鍋（Fig.19 - 3）が出土しているが時期幅が 14 世紀中葉～ 16 世紀前葉まで降る可能性もあるとされているため参考までに挙げておく。いずれも中世後期の遺物である。また輸入陶磁器では 13 世紀中頃から 14 世紀初頭前後の口縁端部が口禿げとなる中国産白磁碗（Fig.78 - 15：大宰府編年椀Ⅸ類）が下限となっている。今回の調査では徳永編年の土師質土器の鍋Ⅲ類が 16 世紀代まで降る可能性があるが、これを除くと山城の機能時の 16 世紀代を含む 15 世紀代以降の確実な遺物は認められなかった。

次に本遺跡で主体となっている中世前期の出土遺物の器種構成をみてみると、供膳具として松本編年Ⅱ～Ⅲ期に比定される土師器皿（Fig.80 - 39）・坏（Fig.66 - 3）、中国産龍泉窯系青磁碗・皿（大宰府編年椀・皿Ⅰ類）、同安窯系青磁碗・皿（大宰府編年椀・皿Ⅰ類など）・白磁碗（大宰府編年椀Ⅴ - 4・Ⅷ類）・皿（大宰府編年皿Ⅲ・Ⅷ類）、調理具として東播系須恵器捏鉢（Fig.49 - 3：森田編年第 2 期第 1 段階）、貯蔵具として中世須恵器甕、中国陶器壺（Fig.69 - 3 他、PL.18 - 31）、煮炊具として木戸編年Ⅲ - a に比定される滑石製石鍋（Fig.29 - 23）など日常的な生活感のある内容の遺物が出土している。この他に土師質土器の香炉（Fig.59 - 2、PL.17 - 27）、碁石状石製品（Fig.64 - 1、82 - 48・49・50、PL.17 - 27）、中国産の白磁水注（Fig.78 - 19 他、PL.20 - 47）や青白磁合子（Fig.80 - 57・81 - 70・81 - 71・82 - 87、PL.21 - 54・21 - 58・21 - 59・22 - 67）・碗（Fig.73 - 1、PL.18 - 33）、内面に鉄絵が施文される陶器の黄釉盤（Fig.28 - 13 他、PL.14 - 7）などが出土しており、中世前期における遺跡の主体者の嗜好や威信財的な役割を有する遺物なども認められる。特に合子は 4 個体分出土しており、他の遺跡の出土例では墓の副葬品や経塚などでの出土が認められる [5] など宗教性のある遺物としても注目される。これらの遺物の

同時性や組成についてはさらに検討を要するが、中国産陶磁器やそれに共伴する土師器坏・皿などの12世紀中頃から後半の短期間にこれらの遺物を大量に消費する人々が存在したことは確かである。以上のように今回の調査では中世前期に供膳具や貯蔵・煮炊具など日常性のある遺物と香炉や白磁水注、合子など宗教に関連するような遺物が確認され、一般的な庶民が山頂部に居住していた痕跡ではないと考えられる。今回の調査で出土した中世遺物は火葬墓や火葬場を想定している土坑SK1からも出土しており、検出状況から遺構に伴う可能性が高い。また未掘のため遺物は確認できていないが、お堂のような建築物が想定される円形掘立柱建物SB9などの検出遺構などから宗教的な性格を有する遺跡であると考える。

②No.21トレンチ出土の墨書土器について

鎮西山城跡の発掘調査ではNo.21トレンチにおいて溝状遺構または土坑より同安窯系青磁碗と土師器坏が合せ口の状態で検出された。この内、同安窯系青磁碗には高台内に「上」の墨書が認められた。今回の調査では調査区内から多くの12世紀中頃から後半にかけての中国産陶磁器が出土しているが墨書が認められたのは当該遺物の1点のみであった。中世における墨書土器は日宋貿易における住蕃貿易[7]の関連遺物として従来より注目されており、近年の発掘調査で本州（兵庫県沿海、奥州藤原氏の平泉）や九州（長崎県、熊本県、宮崎県）でも出土例が数例みられるようだが、その多くが日宋貿易の拠点となっていた福岡県の博多遺跡群より出土している[8]。今回出土した墨書土器と同一の「上」と墨書された陶磁器は博多遺跡群にも認められ、大庭康時の博多遺跡群出土墨書資料集成[8]によると1955年から2001年に刊行された44冊の報告書に掲載された墨書のある輸入陶磁器865点の内、平安末から鎌倉時代のもので「上」の一文字を墨書したものは青磁が6点（龍泉窯系碗4点、同安窯系碗1点・皿1点）、白磁が9点（碗5点、皿4点）、青白磁碗が1点の計16点に認められ、これは掲載資料全体に対して約2%を占める。博多遺跡群から出土する11世紀から12世紀の中国陶磁器には住蕃貿易[7]に関連する中国人の姓名や「綱（輸送する荷物の組単位）」の一文字を墨書するものやその両方を組み合わせて墨書するものが多く認められており、これは荷物の識別をするためのものと考えられている[9]。これに対し「上」の墨書が何を意味するのかは未だ不明のようであるが、博多遺跡群出土の墨書には「中」や「下」の文字も認められ、品質や人名の墨書と同様に商品管理などのために墨書されたものと推測される。博多遺跡群で出土している「上」の文字を有する墨書土器は数量的には大量とはいえないが、一定の数量が出土しており偶然ではなく目的をもって墨書されていると考える。今回当該遺跡で出土したものも博多で出土している「上」と同じ意味合いで墨書されたものであるならば、鎮西山城跡に搬入後に墨書されたものではなく、すでに「上」の文字が墨書された状態であったと推測され、住蕃貿易に関連する人々によって当該遺跡に今回出土した中国産陶磁器と共にもたらされた可能性があると考える。

4．まとめ

鎮西山城跡の中世山城の遺構については、今回の調査により地表面観察のみではわからなかった多くの新たな知見を得ることができた。まず曲輪Ⅰ（主郭部）において現在の土手状の高まりが人工的に盛土された土塁であること、土塁直下に土塁構築以前の遺構が存在する可能性があることが挙げられる。次に曲輪Ⅱ（副郭部）では曲輪内が溝状遺構や堀切によって区画され、中央部には長屋風の掘立柱建物が構築されていた。また曲輪Ⅱ縁辺部は切土造成後に盛土造成を行っており、縁辺部のやや内側に溝状遺構が廻っていることから溝状遺構と曲輪Ⅱ縁辺部の端部の間は土塁が構築されていた可能性がある。さらに曲輪Ⅱ縁辺部の南側には部分的ではあるが柵列が検出されており柵によって防御されていたことが判明した。この他にも主・曲輪Ⅱ直下に埋没する横堀が改めて検出され、横

堀が曲輪Ⅰ西・北西側を除く曲輪直下を取り囲むように廻っている状況が確認できた。鎮西山城跡は今回の発掘調査以前から地表面観察による山城の構造から戦国期の山城と考えられてきた[4]が、改めて中世の城館遺構であることが判明した。さらに最終的な現在の山城の姿は曲輪直下の斜面への進入を阻むように囲繞する横堀の存在によって16世紀代の遺構と考えることができる[1]。このように新たに判明したことも多くあったが、まだ城の出入口や築城主体者など不明な部分も多く、今回の調査では遺構に伴うものも含めて平安時代末から鎌倉時代の遺物しか出土しておらず、それぞれの遺構の帰属時期が明確にできていない。このため、山城築城時や山城以前の遺構の判別が困難となっており、曲輪Ⅱで検出された円形掘立柱建物（SB9）のように遺構の形状や他の遺跡の類似例と比較検討によって時期の推定を行っている。前述のとおり山上で平安時代末から鎌倉時代の中国産陶磁器や土師器類などが多く出土する状況から同時期に宗教関係の遺跡可能性を指摘されており、遺物では白磁の水注、青白磁の合子、土師質の香炉片などがその候補に挙げられるが、現在のところ確実な遺構・遺物が出土しているとはいえない。今後の調査で今回の調査では判明しなかった中世山城以前の遺構や中世山城遺構が新たに検出され、さらに周辺の城館との山城構造の比較検討により築城主体者などのが解明されていくことが期待される。

【註】

1）文化庁文化財部記念物課 「第Ⅴ章　城館の調査」『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編』 2013

2）大分教育委員会 『横尾遺跡9』 1974　の報告では東側は小穴が撹乱などで喪失している可能性があるとされている。

3）長野県更埴市教育委員会『屋代城跡範囲確認調査報告書』 1995

4）佐賀県教育委員会 『佐賀県中近世館跡緊急分布調査報告書Ⅱ　佐賀県の中近世城館　第2集　各説編1（三養基・神埼・佐賀地区）』 佐賀県文化財調査報告書第201集　2013

5）森本朝子 「博多遺跡出土の合子について」『博多研究会誌　博多遺跡群出土墨書資料集成2』第11号　博多研究会　2003

6）横堀の定義は研究者によって差異があるようだが、ここでは文化庁監修の『発掘調査のてびき 各種遺跡調査編』に従うこととする。それによると横堀とは、敵の斜面への進入を防ぐために山城に曲輪の周囲をとりまくように巡らした堀とされ、平地居館とは区別される。構築時期は16世紀第2四半期以降に関東や東海の山城で採用され、やがて全国に広がったが九州では導入がやや遅れ、畝状空堀群と横堀を組み合わせたものが16世紀後半に認められるようである。鎮西山城跡には畝状空堀群こそ認められないが上記と同様の横堀を有しており、少なくとも16世紀第2四半期以降に構築または改修をうけた城館と考えられる。

7）中国（宋）の商人が博多に中国人の街をつくり、そこに居住して中国と日本を往来して行った貿易のこと（亀井明徳 1986）。

8）大庭康時 「墨書陶磁器をめぐる最近の状況」『博多研究会誌　博多遺跡群出土墨書資料集成2』第11号　博多研究会　2003

9）大庭康時 「墨書陶磁器」『中世都市・博多を掘る』 海鳥社　2008

【引用・参考文献】

上峰村 『上峰村史』 1979

佐賀県教育委員会 『九州新幹線西九州ルート建設に伴う埋蔵文化財調査報告書（1）甕屋窯跡・袴野城跡』
佐賀県文化財調査報告書第221集　2019

亀井明徳 『日本貿易陶磁史の研究』 1986

木戸雅寿 「Ⅲ土器・陶磁器13. 石鍋」『中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会編　1995

千田嘉博 『織豊系城郭の形成』 東京大学出版会　2000

徳永貞紹　「肥前における中世後期の在地土器」『中近世土器の基礎研究』Ⅵ　日本中世土器研究会　1990

松本隆昌　「肥前（佐賀県）における土器からみた貿易陶磁-肥前府中の古代末～中世前半の資料から-」『中近世土器の基礎研究』Ⅺ　日本中世土器研究会　1996

山本信夫　『大宰府条坊XV - 陶磁器分類編 - 』太宰府市の文化財　第49集　太宰府市教育委員会　2000

※城に関する用語は『発掘調査のてびき　各種遺跡調査編　第Ⅴ章　城館の調査』を用いている。

Tab. 1　遺物一覧表①

挿図番号	種別	器種	法量（cm）は復元・最大値			出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
			口径/長さ	器高/幅	底径/高台径							
12 - 1	白磁	水注×壺	－	(1.3)	－	F・G1、F2 No.1トレンチ 表土	釉調:青白色 露胎部:淡黄灰色	精緻、砂粒、黒色粒	良	内面:回転ナデ	頸部破片	－
14 - 1	白磁	碗	－	(1.5)	－	E2、F1・2 No.2トレンチ 表土	釉調:黄白色	精緻	良	－	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
14 - 2	土師器	坏	－	(2.2)	－	E2、F1・2 No.2トレンチ 表土	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、石英、雲母	やや不良	内面:ヨコナデ 外面:ヨコナデ	口縁部破片	器面摩耗により調整不明瞭 口縁端部に煤付着 11C後半～12C代
19 - 1	須恵器	大蓋	－	(2.5)	－	主郭部　D5 No.6トレンチ 表土	内面:暗灰色 外面:暗灰色	砂粒、雲母、黒色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部付近破片	ⅠB期（大宰府） 7C末
19 - 2	青磁（同安）	碗	－	(2.5)	－	主郭部　F5 No.6トレンチ 表土	釉調:緑色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、ヘラ描き文 外面:櫛目文	口縁部破片	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
19 - 3	土師質土器	鍋	－	(5.3)	－	主郭部　F5 No.6トレンチ 表土	内面:橙茶色 外面:橙茶色	砂粒、石英、角閃石、白色粒、雲母	良	内面:ハケメ 外面:煤付着のため調整不明	胴部破片	外面に煤付着 13C～14C代（湯Ⅲ類、徳永編年）
21 - 1	中国陶器	鉢×蓋	－	(2.4)	(7.5)	主郭部　G・H5 No.7トレンチ 表土	釉調:灰褐色	黒色粒	良	－	底部1/6残存	－
21 - 2	国産陶器（備前）	壺×甕	－	(7.6)	(20.0)	主郭部　G・H5 No.7トレンチ 7層	釉調:茶褐色、灰緑色 露胎部:灰茶色	白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ヘラケズリ、ナデ	底部1/8残存	－
21 - 3	土師器	小皿	－	1.0	－	主郭部　G・H5 No.7トレンチ 表土	内面:にぶい橙色 外面:にぶい橙色	雲母、白色粒、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	－
23 - 1	白磁	碗	－	(5.0)	－	主郭部　D5・6 No.8トレンチ 3～5層	釉調:灰白色	精緻、砂粒、黒色粒	良	内面:沈線	口縁～体部下位破片	椀Ⅴ - 4×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
23 - 2	白磁	碗	－	(3.6)	－	主郭部　D5・6 No.8トレンチ 6層	釉調:黄白色	精緻	良	－	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
23 - 3	青磁（同安）	碗	－	(3.4)	－	主郭部　D5・6 No.8トレンチ 6層	釉調:緑色	精緻	良	内面:沈線、鞠点描文、ヘラ描き文 外面:櫛目文	口縁部約1/9残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
23 - 4	青磁（同安）	碗	－	(2.5)	－	主郭部　D5・6 No.8トレンチ 3～5層	釉調:黄緑色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線 外面:沈線、櫛目文	口縁部破片	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
23 - 5	瓦器	椀	－	(1.0)	(7.1)	主郭部　D5・6 No.8トレンチ 6層	内面:黒色（炭素吸着による） 外面:黄橙色	砂粒、石英、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:摩耗のため調整不明 外面:回転ナデ、ナデ	高台1/5残存	－
25 - 1	白磁	碗	(16.6)	(4.8)	－	主郭部　C・D6 No.9トレンチ 2～4層	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	－	体部約1/8残存	椀Ⅴ - 4×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 1	白磁	碗	(16.0)	(3.6)	－	副郭部　E7 No.11トレンチ 表土	釉調:黄白色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線	口縁～体部約1/8残存	椀Ⅴ - 4×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 2	白磁	皿	(13.8)	4.0	(4.8)	副郭部　D13 No.11トレンチ 表土	釉調:青白色 露胎部:灰白色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、印花文 外面:回転ヘラケズリ	高台1/4、口縁～体部約1/15残存	14C前半～14C末（森田B群）
28 - 3	青磁（龍泉）	碗	(15.4)	(4.6)	－	副郭部 No.11トレンチ 15・16層	釉調:青緑色	精緻	良	内面:沈線、片彫蓮花文	口縁～体部約1/5残存	椀Ⅰ - 2類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 4	青磁（龍泉×同安）	碗	－	(1.8)	－	副郭部　D13 No.11トレンチ 表土	釉調:緑色	精緻	良	－	口縁部破片	－
28 - 5	青磁（龍泉）	皿	(9.8)	(2.0)	－	副郭部　E10 No.11トレンチ 表土	釉調:青緑色	精緻	良	内面:沈線	口縁～体部約1/6残存	皿Ⅰ類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 6	青磁（同安）	碗	(16.0)	(2.5)	－	副郭 No.11トレンチ 15・16層	釉調:黄緑色	精緻、砂粒	良	内面:沈線 外面:櫛目文	口縁部約1/6残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 7	青磁（同安）	碗	－	(5.0)	(4.9)	副郭部　E11 No.11トレンチ 検出	釉調:緑色 露胎部:灰褐色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、鞠点描文、ヘラ描き文 外面:回転ヘラケズリ、櫛目文、沈線	体部下位～高台約1/2残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 8	青磁（同安）	皿	－	(1.0)	(4.6)	副郭部　D12 No.11トレンチ 表土	釉調:緑色 胎土:灰色	精緻、砂粒	良	－	底部1/2、体部下位約1/7残存	皿Ⅰ - 1a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 9	青磁（同安）	皿	11.2	2.3	4.4	副郭部 No.11トレンチ 15・16層	色調:黄緑色 露胎部:灰色	精緻	良	内面:鞠点描文	口縁～体部1/5欠損	皿Ⅰ - 2b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 10	青磁（同安）	皿	(10.8)	1.7	4.9	副郭部 No.11トレンチ 15・16層	釉調:黄緑色 露胎部:淡黄灰色	精緻	良	内面:沈線、鞠点描文、ヘラ描き文 外面:回転ヘラケズリ	底部完存、口縁～体部1/3残存	皿Ⅰ - 2b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 11	青磁（同安）	皿	(10.8)	2.2	(4.8)	副郭部 No.11トレンチ 15・16層	釉調:緑色 露胎部:灰色	精緻	良	内面:沈線、鞠点描文、ヘラ描き文 外面:回転ヘラケズリ	全体の約1/2残存	皿Ⅰ - 2b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
28 - 12	青磁（同安）	皿	(10.7)	(1.6)	－	副郭部 No.11トレンチ 15・16層	釉調:黄緑色	精緻	良	－	口縁部1/3、体部約1/4残存	皿Ⅰ類（大宰府） 12C中頃～12C終半（D期）
28 - 13	中国陶器	盤	(32.0)	10.5	(22.6)	副郭部　D12 No.11トレンチ 表土	釉調:褐色 露胎部:灰色、暗灰色	黒色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ、回転ヘラケズリ	口縁～体部中位1/8、体部中位～底部1/16残存	盤Ⅰ - 1a類（大宰府） 11C後半～12C代か？ （中世Ⅰ～Ⅱ期頃か） 28 - 14と同一個体の可能性あり
28 - 14	中国陶器	盤	－	(1.2)	－	副郭部　D13 No.11トレンチ 表土	釉調:灰黄色、茶褐色（文様部分） 露胎部:灰褐色	白色粒、黒色粒、雲母	良	内面:鉄絵 外面:ナデ	底部中心部1/4残存	28 - 13と同一個体の可能性あり

Tab. 2　遺物一覧表②

挿図番号	種別	器種	法量（cm）は復元・最大値			出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
			口径/長さ	器高/幅	底径/高台径							
28 - 15	中国陶器	耳壺	－	(2.8)	－	副郭部　D12 No.11トレンチ 表土	内面:灰褐色 外面:茶灰色	精緻、砂粒、黒色粒、赤褐色粒	良	内面:ナデ、指頭圧痕 外面:ナデ 耳部:ナデ、指頭圧痕	肩部、耳部の一部破片	－
29 - 16	中世須恵器	捏鉢	－	(3.8)	－	副郭部　D13 No.11トレンチ 表土	内面:黄灰色 外面:黄灰色	砂粒、黒色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、ナデ	口縁部破片	東播系須恵器 12C末～13C初頭 （第2期第2段階、森田福年）
29 - 17	土師器	坏	(16.3)	2.8	(10.8)	副郭部　D11 No.11トレンチ 表土	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、赤褐色粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁部1/6、体部～底部1/4残存	回転糸切り離し 12C後半～13C前後（初頭） （Ⅳ～Ⅵ期、松本編年）
29 - 18	土師器	坏	(14.0)	2.7	(10.0)	副郭部 No.11トレンチ 15・16層	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	雲母、石英、長石、砂粒、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ、静止糸切り	口縁～体部約1/7、底部の一部残存	回転糸切り離し 13C前後（初頭）～13C中頃 （Ⅵ～Ⅶ期、松本編年）
29 - 19	土師器	坏	－	(2.5)	－	副郭部　D13 No.11トレンチ 表土	内面:にぶい橙色 外面:にぶい橙色	雲母、石英、砂粒、白色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	11C後半～12C代
29 - 20	土師器	小皿	(8.0)	1.2	(6.6)	副郭部　D12 No.11トレンチ 表土	内面:橙色 外面:橙色	長石、石英、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部1/8、底部2/3残存	回転糸切り離し、板状圧痕 12C～13C代
29 - 21	土師器	小皿	(8.2)	1.0	(6.6)	副郭部　D11 No.11トレンチ 表土	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、小石、角閃石、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/4残存	回転糸切り離し
29 - 22	土師器	小皿	(8.6)	1.2	(6.5)	副郭部　E10 No.11トレンチ 表土	内面:橙色 外面:茶褐色	石英、雲母、白色粒、赤褐色粒、角閃石、砂粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁～底部約1/7残存	回転糸切り離し
29 - 23	滑石製品	石鍋	－	(2.9)	－	副郭部　D12 No.11トレンチ 表土	－	滑石	－	－	口縁部破片	11C後半～12C前半（Ⅲ - a類、木戸編年）
29 - 24	土製品	鞴の羽口	(4.9)	(3.6)	－	副郭部　D13 No.11トレンチ 表土	内面:茶褐色 外面:にぶい橙色	砂粒、白色粒、雲母、赤褐色粒、黒色粒	良	内面、スジ状圧痕	破片	最大厚:（2.8）cm
31 - 1	中国陶器	耳壺	－	(2.7)	－	副郭部　C・D10 No.12トレンチ 表土	内面:灰褐色 外面:灰褐色	黒色粒、白色粒	良	内面:ナデ 外面:回転ナデ、沈線	耳部分のみ残存	－
33 - 1	白磁	碗	－	(3.6)	－	副郭部　B・C10 No.13トレンチ 表土	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	－	口縁～体部上半破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
33 - 2	中国陶器	鉢	－	(6.8)	－	副郭部　B・C10 No.13トレンチ 表土	内面:暗灰黄色 外面:灰黄色	砂粒、黒色粒　石英	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、ナデ	胴部下位～底部破片	－
33 - 3	中国陶器	甕	－	(5.4)	－	副郭部　B・C10 No.13トレンチ 表土	釉調:黄茶色、褐茶色、灰黄色 露胎部:にぶい黄橙色、灰黄色	砂粒、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ	口縁部破片	外面に目跡 甕Ⅳ類（大宰府） 12C後半～13C代（中世Ⅱ～Ⅲ期）
33 - 4	土師器	坏	(17.6)	2.4	(12.8)	副郭部　B・C10 No.13トレンチ 表土	内面:にぶい橙色 外面:にぶい橙色	砂粒、長石、赤褐色粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部1/8、底部1/5残存	回転糸切り離し、板状圧痕 12C前半～12C末 （Ⅲ～Ⅳ期、松本編年）
33 - 5	土師器	小皿	－	1.2	－	副郭部　B・C10 No.13トレンチ 表土	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁部1/6、体部～底部1/12残存	回転糸切り離し
35 - 1	白磁	碗	－	(1.9)	－	副郭部　F・G11 No.14トレンチ 6層	釉調:青白色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線	口縁部破片	椀Ⅵ - 1類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
35 - 2	白磁	碗	(17.2)	(3.1)	－	副郭部　F・G11 No.14トレンチ 3層	釉調:灰白色	精緻	良	内面:沈線	口縁～体部上位1/5残存	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
35 - 3	中国陶器	水注×壺	－	(2.4)	－	副郭部　F・G11 No.14トレンチ 2層	釉調:灰黄色	精緻、砂粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	口縁部内面に目跡 耳壺XI類（大宰府）か？
35 - 4	土師器	坏	(16.1)	2.5	(11.2)	副郭部　F・G11 No.14トレンチ 5～7層	内面:にぶい橙色 外面:にぶい橙色	砂粒、長石、雲母	良	内面:回転ナデ、ナデ 外面:回転ナデ	口縁～底部1/8残存	回転糸切り離し、板状圧痕　畿明皿 12C末～13C前半 （Ⅴ～Ⅵ期、松本編年）
37 - 1	青磁（龍泉）	碗	(15.6)	(5.2)	－	副郭部　E・F12・13　No.15トレンチ 3層	釉調:緑色	精緻	良	内面:沈線、分割線、片彫文	口縁～体部約1/5残存	椀Ⅰ - 4b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
37 - 2	青磁（同安）	碗	－	(3.0)	－	副郭部　E・F12・13　No.15トレンチ 5・6層	釉調:黄緑色	精緻	良	内面:沈線、鞠点描文 外面:櫛目文	口縁部破片	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
37 - 3	中世須恵器	捏鉢	－	(4.5)	－	副郭部　E・F12・13 No.15トレンチ 5・6層	内面:灰色 外面:灰色	白色粒、砂粒、石英	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	東播系須恵器 12C末～13C初頭 （第2期第2段階、森田福年）
37 - 4	中世須恵器	捏鉢	－	(1.7)	－	副郭部　E・F12・13 No.15トレンチ 5・6層	内面:灰色 外面:灰色	石英、砂粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	東播系須恵器 12C末～13C初頭 （第2期第2段階、森田福年）
37 - 5	土師質土器	鍋	－	(4.6)	－	副郭部　E・F12・13 No.15トレンチ 5・6層	内面:暗灰色 外面:にぶい橙色	黒色粒、白色粒	良	内面:摩耗により不明 外面:ヨコナデ、ハケメ	口縁部破片	内面に煤付着 12C～13C代
40 - 1	白磁	碗	－	(1.6)	－	副郭部　D13・14 No.16東側トレンチ 2b～5層	釉調:灰白色	精緻	良	－	口縁部破片	椀Ⅵ - 1類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
40 - 2	白磁	碗	(15.8)	(1.6)	－	副郭部　D13・14 No.16東側トレンチ 2b～5層	釉調:灰白色	精緻	良	内面:沈線	口縁部1/10残存	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
40 - 3	青磁（龍泉）	碗	－	(2.8)	－	副郭部　D13・14 No.16東側トレンチ 2b～5層	釉調:緑色	精緻	良	内面:沈線、片彫文、櫛目文	口縁部破片	椀Ⅰ - 3a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
40 - 4	青磁（龍泉）	皿	(12.6)	(2.0)	－	副郭部　D13・14 No.16東側トレンチ 表土	釉調:青緑色	精緻、砂粒、黒色粒	良	－	口縁部約1/8残存	内外面に黒色付着物 皿Ⅰ類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）

Tab. 3　遺物一覧表③

挿図番号	種別	器種	法量（cm）（）は復元・最大値			出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
			口径/長さ	器高/幅	底径/高台径							
41 - 1	白磁	碗	－	(4.0)	－	副郭部　E13 No.16西側トレンチ 表土	釉調:黄白色	精緻、砂粒	良	－	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
43 - 1	白磁	水注×壺	－	(11.2)	－	主郭部　G3 No.17トレンチ 表土	釉調:乳白色、黄色	精緻	良	－	体部下位1/4残存	－
43 - 2	青磁 (龍泉)	碗	－	(3.7)	－	主郭部　G3 No.17トレンチ 表土	釉調:緑色	精緻	良	内面:沈線、片彫蓮花文	口縁部破片	椀Ⅰ - 2類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
43 - 3	青磁 (同安)	碗	(15.4)	(3.9)	－	主郭部　G3 No.17トレンチ 表土	釉調:黄緑色	精緻	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:箆目文	口縁～体部上半1/8残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
45 - 1	青磁 (同安)	碗	－	(3.6)	－	副郭部　F・G7 No.18トレンチ 表土	釉調:黄緑色	精緻	良	内面:櫛点描文、ヘラ描き文 外面:箆目文	口縁部破片	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
47 - 1	土師質 土器	鍋	－	(2.1)	－	副郭部　F・G8 No.19トレンチ 表土	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、石英、角閃石、雲母、赤褐色粒	良	内面:ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	－
49 - 1	白磁	碗	－	(2.1)	－	副郭部　F・G9 No.20トレンチ 表土	釉調:灰白色	精緻	良	－	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
49 - 2	青磁 (龍泉)	皿	(10.2)	(2.3)	－	副郭部　F・G9 No.20トレンチ 表土	釉調:緑色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、櫛目文	口縁部約1/6残存	皿Ⅰ - 1c類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
49 - 3	中世須恵器	捏鉢	－	(5.3)	－	副郭部　F・G9 No.20トレンチ 表土	内面:淡黄灰色 外面:灰色、淡黄灰色	砂粒、雲母、黒色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	東播系須恵器 12C中頃～12C後半 （第2期第1段階、森田編年）
51 - 1	白磁	碗	－	(2.9)	－	副郭部　B・C11 No.21トレンチ 2層	釉調:乳白色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
51 - 2	青磁 (同安)	碗	(17.0)	7.0	5.0	副郭部　B・C11 No.21トレンチ （SX17）7層	釉調:黄緑色 露胎部:灰緑色	精緻	やや良	内面:沈線、櫛点描文、片彫文 外面:箆目文、回転ヘラケズリ	口縁～体部約1/2欠損	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
51 - 3	青磁 (同安)	碗	15.4	6.8	5.4	副郭部　B・C11 No.21トレンチ 8層	釉調:黄緑色 露胎部:茶黄色	精緻	やや良	内面:沈線、櫛点描文、片彫文 外面:箆目文、回転ヘラケズリ	口縁部1/4欠損	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
51 - 4	中国陶器	水注×壺	－	(1.6)	－	副郭部　B・C11 No.21トレンチ 表土	釉調:灰緑色	精緻、砂粒	良	－	口縁部破片	－
51 - 5	土師器	坏	16.3	3.1	12.0	副郭部　B・C11 No.21トレンチ （SX17）7層	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、雲母	やや良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	完形	回転糸切り離し、板状圧痕 内外面に煤付着 12C前半～末（Ⅲ～Ⅴ期、松本編年）
54 - 1	白磁	碗	(16.8)	(3.8)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	釉調:黄白色	精緻、砂粒	良	内面:沈線	口縁～体部約1/6残存	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 2	白磁	碗	(15.8)	(5.4)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	釉調:灰白色 露胎部:灰白色	精緻	良	外面:回転ヘラケズリ	口縁～体部上半1/4、体部下半1/3残存	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 3	青磁 (龍泉)	碗	(15.5)	6.9	6.0	副郭部　C10 No.23トレンチ 1層	釉調:黄緑色 露胎部:淡黄灰色	精緻	良	内面:沈線、片彫文 外面:釉の掻き取り	口縁～体部1/8残存、底部完存	椀Ⅰ - 4a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 4	青磁 (同安)	碗	(16.0)	(4.0)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 1層	釉調:黄緑色	精緻、砂粒	良	内面:沈線、櫛点描文 外面:箆目文	口縁部約1/8残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 5	青磁 (同安)	碗	(15.8)	(5.3)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	釉調:黄緑色	精緻、砂粒	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:箆目文	口縁部わずかと体部上位約1/6残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 6	青磁 (同安)	碗	(15.8)	(4.8)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 1層	釉調:黄緑色	精緻、砂粒	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:箆目文	口縁部わずかと体部上位約1/5残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 7	青磁 (同安)	碗	(16.0)	(6.3)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	釉調:黄緑色 露胎部:淡黄色、灰色	精緻	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:箆目文、回転ヘラケズリ	口縁～体部1/8残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 8	青磁 (同安)	皿	(10.8)	(1.9)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 表土	釉調:緑色	精緻	良	内面:櫛点描文、ヘラ描き文	口縁～体部1/5残存	皿Ⅰ - 2b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
54 - 9	中国陶器	壺	－	(3.1)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 表土	釉調:灰褐色	雲母、白色粒、砂粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、沈線	頸部約1/6の破片	－
54 - 10	土師器	坏	(16.9)	3.0	(12.1)	副郭部　C10 No.23トレンチ 1層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、白色粒、雲母、角閃石、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の約1/2残存	回転糸切り離し 12C前半～12C末 （Ⅲ～Ⅴ期、松本編年）
54 - 11	土師器	坏	－	(2.1)	－	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、赤褐色粒、雲母	やや不良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	－
54 - 12	土師器	小皿	(8.5)	1.0	(7.2)	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、長石、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の約1/3残存	回転糸切り離し、板状圧痕
54 - 13	土師器	小皿	(9.4)	0.9	(7.0)	副郭部　C10 No.23トレンチ 2層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/6残存	回転糸切り離し、板状圧痕
56 - 1	白磁	碗	－	(2.5)	－	副郭部　C12 No.24トレンチ 表土	釉調:灰白色	精緻	良	－	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
56 - 2	中国陶器	耳壺	－	(4.6)	－	副郭部　C12 No.24トレンチ 2層	釉調:暗茶褐色	精緻、白色粒、黒色粒	良	内面:回転ナデ 外面:沈線	頸部～肩部破片	－

Tab. 4　遺物一覧表④

挿図番号	種別	器種	法量（cm）は復元・最大値			出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
			口径/長さ	器高/幅	底径/高台径							
59 - 1	青磁（龍泉）	皿	(9.8)	2.4	(3.4)	副郭部　F10 No.26トレンチ 2層	釉調:緑色 露胎部:茶灰色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、櫛目文 外面:回転ヘラケズリ	口縁～底部1/3残存	皿Ⅰ - 2c類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
59 - 2	土師質土器	香炉	(10.4)	(5.9)	－	副郭部　E・F10 No.26トレンチ 2層	内面:灰黄色 外面:橙色、淡橙茶色	砂粒、白色粒、雲母、黒色粒	良	内面:回転ナデ、ナデ、指頭圧痕 外面:回転ナデ、ナデ	口縁～体部1/8、底部1/2残存	脚が3本か？ 内面に煤付着か？
61 - 1	土師器	坏	(12.4)	2.5	(9.1)	副郭部　E9 SA2-P4　1層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、白色粒、赤褐色粒、雲母	やや良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部1/6、底部の一部残存	回転糸切り離し 13C中頃～13C後半 （Ⅷ～Ⅸ期、松本編年）
64 - 1	石製品	碁石状石製品（黒）	1.9	1.6	－	副郭部　D10 SB6－P3　1・2層	－	黒色粘板岩	－	－	完形	厚さ:0.8cm　重量:4.0g
64 - 2	土製品	壁土	(6.4)	(3.8)	－	副郭部　D10 SB6-P3　1・2層	表面:茶褐色 胎土:にぶい黄橙色	砂粒、白色粒、雲母	良	ナデか？	破片	最大厚:（3.4）cm 表面に十字型の工具痕？あり
66 - 1	青磁（龍泉）	碗	－	(2.1)	－	副郭部　D10 SB7-P4　1層	釉調:青緑色	精緻	良	内面:櫛目文、片彫文 外面:沈線、櫛目文、片彫蓮弁文	口縁部破片	椀Ⅰ - 6a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
66 - 2	土師器	坏	－	(2.4)	－	副郭部　E10 SB7-P2　1層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、赤褐色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	－
66 - 3	土師器	坏	(14.9)	(2.4)	－	副郭部　D10 SB7-P11　1層	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ	口縁部1/8残存	12C前半～12C中頃か？ （Ⅲ期、松本編年）
66 - 4	土師器	坏	－	(1.9)	－	副郭部　E10 SB7-P7　1層	内面:にぶい橙色 外面:にぶい橙色	雲母、砂粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	－
66 - 5	土製品	壁土	(4.4)	(3.4)	－	副郭部　E10 SB7-P3　1・2層	表面:黒色 胎土:橙茶色	白色粒、赤褐色粒、雲母	－	－	小破片	最大厚:（3.8）cm
69 - 1	青磁（龍泉）	皿	(10.0)	(1.8)	－	副郭部　D11 SD4　1層	釉調:青緑色	精緻	良	内面:沈線、片彫文	口縁部1/8残存	皿Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
69 - 2	青磁（龍泉）	皿	(12.8)	(2.1)	－	副郭部　D11 SD4　1層	釉調:青緑色	精緻	良	内面:沈線	口縁～体部1/6残存	皿Ⅰ類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
69 - 3	中国陶器	耳壺	－	(2.1)	－	副郭部　D11 SD4　1層	釉調:灰緑色	精緻	良	－	口縁部破片	耳壺Ⅵ類（大宰府）か？
71 - 1	中国陶器	甕	－	(4.8)	－	副郭部　D～F8 SD5　堆積土一括	内面:暗茶褐色 外面:褐色	砂粒、白色粒、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ、ヨコナデ、同心円状当て具痕 外面:回転ナデ、ナデ	口縁部破片	甕Ⅲ類（大宰府） 13C代（中世Ⅲ期）
71 - 2	土師器	坏	－	(2.0)	－	副郭部　D～F8 SD5　堆積土一括	内面:にぶい橙色 外面:にぶい橙色	石英、雲母、白色粒、赤褐色粒	やや不良	内面:摩耗のため不明 外面:摩耗のため不明	口縁部1/10～1/12残存	－
73 - 1	白磁	碗	(16.6)	(4.7)	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	－	口縁～体部下半1/4残存	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期） 73 - 2・3と同一個体の可能性あり
73 - 2	白磁	碗	－	(4.0)	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	－	口縁～胴部上半破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期） 73 - 1・3と同一個体の可能性あり
73 - 3	白磁	碗	－	(2.4)	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	－	口縁部破片	椀Ⅴ - 4×Ⅷ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期） 73 - 1・2と同一個体の可能性あり
73 - 4	青磁（龍泉）	碗	(16.0)	(5.2)	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	釉調:緑色	精緻	良	－	口縁～体部上半1/6残存	椀Ⅰ - 1類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
73 - 5	青磁（龍泉×同安）	皿	－	(1.5)	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	釉調:黄緑色	精緻	良	－	口縁部破片	－
73 - 6	鉄製品	鉄釘	(3.7)	0.5	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	－	－	－	－	先端部欠損	－
73 - 7	鉄製品	鉄釘	(2.3)	0.4	－	F1　No.1トレンチ SK1　埋土一括	－	－	－	－	頭部、先端部欠損	－
75 - 1	青磁（同安）	碗×小碗	－	(2.7)	－	副郭部　D10 P2　埋土一括	釉調:緑色	精緻	良	内面:沈線	口縁部破片	－
76 - 1	青白磁	坏×皿	－	(1.5)	－	副郭部　C10 P3　埋土一括	釉調:青白色	精緻	良	内面:印花文	口縁部破片	13C末～14C代 （森田B群の可能性あり）
77 - 1	青磁（同安）	皿	(10.9)	(1.2)	－	副郭部　D11 P4　埋土一括	釉調:緑色	精緻	良	－	口縁部1/6残存	皿Ⅰ類（大宰府） 12C中頃～12C終半（D期）
78 - 1	白磁	碗	－	(3.0)	(6.8)	副郭部　C11　表土	釉調:灰白色 露胎部:淡黄灰色	精緻、黒色粒	良	外面:回転ヘラケズリ	高台約1/2残存	見込み部の釉を環状に掻き取る 椀Ⅷ類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
78 - 2	白磁	皿	(10.0)	2.2	(3.8)	副郭部　C11　表土	釉調:黄白色 露胎部:淡黄灰色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、ヘラ描き文 外面:回転ヘラケズリ	全体の1/4残存	皿Ⅷ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
78 - 3	白磁	水注	(11.6)	(4.5)	－	副郭部　D10　表土	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	－	口縁～頸部1/5残存	－
78 - 4	青磁（龍泉）	碗	(15.4)	(3.8)	－	副郭部　D10　表土	釉調:青緑色	精緻	良	内面:片彫文 外面:片彫蓮弁文、櫛目文	口縁～体部上半1/8残存	椀Ⅰ - 6a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）

Tab. 5　遺物一覧表⑤

挿図番号	種別	器種	法量（cm）は復元・最大値			出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
			口径/長さ	器高/幅	底径/高台径							
78 - 5	青磁（龍泉）	坏	－	(1.6)	－	副郭部　E7　表土	釉調:青緑色	精緻、砂粒	良	－	口縁部破片	口縁端部に輪花 坏Ⅲ類か？（大宰府） 13C中頃～14C初頃（F期）
78 - 6	中国陶器	水注×壺	－	(6.3)	(9.9)	副郭部　D10　表土	釉調:灰緑色 露胎部:灰黄色	精緻、雲母、白色粒、黒色粒	良	外面:回転ヘラケズリ	底部1/4残存	－
78 - 7	中国陶器	水注×壺	－	(7.1)	－	副郭部　D11　表土	釉調:赤茶色	精緻、黒色粒	良	－	体部下位1/8残存	－
78 - 8	中国陶器	水注	－	(3.6)	－	副郭部　D11　表土	釉調:緑褐色 露胎部:茶灰色	砂粒、赤褐色粒、雲母	良	－	注口部のみわずかに残存	－
78 - 9	国産陶器（備前）	壺	(13.4)	(4.0)	－	副郭部　F7　表土	内面:赤褐色、褐灰色 外面:褐灰色	精緻、白色粒、黒色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部1/4残存	13C末～14C代 （中世2期～3期、間壁ⅢA～ⅢB期）
78 - 10	国産陶器（備前）	壺×甕	－	(7.2)	－	副郭部　D10　表土	内面:赤茶色 外面:褐灰色	白色粒、黒色粒、赤褐色粒、砂粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	12C後半～13C中頃 （中世1期、間壁2期）
78 - 11	土師器	小皿	(8.9)	1.1	(7.6)	副郭部　C12　表土	内面:橙色 外面:橙色	雲母、砂粒、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁の一部と底部約1/4残存	回転糸切り離し
78 - 12	土師器	小皿	(8.4)	1.4	(6.7)	副郭部　C11　表土	内面:橙茶色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、石英、雲母、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/8残存	回転糸切り離し
78 - 13	白磁	碗	(16.8)	(2.8)	－	副郭部　D11　検出	釉調:黄白色	精緻	良	－	口縁部1/8残存	椀Ⅵ - 1a類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
78 - 14	白磁	碗	－	(4.2)	－	副郭部　E11　検出	釉調:灰白色 露胎部:黄褐色	精緻、黒色粒	良	－	口縁～体部1/12残存	椀Ⅴ - 4類×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
78 - 15	白磁	碗	(16.6)	(6.1)	－	副郭部　D10　検出	釉調:灰白色 露胎部:淡黄灰色	精緻、黒色粒	良	－	口縁～体部約1/6残存	口禿げ 椀Ⅸ類（大宰府） 13C中頃～14C前半（F期）
78 - 16	白磁	皿	(10.8)	(2.5)	－	副郭部　C11　検出	釉調:黄白色	精緻、茶褐色粒	良	内面:沈線、ヘラ描き文、櫛描き文	口縁～体部上半1/16、体部下半～底部1/6残存	皿Ⅶ - 1c類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
78 - 17	白磁	皿	(11.0)	(2.0)	－	副郭部　D13　検出	釉調:黄白色 露胎部:淡黄灰色	精緻	良	内面:白堆線	口縁部1/4残存	口縁端部に輪花 皿Ⅳ - 1b類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
78 - 18	白磁	皿	(9.6)	2.2	(4.4)	副郭部　D9　検出	釉調:灰白色 露胎部:淡黄灰色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線 外面:回転ヘラケズリ	全体の1/2残存	見込み部の釉を環状に掻き取る 皿Ⅲ - 1類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
78 - 19	白磁	水注×壺	(12.0)	(4.2)	－	副郭部　D10　検出	釉調:灰白色 露胎部:灰白色	精緻	良	－	口縁～頸部1/4残存	－
78 - 20	白磁	水注×壺	－	(1.4)	－	副郭部　E11　検出	釉調:黄白色 露胎部:灰白色	精緻	良	－	頸部破片	－
79 - 21	青磁（同安）	碗	(16.0)	(4.5)	－	副郭部　D12　検出	釉調:黄緑色 露胎部:淡黄灰色	精緻、砂粒	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:沈線、櫛目文	口縁～体部1/8残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
79 - 22	青磁（同安）	碗	－	(3.7)	4.6	副郭部　E9　検出	釉調:黄緑色 露胎部:淡灰色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:櫛目文、回転ヘラケズリ	体部下位～高台残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
79 - 23	青磁（龍泉）	Ⅲ	(10.5)	2.2	(3.9)	副郭部　E11　検出	釉調:青緑色 露胎部:淡黄灰色	精緻	良	内面:片彫魚文	口縁1/8、体部～底部1/3残存	皿Ⅰ - 2d類（大宰府） 12C中～12C後半（D期）
79 - 24	青磁（龍泉）	Ⅲ	－	(1.9)	－	副郭部　D11　検出	釉調:灰緑色	精緻	良	内面:ヘラ描き文	口縁部破片	－
79 - 25	中国陶器	水注×壺	－	(6.4)	－	副郭部　D12　検出	釉調:暗緑灰色	精緻、黒色粒	良	外面:沈線	体部上位1/8残存	胴部径:（21.1）cm
79 - 26	中国陶器	水注×壺	－	(4.2)	－	副郭部　D13　検出	釉調:灰緑色 露胎部:黄灰色	精緻、白色粒	良	－	頸部1/6残存	－
79 - 27	中国陶器	水注×壺	－	(4.7)	(9.6)	副郭部　D10　検出	釉調:灰緑色 露胎部:灰黄色	精緻、白色粒、黒色粒	良	外面:回転ヘラケズリ	体部下位～底部1/6残存	－
79 - 28	中国陶器	水注×壺	－	(6.3)	(9.0)	副郭部　D12　検出	釉調:灰緑色	精緻、白色粒	やや良	外面:回転ヘラケズリ	体部下位～底部1/8残存	－
79 - 29	中国陶器	耳壺	－	(3.6)	－	副郭部　D13　検出	釉調:暗茶褐色	精緻、白色粒、黒色粒	良	内面:回転ナデ 外面:波状沈線	頸部～肩部1/8残存	頸部径:（13.7）cm
79 - 30	中国陶器	甕	－	(4.2)	－	副郭部　D12　検出	内面:暗茶褐色 外面:暗茶褐色	砂粒、赤褐色粒、白色粒	良	内面:回転ナデ、同心円状当て具痕 外面:回転ナデ、平行タタキ後ナデ	口縁部破片	甕Ⅲ類（大宰府） 13C代（中世Ⅲ期）
79 - 31	国産陶器（備前）	擂鉢	－	(7.7)	－	副郭部　E11　検出	内面:暗茶褐色 外面:赤茶色	砂粒、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ、擂目 外面:回転ナデ	口縁～体部上位破片	12C中頃～12C末 （中世3期a段階、間壁Ⅲ期）
79 - 32	国産陶器（備前）	徳利×小壺	(7.2)	(2.3)	－	副郭部　D10　検出	釉調:赤茶色	砂粒	良	－	口縁部1/4残存	－
79 - 33	瓦器	椀	－	(3.7)	－	副郭部　E12　検出	内面:淡灰黄色、灰色 外面:淡灰黄色	砂粒、雲母、黒色粒	やや良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ、ミガキか？	口縁部破片	外面に煤付着

Tab. 6　遺物一覧表⑥

挿図番号	種別	器種	法量（cm）は復元・最大値			出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
			口径/長さ	器高/幅	底径/高台径							
79 - 34	土師器	坏	—	(3.1)	—	副郭部　E12　検出	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁部破片	11C後半～12C初頭か？ （Ⅰ～Ⅱ期、松本編年）
79 - 35	土師器	坏	(14.2)	(2.3)	—	副郭部　E12　検出	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、白色粒、雲母	やや良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部1/8残存	11C後半～12C中頃 （Ⅰ～Ⅲ期、松本編年）
79 - 36	土師器	坏	(13.5)	(2.4)	—	副郭部　E12　検出	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、雲母、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部1/8残存	13C前半～14C初頭 （Ⅶ～Ⅹ期、松本編年）
79 - 37	土師器	坏	—	(1.1)	(13.0)	副郭部　D10　検出	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、長石、赤褐色粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	底部1/4残存	回転ヘラ切り離し？、板状圧痕
80 - 38	土師器	小皿	(9.8)	1.0	(9.1)	副郭部　D12　検出	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/4残存	回転糸切り離し
80 - 39	土師器	小皿	(10.8)	1.4	(8.4)	副郭部　D13　検出	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、雲母、黒色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/6残存	回転糸切り離し、板状圧痕 11C末～12C中頃 （Ⅱ～Ⅲ期、松本編年）
80 - 40	土師器	小皿	(9.0)	1.3	(7.6)	副郭部　D11　検出	内面:橙茶色 外面:橙茶色	砂粒、雲母、白色粒、黒色粒、赤褐色粒	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/3残存	回転糸切り離し、板状圧痕
80 - 41	土師器	小皿	—	1.5	—	副郭部　E11　検出	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、長石、石英、黒色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/10残存	回転糸切り離し、板状圧痕
80 - 42	土師器	小皿	(9.2)	1.0	(7.8)	副郭部　D12　検出	内面:黄橙色 外面:黄橙色	石英、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/5残存	回転糸切り離し、板状圧痕
80 - 43	土師器	小皿	(8.8)	1.2	(7.2)	副郭部　E11　検出	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、雲母	良	内面:回転ナデ、ナデ 外面:回転ナデ	口縁部1/3、体部～底部1/2残存	回転糸切り離し、板状圧痕
80 - 44	土師器	小皿	(8.6)	1.0	(7.3)	副郭部　E12　検出	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、赤褐色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁1/6残存、底部の一部残存	回転糸切り離し
80 - 45	土師器	小皿	(8.7)	1.3	(6.3)	副郭部　E12　検出	内面:橙色 外面:橙色	黒色粒、赤褐色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部1/6、底部の一部残存	回転糸切り離し
80 - 46	土師器	小皿	(9.8)	1.2	(7.8)	副郭部　E12　検出	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、赤褐色粒、白色粒、角閃石、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/8残存	回転糸切り離し
80 - 47	石製品	不明石製品	7.6	5.2	—	副郭部　D12　検出	—	滑石	—	—	—	石鍋の二次加工品 厚さ（最大厚）:2.0cm 重量:141.3g
80 - 48	石製品	碁石状石製品（白）	2.1	1.1	—	副郭部　D9　検出	—	砂岩	—	—	完形	厚さ:0.5cm　重量:2.6g
80 - 49	石製品	碁石状石製品（白）	1.4	1.3	—	副郭部　D9　検出	—	砂岩	—	—	完形	厚さ:0.6cm　重量:1.6g
80 - 50	石製品	碁石状石製品（白）	1.5	1.4	—	副郭部　D9　検出	—	砂岩	—	—	完形	厚さ:0.5cm　重量:1.5g
80 - 51	白磁	碗	—	(2.1)	(6.6)	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	釉調:乳白色 露胎部:淡黄灰色	精緻、砂粒	良	外面:回転ヘラケズリ	体部下位～高台2/5残存	見込み部の釉を環状に掻き取る 椀Ⅷ類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
80 - 52	白磁	皿	—	(1.5)	2.9	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	釉調:黄白色 露胎部:淡黄灰色	精緻	良	内面:沈線	体部下位～底部のみ残存	ⅢⅤ類×Ⅵ類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
80 - 53	白磁	皿	(10.0)	2.1	(4.4)	副郭部　E11 東南斜面（SX13）	釉調:乳白色 露胎部:黄灰色	精緻	良	内面:沈線、ヘラ描き文、櫛描き文	全体の1/5残存	皿Ⅵ・2a類（大宰府） 11C後半～12C前半（C期）
80 - 54	白磁	耳壺	(12.8)	(1.8)	—	副郭部　E11 東南斜面（SX13）	釉調:黄白色	精緻、黒色粒	良	—	口縁部1/8残存	—
80 - 55	青磁（龍泉）	碗	—	(4.0)	—	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	釉調:緑色	精緻	良	内面:沈線、片彫文、櫛目文	口縁部破片	椀Ⅰ・3a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
80 - 56	青磁（同安）	碗	—	(3.6)	—	副郭部　E11 東南斜面（SX13）	釉調:黄緑色	精緻、砂粒	良	内面:沈線、ヘラ描き文、節点描文 外面:櫛目文	口縁部破片	椀Ⅰ・1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
80 - 57	青白磁	合子身×小壺	(4.5)	(2.0)	—	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	釉調:青白色	精緻	良	外面:沈線	口縁～体部1/4残存	型押成形
80 - 58	中国陶器	鉢×壺	—	(7.2)	(8.6)	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	釉調:灰黄色	砂粒、白色粒	良	—	体部下位～底部1/8残存	—
80 - 59	国産陶器（備前）	擂鉢	—	(6.6)	(11.4)	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	内面:赤茶色 外面:褐色	砂粒	良	内面:回転ナデ、櫛目 外面:回転ナデ	体部下位～底部1/8残存	—
80 - 60	土師器	坏	—	(2.7)	—	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部下位破片	—
80 - 61	土師器	坏	—	(1.4)	(10.6)	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、赤褐色粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	体部下位～底部1/8残存	回転糸切り離し
81 - 62	土師器	小坏	(9.2)	1.9	(7.0)	副郭部　E11 東南斜面（SX13）	内面:にぶい黄橙色 外面:黄橙色	砂粒、小石、白色粒、赤褐色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ、ナデ	口縁～体部上位1/6、体部下位～底部1/2残存	外底面に付着物あり（鉄分か？） 小坏a（大宰府） 13C代か？
81 - 63	土師器	小皿	(8.8)	0.9	(7.6)	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	内面:橙色 外面:橙色	砂粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部1/7、底部の一部残存	回転糸切り離し、板状圧痕

Tab. 7　遺物一覧表⑦

挿図番号	種別	器種	法量（cm）は復元・最大値 口径/長さ	器高/幅	底径/高台径	出土層位・遺構	色調・釉調	胎土/石材	焼成	調整・文様	残存状況	備考
81 - 64	土師器	小皿	(7.6)	1.1	(5.8)	副郭部　E11 東南斜面（SX13）	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/4残存	回転糸切り離し
81 - 65	土師器	小皿	(8.4)	1.1	(7.2)	副郭部　E12 東南斜面（SX13）	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、長石、赤褐色粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、ナデ 外面:回転ナデ	全体の1/6残存	回転糸切り離し後ナデ
81 - 66	白磁	碗	(16.6)	(5.0)	—	副郭部　E8　撹乱	釉調:灰白色	精緻、黒色粒	良	内面:沈線	口縁～体部1/10残存	椀Ⅴ - 4類×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
81 - 67	白磁	坏	(11.0)	(3.0)	—	副郭部　E10　撹乱	釉調:灰白色	精緻	良	—	口縁～体部1/8残存	14C代（森田B群）
81 - 68	青磁（同安）	皿	(10.5)	1.9	5.3	副郭部　E・F8 撹乱（SD5付近）	釉調:黄緑色 露胎部:灰白色	精緻	良	内面:櫛描文、片彫文	口縁～体部中位4/5、底部1/3欠損	皿Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
81 - 69	青白磁	碗	—	(2.3)	—	副郭部　E・F8 撹乱（SD5付近）	釉調:青白色	精緻	良	内面:ヘラ描き文	体部破片	14C代？（森田B群？）
81 - 70	青白磁	合子蓋	(6.7)	(1.7)	—	副郭部　E・F8 撹乱（SD5付近）	釉調:灰緑色 露胎部:灰白色	精緻	良	内面:回転ナデ	口縁～天井部1/8残存	型押成形
81 - 71	青白磁	合子身	(4.6)	1.6	(4.0)	副郭部　E・F8 撹乱（SD5付近）	釉調:灰緑色 露胎部:灰白色	精緻	良	外面:回転ケズリ	口縁～底部1/4残存	受け部径:（5.6）cm 型押成形
81 - 72	中国陶器	水注	—	(4.5)	—	副郭部　D10　撹乱	釉調:灰緑色 露胎部:黄灰色	精緻、白色粒、黒色粒	良	—	注口部のみわずかに残存	—
81 - 73	中国陶器	耳壺×壺	—	(3.4)	—	副郭部　D10　撹乱	釉調:灰緑色	精緻、黒色粒	良	—	口縁部破片	内面に目跡あり 耳壺Ⅵ類（大宰府）か？ 13C代（中世Ⅲ期）か？
81 - 74	中世須恵器	捏鉢	—	(7.0)	—	副郭部　E・F8 撹乱（SD5付近）	内面:淡黄灰色 外面:灰色、淡黄灰色	砂粒、長石、黒色粒、白色粒、雲母	良	内面:回転ナデ 外面:回転ナデ	口縁～体部上位破片	東播系須恵器 12C中頃～12C後半 （第2期第1段階、森田編年）
81 - 75	土師器	坏	—	(1.6)	(9.4)	副郭部　E・F8 撹乱（SD5付近）	内面:にぶい黄橙色 外面:にぶい黄橙色	砂粒、長石、白色粒、赤褐色粒、雲母	良	内面:回転ナデ、回転ナデ後ナデ 外面:回転ナデ	体部下位～底部1/6残存	回転糸切り離し、板状圧痕
81 - 76	土師器	甕	—	(3.4)	—	副郭部　D10　撹乱	内面:茶褐色 外面:茶褐色	砂粒、長石、石英、角閃石、雲母	良	内面:ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕 外面:ヨコナデ、ナデ、指頭圧痕	口縁部破片	内外面に煤付着 8C後半～9C代 （大宰府Ⅳ～Ⅸ期）
81 - 77	石製品	不明石製品	(6.9)	(4.4)	—	副郭部　E8　撹乱	—	滑石	—	—	—	石鍋の二次加工品 厚さ:（1.3）cm 重量:66.4 g
81 - 78	鉄製品	鉄滓か？	6.4	4.3	—	副郭部　E・F9 撹乱	—	—	—	—	完形？	厚さ:（3.8）cm 重量:122.2 g
81 - 79	白磁	碗	(15.6)	(3.5)	—	副郭部　G9　表採	釉調:黄白色	精緻、黒色粒	良	—	口縁～体部1/8残存	椀Ⅴ - 4類×Ⅶ - 1・3類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
81 - 80	青磁（龍泉）	碗	—	(4.5)	—	副郭部　F8 南側帯曲輪　表採	釉調:青緑色	精緻	良	内面:片彫蓮花文、沈線	口縁部破片	椀Ⅰ - 2類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
81 - 81	青白磁	碗	—	(5.6)	(4.8)	副郭部　F8 南側帯曲輪　表採	釉調:青白色 露胎部:灰白色	精緻	良	内面:ヘラ描き文、櫛目文 外面:回転ヘラケズリ	体部下位約1/4、高台約1/5残存	14C代？（森田B群？）
82 - 82	青磁（龍泉）	碗	(13.0)	5.3	4.8	副郭部　E7 8～18層	釉調:灰緑色 露胎部:灰茶色	精緻	やや不良	内面:片彫文 外面:回転ヘラケズリ	口縁～体部1/8残存	椀Ⅰ - 2類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
82 - 83	青磁（龍泉）	碗	(16.8)	(4.7)	—	副郭部　E7 8～18層	釉調:緑色	精緻	良	内面:片彫文、櫛目文	口縁～体部1/9残存	椀Ⅰ - 3a類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
82 - 84	青磁（同安）	碗	(16.4)	(6.0)	—	副郭部　E7 8～18層	釉調:黄緑色 露胎部:淡黄灰色	精緻	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:櫛目文、回転ヘラケズリ	口縁約1/8、体部約1/8残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
82 - 85	青磁（同安）	碗	(16.0)	(4.4)	—	副郭部　E7 8～18層	釉調:黄緑色	精緻、砂粒、黒色粒	良	内面:沈線、櫛点描文、ヘラ描き文 外面:櫛目文	口縁部約1/8残存	椀Ⅰ - 1b類（大宰府） 12C中頃～12C後半（D期）
82 - 86	青磁	香炉	—	(3.2)	—	副郭部　E7 8～18層	釉調:青緑色	精緻	良	—	体部破片	—
82 - 87	青白磁	合子蓋	—	(0.6)	—	副郭部　F7 8～18層	釉調:青白色	精緻	良	外面:型押成形	天井部破片	—
82 - 88	石製品	不明石製品	13.9	5.5	—	副郭部　F7 8～18層	—	滑石	—	—	—	石鍋の二次加工品 厚さ（最大厚）:1.5cm 重量:163.6 g

Tab. 8　トレンチ一覧表①

トレンチ名	トレンチ設置地点	グリッド	トレンチの規模	調査の目的	調査成果
No.1トレンチ	曲輪Ⅲ	F・G1、F2	長さ15.3m×幅1m	曲輪Ⅲの内部施設、地形形状(有段の有無など)の確認	SK1を確認した。
No.2トレンチ	曲輪Ⅲ	E2、F1・2	長さ15m×幅1m	曲輪Ⅲの内部施設、地形形状(有段の有無など)の確認	トレンチ東側で南北方向に走る堀切、もしくは竪堀と考えられる堀跡を確認した。
No.3トレンチ	曲輪Ⅰ 土塁Ⅲ	F・G4	長さ4.9m×幅1m	土塁の有無と、その形状・規模の確認	土塁の造成土と溝状の落ち込みを確認した。
No.4トレンチ	曲輪Ⅰ 土塁Ⅰ	D4	長さ5.2m×幅1m	土塁の形状・規模の確認	土塁の造成土を確認した。
No.5トレンチ	－	C4	長さ5.7m×幅1m	帯曲輪の形状・規模の確認	帯曲輪などは確認できなかった。
No.6トレンチ	曲輪Ⅰ	D～G5	長さ28.7m×幅1m	主郭部の内部施設・地形形状（有段の有無など）の確認 北端は土塁の規模・形状の確認	副郭部の調査に移行したため、表土除去したのみで、掘削を終了した。
No.7トレンチ	曲輪Ⅳ 横堀Ⅳ	G・H5	長さ8.1m×幅1m	曲輪Ⅳの形状・規模の確認	切岸・横堀・帯曲輪の造成土を確認した。
No.8トレンチ	曲輪Ⅰ 土塁Ⅱ	D5・6	長さ5.1m×幅1m	土塁の形状・規模の確認	土塁の造成土を確認した。
No.9トレンチ	横堀Ⅰ 土塁Ⅳ	C・D6	長さ4.3m×幅1m	帯曲輪・土塁の形状・規模の確認	切岸・横堀・土塁の造成土を確認した。
No.10トレンチ	－	－	－	主郭部の虎口(出入口)・城門跡の確認	トレンチ設定箇所が車両の出入口となったため、調査を実施できなかった。
No.11トレンチ	曲輪Ⅱ 横堀Ⅱ	D11～14、 E6～11、F6・7	長さ75.4m×幅1m	副郭部の内部施設・地形形状(有段の有無など)の確認	副郭部の東西方向の地形状況と端部の曲輪造成の確認を行った。遺構配置状況を確認した。
No.12トレンチ	曲輪Ⅱ 横堀Ⅱ 土塁Ⅴ	C・D10	長さ10.5m×幅1m	帯曲輪・横堀の形状・規模の確認	切岸・横堀・土塁の造成土を確認した。
No.13トレンチ	曲輪Ⅱ 横堀Ⅱ 土塁Ⅴ	B・C10	長さ9.7m×幅1m	副郭部の虎口(出入口)・城門跡の確認	階段状の切土(出入口？)・横堀・土塁の造成土を確認した。
No.14トレンチ	曲輪Ⅴ 横堀Ⅲ	F・G11	長さ10m×幅1m	帯曲輪・横堀の形状・規模の確認	切岸・横堀・帯曲輪もしくは土塁の造成土を確認した。
No.15トレンチ	曲輪Ⅴ 横堀Ⅲ	E・F12・13	長さ7m×幅1m	帯曲輪・横堀の形状・規模の確認	切岸・横堀・帯曲輪もしくは土塁の造成土を確認した。
No.16東側トレンチ	横堀Ⅱ	D13・14	長さ3.5m×幅1.8m	堀切の形状・規模の確認 木橋などの柱穴跡の確認	切岸・横堀・土塁の造成土を確認した。横堀Ⅲが竪堀Ⅰまで延びる状況を確認した。
No.16西側トレンチ	－	E13	長さ3m×幅1.8m		切岸を確認した。
No.17トレンチ	曲輪Ⅳ	G3	長さ3.2m×幅1m	帯曲輪・横堀の範囲・規模の確認	攪乱による削平で、帯曲輪・横堀の範囲・規模の確認できなかった。
No.18トレンチ	曲輪Ⅳ 横堀Ⅳ	F・G7	長さ5m×幅0.6m	帯曲輪・横堀の範囲・規模の確認	切岸・横堀・曲輪の造成土を確認した。
No.19トレンチ	曲輪Ⅳ	F・G8	長さ4.1m×幅0.8m	帯曲輪・横堀の範囲・規模の確認	切岸・横堀・帯曲輪を確認できなかった。
No.20トレンチ	曲輪Ⅴ	F・G9	長さ2.8m×幅0.8m	帯曲輪・横堀の範囲・規模の確認	切岸・横堀・帯曲輪を確認できなかった。

Tab. 9　トレンチ一覧表②

トレンチ名	トレンチ設置地点	グリッド	トレンチの規模	調査の目的	調査成果
No.21トレンチ	曲輪Ⅵ 横堀Ⅱ 土塁Ⅴ	B・C11	長さ3.8m×幅1m	帯曲輪・横堀・土塁の範囲・規模の確認	横堀・土塁・帯曲輪の造成土を確認し、SX17では青磁碗に土師器坏を伏せた状態で出土した。
No.22トレンチ	曲輪Ⅴ 横堀Ⅲ	F・G9	長さ4m×幅0.6m	帯曲輪・横堀の範囲・規模の確認	横堀を確認した。
No.23トレンチ	曲輪Ⅱ	C・D10	長さ3m×幅1m	曲輪・横堀・土塁の範囲・規模の確認	横堀・土塁もしくは曲輪の造成土を確認した。
No.24トレンチ	曲輪Ⅱ	C・D12	長さ5.2m×幅0.5m	曲輪・横堀・土塁の範囲・規模の確認	横堀・土塁もしくは曲輪の造成土を確認した。
No.25トレンチ	曲輪Ⅱ	F10	長さ3.8m×幅0.3m	曲輪・横堀・土塁の範囲・規模の確認	横堀・土塁もしくは曲輪の造成土を確認した。
No.26トレンチ	曲輪Ⅱ	E・F10	長さ4.7m×幅1.2m	曲輪・横堀・土塁の範囲・規模の確認	横堀・土塁もしくは曲輪の造成土を確認した。

Tab. 10　柵列一覧表

遺構番号	グリッド	柱間	柱間距離(m)		全長(m)	方位
			最大	最小		
SA2	E9・10	6	1.0	0.7	6.5	N 82°15′ E
SA8	E・F7・8	6	3.2	1.1	11.2	N 82°0′ E
SA10	E8・9	4	1.9	1.8	7.6	N 82°10′ E

Tab. 11　掘立柱建物跡一覧表

遺構番号	グリッド	柱間		梁行柱間(m)		桁行柱間(m)		梁行長(m)		桁行長(m)		全体面積		身舎面積		方位
		梁間	桁間	最大	最小	最大	最小	最大	最小	最大	最小	㎡	坪	㎡	坪	
SB6	D・E10	1	4	-	2.2	2.2	2.0	-	3.5	8.5	8.4	31.5	9.52	18.7	5.65	N 0°20′ Wから N 2°20′ Wに主軸を取る
SB7	D・E10	1	4	-	2.2	2.2	1.9	-	3.7	5.8	5.7	21.6	6.54	12.98	3.92	N 0°15′ Eから N 0°40′ Wに主軸を取る
SB9	D9・10 E10	-	18	-	-	2.0	0.4	-	-	-	-	36.2	10.9	36.2	10.9	-

Tab. 12　溝状遺構・土坑一覧表

遺構番号	グリッド	平面形態	規模単位：（m）は残存・最大値			出土遺物	備考
			長さ・長径	幅・短径	深さ		
SD4	C～E11	-	(15.8)	2.0	0.1	中国産陶器壺・青磁皿	-
SD5	E・F8	-	(12.3)	4.2	1.1	中国産陶器甕・土師器坏	-
SK1	F1	不整	2.15	0.85	0.08	中国産青磁碗・皿 中国産白磁碗、鉄釘	深さは、遺物多数で完掘していないため現状の数値
SK3	E8	円形	0.8	0.65	0.06	-	-

写 真 図 版

1. 鎮西山城跡調査状況遠景（北から）

2. 鎮西山城跡調査状況全景（天が北）

1. 鎮西山全景（南西から）

2. 鎮西山全景（南から）

3. 鎮西山城跡調査前全景（東から）

4. 曲輪Ⅰ（主郭部）調査前（南から）

5. 曲輪Ⅱ（副郭部）調査前（西から）

6. No. 1 トレンチ調査前（西から）

7. No. 1 トレンチ南壁面土層（西から）

8. No. 1 トレンチ掘削完了（東から）

1. No. 2 トレンチ掘削完了・北壁面土層（東から）

2. No. 3 トレンチ調査前（東から）

3. No. 3 トレンチ南壁面土層（西から）

4. No. 3 トレンチ掘削完了（北東から）

5. No. 4 トレンチ調査前（東から）

6. No. 4 トレンチ西壁面土層（南東から）

7. No. 4 トレンチ掘削完了（南から）

8. No. 5 トレンチ西壁面土層（北東から）

1. No. 5 トレンチ掘削完了（北から）

2. No. 6 トレンチ西壁面土層（南東から）

3. No. 6 トレンチ掘削完了（北から）

4. No. 7 トレンチ調査前（東から）

5. No. 7 トレンチ東壁面土層（南西から）

6. No. 7 トレンチ掘削完了（西から）

7. No. 8 トレンチ調査前（南東から）

8. No. 8 トレンチ西壁面土層（南から）

1. No. 8 トレンチ掘削完了（南から）

2. No. 9 トレンチ調査前（北東から）

3. No. 9 トレンチ西壁面土層（東から）

4. No. 9 トレンチ掘削完了（南から）

5. No. 11 トレンチ東端土層（南東から）

6. No. 11 トレンチ西側掘削完了（東から）

7. No. 11 トレンチ東側掘削完了（西から）

8. No. 12 トレンチ西壁面土層（北東から）

1. No. 12 トレンチ掘削完了（南から）

2. No. 13 トレンチ西壁面土層（北東から）

3. No. 13 トレンチ掘削完了（北東から）

4. No. 14 トレンチ東壁面土層①（南西から）

5. No. 14 トレンチ東壁面土層②（南西から）

6. No. 14 トレンチ掘削完了（北西から）

7. No. 15 トレンチ調査前（西から）

8. No. 15 トレンチ南壁面土層（東から）

1. No. 15 トレンチ掘削完了（北東から）

2. No. 16 東側トレンチ調査前（北西から）

3. No. 16 東側トレンチ西壁面土層（北東から）

4. No. 16 東側トレンチ掘削完了（北西から）

5. No. 16 西側トレンチ西壁面土層（南東から）

6. No. 16 西側トレンチ掘削完了（北西から）

7. No. 17 トレンチ西壁面土層（東から）

8. No. 17 トレンチ掘削完了（南西から）

1. No. 18 トレンチ東壁面土層（南西から）

2. No. 18 トレンチ掘削完了（北から）

3. No. 19 トレンチ東壁面土層（北西から）

4. No. 19 トレンチ掘削完了（北から）

5. No. 20 トレンチ東壁面土層（南西から）

6. No. 20 トレンチ掘削完了（北から）

7. No. 21 トレンチ西壁面土層（北東から）

8. No. 21 トレンチ掘削完了（北から）

1. No. 21 トレンチ遺物出土状況（東から）

2. No. 22 トレンチ西壁面土層（南西から）

3. No. 22 トレンチ掘削完了（北西から）

4. No. 23 トレンチ西壁面土層（東から）

5. No. 23 トレンチ掘削完了（南東から）

6. No. 24 トレンチ掘削完了・西壁面土層（北東から）

7. No. 25 トレンチ掘削完了・西壁面土層（北東から）

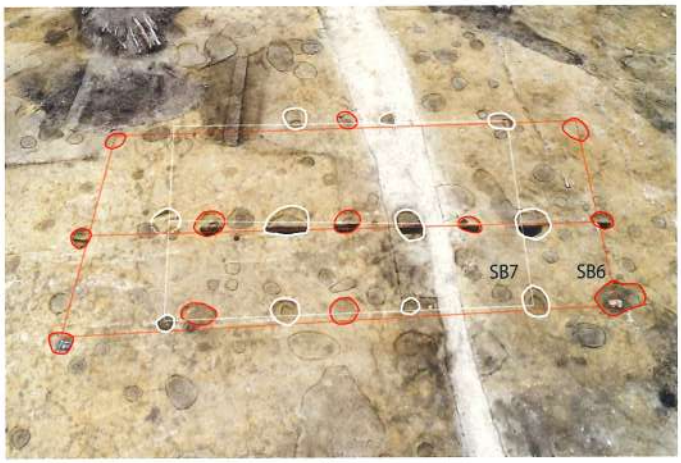
8. No. 26 トレンチ掘削完了・西壁面土層（北東から）

1. 曲輪Ⅱ（副郭部）調査状況　（天が北）

2. SA2・8・10、SB6・7・9、SD5、SK3、SX12 検出（天が南）

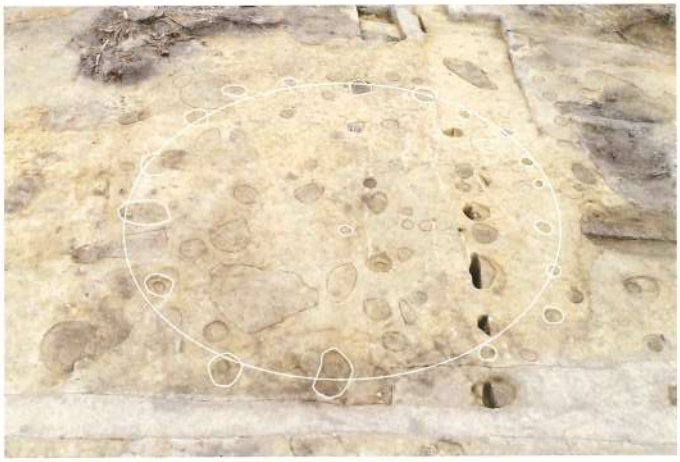
1. SA2 検出（東から）

2. SA8 検出（西から）



3. SB6・7 検出（西から）

4. SB6-P15 遺物出土状況（西から）



5. SB9 検出（南から）

6. SD4 土層（北から）

7. SD5 トレンチ 1 南壁面土層（北東から）

8. SD5 トレンチ 2 北壁面土層（南東から）

1. SK1 検出（西から）

2. SK1 遺物出土状況（西から）

3. SK3 検出（南から）

4. SK3 土層（南から）

5. SX12 検出（東から）

6. SX13 検出（北西から）

7. SX13 遺物出土状況（北東から）

8. 宮武教授による現地指導

1. No. 7 トレンチ出土遺物（Fig.21-2）

2. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-2）

3. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-3）

4. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-9）

5. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-10）

6. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-11）

7. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-13）

8. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.28-14）

9. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.29-16）

10. No. 11 トレンチ出土遺物（Fig.29-24）

11. No. 12 トレンチ出土遺物（Fig.31-1）

12. No. 13 トレンチ出土遺物（Fig.33-4）

13. No. 14 トレンチ出土遺物（Fig.35-4）

14. No. 15 トレンチ出土遺物（Fig.37-1）

15. No. 15 トレンチ出土遺物（Fig.37-3）

16. No. 15 トレンチ出土遺物（Fig.37-4）

17. No. 15 トレンチ出土遺物（Fig.37-5）

18. No. 19 トレンチ出土遺物（Fig.47-1）

19. No. 20 トレンチ出土遺物（Fig.49-3）

20. No. 21 トレンチ出土遺物（Fig.51-2）

21. No. 21 トレンチ出土遺物（Fig.51-3）

22. No. 21 トレンチ出土遺物（Fig.51-5）

23. No. 23 トレンチ出土遺物（Fig.54-2）

24. No. 23 トレンチ出土遺物（Fig.54-7）

25. No. 23 トレンチ出土遺物（Fig.54-10）

26. No. 26 トレンチ出土遺物（Fig.59-1）

27. No. 26 トレンチ出土遺物（Fig.59-2）

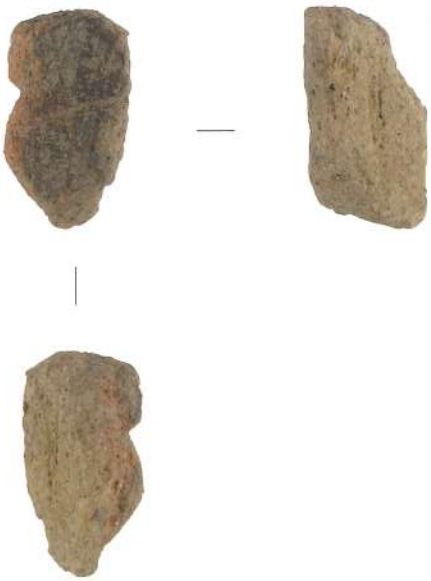
Fig.64-1

Fig.80-48

Fig.80-49

Fig.80-50

28. SB6（Fig.64-1）、
その他の出土遺物（Fig.80-48・49・50）



29. SB6 出土遺物（Fig.64-2）

30. SB7 出土遺物（Fig.66-5）

31. SD4 出土遺物（Fig.69-3）

32. SD5 出土遺物（Fig.71-1）

33. SK1 出土遺物（Fig.73-1）

34. SK1 出土遺物（Fig.73-2）

35. SK1 出土遺物（Fig.73-3）

36. SK1 出土遺物（Fig.73-4）

37. SK1 出土遺物（Fig.73-6）

38. SK1 出土遺物（Fig.73-7）

39. その他の出土遺物（Fig.78-1）

40. その他の出土遺物（Fig.78-2）

41. その他の出土遺物（Fig.78-4）

42. その他の出土遺物（Fig.78-6）

43. その他の出土遺物（Fig.78-8）

44. その他の出土遺物（Fig.78-9）

45. その他の出土遺物（Fig.78-10）

46. その他の出土遺物（Fig.78-18）

47. その他の出土遺物（Fig.78-19）

48. その他の出土遺物（Fig.79-23）

49. その他の出土遺物（Fig.79-29）

50. その他の出土遺物（Fig.79-32）

51. その他の出土遺物（Fig.80-40）

52. その他の出土遺物（Fig.80-47）

53. その他の出土遺物（Fig.80-54）

54. その他の出土遺物（Fig.80-57）

55. その他の出土遺物（Fig.81-65）

56. その他の出土遺物（Fig.81-68）

57. その他の出土遺物（Fig.81-69）

58. その他の出土遺物（Fig.81-70）

59. その他の出土遺物（Fig.81-71）

60. その他の出土遺物（Fig.81-72）

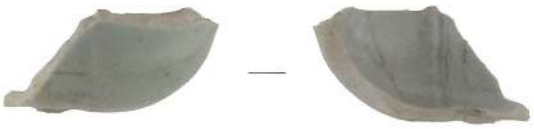
61. その他の出土遺物（Fig.81-73）

62. その他の出土遺物（Fig.81-77）

63. その他の出土遺物（Fig.81-78）

64. その他の出土遺物（Fig.81-81）

65. その他の出土遺物（Fig.82-82）



66. その他の出土遺物（Fig.82-86）

67. その他の出土遺物（Fig.82-87）

68. その他の出土遺物（Fig.82-88）

報告書抄録

ふりがな	ちんぜいざんじょうあと
書名	鎮西山城跡Ⅰ
副書名	令和3年度鎮西山再整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	
シリーズ名	上峰町文化財調査報告書
シリーズ番号	第55集
編著者名	松浦　智　　中田　裕樹　　礒村　康行
編集機関	上峰町教育委員会　㈱埋蔵文化財サポートシステム
所在地	〒849－0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所319-4　上峰町町民センター内　TEL 0952-52-3833
	〒849－0924　佐賀県佐賀市新中町1-7　㈱埋蔵文化財サポートシステム
発行年月	2022（令和4年）年10月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ちんぜいざんじょうあと 鎮西山城跡	さがけんみやきぐん 佐賀県三養基郡 かみみねちょうおおあざつつみ 上峰町大字堤 あざさんぼんくろぎ 字三本黒木	41345	0002	33° 21′ 42″	130° 25′ 06″	20211221～ 20220319	5,598㎡	鎮西山再整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
鎮西山城跡	城館跡	中世	曲輪　横堀 建物 小穴 土塁	陶磁器　土師器 須恵器　石製品 瓦器　鉄製品 土師質土器　土製品	中世の山城跡等

※遺跡番号は『佐賀県遺跡地図』による。

上峰町文化財調査報告書第 55 集

鎮西山城跡 I

令和 3 年度鎮西山再整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

2022 年 10 月 31 日

発行　上峰町教育委員会
〒 849-0123　佐賀県三養基郡上峰町坊所 319-4
編集協力　㈱埋蔵文化財サポートシステム
〒 849-0924　佐賀県佐賀市新中町 1-7
印刷　大同印刷株式会社
〒 849-0902　佐賀市久保泉町大字上和泉 1848-20

発掘現場から
文化力
POWER OF